

# ナザリックの赤鬼

西次

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

その日、ひとりの老人が人生を終える。その名は周大鸞。21〜22世紀の中国に大きな影響を及ぼした人間であり、分裂し混沌とした大陸に秩序をもたらした男だった。

そして、彼は死に、甦る。かつて友と共に異世界を駆けた、その姿で。

モモンガ様が、至高の四十一人の一人と共に転移するお話です。

本物の支配者層の人間が、アインズ・ウール・ゴウンに所属していたとしたら？ そして、そんな人物がモモンガ様を心から案じて、支え続けていくとしたら？

これは、そんなお話です。

※書籍版とWEB版の内容を基にしております。

アニメ版と、限定版付属の小説の内容は把握しておりません。

# 目次

|      |          |     |
|------|----------|-----|
| 第一章  | その老人について | 1   |
| 第二章  | 再会する二人   | 13  |
| 第三章  | 現実への自覚   | 25  |
| 第四章  | 王佐の友     | 38  |
| 第五章  | 赤鬼の模擬戦   | 53  |
| 第六章  | 美しい世界    | 77  |
| 第七章  | 酒宴       | 99  |
| 第八章  | カルネ村     | 125 |
| 第九章  | 解決、そして   | 156 |
| 第十章  | 街に目を向けて  | 180 |
| 第十一章 | 冒険者として   | 201 |
| 第十二章 | 奉仕者      | 229 |
| 第十三章 | 英雄の誕生    | 254 |
| 第十四章 | 女の戦い     | 287 |
| 第十五章 | 棍棒外交・前編  | 311 |
| 第十六章 | 棍棒外交・中編  | 347 |
| 第十七章 | 棍棒外交・後編  | 374 |
| 第十八章 | 王国への楔    | 415 |

## 第一章 その老人について

鈴木悟が中国共産党について知っていることは、多くない。

せいぜいが、新聞かネット、ニュースに載っている程度のこと。一般人以上の情報は持ちえない以上、その内実に関する知識など持つわけがないし、己にどれだけの影響があるものか、想像さえつかない。

しかし彼は、会社の都合で、中国で半年ばかり働いていた時期があった。現在の中国は治安も安定しているから危ない目にあつた覚えはないが、それでも時折流れる関連ニュースには気を付けている。

だから、その記事を見かけたときも、目にとめて熟読するくらいの関心はあつたのだ。

——元國務院総理【周大鸞<sup>しゅうだいらん</sup>】死亡説、中国当局は否定。

外国人である鈴木悟にとっては、どうということはない一文である。

22世紀の現代も大陸を支配する、中国共産党の重鎮は、今も健在だと。そう伝えているだけだ。

だが、現地の人々にとってはそうではない。分割された中国という国家を、まがりなりにもまとめみせたのは、彼の存在あつてのことである。知識の少ない彼であっても、世界のVIPである人物の名前と功績くらいは耳にしていた。

——たしか、分裂した中国を統合したのが現在の中国共産党で、彼はその最前線で功績を立てたとかなんとか。

具体的な実績は思い出せないが、彼がいなければ中国はまだ内乱を続けていた、とまで言われる偉人と聞いている。漢王朝における光武帝のような人物と比べて、よいのだろうか。

二十一世紀末から、中国という国は分裂した。原因は様々だが、中華の歴史上ではよくあることである。そして再統一の流れもまた、自然に起こり、結果として再度、中国共産党が中華圏を取りまとめることになった。それが三十年ほど前のことである。

政治体制も色々と変わったらしいが、詳しく知ろうとは思わなかった。前世紀とは名前が同じだけの別物、という話と、『いにしへの秦の

暴虐を許さず。中国は時代を逆行せず』というスローガンを聞いた覚えはあるから、きつと昔よりは良くなったのだろう。

——周大鸞総理といえ、子供の頃はよく聞いた名前だった気がするけど、体を悪くしたのかな。

そんな偉人も、十年以上前に党の職からは引退し、最近は音沙汰がなかった。かなりの老齢であるから、死亡説はそこから出たのだろう。

半世紀以上前の大陸の戦乱で、相当な無茶をしたらしく、多くの民から支持されつつも、敵も作っていた。暗殺未遂事件もあり、隠棲後の所在は極秘事項である。

——ウォン・ライさんなら、もつと詳しい情報も持っているんだろうか。

鈴木悟は、中国人の友人がいる。ゲームを通じての交流に過ぎなかったが、とても濃い付き合いをしていたと、自信をもって言える。

それはユグドラシルというオンラインゲームで、当時における最新の技術を詰め込んだ人気作品だった。

その中で、彼はウォン・ライという人物（異形種）と知り合い、共に同じギルドに所属して楽しみを分かち合った。ギルドメンバーの中では唯一の中国人であり、外国人でもあったので、交流そのものが刺激的で面白かったことを覚えている。

鈴木悟という男には、中国に対する満足な知識がなかった。そしてそれ以上に、偏見というものも持ち合わせていなかった。

無知の純真さを大人になっても持ち続けている男であり、だからこそ異国の相手にも、無理なく対等に接することができたのである。

——結構、お世話になったなあ。話していて疲れないし、面白いし、外国人とは思えないくらいに接しやすい人だった。

ウォン・ライ自身が話すところによれば、日本への留学経験があったらしい。

実際、日本語に不自由はなく、日本文化と歴史にも豊富な知識を持っていた。人格的にも、紳士といってよい。

日本人の感性をよくわかっていて、和を重んじてメンバー間の調整

を行ってくれた。彼がログインしてくれている間、鈴木悟は人間関係の面倒な部分について、忘れることができたのである。

それでいて楽しむことを忘れず、上手に仲間を楽しませることを心掛けていた、気遣いの人。それが、鈴木悟の知るウオン・ライという人物だ。

——でも、そんな会話ができる機会なんて、もう——。

ユグドラシルは、本日、サービスを終了する。明日以降、このゲームで遊ぶことはできなくなり、そうなれば必然的に、ウオン・ライという人物との交流も途絶えてしまうだろう。

本人との個人的なメールのやり取りができればよいのだが、彼は一切の個人情報秘匿していた。

相手には相手の事情があるのだから、これは当然の備えではある。だが、一抹の寂しさを覚えてしまうのは、それだけ惜しむべき人物であつたから。

一応、ゲームの中からキャラクターを通じて、メールを送ることはできる。ユグドラシルの運営を通じての連絡になるので、おそらく、これが最後の機会になるだろう。

——最後に、もう一度だけ会って、話をしませんか。

それだけを伝えて、鈴木悟は待つことにした。サービスの終了時刻まで、まだ時間はある。

他のギルドメンバーも含めて、顔を合わせるのが楽しみでもあり、悲しくもあつた。

それはきつと、皆も同じであろうと、彼は信じたかつた——。

老人は、己の命数が尽きつつあることを自覚していた。

周大鸞という老人にとつて、死は恐れるようなものではない。中国はいまだ暗雲の中にいるが、すでに現役時代から環境は整えてあつた。以後のことは、後継者たちに任せるべきだと割り切っている。

「少し、歩くか」

齢は数えて九十三。その年になつても、足腰は未だ壮健である。頭

も明晰であった。

最新の医学の賜物だが、それでも死が迫ってくることを自覚できてしまうのは、理屈ではなく、感覚の領域である。

そして、唐突に歩きたくなくなったのは、死から遠ざかりたいという本能が、体を動かしたがるからか。

——どうでも、よいことだ。

生き汚く、よくここまで生き延びたものだと思う。

特に近年は、晩節を全うすることばかり考えて、政治的なことから身を遠ざけていた。己も保身を考える年になったかと、年月の流れの無常さに、感ずるところがあった。

もつとも、暇ができたのは悪いことではない。新しい遊びも知れだし、堪能しきつたという満足感もある。散歩しながら思うのは、そんな他愛もないことばかりである。

「兄さん。今日もお元気そうで、なによりです」

「ああ、お前か。……今日は、気分が良くてな。少し、散歩に付き合わないか」

周大鸞には、弟が二人いる。話しかけてきたのは、上の弟の周大葉だった。

九歳も年下で、父が亡くなったときはまだ三歳だったことを覚えている。

己は長兄として、弟二人を養育する責任を、十二歳にして背負ったのだ。その当時のことを思い出して、つい懐かしくなる。

「今日は、調子がいいようですね。いつもは、部屋にこもりきりなのに」

「そうだな。今日くらいはいいだろうと思ってな」

「……医師たちは、呼ばなくていいですか?」

「気にするな。自然に従えばよい。無理をする必要など、どこにもないのだ」

さすがに、そろそろ死ぬぞ、とは言えなかった。弟たちには苦勞をかけたし、葬式を取り仕切ってもらうことにもなる。

大鸞は男子を得なかつたから、周家は弟の家系が継いでいかねばな

らぬ。その心労を思えば、今から不吉な言葉で煽ることもないだろう。

「無理を、なさらないでください。今でも北京から相談事が舞い込んでくるのです。まだこの国には、兄さんが必要なのです」

そんなわけがあるか、と即座に否定してやりたかったが、これは弟なりの気遣いなのだ、と理解してもいた。

必要とされているのだから、長生きしてほしい。その感情を理解せぬでもないが、老人の院政は前世紀の悪習として、絶つべきことである。

だから、大鸞は政治的な相談事を、個人的な相談として、あくまでアドバイスするだけにとどめていた。実際に行動したり、させたりすることはしない。

もちろん、言葉だけでも強制力が発することはあるが、そうした政治的行為を彼が嫌っていることはすでに周知されていた。

——まったく、私はお前たちの父母ではないのだぞ、と何度言わせるのか。

要するに、ただ愚痴を聞いていただけである。いい歳をして、いつまでも甘えにくる次世代の首脳陣に、いくらかの不安を感じざるを得ない。

とはいえ、正面から泣きついてくる子供たち(ただし還暦を超える)を無下に扱うこともできなかった。これを優しさと取るか、甘さと取るかは、判断の分かれるところであろう。

「自分で出来ることは自分でやれ、と言い返してやっただろうに。まあ、隠居暮らしの暇潰しにはなったが、不毛なことだ。今にも死にそうな老人を捕まえて、ご機嫌伺いも何もないだろう。何度も言うようだが、かつての悪習は、次の世代に残してはならん。わかっているな」

せつかく初期化した党内を、黒い政治学で塗りつぶしてはならない。大鸞はそれを肝に銘じており、後任たちにもきつく徹底させた。

彼は、後継者の育成もせず引退するほど、無責任ではなかった。後の世代のためにできることはやりきったのだから、不安はないはずである。が、それはこちらの意見であって彼らの意見ではない。



今、中国の中枢にいる人々にとって、彼は父親であり、母親のような存在なのである。民を慈しみ、衆を教育し、人々を生かすために戦い、広く恩恵を施した。

彼らにとつては、そんな聖人君子を絵にかいたような人なのである。いずれ失うとわかつていても、なるべく長生きしてほしいと思つて何が悪いというのだろう。

「もちろんです。中国は、少しずつ良くなってきています。再統一が成つてから、餓死者は出なくなつて久しい。治安も日本並みとは申しませんが、大平だった前世紀の水準を取り戻しました。民衆に奉仕する。その原点を取り戻した中国の未来は、明るいものと信じています」

「ふん。原点、再統一、か。お前が言うなら良いが、子供たちまでその妄言を真に受けるようなら、問題だな」

大鸞はわずかに顔をしかめた後、皮肉気に笑みを浮かべた。——そして、ふいに真顔に戻り、頭を振つて答える。

「昔は昔、今は今だ。……自然環境の悪化が懸念事項だが、こればかりはどうしようもない。気長に付き合つていくように。経済の重要性はわかるが、これ以上の悪化は避けるように——と、今更私があればこれ言うのも蛇足だな」

せつかく上手に描いた蛇の絵である。余計な足をつけ足しては、台無しというもの。

今の世に老人は必要ないのだ。過去の遺物は、ただの匹夫として死ねばよい。

「風通しは、だいぶ良くなつたはずだ。それも善し悪しだが、若者はたくましい。なんとか、なるだろう」

「そうですね。……中華の空に、明るい日差しを取り戻してやりたい。その想いは、次世代の若者たちも同じでしょう」

大鸞が住む邸宅は、極めて嚴重に保護されており、汚染された空気や水が入り込んでくることはない。こうして歩いて中庭に出ても、平気で植物を愛でることができると。これは一種の特権であり、本人も後ろめたさを感じずにはいられない。

そも、一般の大衆は、この汚された大地で生きていた。人間の生命力と医療の進歩が、さらに汚染された環境に敗北する日がくるかもしれない。

ゆえに、美しい自然を取り戻すことは、もはや世界共通の悲願と言つても過言ではないのだった。

「いかなな、少し歩いただけで、疲れてしまう」

「部屋で横になりますか？ 何度も言いますが、無理をなさってはいけません」

「まあ、待て。昨日、大彭から手紙が来ていただろう。せつかく調子がいいんだ。今のうちに見ておきたい」

大彭とは、下の弟である。兄弟の末っ子で、大鸞より十歳以上も年が離れている。

生まれて半年とたたぬ間に父母が亡くなったから、おしめを替えるのも、離乳食を与えるのも自分の仕事だった。あの頃よりも、年を食つてからの方が、手間がかかっているような気がする。いつまでも成長せぬ奴と、苦笑した。

——まあ、せつかくの手書きの手紙だ。今のうちに目を通してやらねば、もはや機会もあるまい。

彼はいまだに北京におり、政治の中枢に食い込んでいたが、己が死ねば引退を考えるだろう。あれが好き放題にしているのは、自分が尻拭いをしてくれると思つているからなのだ。

たとえば、大鸞自身が『あいつに甘い顔を見せるな。容赦しなくいい』と発言しても、やはり家族である。危ない目にあつてほしくはないし、長生きしてほしいと思う。

そうした大鸞の本心が透けて見えるので、周囲も自然と手加減してしまうのだ。結果、老害が居座ることになる。

決して無能な人間ではないのだが——と、余計な気を回しつつも、適当な椅子に座り、大葉が持つてきてくれた手紙を見る。

——相変わらず、汚い字よ。

手書きの上質な手紙は今や珍しく、それだけに美しい字で丁寧に記せば好感を買える。

長兄として、それなりに教育したつもりだったが、最後まで汚い癖字は直らなかつた。しようもない奴、と苦い顔をしながら目を通す。

「……なんとも」

内容はといえば、他愛のない社交辞令に近況報告。それだけならばまだしも、政治的な話をこれでもかと盛り込んでいた。

「あいつは、私がまだ百年は生きるとでも思っているのか？」

「……兄上がいなくなるなど、考えもしないのでしよう。もう孫がいる歳だというのに、無邪気なことですよ」

「私にできることには、限りがあるというのに。私はそろそろ死ぬから、いい加減自制を覚えよと——ああ、いや、それではいかな」

つい無神経なことを言ってしまったが、それを打ち消すように応える。

弟というより、出来の悪い息子を見ているようだった。そして多くの親が感ずるように、手間のかかる子供ほど、かわいく思えてしまうのは、どうしようもないことだった。

「お前が落ち着かねば、お前の家族はいつまでも気をもむことになる。そろそろ家族を慈しむだけの人生を送っても、良いころだろうと。それだけ伝えてやってくれ」

心得ました、と大葉は応える。そういえば、この落ち着いた方の弟は、あまり面倒を起こさなかつたな、と今更ながらに思う。

老いた兄弟が、同じ邸宅で暮らすというのも、改めて自覚すると妙な気分だった。前半生が色々と立て込んでいただけに、穏やかな暮らしに違和感を持つことも、たまにあった。

——もつとも、そんな風を感じるのも、今だけのことだ。

己の余命について考えると、やり残したことはないかと、気になつてくるものである。死への恐怖はすでにない。そうしたものを抱えていたのは、自分以外の命を背負っていた頃の話で、今は己以外のものに責任を負ってはいない。

だからこそ、気楽な気持ちで自分の楽しみを漁ることができるのだ。自室へと戻り、弟を下がらせる。

「もう、一人にさせてくれ。……そうだな、明日の朝まで何もなければ

ば、用意だけはしてくれりと嬉しい」

「——は、いや、それは」

「書付けは、机の二段目の引き出しにある。私の希望通りに行うように」

「……はい。では、また」

暖かい視線だった。大葉は聡い。理解してくれているのだろうと思う。

兄と弟である。すでに言葉は尽くした。なるようになるだろう。きつと何も問題は起こらないと、信頼できる程度には共に生きた。

——酒でも入れば、もつと陽気になれるものかな。いや、逆効果か。食事は必要ない。体が必要としていないのだ。睡眠は別だが、その求めに応じれば、二度と目覚めないと、なんとなくわかつていた。

なんとなく。何気なく、今を生きている、という現実が惜しくなった。これも寿命なれば、受け入れるのが人生というもの。

だが、まだわずかな時間があるのなら、何かしら娯楽で気を紛らわせたいと、気まぐれに思う。

部屋を見渡せば、いくつものゲーム機が、新旧を問わず周辺機器と共に転がっている。彼は、この手の遊戯が大好きだった。中国共産党の幹部というイメージからは、なんとも似つかわしくない。

——知ってしまえば、戻れぬことがある。一度上げた生活の質を、かつての水準まで下げることが困難なように。一旦娯楽にハマってしまえば、抜け出すことは容易ではなくなる。

幸い、周囲の目を気にするような立場ではなかった。政治の場を退いて十数年。暇を持て余していた彼が見つけたのは、今や古典へとなりおさせた、ビデオゲームの山だった。

大鸞はもともと読書が趣味であったが、そればかりでは飽きが来る。中国といえ、古典の名著だけでも五つの車に山ほど積んで、なお余るほどの量があるのだが、読んで面白いと感じるものは多くない。

積極的に面白い本を新書から探るとなれば、これがなかなか疲れるのである。必然的に、手っ取り早く楽しめそうな娯楽に寄りたくなり

——結果、電脳的な遊戯に行き着くのである。

特に好んだのが日本製のゲームで、RPGやSLGをやりこんだ。基本的に、彼は経験値であれ資源であれ、数字を積み重ねるのが好きだった。付け加えるなら、優れた物語性があれば、なお良い。

——とはいえ、今から新たに発掘するのも、機を逸した感がある。手元にあるものはだいたいやりつくしたし、さて。

——と思いを巡らしたところで、別の発想に行き着いた。

やりつくしたといっても、それは個人の感想に過ぎない。自分だけで完結するオフラインのゲームではなく、広い舞台で不特定の人々と関わりあう。そんな作品について、ようやく思い至った。

——ユグドラシル。一年前に病氣療養を理由に、離れてしまっただけで、か。

ただのビデオゲームに飽きてしまった頃、DMMO—RPGというものを知った。基本的に大鸞は一人用のゲームしかできない。

囲碁や将棋なら、相手もいる。しかし、ビデオゲームとなると屋敷の者たちは、どうにも肌合わないらしい。

だから、オンラインで不特定の人々と交流し、共にゲームを楽しむという形態は、ひどく彼を喜ばせた。

そこに中国共産党元総理にして、国家を復興させた元老の周大鸞はいない。ゲームプレイヤーの、ウォン・ライがいるだけである。

——そうだ、ウォン・ライ。あの世界での私は、そういう名の『鬼』であった。

ユグドラシルは、日本製のゲームであった。わざわざ国外の作品をプレイしたがったのは、仮想空間だけでも、現実のしがらみから離れていたかった、という感情的な理由である。

そしてウォン・ライという名は、個人的に尊敬する人物が由来である。日本語読みにして、少しもじつてあるが、気づく人は気づくだろう。

それとて、中国人であればいかにも『らしい』と思われたであろうし、不審に受け止められたことはなかったはずだ。

異形である鬼種を選んだのは、己を皮肉って、自虐を楽しむため

ある。自己分析するならば、私は人でなしだ、という悲観を、娯楽で塗りつぶしたかったのかもしれない。

——まあ、自虐する以上に楽しませてもらった。本当に、楽しかった。悔いなど残しようもないほどに、堪能させてもらった、な。

プレイスタイルは、いわゆるタンク。前衛で敵の攻撃を受け止め、仲間を守る役割を好んで担った。守りたいものを、全力で守りに行くスタイルを貫く。現実では容易ではない行為こそ、仮想空間では実現したかったのだ。

ともあれ、大鸞はユグドラシルという世界を存分に楽しんだのだ。一人ではなく、大勢の仲間たちと共に。

——あの頃は、良かった。皆は、元気でいるだろうか。一度意識してしまうと、たまらなくなつた。時間はある。アクセスして、かつての己の分身を動かしてみるのもいいだろう。

現役だったころの元気が、戻ってきたようだった。病気療養と称して、一年前から引退同然の状態となつてしまつたのは、何も事実無根というわけでもない。実際、彼は死を間近に迎えた老人なのだから。もつとも、療養の意味はすでになく、病は現在進行形で命を食いつぶしている。去年はまだ足掻いていた時期であり、生きる意欲を捨てきれていなかったから、娯楽を捨ててでも治療に専念せねばならなかつたのだ。

——モモンガには、悪いことをしたな。会えたら、謝っておこう。だが、いまや生存の可能性は絶たれ、死を待つだけの身である。一度割り切つてしまえば、精神的にはむしろ楽になる。こうして再び、ログインするだけの力を絞り出せているのも、それだけ心に余裕を持てたからだろう。

久々にユグドラシルを起動すると、すぐにメールが来た。モモンガからのものである。

——ああ、久しぶりに話したいな。きつと、私がやり残した、最後のことだろうか。

ウォン・ライは、嘆息しつつも、ログインした。僅かな待機時間も、物思いにふけりながら待つ。

ここでしかできないことは、存分に楽しむべきである。悔いを残してはならないと、改めて思った。

## 第二章 再会する二人

ウォン・ライがナザリックに足を踏み入れるのは、丸々一年ぶり、と言つてよいだろう。

その間、所属したギルドがどうなっているのか、確認することすら出来なかった。だから、何ら変わりのない様子を見て、安心したというのが本音であった。

——いや、確認できなかったのではなく、しなかつたというべきだな。

数分ログインするだけでは味気ないと見送り続けて、いつしか記憶の片隅に追いやっていたのは自分である。今日がサービス終了日だと知つたのさえ、ログインする直前であつたのだから、己の愚かしさは救いがたい。

この最後の日に、最良の友人であるモモンガと会えたのは、この老人に対する運命の慈悲、とでも表現するべきであろうか。

「お久しぶりです、モモンガ殿」

「……ああ、こちらこそ、お久しぶりです。ウォン・ライさん」

円卓の部屋にて、二人は出会つた。そして骸骨のギルドマスターは、暖かく自分を迎えてくれた。

恨み言の一つや二つは耐えるつもりでいたが、そうした想定をしていた己を後ろめたく思うほどに、モモンガは友好的だった。

「お変わりないようで、なにより。この一年、息災でありましたか？」  
周大鸞はここにはいない。ウォン・ライという赤い肌の鬼がまず口にしたのは、友への気遣いであった。

「ええ。……ええ、元気でしたよ。もしかしたら、今が一番、元気かもしれません。本当に、よく来てくださいました」

はばかりながら、友として。これ以上の歓待があるであろうかと、ウォン・ライは言葉にしないまま、静かに感謝した。

ロールプレイを思い出すように、装備した眼鏡を触るフリをする。まるで眼鏡を直すような動作をして、ここでの己を再確認した。

——しばらくぶりだが、やはりこの外見は上手くできているな。自



画自賛も許されよう。

ウォン・ライは、赤鬼と呼ばれたことがある。実際、赤い肌の鬼種であり、非常にごつごつした筋肉オバケで、二メートルを超える体格は他者を威圧させかねないほどである。赤い装束は鋼色の金属で補強され、大型の武骨な手甲は、彼が無手の凶手であることも表していた。

事実、その手で人間種を屠ったこともある。武器をもって倒すより、直接手で触れて壊す方が、性に合う気がしたのだ。だからこそ、『ナザリツクの赤鬼』という名で、ギルドと共に勇名をはせたのである。

「ご心配をかけたようで、申し訳ない。最後の日になって、ようやく戻ってこられました」

「いえいえ、お互いに都合もあるのです。こうして来てくれただけでも、私は嬉しいですよ」

「それでも、筋は通わせていただきたい。今まで会いにこられなかったこと、申し訳なく思っております。どうか、お許しください」

だが、その眼には知性の光があった。声も野太いが穏やかであり、発音もゆったりとしていて心地よいほどだった。現実として、一つの所作も洗練されている。

椅子に腰かけるにも、頭を下げるにも、意外なほど雑に感ずる所がない。ふとした無意識の動きにも、下品な部分がないのだ。本来、巨躯を動かす場合はそうした細かい動作が難しいはずであるのに。

足運びの一つ一つ、手の伸ばし方、目線の動かし方など、どれもがすつきりと線が通っているように清潔で、上品だった。あきらかに、相応の教育を受けて染みついた者の動作である。

脳筋らしい外見の巨漢が、こうも流麗に礼の作法をわきまえて、完璧に動いているのを見ると、違和感を覚えるはずである。しかし、それでいて自然に受け入れてしまうのが、ウォン・ライという鬼の不思議さであった。

これはある意味、ユグドラシルの製作スタッフの優秀さを示すものと言えるだろう。ウォン・ライは周大鸞全盛期の肉体的動作を、完全

に再現できているのだから。

「いえ、そんな後ろめたく思う必要はないですよ。私だって、他に優先するものがあればそうしていました。ただ、自分にはここしかなかった。だから、どうしてもこの場所を維持したかった。それだけなんですから」

「ならば、感謝を。——ナザリックを守ってくれて、ありがとうございます。私が生きた証が、ここにはある。貴方と共にこの世界を堪能できたことは、私の人生で数少ない幸運であつたと、本心から思います」

この円卓に、今は二人だけだった。かつては四十一人いたギルドメンバーは、皆何かしらの理由で引退し、すでに現役ではない。この孤独の中、一人奮闘してナザリックを維持していたモモンガに対し、感動の念を禁じ得なかった。

——だからこそ、皆が貴方をギルドマスターに推したのだ。貴方以上、このギルドを愛した人はいないから。

あからさまな態度は、逆に気持ちを覆い隠すであろう。控えめに接することが、逆に強く気持ちを伝えることもある。ウォン・ライとなつた周大鸞は、感動を押し殺しながら、穏やかな声で応えた。

「感謝されるなんて、どうも慣れませんね。でも、そう言ってくれると嬉しいですよ。今日まで頑張ってきて良かったと思います。……ウォン・ライさんは確か、病氣療養でしたっけ。でも、元気になられたようで、良かったです」

実際には、治療を諦めて死を受け入れる段階に入っているのだが、口にすべきことではあるまい。再び眼鏡の位置を直すフリをして、何も答えずにごまかした。

「ああ、なんとというか。いけませんね、どうも。……話したいことは山ほどあつたはずなのに、今は何をお話ししてよいやら、上手く——言えません」

モモンガの心情を、どう推し量ればよいのか。その心の複雑な感情を、彼は口にできないでいる。

もちろん、ウォン・ライにはわかっている。彼がうまく言葉にできないときは、自分が応えるのだ。それが、己の役割でもあつたから。

「私は、この場所を愛しています。モモンガ殿、貴方には及びませんが、ここでの思い出は、私にとって生涯の宝だ」

まずは称賛、次に共感。想いを同じくし、価値観を同じくする。そうしてようやく、真意を話せる。

「貴方と、出会えてよかった。メンバーの皆と出会えて、楽しかった。二度と戻らない黄金時代。それでもあの時、あの人たちと共に戦い、共に喜び、達成感を分かち合った日々は、私たちにとって人生の大きな財産でした」

モモンガは、頷きながら聞いていた。肉体があれば、どんな顔をしていたらだろうか。

「私と出会ってくれて、ありがとう。この世界で、一緒に生きる相手として——私を選んでくれて、ありがとう。……最後になりましたが、モモンガ殿。ユグドラシルが終わっても、ここでの記憶は、決して死んでも忘れません。貴方がいたから、私はここにいる。その感謝を、伝えさせてください」

もつと言うべきことはある。謝罪すべきだと思う気持ちもある。言葉を尽くしたいと、切に願う。

それでも、これ以上は蛇足であろう。言葉は、大切に使うべきだ。無駄な装飾を凝らして、真意をぼやけさせてはいけない。ただ正直に、己の感情だけを述べた。

だからこそ、であろうか。モモンガは、ウオン・ライの友は、ただ感謝の言葉を口にした。

「礼を言うのは、私の方です。私こそ、ギルドの皆と出会えて、共に遊べて、本当に良かったと思っっているんですから。……ああ、いけませぬね、うん。ここがリアルなら、泣いているところですよ」

お互いに、しばらく言葉もなかった。その沈黙も、心地よかった。かつての自分に戻ったようで、気負いもなく接することができる、二人はようやく思う。

それから、何時間も彼らは語り合った。話題は尽きぬほどあった。途中でログインしてきたメンバーも交えて、最後の時を楽しむ。

「皆さん、帰ってしまいましたね」

「ええ、彼らには彼らの生活がある。皆が現実世界でも、良き人生が送れることを願いますよ」

「寂しくは、ありますが……そうですね。そうでなければ、いけませんね。ああ、お時間は大丈夫ですか？」

「大丈夫、終了の強制ログアウトまで、付き合えますよ」

夜も更けて、今もナザリックにいるのは、モモンガとウオン・ライの二人だけになった。この一日、ユグドラシルのために捧げようとモモンガは思っていたから、苦痛はない。

ウオン・ライもまた、今日が人生最後の日だと悟っていたから、生を実感できる今が長く続くことを望んだ。だが、それもまた、日付が変われば終わってしまうのだ。

「最後ですからね。何か、記念になることをしたいものです。どうでしょう。一緒に、玉座の間まで行きませんか。別れを惜しむなら、あそこが一番いい」

ウオン・ライは同意した。元より、拒否するつもりなどない。

モモンガは、我がままの少ない人だった。和を尊ぶ人である。その人の頼みを断るほど、彼は情の薄い鬼ではなかった。

モモンガは思う。もし、一人でこの時を迎えていたら、どうなっていたかを。

やけを起こしていたかもしれないし、むなしさを抱えたまま、納得できない感情を処理するのに、相当手間を食っただろう。

その程度には、己の感性の面倒くささを自覚してはいるのだ。ことさらに卑下するつもりはないが、自分は凡庸な人間で、理性と感情が衝突すれば、感情を優先したくなる。

——だからこそ、人間的によくできたメンバーたちには、敬意を表してきたし、それはこれからも変わらない。

最後の日に、この場に来てくれた方々には、感謝してもしきれない。最後の時を共にするウオン・ライには、特に強くそう思う。

「ウオン・ライさんは、初めて会った時のこと、覚えていますか」

「覚えていますよ。お互い、始めたばかりの頃で、いろいろ苦労しましたな」

「ログインする時間を合わせて冒険したのも、遠い昔のことのようにです。よく考えたら、私がユグドラシルと一緒にいた時間が一番長いのは、ウォン・ライさんじゃないですかね」

「おそらく、そうでしょうな。いや、ここまで長く縁が続くとは、人との関わりは面白い。だから人生は素晴らしい、そうではありませんかな？」

「まさに。含蓄がある言葉は、さすがに年長者、という感じがしますよ」

玉座の間に着くまでも、話がやむことはなかった。惜しむ気持ちは同じだと、共感する者同士である。もつとも、意味合いは違う。

モモンガは、ゲームが終われば友人と会えなくなるかもしれない、と黙って話している。

ウォン・ライは、もうすぐ死を迎えると理解して、人生を惜しんで話している。だから、伝えたいことを残したまま、終わらせたくないと思っていた。

「無駄に長く生きていただけですがね。まあ、苦勞の多い人生ではありましたが」

「そういえば、年齢については聞いたことがありませんでしたね。職業については、中国で個人事業を営んでいる、と聞きましたが。事業の方は、順調ですか？」

「まあ、順調かと。しかし、私はもう引退して後進に席を譲ったつもりなのですが、いろいろ相談が舞い込んできて困ります。生涯現役、といえは聞こえはいいのですが、おかげで落ち着いて療養もできないありさまで——と。余計なことですね、これは」

中国共産党は、営利企業ではないが、そこに所属する以上は公務員といつて良い。周大鸞は役職こそ退いたが、除名はされていないので、いまだ党員であることは確かであった。

そして政治を事業と考えれば、そこそこの順調なのではないかと思う。表現は微妙だが、嘘ではない。

だが、モモンガが気になっているのは、もつと別の部分だ。

「お体は……まだ、悪いんですか？」

「大丈夫ですよ。気にしなくていいほどには、状態は落ち着いています。だからこそ、ログインしたのですから」

「そうですね！ いや、良かった。ここでの付き合いは終わりでも、現実でメールのやり取りだけでも続けられたら、と思うんです。……ご迷惑かも、しれませんが」

「光栄ですよ。——ですが、そうですね。難しいかもしれませんが、可能なら連絡を入れますよ。ユグドラシルの運営を通じて、になると思いますが、その時は少し、びっくりするかもしれない。それでも、現実ではそれなりに有名人のつもりなので」

それは楽しみだ、とモモンガは応えた。ウオン・ライは運営を通じて、自身の正体と、己の体の具合について、詳細に伝えるつもりだった。そう手間はかからない。今からでも、ちよつとした時間があれば済むことだ。

楽しみにしてくれているのに、悲しませてしまう。それが、後ろめたかった。玉座の間に着いても、後味の悪さは消えてくれなかった。

ナザリツク地下大墳墓最奥にして、最重要箇所。玉座の間の扉が開かれた。

荘厳なる内装の見事さを、いかにして言葉で語ればよいのだろう。無理に月並みな言葉で表すよりは、ただ鑑賞して楽しみ、率直に称賛するのが誠実であろうか。

「おや」

だが、内装よりも見事なものがある。純白のドレスに身を包んだ美女が、そこにはいた。

その容姿の美しさを語るのは、玉座の間の荘厳なる様を語るより、なお難題だった。彼女の創造主であるメンバーは、この一点をもつて、日本屈指のデザイナーと言い切つてよいであろう。

「アルベドか。彼女は、いつもここに詰めているのですか？」

「ああ……玉座の間に誰もいない、というのはいささかアレかと思

まして。特に今日は最後の日ですし、この場で過ごすことは決めていましたから、事前に呼んでおきました」

NPCの纏め役である彼女だからこそ、この場に留まることが許されている、という一面もある。

メンバーを除けば、このナザリックの頂点に立つ存在なのだ。ゆえにNPCの代表として、共に最後を迎えるに相応しい相手だろう。

「玉座が寂しいまま、というのは悲しいでしょう。アルベド一人だけでも、ここにいてくれれば、いくらか華やかになりますな」

「華やかですか。……そういう見方も、できますね。別に意識したわけではありませんが」

奥の階段をのぼり、モモンガは玉座の前に立つ。ウォン・ライも傍に控えていた。

モモンガはうかがうように視線をウォン・ライに向ける。彼がうなずいてから、ようやく玉座に腰を掛けた。

「気づいてみれば——もう残された時間は、十分ばかりですか」

「やり残したことがあれば、やりきってしまったほうが、よろしいでしょう」

「そうですね。……では、せっかくですし」

出来ることで、思いつく限りのことは、すでに済ませている。心残りはあるけど、これ以上はもはや未練であろう。

よって、思いつきでこの場にいるアルベドの設定などを見てみた。最後を共にする以上、何かしらの感慨を持って、彼女と別れたかったから。

——長い。

が、そういえば彼女を想像したメンバーは、相当な凝り性であったことを思い出す。

詳細なプロフィールを細部にわたって把握するのは、今や困難であった。しかし、流し読みでもいくらかは理解できる。

そうして、最後の一文に目をとめて、これはないだろうと思った。

——ビッチとか。いくらなんでもひどいんじゃないですかね、タブラさん。

うーん、と唸りながら、モモンガはウォン・ライの方を見た。

彼は彼で、己のNPCの設定を見直しているらしく、背を向けてコンソールをいじっている。

相手の目から逃れている、という事情があり、最後の日にもやってこなかった、タブラという創造主に対しても思うところはあった。

これくらいの意趣返しは許されるであろうと、モモンガは設定を書き換える。

——モモンガを愛している、と。

NPCの纏め役であり、これほどの美人である。見境のない売女にさせておくよりは、そうした方が自然というものだろう。何かしら特別な思惑があつて行ったわけではないが、これもギルドマスターの特権というもの。

これまで行使することはほとんどなかったのだから、最後にこの程度のわがままは許されるであろうと、モモンガは割り切った。

「失礼、少し息子の調子を確認したいと思ひまして。——当たり前ですが、変わりない様子で、安心しました」

「いえいえ、こちらも適当にいじくっていただきましたので、お気になさらず」

ウォン・ライは当然自分なりにNPCを作成していたから、この間際で確認したくなるのも仕方がない。

自分とは違って、被造物に愛着を持っているのだ。なら、その想いは尊重してしかるべき。

「本当に、これまで、色々ありましたね」

「ええ、本当に」

「なんだか、真剣に惜しくなってきましたよ。どうして、続けてくれないうんでしょう。あの楽しかった時間が、いつまでも続いたら良かったのに」

「——それは」

ウォン・ライは言葉に詰まった。

その様子を見て、モモンガは後悔した。ありえぬことと、わかっている。それでも黄金時代を想い、惜しむ気持ちは抑えられない。



「俺。たっち・みー。死獣天朱雀、餡ころもっちもち。へろへろ、ペロロンチーノ、ぶくぶく茶釜、タブラ・スマラグデイナ、武人建御雷——」  
メンバーの名を告げる。この場にいない者たちの名を、残らず述べる。

「ウォン・ライ」

最後に、口にする。

彼は顔を合わせて、一礼した。それだけで、気持ちが伝わるようであった。

「楽しかったんだ。嬉しかったんだ」

知っております。理解していますと、肯定してくれる人がいたから、気持ちが漏れる。

細かく頷いてくれる相手がいるから、モモンガは続けた。

「俺に家族はいない。現実に帰れば友もない。この世界だけが、俺の人生の証だった。輝かしい時間があつたとすれば、それはここにいる時だけだった」

ウォン・ライは、自然体のままで、その言葉を受け入れてくれた。

憐れむでもなく、苦言を呈するわけでもなく、ただそうであろう。そうであるならば、それが正しいのだと言わんばかりに。

「失われる。失われてしまう。それが、なんとも不快で、悔しい。私は間違っていますか？ ウォン・ライさん」

「いえ、貴方は間違っていない。いや、貴方が正しいのだ。……ここには、不変の輝きがある。それを誇るのは、間違いなく良いことなのですから」

時間は迫っている。もう一分を切った。

秒数を数える。23:59:30、31、32——。

「連絡、楽しみにしていますよ」

周大鸞は、最後に一言だけ遺した。

「では、おさらばです」

モモンガは沈黙している。己の中に閉じこもっていた彼に、その声

が聞こえたかは知らない。

だが、ウォン・ライは確かに自分の中から、失われていくものを感じた。それは日付が変わるのと、ほぼ同時であった。

23 : 59 : 57、58、59――。

「……ん？」

「……ふむ？」

幻想の終わり。ブラックアウトを覚悟していた二人は、同時に困惑した。

一人は、強制排出による、現実の覚醒を得られなかったため。

もう一人は、己の死による、現実世界からの別れを実感できなかったため。

「時刻は」

「……正確ですな」

0 : 00 : 21。

確認して目にした時間は、確かに終わりを過ぎたことを示していた。

数分の延長か、タイムラグか。それを疑い、コンソールの起動を試みる。

「――え？」

「何が……？」

コンソールが浮かび上がらないことを、二人は不審に思った。

何かしらの不具合かと、様々に行動を試みるが、しかしいずれも不発に終わった。まるでシステムから除外されたかのように、あらゆる電子的な感覚が失われている。

「何故だ？」

「……これはまた、なんとも」

綺麗に終わりを迎えられないことへの戸惑いが、二人を脱力させていた。

終わらないなら、続けるしかない。お互いに声をかけて、どうしようか協議しようと思った、その時である。

「どうかなさいましたか？ モモンガ様。ウォン・ライ様」

アルベドの声が、その二人を驚愕させた。

そして呆気にとられた彼らを前にして、まるで生きているかのよう  
に、感情と意思を感じさせる声で、再度問うた。

「何か、問題がございましたか？」

モモンガとウオン・ライは顔を見合わせて、ほぼ同時に声を出した。

「これは現実でしょうか？」

「これは現実だろうか？」

まさに、これが彼らの現実であり、彼らの人生の始まりでもあった。

あるいは、再出発というべきであろうか。ともあれ、その記念すべ  
き第一日となったことは、間違いないであろう――。

### 第三章 現実への自覚

状況を冷静に把握して、行動を起こしたのは、モモンガの方が先だった。

——焦りは失敗の種であり、冷静な論理思考こそ常に必要なもの。心を鎮め、視野を広く。

かつて存在したメンバーの言葉を思い返し、モモンガは現実を受け入れた。

「問題か。ああ、問題だ。何しろ、GMコールが利かなくなっているのだからな」

不可解なことが起こった。それを理解した以上、即座に対策を練る必要がある。

己はギルドマスターである。メンバーの目の前で無様をさらすことは許されない。ゆえに、彼はまず一手を打つ。

「お許しを。無知な私には、GMコール、なるものが何を意味するか、理解することができません。ご期待に添えられぬ私に、どうぞ挽回の機会を頂きたいです。どうぞ、何なりとご命令を」

「……よい。責めるつもりはない。それより、緊急事態だアルベド。すぐに動かねばならぬ」

NPCを相手に、会話ができていく。この驚異的な事実には驚く余裕を、すでにモモンガは持ち合わせていない。

ただ事実に向き合って考察し、理解し、様変わりした世界の法則を掌握する。その必要に駆られていた。

「セバスと、プレアデスを動かす。この場に呼んでくるのだ。良いな？」

「仰せのままに」

命令には忠実だった。アルベドはモモンガの言葉の通りに、退室して行動に移った。それを遠目に確認して、彼はようやくウオン・ライに声をかけた。

「大丈夫ですか？ ウオン・ライさん」

「あ、ああ。うん。大丈夫ですとも。——いささか妙な気分ですが、私

は確かにここにおります」

「……良かった。この状況で一人だっただらと思うと、ぞっとしますよ。どんな失敗をやらかしたか知れない」

仲間がいたから、モモンガは踏ん張れた。有り得ない、と思考停止せずに即座に手を打てたのは、まさにそのおかげであった。

ウォン・ライは、まさに『そこにいる』という仕事を成し遂げたのである。だから、モモンガは感謝した。彼が今、間違いなくこの場に、ナザリックに居てくれたことを。

「これは、現実ですか」

「そのようです。……口も動いていますね。グラフィック……：……というか、現実そのままの存在感がありますよ。我々は今、この大地に生きている。そう言っても良いでしょう」

理屈はわからないが、仮想であったものが、実現してここにある。分身に過ぎなかったキャラクターが、今では自身そのものだ。これを夢の一言で済ませられるほど、モモンガは楽天家でも悲観論者でもなかった。

「それはまた、なんとも。実に重い現実ですな。気持ちが躍るようです」

「剛毅ですね！ ……私は表面は取り繕っていますが、今にも倒れそうですよ。目に飛び込んでくる情報を整理するだけで精いっぱいです」

「良いではありませんか。弱音を吐けるだけ、余裕がある証拠です」

モモンガとしては、そこまで余裕を持っているつもりはない。

だがウォン・ライはそれを余裕という。腑に落ちぬ、という感情を読み取ったのであろう。続けて彼は語った。

「本当に余裕がないときは、言葉さえ出なくなるのです。落ち着きもなくなり、弱音を吐く暇もなく忙しく足を動かすもの。……モモンガ殿は、どっしりと構えておられる。それは余裕というものです」

「虚勢という線はありませんか？」

「張り通した虚勢は余裕と変わりません。張り通しなさいませ。それが君主というものです」

それでも不安ならば、とウォン・ライは付け足した。

「私が居ります。ここに。ナザリックの赤鬼が、この場に控えているのです。何を恐怖する必要がありますか」

「——ああ」

「私と貴方が居て。完敗などした覚えがありますか」

過去の栄光と言えば、そうであろう。今と昔は違うと、言えばそのままに終わるであろう。

だが、モモンガは肯定した。それは、彼にとっても誇るべき栄光であつたから。

「ありませんね。不覚はとつても、きっちり復讐は果たしました」

「臣下の者共が、そろそろ戻ってくる頃合いでしょう。——ギルドマスター。アインズ・ウール・ゴウンは、ここに健在です。何も恐れることはありません」

二人だけでも、ギルドは存続しうる。

ウォン・ライはそう言っている。他のあらゆるものが敵対したとしても、ここに我等の絆は不滅である。

モモンガはそう受け取つたし、それで正しかった。だから、アルベドと彼女が引き連れるセバス達と向かい合つても、何らストレスを感じることもなく、ごく自然に主として接することができた。

「よく来てくれた、我が僕たちよ」

友人の格が、そのまま本人の格に直結すると見なされる文化がある。友人を己と同格の存在にまで引き揚げてしまう人物もまた、同時に存在する。

そして、ウォン・ライはそうした文化の国に生まれ、そうした人間として育っていた。モモンガが最初から支配者としての核を持てたのは、この手の幸運に恵まれたからだ、そう言えるのかもしれない。

モモンガはセバスとプレアデスに情報収集を命じ、一息ついた。

とりあえず敵襲を受けているわけではないのだから、周辺地域への偵察は、最初の一手として無難なところであろう。

『モモンガ殿』

「——何か？」

『いえ、<sup>メッセージ</sup>伝言の確認です。このやり方なら、我々だけで、内密に話ができますな』

ここが現実である以上、急いで情報を確認せねばならない。そして、NPCの動向を観察するうえでも、自らの情報は秘匿しておくべき。

何もアルベドらが裏切るなどと、本気で考えているわけではないが、NPCの主として、相応の振る舞いというものがあるだろう。

そうした縛りを意識せずに、素のまままで話し合える状況は、モモンガに精神的な余裕を与える。本人としても、小心で臆病な己を自覚しているだけに、<sup>メッセージ</sup>伝言を有効活用できるなら、それに越したことはなかった。

『後で、時間を作りましょう。今は、アルベドの目がありますので』  
『わかりました。では、とりあえずこの場を収めますね』

アルベドは命令を望んでいる。連れてきた者たちは仕事を与えられたが、己は如何にすべきか。彼女は、モモンガの言葉を待っていた。

「アルベド、近くに」

「——は」

傍に来たアルベドを、モモンガはあえて無遠慮に触れた。肩に手を置いただけだが、それでも肉感的な彼女の感触が、掌に吸い付くように感じられる。

「ん——」

「驚いたか？ いや、負の接触を解除するのを忘れていたな。すまない」

「いえ、これは栄誉ですわ。モモンガ様に直接触れられることは、私の喜びです。……それに、この程度であればダメージのうちにも入りません。どうか、お気になさらず」

試し、である。あえて無礼を働くことで、忠誠心をみるつもりであった。

だが、結果は予測以上。何気にフレンドリーファイアが解禁されて

いるらしいことも、この接触で理解する。その上で、アルベドは敵意どころか心酔の情を向けてくれているのだから、彼女の忠誠はそのままであるはず。

ユグドラシルと同じ仕様であれば、NPCはプレイヤーを裏切ることはない。だがここではどうか。

人格があれば、自由意思もある。そうした存在を縛り付けることに、モモンガは人としての感情から、違和感を覚えてしまう。現実では人を使った経験がないのだから、その想いは当然でもあった。

この確認は、相手の忠誠を図ると同時に、己の認識を改めるための儀式に近かった。すなわち、ギルドマスターとして生きたNPCを統率する覚悟を、この時モモンガは自覚せねばならなかったのである。「そうか。……今は、もうよい。下がって、外に出た者たちの帰還を待て。防衛に関しては、基本は一任する。だが、異常があれば報告せよ。現状、情報がそろうまでは慎重に動かねばならぬ。侵入者があれば、まず警告し、相手の反応を見よ。出来る限り友好的に接触し、私の下まで連れてくるのだ。たとえ暴力的な手合いでも、処理できるものならば、生かして捕らえることを重視せよ」

「了解しました。では、これにて。——ご用命あらば、いつでもお呼びください」

そうして、アルベドは一礼して去った。モモンガは密かに安堵して、息を吐く。

「緊張しました。でも、何とかやれるもんですね」

「はは。いや、様になっておりましたぞ。モモンガ殿には、支配者の風格というものがあるようで」

「よしてくださいよ。一営業マンに何を期待してるんですか」

「もちろん、ギルドマスターであることを期待しておりますよ。今でも、貴方は我々の長だ。元よりわかっていましたが、こうして現実のものとして認識すると、何やら感慨深いですな」

ウォン・ライは少し雰囲気が変わったようだった。

少しだが、生き生きとした印象を受ける。先ほどより元気になったと、そんな風に見えた。



「もしかして、楽しんでますか？」

「生きていることを楽しまず、何を楽しむというのです。モモンガ殿はアンデッドですが、こうして現実に存在するのですから、生きていくとって良いでしょう。されば、この不可解な現状に対応しつつも、同時に娯楽として堪能したほうがよろしい。さあ、次の一手はいかがなさる？」

お気楽に聞いてくれる、とモモンガは溜息をつきたくなったが、ついにセバスからの伝言が飛んでくる。

その内容はと言えば、周辺の地形が変わっているばかりか、植生まで変化しており、ユグドラシルではありえない環境となっているらしい。真剣に、考慮すべき事態である。

「……本当に元氣ですね。うらやましい。さてと、セバスから報告が来ました。ちよつと難しそうな事態ですし、呼び寄せて詳細を聞きましょう。——ウオン・ライさん」

「はい。では、そのように」

ウオン・ライはうなずいて、うやうやしくモモンガの傍に侍り、セバスの帰還と報告を待った。

彼はごく自然にそうしたから、モモンガもつい普通に流してしまった。あの呼びかけは、『一緒に報告を聞いて、それから考えましょう』という程度の意味でしかなかったのだが、相手はそうとわかって意図を外してきた。

——何か、一歩。線引きされたような気がする。アレ？ 俺なにかやらかした？

別にウオン・ライを部下にしたつもりもなければ、降格（という言葉はおかしいが）したわけでもないのに、彼が臣下の礼を取るのを良しとしてしまった。

「ええと、ちよつとツツコミが遅れましたが、そこまで他人行儀にしなくてもいいんじゃないかなーと」

「さあ、現実を生きるNPCが帰ってきます。相応の態度を取らねばなりません。よろしいですか？」

微妙な違和感を抱いても、NPCを前に不審な行動をとるわけにも

いかないのも確か。ともあれセバスの情報を検討せねばならない。

——守護者を集めるのは、それからにするか。

大勢で情報を吟味する方が、考察には有利であろう。

だが現状、どこまで守護者の能力を信ずればよいのか、いささか微妙なところである。忠誠心はもう、いちいち気にする方が馬鹿らしいので、気にしないとしても。

それからしばらくして、セバスがやってきた。顔色は変わらないが、心なしか表情が硬い。

「さてセバス。お前の報告を聞こう。出来れば、お前自身の雑感も添えてな」

モモンガは、NPCの設定を詳細に理解しているわけではない。

その設定の中に致命的な弱点が潜んでいたとしても、コンソールが開けなくなつた今、確かめる手段もない。

だからこそ、この場面で絶対的に信頼のおける相手。すなわち、ウオン・ライの見解をまず参考にするべきだ。そのうえで、己が身の振り方も考えようと、彼は思っていた。

ウオン・ライは、モモンガほど事態を悲観的にはとらえていない。

油断しているのではない。現実感を失っているとか、知能が低下しているという理由でも、無論ない。

——戦場では、情報があいまいで頼りにならんことや、目的の情報自体が逐一変化し続けることも、ままたある。

ユグドラシルでの戦いも、そうであった。万全の状態で戦闘を始められることは、まずない。

不完全な部分をいかに補うか。いかに手持ちの札を活用するか。運用する側の裁量次第で、不利な状況からでも、優位に持ち込むことは出来るものだ。

ゆえに、焦りは禁物。合理的な思考さえあれば良い。

「ふむ。聞く限りでは、ナザリック自体が、どことも知れぬ未知の大陸に、転移したような感覚を受ける。セバス、お前の感想はどうだ？」

「——はい。そこまで深く探ったわけではありませんが、まったく異質の舞台に立った、という感想を抱きました。我々が異質なのか、ここが異常なのか。わかりませんが、異常事態が起こったというのは、事実であるようです」

NPCは、ユグドラシルでも大つぴらに表を出歩けない存在である。基本的に拠点防衛用のためか、ナザリックの領地である地表のわずかな所までしか出ていけない。

それゆえ世界の形に、そこまで造詣が深いわけでもなからうが、漠然とした違和感を覚えたのは確かであるようで——。報告を受けているうちに、彼なりに困惑している様子が伝わってくる。

「プレアデスには、そのまま周辺を探らせて、常時情報をやりとりしております。半日頂ければ、さらに詳細な情報を収集できるものかと」

「そうだな。……いや、もうよい。彼女らを戻らせよ」

「よろしいのですか?」

「いまだに襲撃を受けていない。安全に探れている、という現状が把握できただけでも収穫だ。これ以上は、守護者たちと検討してからにしよう。ウォン・ライさん、それでよろしいですね?」

「——ええ、それが最善かと」

モモンガは、ここで一旦打ち切らせた。実際、彼の言葉の通り、その事実そのものが収穫である。ここが全盛期のユグドラシルなら、高レベルのプレイヤーが不審な動きをすれば、数分とたたずになにかしらのリアクションを受け取るものだ。

ウォン・ライは、彼の判断の正しさを認めた。そしてモモンガもそれを感じ取って、話を進める。

「では、セバスよ。各階層の守護者たちに通達せよ。この玉座の間に集合するように、とな。——ただし、全員がそろってから入室するように」

その際、己に伝言で伝えるよう命じた。守護者たちが集まるまでの間、ウォン・ライと話し合っておきたかったし、心の準備というものも必要だったからだ。

「了解しました。各階層を回り、守護者に召集をかけます」

「急がずともいい。だが、もし手を離せぬ事情があれば、その旨をこちらに伝えるようにな」

なるべくゆっくり来てくれ、とは言えないモモンガだった。

内心では冷や汗をかくような想いであったが、セバスの退室を確認してから、ようやく一息ついた。

呼吸など必要としない身でありながら、心理的な要因から、溜息をついたつもりになる。その精神の圧迫感を解放するつもりで、彼はウオン・ライに話しかけた。

「……どうしましょうか」

「このまま流れに乗るのが良いでしょう。今のところ、悪くない展開になっていと思います」

「しかし、まるで何も見えない状況です。情報は入ってきましたが、それが示すのは、つまり、その——」

「ナザリックは素晴らしいところですね。現実感が伴うと、こうも違って見えるものかと、感動します。暇が出来たら、見て回らましよう」

ウオン・ライは努めて明るく言った。そんな、わかりきったことを確かめる必要性を認めなかったし、彼の不安を取り除く方を優先すべきだと思ったから。モモンガの不安をかき消すように、さらに言葉をつづける。

「外の環境にも興味が出てきました。美しい自然がここに残されているというのなら、それをながめるだけでも、心が癒されましよう」

「……そうですね。そうですね。失礼。奮起したつもりでしたが、気弱になっていたようです」

「よくあることです。人の心は、うつろい易い。新たな事実直面するたび、心が悲鳴を上げることもあるでしょう。——だから、恥じることはありません」

何より、とウオン・ライは改めて言った。

「アルベドに対して、即座に毅然とした態度を取られたではないですか。私は、そこまで機敏に対応できなかった。貴方は、私には出来ぬことを、やれるお人です。……自信をお持ちください」

モモンガには、自信を持ってもらわねばならない。その必要性を、彼は認めていた。

これから現実となった世界で、このナザリックと共に生きていくのならば、組織の秩序を重んじねばならぬ。

ナザリック内の序列を乱してはならないと、ウォン・ライは固く心に誓った。ギルドマスターとしてモモンガを頂点にいただき、己はその下で働くことを、早くも受け入れたのである。

——さりとして、性急に覚悟を求めても、彼の精神によくはない。徐々に詰めていくのが良いか。

ウォン・ライは周大鷲であった。彼は創業者であり、守成を知る人である。その経験が、ここで自分は彼の下風に立つべき、と判断させた。そして、彼には確実に資質がある、とも。

「自信、ですか」

「そう。元々、このギルドを治めていたのは、モモンガ殿ではありませんか。これからも、それを続けていくというだけです。実績があるのですから、何も問題は起こらないでしょう」

「ゲームと現実の違いですよ」

「はい。そして、ここが現実です。——おわかりでしょうか？」

モモンガは傍目にもそれとわかるほど、動揺している様子だった。しかし、ウォン・ライは逡巡を許すつもりはなかった。

「ギルドマスターを演じ続けると、そうおっしゃるのですか？」

「演じる？ とんでもない。自然のままに振る舞えば、よいのです。思い出してください。貴方は四十一人がそろっていた時も、よく考え、よく接して、ギルドを維持していたではないですか。これは、その延長ですよ」

「……ゲームの、延長……」

「はい。モモンガ殿。貴方はナザリックの支配者。死の王。異形種を統べる魔、そのものなのです。そして——」

ウォン・ライは臣下が君主に対してするように、ひざまずいて礼を行う。わかりやすい形で、『私は貴方に従う』と意思表示を見せたのだ。

「このウオン・ライ。他の三十九人に代わって、貴方を支え続けましょう」

あえて仰々しくしたのは、それだけ印象を強く与えたかったからだ。

モモンガから『疑いの目』で見られることだけは、耐えられない。それだけは、受け入れたくないことである。

たとえ相手にその気がなかったとしても。これが邪推に過ぎないとしても。

それでも、服従の意を示しておかねば、ウオン・ライは安心できなかったのだ。

「そこまでしなくてもいいですよ！ 俺は——そんな立派な人間じゃない」

「まさに。貴方はもう人間ではない。そして私も、周チュウ、ダーラン大鸞ではない。だからこそ、申し上げます。——どうか、ご安心を。至らぬところは、補佐いたします。ご心配なく、喧嘩の仲裁や異文化コミュニケーションには慣れておりますので」

モモンガが駆け寄る前に、ウオン・ライは立ち上がって彼を押しとどめた。

彼は変わっていない。少なくとも、己に対しては真摯に、同格の友人として接したがっているのだと、確信を持てた。それだけで、もう充分である。

——さあ、この大事な骸骨殿のために、働いていくとしよう。死んでからも、やりがいのある仕事に就けるとは、嬉しいことだ。

モモンガは言葉を選んでいようで、少しの間、沈黙した。そして、決心する。

「私を、補佐してくれるんですね？」

「はい。かつてのように、これからも」

「私を、ギルドマスターと認めてくれるのですね？」

「はい。これまでと変わりなく」

今更のことであるが、これだけは、確認することに意味がある。二人は真剣に、応え合った。

「私は未熟で、頼りない男です。それでも?」

「貴方は若い。今の自分に満足できないなら、成長していけばいい。私も、協力いたしましょう」

すでにレベルは限界に達しているが、そうした問題ではなく、精神的な面のことである。モモンガには、傷つきやすい現代的な青年としての一面もあるのだ。

それを理解し、ウォン・ライも言葉を選んで言う。

「ロールプレイでは、完璧にこなしていたのが貴方だ。そのノリでやってみればよろしい」

「ずいぶん簡単に言ってくれますね。……まったく、威厳を演出する方になってみてくださいよ」

「よくわかりますとも。ですから、フォローは完璧にしてみせます。私を信じてくださいますな?」

「そうするしかないのでしょうか? なら、選択の余地はありませんよ」  
あきれたような口調だが、本当に嫌がつているわけではない。その証拠に、モモンガの体の緊張は解かれ、リラックスしたように言葉を漏らす。

「——ああ、そうだった。ウォン・ライさんは、人をのせるのも、のせた人を支えるのも、得意な人でしたね。……昔を思い出しましたよ。ええ、そうだった」

ようやく気が緩んだのか、雰囲気やわらかくなった。モモンガは骸骨ゆえ表情がわかりにくいだが、よく観察すれば、笑っているような様子を感じ取れたはずである。

その時であった。セバスからの伝言が飛んでくる。どうやら、守護者が勢ぞろいしたらしい。

「覚悟を決めました。やってやりましょう。そう、私はナザリックが主、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスター、死の支配者モモンガである」

ウォン・ライは微笑んでうなずくと、その傍にはべる。

モモンガは緊張しつつも、とにもかくにも外見は威厳を保っていた。全階層の守護者たちを玉座の間に迎えた時も、ロールプレイのつ

もりで現実に適応してみせた。

「——面を上げよ」

ここから、彼らの伝説が始まる。

死の支配者に、忠実な赤鬼がいたことは、この世界の誰にとっても僥倖であつたろう。

その証拠に、不変の伝説は物語るのだ。王には宰相がいた。それはごく当たり前の存在として、最初から王に寄り添っていたのだ——と。



## 第四章 王佐の友

モモンガとウォン・ライは守護者たちと相對する。といっても、主君と臣下の關係である。当然、對等ではない。

玉座の間において、二人は彼らを見下ろす位置におり、彼らは下から見上げる立場にある。

「集まってもらったのは、他でもない。我々が未曾有の事態に直面しているからだ」

驚きの声が、守護者たちから挙がる。疑問が飛ぶ前に、モモンガは続けた。

「状況を把握できていない者もいるだろう。これより詳細を説明する。——セバス。再度、この場で見たものを報告せよ」

そうして、セバスは自らが確認したことを、余すところなく述べた。

ここがユグドラシルではなく、まったく未知の世界であることを、この場の全員が理解する。

「——そういうことだ。差し迫った危機こそ迫っていないものの、我々は行動せねばならぬ。まず何よりも、情報が必要だ。環境、植生、種族の多寡とその強さ、国家があればその数と外交關係。……最低限の知識を得るまでは、ナザリックの秘匿も重要事項だ。理由は、言うまでもないな？」

モモンガはとりあえず、思いついたことを適当にしゃべっていた。ある程度ぼかしておけば、勝手に納得してくれるだろうと思つて。

それが悪い方向に向いても、ウォン・ライが傍にいる。補助は常に期待できるし、彼が沈黙しているのならば、そのまま続けていいのだろう。

「よつて、これより即座にナザリックを周囲から隠匿し、他の生物の目に映らぬよう工作を行つてもらう。——誰が適任と思うか？ デミウルゴス」

「……問題がなければ、私とその任にあたりましょう。よろしいでしょうか？」

一度、逡巡してからデミウルゴスは答えた。問われたからには、自

身が全力を尽くす。それが、彼の誠意なのだろう。とすれば、あえて再検討を求める必要もない。

「よろしくない理由があるのか？ 知患者であるお前が、自ら対策を施すというのだ。疑いようがあるまい。——任せよう」

「——はッ！ では、直ちに」

「話をすべて終えてから、だ。急ぎの仕事ではあるが、ここで話を聞く余裕くらいはあるだろう」

「失礼いたしました。そう致します」

ちらり、とモモンガはウオン・ライの方を見やる。

彼はうなずいて、先をうながした。

——で、なんだっけ。他になにかあったかな。

言葉が途切れる。モモンガは猛烈に焦りながらも、表には出さない。十秒ばかり間をおいて、ようやく彼は言葉に出した。

「組織の運営システムについて、確認しておきたい。アルベドよ、不具合などはないか？」

「ございません。ナザリックは完璧なシステムの下、運営されております」

「……そうか。頼もしいことだ。が、具体的に聞きたい。たとえば、情報の共有システムはどうなっている」

「デミウルゴスを総責任者とした、共有システムが出来上がっております。八、九、十階層を除いては、余さず網羅している状態です」

あれこれと情報を確認しつつ、モモンガは詳細を詰めた。警備システムはほぼ、そのまま運用できるだろう。これは、いくらか調整を加える程度で済んだ。

内部に関しては、問題ないだろう。後、聞くべきことがあるとすれば——。

「最後に、各階層守護者達に聞くべきことがある。私と、ウオン・ライについてだ。——我々を、どう思っている？ 率直に述べよ。この場においては、正直さこそが美德である。不敬と思っても、嘘偽りなく答えるのだ」

疑うばかりで、信じることを知らないものは愚かである。

信じるばかりで、疑うことを知らないものは無思慮である。

モモンガはちょうど、程よい所で疑いつつ、信じたいという想いを持ち続けていた。このあたりのバランス感覚は、天性のものといつて良い。

また、このタイミングでの質問としても、最適であった。とにかく、しもべたちは主の役に立ちたくて仕方がない状態で、言葉だけでも応えられるなら、応えたい状態であったからだ。

「支配者トシテ、申シ分ナキ方々カト心得マスル」

コキュートスが実直に述べた。単純な言葉であるが、真剣に語っていることは、雰囲気でもわかった。疑う必要はない、とモモンガは見る。「慈悲深い、方々だと思えます。不満の持ちようがないくらいです」

「す、すごく優しい方々だと思えます」  
アウラとマールレの返答に、安堵を覚える。これを疑う気には、なれなかった。

「デミウルゴスはどうか？ 知患者たるお前に聞きたい」

「知患者、などと。至高の方々には敵いません。賢明なる実行者たるお二方には、私など及びもつかぬとわきまえております。まさに、端倪すべからざる、という言葉がふさわしいでしょう」

モモンガはそこまで自己評価は高くないが、この発言は好意の発露とみるべきだろう。素直な好意を疑うよりは、信じようと思う。

「モモンガ様は、美の結晶。この世で最も美しいお方。ウォン・ライ様は、この世で最もたくましいお方。その肉体の素晴らしさ、人格の高潔さは、何物にも代えがたく、例えようもないほどでございます」

シャルティアの言には、聞くべきところがあつた。美しいといわれて喜ぶ質でもないが、友を称賛されるのは、素直に喜ばしいと思う。「慈悲深く、そして思慮ある、君子と評すべき方々です。どうか、これまでと同じように、我らを導いていただきますよう——お願い申し上げます」

セバスは製作者に似て、誠実な男である。もとよりそれは、前提として把握しておくべきことであり、この場で発言させたのは余計なことだったかもしれない。ともあれ、モモンガはそれを再確認できて安

心した。

さて、と最後にアルベドに視線を向ける。設定をいじってしまった相手だけに、向かい合うのが怖くもあった。

「私どもの最高の主人であります。そして、私にとっては、愛しい方でもあります」

「……念のために聞くが、お前が愛しいと思うのは、どちらだ？」

「もちろん、至高の方々の最高責任者、我らがマスター、モモンガ様です。——あるいは、これも不敬なことかもしれませんが、心からお慕いしております」

「う、うむ、そうか。いや、不敬なことはないぞ。お前の気持ちは嬉しい。一応聞くが、ウォン・ライさんについてはどう思う？」

「敬愛しております。——非礼を承知で申し上げますが、モモンガ様には及びません」

内心、冷や汗をかいているモモンガである。明らかに設定をいじった影響が出ている。

思わずウォン・ライの方を見てしまうが、朗らかに微笑んでおり、気分を害した様子はない。

「それでよい。ナザリツクの最高責任者はモモンガ殿だ。私は序列二番目で——いや、そうだな。アルベドと同格、ということにしても良い。いかがかな？ モモンガ殿」

「……それは、即答できかねます」

ウォン・ライがそう言い出した意図が分からない。モモンガはとりあえず保留して、場を締めくくることにした。

「なるほど、各員の考えは理解した。ならば不安はない。私たちが担当していた職務も、今後は委ねていくことになるだろう。その信頼に応え、励め。——以上である」

謁見はこれで終了したとばかりに、モモンガは一度席を立とうとした。

だがウォン・ライが手で制して、そのままにいるように、と伝言で伝えてくる。

いぶかしく思いつつも、モモンガは守護者達と向かい合う、ウォン・

ライを見た。

「挨拶が遅れてしまったが、改めて伝えておきたい。——このウオン・ライ。ようやくナザリックに帰還した。今後とも、よろしく頼む」  
そういえば、そうであったか、とモモンガは思う。ウオン・ライはナザリックを一年余り離れていた。NPCとプレイヤーとは、時間の感覚も違うだろう。この一年を、どのような想いで過ごし、また彼の帰還を受け止めるのか。

これは、一つの試練であろう。モモンガは、彼の行動を玉座から見守ることにした。

「そして、私は皆に詫びねばならない。一人、このナザリックを離れたこと。今、こうして帰還が叶ったのは、偶然のようなものだ。我が身に巣くった病魔が、ひと時の自由を許してくれたからだ」

守護者たちに、どよめきが走る。モモンガも、そこまで言うのか、と驚いた。うやむやに終わらせても、文句が飛ぶことはないというのに。

いや、ここで誠実に現実を語るのが、ウオン・ライという男なのだろう。そういえば、次の言葉にも見当がつく。

「皆に謝罪したい。私は、許しを請わねばならぬのだ。——私の不徳によって、ナザリックを離れざるを得なかった。それは紛れもなく私自身の落ち度であり、罪である。許していただけるだろうか？」

ずるい謝り方だ、とはモモンガは思わなかった。ただ、当人だけが罪悪感を感じるのみである。

もとより、至高の四十一人に逆らう者など、守護者の中には存在せぬ。その謝罪は受け入れられた。

「病魔に敗北し、私は死んだ。ここに居るのは、ナザリックが私を復活させてくれたからで、それはモモンガ殿がナザリックを維持してくれていたからこそ、出来たことなのだ。……よって、私はここに誓う。ウオン・ライはモモンガに永遠の忠誠を捧げよう」

口約束で済ませるような人物ならば、モモンガの信頼など、最初から得られなかった。

彼が口に出した言葉である。金を山と積まれようと、いかなる暴力

や権力を約束されようと、これを違えることはない。

何より、忠誠、という言葉の重みは、本人が誰より思い知っている。それでも、ウオン・ライは言い切ったのだ。

そしてモモンガは、それを無自覚に受け取った。

「その忠誠を受け取ろう。そして、祝福しよう。我が盟友よ。かつて至高の存在であった四十一人も、今やたった二人に過ぎない。だが、こうして一人の友が戻ったのだ。他の者たちが戻ってこれぬと、どうしていえよう？ ——この瞬間より、ナザリックは再生するのだ」

モモンガは守護者たちを見下ろして、威圧するように呼び掛ける。

「よもや、我が友ウオン・ライを疑う者はおるまいな？」

逆らう者などいないと、わかっただけで、言った。これは儀式である。これは儀礼的なやりとりで、実行することに意味がある。

そして、モモンガの予想通りに反対など出なかった。これでようやく、きちんとした行動がとれると、二人は安堵する。

「ならば良し。これよりナザリックは、未知の領域に進出する。困難ではあるだろう。危機も想定される。だが、私は皆の協力があれば、それを乗り越えられると信ずる」

モモンガは玉座を立って、歩き出し、守護者たちの前に出でて、大仰に腕を振り上げ、振り払った。

「ゆえに守護者たちよ。我が愛するナザリックの者たちよ。——励め。得られる宝物一点、領地一寸、それら一つ一つが我らの生きた証であり、誇りとなるのだ」

さらに付け加えるように、モモンガは言葉をつづける。

「これより、アインズ・ウール・ゴウンは異世界の大地に立つ。ゆめゆめ警戒を怠るな。連絡を密にせよ。——油断は許さぬ。ナザリックは我が領地である。そこに住まう者たちは我が宝である。お前たちが傷つけば、それだけ私の心も傷つくのだということを、忘れることのないように」

言うべきことは全て言った、とばかりに、モモンガはそこで話を切り上げた。

ウオン・ライは察して、締め言葉を吐く。

「モモンガ殿の意思は示された。……行動の時である。各自、日常の業務に戻れ。情報収集は一旦、時を置く。私か、モモンガ殿が直接出向く必要があるからだ。——もちろん、供の者を選出する。その人選が済み次第、連絡を入れよう。それまで、いつでも表に出られるよう準備せよ」

これで、皆を解散させた。これで、残るのはモモンガとウオン・ライのみである。

「……どうでしょう。上手く演出できたと思いますか？」

「完璧ですな。文句のつけようのない態度でした。まこと、モモンガ殿は支配者としての風格を身につけておられる」

「よしてくださいよ。いわゆる、魔王ロールプレイをそれらしく演技たにすぎません」

「そうですね。——しかし、結果を見ましよう。我々はこの現実に適応しつつある。未知の脅威を前に、なんとか戦い抜こうとしている。この現状を、ロールプレイで乗り切れるのであれば、それはもはや本物、というほかない。私はそう思います」

モモンガの演技——本人がそう主張する——ところによれば、これまで見聞きしてきた大物らしい態度と言葉遣いを心掛けただけ、という。

謙遜しているわけではない、とウオン・ライは理解する。彼は素のままではいけないと思い、相応の役柄を演じているつもりなのだろう。

今はそれでよい……としても、長時間続けば本人は疲れてしまう。なら、身を休める廂むすびが必要だ。己がそれになろう、とウオン・ライは決意する。

「それでも、自分は自分です。それ以上のものになんて、なれない。理想的な支配者なんて、ガラじゃない。私は——『俺』は、ただの営業マンに過ぎないんですよ……」

「そうでしょうとも。モモンガさん。貴方は、それでいい」

ウオン・ライは知っていた。今はただ、肯定すること。ありのままの自分を保証することが、なによりの薬であると。

言葉は大切に使うべきだが、今回に限っては、くどいほど強調するのが良い。何しろ、ゲームが現実になるかのような、異常事態である。己の存在、自分の精神に不安を持つのは当然で、それをぬぐい去るには、繰り返し強く言葉を用いるべきだった。

「なるほど、貴方の本質は支配者ではないかもしれない。だが、それはそこまで重要なことだろうか？」

「……ギルドマスターとしての私を求めた貴方が、それを言いますか。矛盾してませんか？」

「矛盾は人の性ですよ。誰も彼も、完璧に首尾一貫とした行動を取れたなら、それは人間とは言えません。揺れ動くから、人です。かえりみて成長できるから、人なのです」

モモンガはプレイヤーとしてはかなりの力量を持っており、それは誇ってよいことだ。この点に関しては、当人も自覚して自負している。

だが現実として、モモンガはただの一般人。ゲームでの実績が現実において、どれほどの優位性を保証してくれるだろう。現実の比重を重く見るがゆえに、モモンガは自信を持つことができない。

「詭弁にしか聞こえませんが」

「おや、ばれましたか。……実際、調子のいいことを言っておかねば、耐えられぬのですよ。これで結構、衝撃が大きかったもので」

ウォン・ライの弱みを、モモンガは初めて見た気がした。

モモンガは意外に思いつつも、内心を問う。

「俺の本質が支配者でなくとも、重要ではない。そう言われましたが、どうしてですか？ ナザリツクを率いるなら、相応の威厳があった方がいいでしょう。有能な為政者であった方が、理想的でしょう。俺にはわかりません」

「モモンガという人が、そこにいること。肝心な要は、それだけだという話です」

モモンガの顔が生身なら、若干驚いた顔を見せていただろう。

理解半分、不可解半分、という表情で。

「モモンガさんだから、皆が納得した。そういう貴方だから、皆に認め



られた。これは、純然たる事実です。まさか、アインズ・ウール・ゴウンの輝かしい日々を否定するほど、やけになつてはいないでしょう？」

「まさか！ でも、それは——」

「その程度のこと、ですよ。貴方の支配を受け入れぬのなら、それはナザリックの方が間違っているのです。あの楽しかった日々、栄光の軌跡を、どうして消し去ることができなのでしょう。貴方が率いた四十一人は、貴方の下だからこそ団結して戦えた。同じ目標をもって、生き抜くことができた。……皆で喧嘩したこと。その後で仲直りして笑いあつたこと。全て、私は覚えております」

モモンガは思い出していた。かつての記憶、過去の素晴らしき日々を。

そこには仲間がいた。大切な友たちだつた。他に変えようがない、まぎれもない人生の一部であつた。

「私たちの、アインズ・ウール・ゴウン。私たちの、ナザリック」

「そして、我らがギルドマスター、モモンガ殿。貴方は、ありのままがいい。たまには気取るのもよろしいがね。——どちらであろうと、貴方の自由。ここは貴方の庭であり、我らの家です。当たり前すぎて、意識するのを忘れていたのですが、大丈夫。何も心配は、いりませんよ」

「でも、もし失敗したら、どうしたらいいんです。もし、それでナザリックが壊滅したら。私たちの生きた証が、消えてしまったら。俺に、そんな責任は負えません。人の上に立つことが、怖い。どうしようもなく、怖いんです。それは、俺にとつては知らないことだから」

未知を恐れるのは、人として正常なことである。

ウオン・ライは、あたたかな声で、モモンガに応えた。

「私が、おります」

再度、強調して、口調を強めて言った。

「ウオン・ライが、ここにおります」

自身に、忠誠を誓った男の声である。

モモンガは、ただ目の前にいる赤鬼の言葉に耳を傾けた。真摯な表

情を見て、口をはさむことすら忘れる。

「不安とあらば、何度でも、申し上げましょう。あの時を共有した友が、ここに一人残っているのだと。孤独になどさせません。責任を分かち合い、喜びを分かち合う。モモンガさん、貴方を支えるために、私は生きよう。それが、私の存在理由なのです」

ウォン・ライは、かつて周大鸞であった。

その人物は、中華を動かし、国をまとめた。『中華の執事』『中国の良心』『甦った大儒』——異名は数ある。

その人物の残滓が、訴えかけるのだ。『彼を救え』と。

「頼りにしても、いいですか」

「もちろん」

「何度も悩みます。迷うでしょう。後悔だつて、いくらでもすることになると思います」

「特別なことではありません。よくあることです」

「……俺は、鈴木悟という男は、ただの凡人です。学歴があるわけじゃない。仕事で褒められたこともない。教養もないし、とりえもない。自発的に努力したことと言えば、ユグドラシルに熱中してやりこんだことだけ。どうしようもない、普通の人間なんです」

モモンガの吐く言葉には、重みがあつた。他者の評価は知らぬ。本音としての自己評価である。

それを、ウォン・ライは否定しない。だからどうした、と吹くのみ。「普通の人間、結構なことではないですか。例えば、の話です。地方の役人、むしろ売りの男、農民の末っ子。これらは、特別な人間と言えるでしょうか？」

「……え？ それは、別に、特別ではないでしょう。それが何か」

「その特別ではない、普通の人間が——。きつと、貴方よりよほど不真面目で、卑しい性格の男どもが、皇帝になつた例がある。中国には、そうした歴史があります。生まれや育ちなど、大した差ではないのですよ。本人の徳というものは、そんな世俗の価値観とは別のところにあります」

重要なのは、天に愛されているか、否か。一種の宗教的思想ともい

える基準であるが、それを大真面目に突き詰めれば、本人の人徳。君主としての器、その完成度に帰する。

自覚していれば、実務能力はなくても構わない。この点は、あればあったで弊害も招く。むしろ、付き従うものをいかに納得させるかが重要だった。

この人を放っておけないと感じ、助けてあげたいと思う。傍にいと楽しいと感じ、もつと頑張ろうと励む。それが君主の徳の本質であり、器としての意味である。

モモンガという名の器は、大規模な建造物と付属物を盛つたうえで、多数の人間を乗せて、なお余っていた。少なくとも、ウォン・ライにはそう見えた。

「よく、わかりません。俺は、自分が普通の人間であることを知っています。徳とか、意識したことはありません」

「乱世に揉まれねば、開花せぬ才能だったのでしよう。現代日本では、持て余して当然です。……しかし、ここは全くの別世界。今まで閉じていた才覚を、現実に花咲かせる機会を得た。そう思えばよろしい」  
彼は大器である。自覚がないだけだ。器自身は、己の大きさを理解せぬもの。大きさを測れないからこそ、大器と呼ばれる。

放っておけば、自覚を持たぬがゆえに粗雑な扱いをされ、欠けたりヒビが入ったりするだろう。それを許しては、己の沽券にかかわるとウォン・ライは思った。

「まあ——なんですね。ぐだぐだと思い悩むより、行動ですか」  
「まさに」

「不安を感じても、動くほかない。わかっていたことです。一人なら無理なことでも、皆となら——どうにでも、できる」

「昔を思い出しますな。我らも、昔は弱かった」

「PKされたことを思い出しますよ。そうだ。あの頃は、若かった」  
「その頃と比べれば、状況はいくらかマシですな。久々に、若返ってみますか？」

モモンガは苦笑した。ナザリックの外に、どれほどの危険が待ち構えているか、わからないのに、である。

外には、己を一撃で殺せる脅威があるかもしれない。ナザリックごと葬る手段が、どこかに転がっているかもしれない。なのに、モモンガの心は軽かった。

自分の傍に、自分を理解してくれる人がいる。認めて、励ましてくれる人がいる。それが、どんなに心強いのか、彼はようやく自覚した。「無謀になれる歳ではありませんよ。事はクレバーに。かつ慎重に行わなければ」

「敵を知り、己を知れば、百戦しても危うくない。しかし、百戦百勝は善の善なる物にあらず、ですな」

「ええと、確か孫子でしたっけ。なんか解説書で見た覚えがあるような。……まあ、理想論ですね。戦わずして勝つ、というのは」

「しかし、理想的な勝利が得られるなら、それが最善である——というのも、また真理。常に暴力が必要とされるとは限りませんが、世界は争い事で満ちているもの。心構えだけでも、しておくにこしたことはありません」

そういえば、とモモンガは思う。この世界で生きていくなら、生きる理由を作らねばならない。己は何をなすべきなのか。情報収集を行いつつでも、考えねばなるまい。

「そうですね。究極的には、それを目指しましょう。情報を得たら、目的を考えねばなりません。その目的は、戦わずに得られるものの方が、都合がいいとは思っています」

モモンガには、情報と考える時間が必要だった。出来れば、思索の方に比重を傾けたいというのが本音である。何しろ、考慮すべきことが山ほどありそうだったから。

「さしあたっては、ナザリック内部の確認、アイテムの動作確認と、スキルを試してそれぞれの出力を比較して——ああ、自分を知ることだけでも大変です」

「付き合いますよ。私も、それは知らねばならぬことですから」  
ゲームの中だけの付き合いだったはずが、もう二人は人生を共にする伴侶のようであった。

水と魚の交わり。鰻頭とタレでもよい。ともかく、彼らはお互いの

人生と価値を保証し合うような、色濃い関係へと変化していた。

あの日付が変わる瞬間に起こった出来事は、それだけの変化を二人の元人間に及ぼしていたし、この世界の変革への第一歩だったといえる。

「ああ、そうだ。これからは、お互いにぎつくばらんといきましよう」「隠し事をせず、心を割って話し合う、という意味の日本語でしたか？」

「そうですね。ですから——ウオン・ライ。二人だけの時は、敬語もなしだ。俺も遠慮しない。だから、貴方もそうしてくれ」

これは一時の気の迷いなのか。精神的疲労が、思考のエアポケットを生じさせた結果、とみることも出来よう。だから、相手がちよつとでも鈍い反応を返してきたら、モモンガは即座に撤回したに違いない。

だが、ウオン・ライはそうしなかった。鋭く切り返して、望む反応を返す。

「では、そうしよう。モモンガ、これでいいか？」

「それでいい。じゃ、行こうか。とりあえず、地表まで散歩するのも悪くないだろう」

モモンガが対等な立場で、同格の友を望んでいたのは明らかである。彼にとつて補佐、というものは、対等な人間関係で成立するもので、上下関係は問わないものであった。

会社では底辺であり、使われる立場だった彼は、仕事上まともな補助を受けたことがない。

NPCは別だが、ゲームの中では誰もが同格で、自由意思で助け合うものだ。

よつて、堅苦しい上下関係で、ウオン・ライに補助を要求するのは——どうにも強要して搾取するような気持ちになりそうで、据わりが悪いのである。慣れれば別であろうが、今の彼は小市民。己の小心を理解してもいる。

「お出かけですか？ 近衛の準備は、整っております」

玉座の間を出ると、メイドに声を掛けられる。彼女としては、それ

が礼であるとわきまえているのだろう。

モモンガは、主としてこれに相応しい態度を取らねばならない。

「……ナザリックを散歩するだけだ。儀仗兵はいらん」

「では、メイドを」

「よい。構うな」

ぞろぞろと大勢に付きまとわれるのは、なんとも形容しがたい気分になる。一人だけだったならともかく、ウォン・ライが共にいる現状、必要もないのに王侯貴族の真似はしたくない。

「それでは、何かあったときに、盾になれません。どうか、ご寛恕を」  
「一人ではない。ウォン・ライがいる。心配は無用だ」

そのうち雰囲気の流れされてしまうかもしれないが、とりあえず、今は率直に拒否したい気分だった。

それで、モモンガの気持ちを理解したのか。メイドの方もあえてそれ以上は、主張しなかった。

「……失礼しました。いつてらっしゃいませ、モモンガ様」

緊張が続いていたから、彼としてはリフレッシュしたいところである。休憩をかねた散歩にするつもりだった。

だから、ウォン・ライがモモンガの申し出を素直に受けってくれたのは、本当にありがたいことだった。何しろ、素の自分を許してくれる。どんな反応をしても、見捨てられたりしないと、信じられるのだ。

「いっそ、外まで出てみようか。外の空気を吸えば、気分も和らぐだろう」

「その体で、呼吸が必要なのかね？」

「……それを言ってくれるな。気持ち的なものだ。良いだろう？ 別に」

「構わない。私もナザリックの外には興味がある」

友人づきあいというものは、これで正しいのだろうか。ふと、モモンガは思った。

だが、すぐにどうでもいいか、と思い直した。自分の状況は、他の誰と比べても異質なものに違いないのだ。

だから、生のままに彼と接した。それは実際、意外なほどの安定を、

モモンガの心に与えてくれた。

## 第五章 赤鬼の模擬戦

散歩の途中、円形闘技場でスキルの試しに戦闘訓練をしたり、アウラやマーレと適度な会話を楽しんだりして、モモンガは思ったより気持ち上が上向いていることに気付いた。

やはり己は深慮遠謀の人ではなく、行動の方が向いているとよくわかる。

「モモンガ様は、誰をパートナーにするおつもりなんですか？ えと、情報収集の、ですけど」

マーレとの会話の中で、実務的な話が出てきた。その内容については、考慮中の一言で済む。

だが、それは決定してから伝えられることで、今あえて聞く必要はないはず。ここで話題に出したのは、おそらく――。

「そうだな。アウラもマーレも候補のうちだ。実力に不安はないし、性格も割と温厚だから、向いている。情報を広く収集する過程において、お前たちの力は非常に有用だろう」

「そ、そこまで高く評価してくださるなんて……恐縮です」

自分かアウラを売り込むつもりで、話題にしたとみるべきだった。モモンガは先手を打って、自身の見解を言葉にする。自分なりに、知恵者としてのロールプレイをしたつもりだった。

「あたしを選んでくれるなら、頑張って役に立ちますよー！」

「ぼ、ぼくもやります！ 足手まといには、絶対になりませんからー！」  
守護者たちは積極的だな、と感心するが、比較的消極的なマーレの発言としては、いささかからしくない。アウラに釣られてのことだろうか。

「不安に思うことはないぞ。モモンガ殿は、君ら二人を充分に使い倒すおつもりだ。ただ、本格的に運用するのは、ある程度の情報が出そろってからになるだろう」

「ウオン・ライ。そういう言い方はよろしくない。使い倒すのではなく、使いこなす、という方が響きがいいだろう」

「いや、失敬。人材は適材適所、有効に確実に用いればこそ、ですな。」



アウラとマーレほどの実力者を使い倒してしまつては、もつたいない。正しく用い、負担を掛けず、安定して成果をあげさせるべきです。まこと、モモンガ殿は人の使い方をわきまえておられる」

モモンガは、『わかつてていつてるだろう』——と伝言でひそかに伝える。

ウォン・ライは、『NPCの前でも、これくらいのユーモアは許されよう』と返す。他愛のない戯れだが、こうした一言一言を積み重ねていくのが人間関係である。

あからさまにモモンガを持ち上げる発言だが、子供は素直なもの。そして純粹であるからこそ、好悪の情には敏感だ。ユーモアはともかく、モモンガの思いやりは正直に受け取ってくれる。

——実際、モモンガは思いやりのある人なのだから、その優しさに触れる機会は、多く設定するべきだな。

ウォン・ライは、彼を支えると決めた以上、どこまでも協力するつもりだった。モモンガは、どちらかといえば人間関係には消極的な方で、自分からはなかなか深く踏み込もうとはしない。

だから、こちらでお膳立てを整えるべきだと考えていた。アピールの機会さえあれば、その人格に触れた守護者たちは、より忠誠心を刺激されるはずだ。

「じゃあ、お試してことで、今回はあたしを選んできますか？ 情報収集は、一度で全部やり切れるわけじゃないですよね。マーレも一緒なら、かなりのことができますよ？」

実際、アウラもマーレも目を輝かせていた。期待を膨らませて、アウラが言う。

「……ああ、うむ。そうだな。お試しか。そういうのも——考えないではないが」

なるべく言葉を濁して、あいまいにするモモンガである。別にアウラやマーレが不足というわけではないのだが、最適解かどうかは自信がない。

ちらり、とウォン・ライの方を見やると、心得ましたとばかりに助け舟を出してくれる。

「そう結論を急いでくれるな。君らの熱意は理解している。もちろん、モモンガ殿もな」

「……はい」

「その熱意は、他の皆も同じことなのだ。そうだな、アルベドなどは、君らよりも別の意味で熱意に満ちている。それでも、状況次第では彼女の運用もひかえねばならん。理由は、わかるかな？」

アルベドは、情報収集を目的とした探索には、出さないつもりでいる。これはモモンガもウオン・ライも同じ見解であった。

「理由ですか？ ……うーん、あたしより前衛としては優秀なアルベドを、おいていく理由？」

「防衛に必要なだから……ですか？」

アウラが考え込んでいるうちに、マーレはさらりと答えを出した。

ウオン・ライは破顔して、彼と目線を合わせて語らう。

「そう、それが一番の理由だな。アルベドはナザリックの防衛のかねめだ。そうそう外部に連れ出せない。……後は、見た目の問題か。あの悪魔らしくも美しい姿は、人間に対して刺激が強過ぎよう。戦力としてはともかく、裏方の仕事のために、表に出したくはないな」

だいたいの場合において、繁殖力に優れるのが人間の特徴である。

この世界において、人間が最大派閥であると想定すると——『美しい異形種』の彼女は、人目を引きつけ過ぎるのではないか。

また人格面を考慮するなら、モモンガに懸想している彼女と共に行動するのは、相応のリスクがある。

恋心は抑えがたく、女の情は恐ろしい。外界に持ち出して暴発する危険を、ウオン・ライは危惧したのだ。口に出さないのが、せめてもの情けであった。

「マーレは賢いな。長ずれば、良き知患者となるだろう。先が楽しみだ」

「え、そんな。……ぼくは、そんなに頭がいいつもりなんて、ありません」

「よく考え、正しい答えを導き出せる。これは賢いというべきだ。褒めて、伸ばすべき長所だろう。卑屈になってはいけない」

そして、ウオン・ライは暖かな声でマーレを褒めた。謙遜は美德だが、子供のうちは、褒められたら正直に喜んでほしいと大人として思う。

「……ずるい」

アウラはか細い声で、そう言った。マーレが褒められるのは、姉として嬉しい。けれど、少女の心は複雑だった。弟だけが褒められることを、うらやましく思う。

あたしだって、同じことを考えていたのに。口に出せなかっただけなのに、とアウラはすねたくなった。

「アウラ」

「はっ、はいー!」

「卑屈になってはいけない、というのは、お前にも当てはまる言葉だと、私は思うぞ」

そしてすねかけたアウラに声をかけたのは、モモンガだった。

——すねる姿は、子供らしくて可愛くもあるが、捨て置くのも後味が悪いな。

彼は自分が現代社会において、正しく評価されていたとは思っていない。工作上、うまくやっても功績が自分の物になるとは限らず、失敗を押し付けられたり不当な扱いを受けることもままある。

そして、同僚が評価されたら、自分もつとよくやっているのに——と。ひがんでしまう心情も、わかるつもりだった。

「お前の優秀さは、私が一番よく分かっている。それこそ、生みの親よりもな。それでは、不十分かな?」

「そんなことありません! ——ありがとうございます」

「うむ。ついでには、一つ質問をしたい。魔獣を率いることや、生物を捕らえ調教すること。これをお前とマーレで競わせれば、どちらが勝つと思う?」

「絶対にあたしが勝ちます」

モモンガは笑った。自信をもって、アウラも笑った。それを確認し続ける。

「さて、二人に問おう。己の方が優れている、と思うことと、相手の方

が優れている、と思うこと。比べてみれば、さて。どちらが大きいだろうか？」

モモンガとしては、優劣はつけないところだった。選んだ人物によつて、他の者たちが劣等感を感じるようではいけないと思つて、諭すように語る。

「なかなか、判断は難しいように思う。私も同感だ。だから、卑屈になつてはいけない。といつても、傲慢になるのも——そうだな。私の前でならば許可しよう。その代わり、よそでは自重するようにな」

子供が背伸びする様は、目にしてみると微笑ましいものだ。モモンガとしても、アウラやマーレが張り切つて奮起する様は、ぜひ見たいと思う。

ただ、外では控えめにふるまう、ということも覚えてほしかった。今すぐは難しいとしても、今後を見据えて教育も行うべきかもしれない。

「わかりました！ そうです」

「は、はい！ 必ず、ご期待に応えます」

子供というものは、少しくらいヤンチャな方が、健やかに育つのではないか。それくらいのを考えで、傲慢という表現を使ったのだが、二人がその通りに解釈するとは限らない。

とはいえ、モモンガとしては失敗をいくら重ねたところで、アウラやマーレに対して嫌悪感を持つなどありえないことだ、と確信している。だからこれでよいのだ、と思う。

「ナザリックにいる内は、いつも通りでいいけど、外に出たら大人しくしてろつてことですね？」

「う、うむ。まあ、そんな感じで頼む」

もとより、深く考えての発言ではない。思わずふわつとした返答で返してしまふ、モモンガであつた。

ウォン・ライは、穏やかにそのやりとりを見守つていた。支え甲斐のある人を頂いて、己は幸せだと思ひながら。

「せっかく闘技場に来たのだから、模擬戦の一つでもしたいものですな」

「戦闘訓練ではなく、模擬戦となると——相手は誰が良いかな。コキュートスなら、喜んで付き合ってくれるだろうが」

「差し迫った脅威が、近くにあるわけでもない。防衛の手を一つ抜くことになるが、相手としては悪くないかと」

モモンガは後衛職であるから、コキュートスと直接殴り合うことはできない。自身の実力を測るための訓練として、ならばともかく、模擬戦相手としては相応しくない。

しかし、ウォン・ライの相手としてならば、おそらく最適であろう。お互いに前衛職であり、正面からの殴り合いを得手とする。さりとて危惧がないでもないが。

「しかし、コキュートスは白兵戦においては、守護者の中でも屈指の実力者。慣らしの模擬戦としては、いささか過剰な戦力では？」

「彼とて加減は心得ているでしょう。徐々に慣らしていけば、まあ問題ありません。——第一、彼とまともに打ち合えないなら、この肉体に値打ちはない。耐えられぬタンクに意味はありません。そうではありませんかな？」

ウォン・ライは、高火力で敵をなぎ倒す系統の前衛ではない。前に出て敵の攻撃を引き付け、仲間を守ることでパーティに安全をもたらす、他のメンバーを攻勢に集中させるのが、彼の本懐である。

よって、いかに己に敵の目を引き付けるか。いかに長時間、敵の行動を拘束し続けられるか。これが問題であり、主要な目的と言える。

そして可能ならば、相手の戦力をそぐことも求められる。完璧にこなすのは難しいが、それだけにやりがいのある仕事でもあった。タンクと一口に言っても、その行動は単純なようで難しい。

特に、常に戦線が流動する乱戦の場合は、即座の判断力や冷静な分析力、全体を俯瞰して把握する理解力が必要になる。これを殴ったり殴られたりしながら行うのだから、よく考えなくとも大変な仕事だった。

「同じ戦場に出て、私より先にモモンガ殿が倒れるようなことがあれば、それは私の失態だ。許されるべきことではない。——今のうちに、勘を取り戻し、己の力を磨いておきたいのだ。許してくださいま

すな？」

極端な論説になるが、手の届く範囲で仲間が倒れた場合、一部どうしようもないケースを除いて、それはタンク役の責任になる。

アインズ・ウール・ゴウンではそこまで厳格ではなかったものの、ウオン・ライは自ら望んでタンクを担っていたのだ。これくらいの厳しい基準は、常に自分に強いている。

それをモモンガもわかっているから、強く否定はできなかった。その強い倫理観に敬意を表したく思うから、許可を出した。

「コキュートスと呼ばう。——そうだな、他の守護者たちも呼んで、ちよつとしたイベントにしてもいいか」

「見世物にされるのかな？ 私」

「なに、その覚悟。私だけで独り占めにするのは、もったいないと思つてな。……良いではないか。ウオン・ライの力、改めて皆に見せつけるといい」

これは、装備を整えて臨まねばなるまいと、ウオン・ライは思った。気持ちも高揚するようで、やる気がわいてくる。コキュートスには悪いが、とことんまで付き合ってもらおうと、彼は決心を固めていた。

ウオン・ライの装備は、全盛期からは一段か二段ばかり落ちる仕様になっていた。

装備の力に頼り切らないようにするため、という理由からであったが、最高の武装は引退時にモモンガに預けている、という事情もあった。

「準備ハ、ヨロシイデスカ？」

「私は大丈夫だ。いつでもいい」

二人とも、構えもせずは無造作に立っている。闘技場の中心で向かい合っており、お互いの距離は10m程度か。

「先手は譲ろう。まずは小手調べといこうか」

「ゴ厚意、アリガタク」

ウオン・ライは手甲の具合を確かめるように、手を振ってから拳を

固く握りしめた。

コキュートスは中空から太刀を取り出して、構える。どちらも、戦闘態勢は整った。

「よろしい、では開始の合図を」

「了解しました」

観客席には、守護者どころか、話を聞きつけてきた者たちが詰めかけてきており、ほぼ埋まり切っている。

モモンガが開始の合図を求めると、アルベドが合図となる鐘を打ち鳴らした。

「……緊張するね」

「う、うん」

鐘が鳴ったからと言って、すぐに始まるとは限らない。コキュートスは何かを見定めるかのように、太刀を構えたまま動かない。ウォン・ライも一手を譲った以上、攻める気配はない。

アウラとマールは、固唾をのんで見守っている。

「さて……コキュートスは、どう攻めるでありんすかねえ」

「相手は、忠誠を尽くすべき至高のお方よ？ コキュートスは、礼としてすぐには斬りかからず、少し時間を置く。そしてウォン・ライ様からの合図で動くのでしょうか」

シャルティアの言葉に、アルベドが答える。

シャルティアはどこか面白がっている風だが、アルベドは真面目な顔で言い切った。

「礼？ ははあ、コキュートスは武人でありんすからねえ。理解できないことには、何とも言えんせん」

「シャルティア、コキュートスなりに思つてのことだ。茶化すことはないだろう。そして、あのお方は配下の思いやりに、きちんと応えてくださる」

デミウルゴスが、補足するように答えた。その目は二人を注視したままだが、思うところは正直である。

「コキュートスが、太刀を構えたまま微動だにしないのは、隙を窺っているというよりは、相手の同意を求めているようでもある。アルベド

は合図をしたから、いつでも斬りかかっているはずなのにね」

「……そうしないのは、彼が攻めあぐねているのではなく、ウオン・ライ様の声を待っているからだ?」

「そこまで、あからさまでもないよ。ただ、ウオン・ライ様にもブランクがある。それを気遣っているのかもしれない。まあ、何にせよすぐ動くとも」

セバスの声に反応して、デミウルゴスは思うところを述べた。そして実際、それは現実のものとなった。

ウオン・ライは一步前に出て、半身になり、手を前に出して構えた。初太刀をさばく体勢である。

それを確認してから、コキュートスは突貫、一撃を見舞った。

「——才見事」

「とも、言えまい。所詮は単発の一撃だ。お前の本領ではあるまい」

ウオン・ライは、わけもなく手甲で受け流し、コキュートスの体に拳をそえていた。

彼がその気なら、ダメージを入れていたところである。そうしなかったのは、相手も本気を出していなかったとわかっていたから。

「シカシ、全力デハアリマシタ」

「今から行くぞ、と主張して、わかりきった軌道での一振りだ。この程度を流せぬようでは、赤鬼の名が泣こうさ。……さて、仕切り直そう。次は、もう少し本気で来い」

再度、距離を取って向かい合う二人。

「サレバ、ゴ厚意ニ甘エサセテイタダキマスル」

「よろしい」

ウオン・ライは、初撃は受けても良いつもりだった。その痛みを覚えることで、心構えを決めようかとも思ったが、コキュートスがここまで加減するつもりであるならば、乗ってやるのも器量だろう。だが、次からはそう甘くない攻撃が来る。

「次ハ、本気デ行キマシヨウ」

「わざわざ宣告せずとも良い。気兼ねなく、お前の實力を見せてくれ」  
ウオン・ライは正面から受け止めるつもりで、まともに向かい合っ



た。その瞬間、コキュートスの太刀が眼前に迫る。

踏み込みの瞬間から速度を乗せ、自身の体重を込めた剣である。回避は不可能、防御も容易くはない。

——速い！

思うより先に、体が動いていた。手甲で弾き、衝撃を受け止める。が、コキュートスは弾かれた太刀を器用に持ち直して、再度ウォン・ライに迫る。

「クツ」

これは意識して防いだ。が、それも相手の計算のうち。コキュートスは、死角から尻尾を動かし、勢いよく叩き付けるように、彼へ向けた。

「——利かん、な」

それは確かに直撃したはずだが、ウォン・ライにダメージはない。彼は鬼種であり、物理防御力に格別優れている。コキュートスの尻尾程度では、わずかな傷さえつきはしない。

それに気を取られるという様子もなく、追撃の斬撃をさばき、いなし、時には受け止めて防いだ。

「コキュートスの多角的な攻撃に、ウォン・ライ様は的確に対応なされている。なるほど、ブランクは有って無いようなものようですね」「そうだね。これは心配する方が不敬というものだろう」

セバスとデミウルゴスが、お互いの感想を述べた。そう言っているうちにも、コキュートスは攻撃の手を緩めることなく攻め立てているのだが、まともなダメージが入ることは一度としてなかった。

「……あたしじゃ、よくわかんないなあ。どうやって防いでいるんだろ。いや、なんとなくわかるんだけど、理解するのは難しいっていうか」

「無理に言葉にすると、わけがわからなくなりんす。ああいうものと割り切った方が早いでありんすえ」

「シャルティアも、その言い方は馬鹿っぽいよ」

「わざわざ考え込んで、防御の手を見逃す方が馬鹿じゃないの?」

アウラの言葉にシャルティアが茶々を入れる。こんなところでは

がみ合う必要もあるまいに、と他の者はあきらめるが、それより戦闘の行方の方が大事である。

それからさらに数合打ち合った後、コキユートスは攻め手を止めて引き下がった。

「流石、ト申シ上げマス」

「ふむ、どうやら空白期間は私に衰えを与えなかったようだ。喜ばしいが、この程度では物足りん」

ウォン・ライは攻撃的な目を見せた。猛禽を思わせる、鋭い視線であつた。

「今度ハ、コチラガ受ケニ回リマスル」

「わかつた。ならば、攻めるとしよう。こちらは少し、不器用になるか知れないが——」

彼はタンクにしては高い、という程度の攻撃力しか持っていない。単純な瞬間火力でいえば、コキユートスと比べてもかなり劣る。

しかし、ウォン・ライは敵の戦力を弱体化させることも仕事のうちだつた。それはつまり、彼の攻撃が、決して甘いものではないことを意味する。

「久々に、凶手として働かせてもらおう」

ウォン・ライは、左手に魔力をまとわせて、それをコキユートスへと打ち出した。

「ム……？」

打ち出された魔力の速度は凄まじく、彼をして回避できぬほど。まともにその身に受ける。

不可解なのは、ダメージが入らなかったことだつた。防御力を抜けなかつた、という理由ではない。これはそもそも、攻撃力を持っていないのだ。

「さて、これでしばらくは持つ。——いささか気が引けるが、これも試練と思つて耐えてくれ」

ウォン・ライが左手を招くように引き寄せると、コキユートスの体もまた、それに釣られるように彼の下へと引きずられた。先ほど受けた魔法の効力とみるべきだろう。

引き寄せの力は強く、抵抗は難しい。ならば、むしろ踏み込んで攻勢に出るべき——と思うのは当然の話だった。勢いに乗って自ら間合いに入り、太刀を振るう。

「捕った」

乾いた音が鳴る。振るった太刀が、掴まれていた。ウォン・ライの手甲を付けた右手から、金属のこすれる音がする。

コキュートスと同じ手段を取った敵と、彼は何千、何万と戦った。対処の方法も、手慣れたものである。

コキュートスは太刀を放棄する間もなく、その身を拳によつて打ち据えられた。その衝撃で、闘技場の壁際にまで追いやられる。

「——今更だが、お前と打ち合うのは、初めてだったな。ならば、知らないのも無理はあるまい」

「……ハ」

再び距離が開いた二人は、改めて言葉を交わした。

ウォン・ライにとつては、模擬戦も交流の一種である。間が空けば話すのも一手だった。

「私はこれでも、メンバーの中では弱い方でね。かなり見栄を張つても中堅下位、と言ったところだ。純粹な近接戦闘では、分が悪い。——だから、搦め手を使わせてもらう。不服はあるまい？」

「アラウル手ヲ尽クシテ、勝利ヲ求メルノガ、武人ノ性ナレバ」

コキュートスは、一撃を食らってもそこまでのダメージはない。彼の防御が硬いたためでもあるが、ウォン・ライ自身も本気で打ったわけではなかったからだ。

これは模擬戦である。己を試みると同時に、相手も試みる。一種の共同作業であり、短い時間で終わらせては、興ざめというものだった。「文句は言わぬ——か。なるほど、ならば、こちらも手をつくし甲斐があるというもの」

ウォン・ライは鬼種である。しかし、ただの鬼ではない。その中では最上級の種族、高レベルの闇魔王ヤムラージである。これは独特の効果を持つ魔法を有しており、トリッキーなスキルで敵の行動を看破・制限する術に長ける。

先ほどの魔力弾は、正確には『閻魔の呪縛』——俗称として、『呪縛弾』とも呼ばれる、その種族専用の魔法である。引き寄せは、この魔法の一段階目の効果であった。

また、付け加えるならば、同時に鐘馗ショウキの種族も高レベルで取得しており、こちらは耐性と回復力に優れている。その上、どちらも魔法攻撃力に乏しい鬼種らしく、魔法攻撃力に依存しないスキルで満たされていた。

「離れたところで、先ほどの魔法の影響が残っている。——さあ、もう一度だ」

「参ル！」

コキュートスは、再び踏み込んだ。それだけでは先程の再現だが、ここで一手を挟む。

極寒の冷気が、コキュートスの周囲に集中し、それが弾ける。氷の霧が、彼の身を守っていた。フロスト・オーラの変異版といって良いだろうが、純粋な防御面の強化として、これは最適解である。

なにしろ、ウォン・ライの素の攻撃力では、この防御を抜くことは難しい。ただの拳の一撃でダメージを入れる、ということは期待するだけ無駄だろう。だから、彼もまた対策を講じねばならない。

「あいにく、私はお前を傷つけたいとは思っていない」

攻撃が通じない、ということとはユグドラシル時代もよくあった。そもそもタンク役に求められるのは、戦力を削ぐことであって、敵を倒すことではない。

最高レベルのユグドラシルプレイヤーは、そう容易くは倒れてくれなかった。この場合も、そうした相手へのあしらい方を応用すればよい。

「——ッ！」

突然、コキュートスの足が止まる。踏み込みと同時に切り込むはずであったが、出鼻をくじかれて一瞬の硬直が生ずる。

「そら」

硬直が一瞬あれば、隙になる。再度ウォン・ライは、コキュートスへ呪縛弾を撃ち込み、縛りを増やした。

すると、攻撃を受けたわけでもないのに、コキュートスは数mもの距離を飛ばされた。いや、飛ぶというよりは、後ろから掴まれて力づくで引き離された、という表現が的確であったろう。

「先ほどまでは、一定距離の『引き寄せ』と、一瞬の『足止め』だけだった。が、これからは『引き離し』が追加される。……一応断っておくが、ノックバツク耐性は無効だぞ？」 閻魔王は、この手の拘束がウリでね。使いこなさねば、ただの不人気種族に墮する」

この魔法は、同じ相手に何度も打ち込むことで、その効力を強めていく。逆に言えば何度も打ち込み続けないと、わざわざ使う意味がない。そういうわけで、やはり使いづらい系統の魔法と言える。

「不人気？ ……ゴ謙遜ヲ」

「いやいや、本気で人気がなかったのだ、閻魔王ヤムラージという種族は。鬼種は単純な攻撃力の強化がもつとも簡単で、もつとも人気が高かった。この点を追求すれば、人間種でも到達できない、凄まじい爆発力を持つことができた。なのに防御と耐久を偏重し、敵を食い止めることだけに成長を集中させた私は、とんだ変わり者というわけだ。……まあ、だからこそ一般プレイヤーの意表をついて、うまく仕事をさせてもらったがね」

閻魔王ヤムラージをまつとうな前衛として機能させるくらいなら、他の種族レベルを上げた方が、戦力として効率がいい。

そうしなかったのは、タンク役としてはこれが最善、と彼自身が判断したからだ。それが正しかったことは、ゲーム内の実績が示している。

「さて、コキュートス。もう一つ、指摘させてもらおう」

「何デシヨウ？」

「敵が長々と話しているときは、時間を稼いで何かを狙っていると思っしてほしい。別にしゃべっているときに攻撃してはならない、なんてルールは設けていないのだから、君は耳を貸さなくとも良かったのだ」

「——ソレハ」

「どうということか、と問う前に、それは発動した。」

コキュートスが知覚したときには、周囲を呪縛弾で囲まれていた。いかなるスキルを持つてしてか、彼には判断がつかないが、ともかく。これらを受けてしまえば、敗北は必至。それだけは、即座に理解した。回避など、望むべくもないことも。

「又ウ……」

現状、ほぼ詰んでいる。せめて切り払うことは出来ないものかと、太刀を振るうが——無益であった。太刀が触れた時点で、効果が発動する。

さらに体が拘束されていく感覚を、コキュートスは味わった。ウオン・ライの話に耳を傾けた時点で、彼に勝ちの目はなかった、というべきだろう。

「ナラバ」

「と、思うだろうな」

遠距離から、斬撃を飛ばすスキルがある。これを用いれば、動かずとも攻撃することは可能だ。せめてもの悪あがきにと、コキュートスは試みる。

しかし、すでに迎撃の態勢になっているウオン・ライに、予測されている攻撃は通じない。手甲で弾かれて終いである。

そして引き続き、意に添わぬ動きを体に強制され、コキュートスはすつかり翻弄されてしまった。

展開された魔力弾は八つ。これを全て受けざるを得なかった彼は、ひどい縛りを受けることになる。

「詰みだな」

それから、ある程度殴り合つて、ウオン・ライは結論を出した。すでに相手の行動は、彼の手の内にあつた。

「マサニ、詰ミト申サネバ、ナリマセヌナ……」

コキュートスは、未だに戦闘を継続する意思に溢れていた。

しかし、すでに『武器装備解除』『物理攻撃力・魔法攻撃力半減』『攻撃用スキル使用不可』といった致命的、かつ時間経過以外の手段では、自力で解除できないバッドステータスを抱えている。

「しかし、これでは消化不良だろう。——そうだな。一度縛りを解い

て、仕切り直すか」

時間経過以外の解除は、自力では不可能だが、術者が望めば行うことができる。

これがまた厄介なのだが、今のコキュートスはそれを理解する余裕もないだろうと、ウォン・ライは思う。

「ヨロシイノデ？」

「構わない。だが、今度は多対一を想定したい。セバス！」

セバスは、呼びかけにすぐさま応えた。闘技場の舞台に降り、ウォン・ライの前に出る。

「私を加えて、模擬戦を続けるということですね？」

「そうだ。コキュートス、いけるな？」

「……ハ。問題アリマセヌユエ、ゴ心配ナク」

「結構。——では、再開しよう。ここからは二対一だ。二人とも、それを意識してかかってくるといい。単純な攻めでは、先ほどの二の舞だぞ？」

ウォン・ライはその場で構えて、防衛に回る。二人に攻めさせて、しのぎ切るつもりなのだ。――

「では、連携いたしました。私が先手、貴方が後手。……よろしいですか？」

「ソレガ最善ダ。手数<sub>テ</sub>押し<sub>テ</sub>クレレバ、一撃<sub>ヲ</sub>入<sub>レ</sub>テミセヨウ」

セバスもまた、拳を固めて、攻撃態勢を取る。コキュートスは太刀を装備し直して、セバスに続く構えだった。

ウォン・ライは手招きをした。相手の迷いを払うためである。

——私が攻めよ、と言っているのだ。ためらいは許されんぞ？

コキュートスもセバスも、至高の方々に仕える身の上である。指示をされたならば、その通りに動く義務があった。

「参ります」

「来い——ッ！」

セバスは素手の凶手、という分類でいえば、ウォン・ライと同類である。だが、その性質はアタッカー兼タンクという表現が、もつとも正確であろう。

時には味方の盾となりつつも、高火力を叩き込んで敵を潰していくスタイルは、彼とはまったく別種であった。防御よりは攻撃力に比重を置いていたため、守勢よりは攻勢に強い。

「なるほど、アタッカーとしては、私より優秀だな」

「恐縮です」

拳の乱打を防ぎ、さばき、後退を余儀なくされながら、ウォン・ライはセバスを褒めた。

彼の防御を抜くほどの攻撃ではないが、無視して身に受けることができるほど、甘い拳ではない。直撃の瞬間に、爆発力を発揮するスキルが存在する以上、一撃たりともまともに喰らいたくはなかった。

「しかし、それだけでは足りん。コキユートス」

「ハッ！」

セバスの斜め後方より、剣が飛んできた。セバスを無理矢理一撃によって弾き飛ばし、コキユートスの追撃を手甲で防ぐ。

その一手の間にセバスは態勢を立て直して、再び攻勢に出た。また、ウォン・ライは守勢に持ち込まれる。

「厳しいな」

コキユートスは隙あらば、遠距離から斬撃を飛ばしてくる。そしてセバスが捨て身で突撃し、まともな反撃の余裕を与えてくれない。

ウォン・ライは、それを経験則と技量によって、さばき続けていた。一度も直撃を受けていないあたり、タンク役としての能力は、非常に高いと言い切ってよいだろう。

そして、全盛期の力を取り戻しつつある。セバスが攻撃の合間に、吹き飛ばされる頻度が増えていった。コキユートスとの連携も途切れがちになり、絶妙な感覚で、行動を妨害されてしまう。

「わかつては、いしましたが」

「彼ノオ方ノ防御ヲ抜ク、トイウ行為ガ、ココマデ難シイトハ——」

単純なステータスで、力量は測れない。力に技がともなえば、能力は相乗して発揮される。

ウォン・ライは、ナザリックにおいて、最上にして最硬のタンクであった。彼は、同レベルの近接アタッカーを三人同時に相手にしたこ



ともある。さらに遠距離からターゲットに定められ、常時射撃の的にされた経験もあった。

その上で、『自身の役割を完璧に全うした』経験を持っている。これが意味することは、ひどく単純である。

「厳しい、というだけで、危険とは言えんか。デミウルゴスも、参加させるべきかもしれん」

己を窮地に立たせてみせよ、とばかりに挑発する。もちろん、デミウルゴスに参加するつもりはない。ご冗談を、と肩をすくめるばかりだ。

彼ら二人をして、守備に徹するウォン・ライを打ち負かせない。これが事実であった。

「とはいえ、千日手でもある。私には、決定打がないからな」

ウォン・ライは、さらに一時間も二人の攻撃をしのぎ続け、息一つ乱さなかった。

継戦能力に長けるのも、タンクの特徴である。自身のパフォーマンスを長時間維持し続けられなければ、パーティの防衛役としては不足であろう。そうした意味でも、彼は余すところなく完成されていた。完成されているからこそ、状況をひっくり返すことも、また出来なかった。それが、彼の限界でもある。

「……参りました」

「ソノ技量、ソノ能力。マコトニ、感服イタシマス」

このまま際限なく続けられれば、スタミナが切れるのは二人の方になるだろう。コキユートスとセバスは、潔く負けを認めた。

二対一で、この結果である。三対一でも、彼はしのぎ切るだろう。そして、もしウォン・ライに優秀な後衛がついていれば、敗北は必至である。よって、この場は二人の敗北、と見るのが妥当だった。

「いや、コキユートスもセバスも、素晴らしい力を示してくれた。私の方こそ、感謝させてもらいたい」

「勿体なき、お言葉です」

「光荣デ、アリマス」

彼らは頭を下げて礼を行うことで、ウォン・ライに対する敬意を示

した。

これにて、勝負あり。ここまで模擬戦を見届けていたモモンガは、立ち上がってその意を表す。

「見事な勝負であった！ 皆、ウォン・ライと我が守護者たちに拍手を！」

闘技場全体が、歓声と拍手に包まれる。モモンガは、ナザリツクの全てを誇らしく思った。

これほど見事な男たちの忠誠を受けていると思うと、身が引き締まる。魔王ロールプレイを続けるべく、さらに言葉を重ねた。

「ウォン・ライ。我が盟友よ。その力、しかと見せてもらった。私は誇らしい。貴殿ほどの強者に尽くされている喜びを、私はどう表現したらよいだろう」

「——胸を張ることです。全ての頂点に立つに相応しい態度とは、それ以外にありませんぞ」

後ろめたく思うな。気兼ねをするな。

ウォン・ライの気持ちを、モモンガは正しく受け取ることができた。長い付き合いが、そうさせた。

「ならば、そうしよう。栄誉は共にすべきもの。喜びは分かち合うもの。私は堂々と胸を張ろう。だから、お前たちも誇るべきだ。私は確信する。どのような困難があろうと、ナザリツクは栄光をつかむことができるのだと。決して、敗北はあり得ないのだと。——最後にもう一度、彼らを讃えよ！ それをもって、この模擬戦を終了とする！」

モモンガは、声を張り上げて言った。闘技場はさらなる興奮に包まれて、戦いを演じた者たちを祝福する。その喧騒は、ウォン・ライが退場した後も、しばらく続いていた。

「私たちは、幸福に思うべきだね」

「何を、かしら？」

「もちろん、素晴らしい主たちを持てたことに、だよ」

「……そうね」

デミウルゴスの言葉に、アルベドが返した。彼は疑う余地のないことを言ったつもりだが、アルベドの方は歯切れが悪い。彼女にも思う

ところがあるのだろうか、疑問に思いつつ、しかし追及はしない。「お二人が健在であれば、情報の収集にも不安はない。供に誰を選ぶかは、まだわからないが、いつお呼びがかかっても良いように、準備を整えておくでしょう」

「……ええ、そうね」

やはり、アルベドの反応は、どこか鈍かった。怪訝に思いつつも、デミウルゴスは心配するほどのことでもないだろう、と判断した。

というのも、他に懸念すべき事柄があったからである。

「しかし、彼はここにいないのか。せつかく父君の晴れ舞台だということ、ね」

「ああ、彼のこと？ 自由奔放な人だから、気まぐれということもあるわ。どうせ、大した理由でもないでしょう」

「……そうだね」

彼、とは、ウォン・ライが直々に作り上げたNPCのことである。その間柄を考慮すれば、親子と称して差し支えあるまい。

「せつかくだから、私が様子を見てこよう」

「物好きなものね。私は彼が苦手だから、貴方に任せるわ」

「……ああ、任されたよ」

デミウルゴスは、複雑な感情を抱いていた。それでも、そのまま思ったことを口にすることはなかった。

手土産に、酒でも持っていけばいいだろう。酒好きの自由人、という定義がもつとも相応しい彼のことを、デミウルゴスはよく案じていた。

彼は、闘技場の歓声を遠くから聞いていた。戦いが終わったのだから、より強い歓声とともに、父の名が聞こえてくる。

「親父殿は、コキュートスに勝ったか」

その男は、わかり切った結果を見に行く必要性を認めなかった。だ

から闘技場には赴かなかったし、こうして六階層のジャングル内で、思うままに過ごしていた。

適当な木の下で座り込み、身を幹に預ける。どこか、影のある雰囲気、顔を漂わせる青年だった。それでいて、決して陰気な印象を抱かせない清廉さを、身のこなしや所作から感じさせた。

顔つきは美形というよりは、男前と言った方が正確であろう。美しいというよりは、精悍である。武人らしいたくましきを持ちながら、それでいて武骨な様子はみじんもない。

おだやかで優しい表情は、人の世であれば、ご婦人方を騒がせただろう。

しかし、今の彼は物憂げな儂さを漂わせている。これは、なにゆえか。

「……うん」

手持ちの水筒には、酒が満たされていた。一口、飲み下す。

いくら飲んでも酔えない性質だが、酒の味は好きだった。そのように作られていたし、そうであろうとした。

ナザリックの酒は美味い。美味すぎるから、上手く酔えないのではないかと、思いたくなるほどに。

「さて」

男は、木彫り彫刻の続きをしようと、懐からそれを取り出した。

彫刻は、手のひらに収まりそうな大きさだが、精密で美しかった。女性の姿をしており、よく見れば悪魔らしい角や翼があった。

「……は」

自嘲するような笑みを浮かべてから、男は彫刻用の刀を取り出した。像はより精巧に、より精緻に、彼自身がよく見知る人物へと似通ってきていた。

それでも、まだ足りぬ、もつとそのままに、ありのままの姿を現そうと、男は作業を続けた。没頭するあまり、近寄る人影にも気づかなかった。

「リジンカン、ここにいたのか」

「……なんだ、デミウルゴスか」

「なんだ、とはなんだね。せっかく訪ねてきた友人に言うべきことかな？」

「そうだな、すまない。どうも、俺は礼に欠けるところがあるらしい。気を許した相手には、なぜか甘くなる」

男は、リジンカンと呼ばれた。その男に近づいていたのは、デミウルゴスだった。戦いの喧騒から逃れるように闘技場を出て、彼はこの男の下へとやってきていたのだ。

「木彫り細工は、順調かね？」

「……お前のそれは皮肉なのか、それとも本気で案じているのか、たまにわからなくなる。いや、きつと心配してくれているのだろうな。お前は酷薄なようで、気立てがいい」

それはわかっているつもりだ、とリジンカンは付け加えた。苦笑しながらも、手の中の彫刻はそのままにして、穏やかな目で見つめていた。

精悍な武人を、儂げな青年に変えているのは、それが原因であるらしい。

「性分でね。私も、気を許した相手には甘くなる。もっとも、だからといって思い悩んだりはしないが」

デミウルゴスは、リジンカンが手にする木彫り彫刻を見た。

やはり、それは想像通りの代物だった。

「……難儀な性をしていると思うよ。それは、どうしようもないのかい？」

「別に、どうということもない。いつものことだ。気持ちを押し殺すことも、こうして発散することも」

話しながらも手を動かし続け、ついに彫刻は完成した。

完全な人物のミニチュアとして、彼の手の内にあった。

「何、他の連中は何も知らないさ。だから、悩むようなことでもない」「伝えるようなことではない、と？」

「そうだ。他の誰にも、知ってほしくはない。俺が、彼女に惚れてるなんてことは——」

リジンカンは、自嘲するように言った。デミウルゴスは、柄にもな

く案じるように応えた。

「父上には、相談したのかね？」

「しようがない。色恋は理屈ではあるまい。そして抱いた以上は、叶わぬと思いい知った以上は、隠し続けるほか、ないだろうよ……」

リジンカン。彼は、ウォン・ライが作成したNPCであり、設定上は親子関係である。

実際に血がつながっているわけではないから、義父と養子の間柄、ということになるのか。

「そうかね？　ならば、あえて何も言うまいよ」

「……ありがたい気遣いだ。だから何も言わずに、酒に付き合ってくれるのだろうか？」

デミウルゴスは、その手に酒瓶を携えていた。無言で杯を持ち出し、お互いにそれを注いでは干す。

言葉はなかった。それで気が済むのだと、両者ともにわきまえていた。

「良い酒だった」

「そうかね」

デミウルゴスは真顔だった。リジンカンは、それから顔をそむけるように地面に目を向け、穴を掘る。

彼は、完成した彫刻をそこに埋めた。彼なりの、想いを封じ込めるための儀式である。別に魔法的な意味があるわけではない。ただの、気持ちの問題だった。

「横恋慕は、趣味ではないかね」

「俺の方が、身を引くべきだろう。彼女は、モモンガ様を愛している。ならば、それでいいんだ」

リジンカンは、無情な声でいった。本人は、そのつもりだった。

だが、デミウルゴスは、無情の中にある多情を、感じ取らずにはいられなかった。

——面倒くさい男だ、君は。

デミウルゴスは、なるべく表情に出さないように努めた。そうしなければ、本気で心配していることを悟られてしまうと思ったから。

——アルベド。貴女は知らないだろうし、知る必要もないが、どうにも。罪な女だね、貴女という方は。

木彫り彫刻は、アルベドそのものだった。

リジンカンの恋慕は、ただ一人。彼女にのみ、向けられているのであり——。

あえていうなれば、それこそが。この世界におけるウォン・ライの唯一の罪、いまだ自覚せぬ、残酷な悪行であったと言えるだろう。

## 第六章 美しい世界

模擬戦の後、二人はナザリックの地表部分へと出ていた。

二人とも、はしやぎ過ぎたような感覚を覚えており、先ほどの騒ぎを思い出すと、妙に気恥しい気持ちになった。

「結構な騒ぎになったが、やってよかった。これで、実戦では十分な仕事ができるだろう」

「ウオン・ライが前にいてくれれば、俺は安心できるな。うん。やつぱり、貴方が居てくれて、よかった」

ウオン・ライは、言葉では応えなかった。もうそんなことで確認する段階は、過ぎ去ったと思っていたから。

地表の墓地の部分に出て、何をするというわけでもなく、ただ観察し、歩く。

「これが、夜空か。……素晴らしいな」

モモンガは素直に感嘆する。単純な興奮ではなく、静かな感動が、彼の胸を満たした。

ウオン・ライも、同様に感動の言葉を述べる。

「透き通った、この夜空の美しさ。我々の世界のそれとは、比較にならない」

夜の世界の壮麗さに感嘆し、自然の偉大さを称賛し、世界の広さを我が身で感じた。

汚染されていない、きれいな空気が、ここまで清廉で爽快な気分をもたらしてくれるとは、想像だにできなかったことである。

「空を飛んだら、どれだけ気分がいいだろう」

「モモンガ殿、試してみるかな？ フライ飛行を使えばいい。私も付き合おう」

モモンガとウオン・ライは、宙空に舞い上がると、そのまま上昇を続けて、ナザリックを遠く見下ろせる位置にまで飛んだ。

この時の気持ちを表現する言葉を、二人は持たない。空から世界をながめる、という行為が、ひどく神聖で崇高なものに思えた。それだけは、確かだった。



星々のきらめき、風の音、そよぐ草木の様子——。清浄な空気の匂いが、心地よい。

「……たまらない。ブルー・プラネットさんがいたら、どんな蘊蓄を語ってくれるだろう」

かつてのメンバーを思い出しながら、モモンガは感動を口にした。生身であれば、輝いたような表情を見られたであろう。それをウォン・ライは惜しく思いながら、相槌を打つ。

「私に詩才があれば、一首詠んでみせるのだが。まったく、言葉もありませんな」

「なんとなく、気持ちはわかる。……世界は、美しいな」

地球とは、生まれ故郷とは、比べ物にならぬ。それをただ褒めるだけでは、物足りなくなつた。モモンガは、さらに言葉を尽くそうとする。

「夜の明かりは、こんなに明るかつたのか。星と月があるだけで、物が見える。それが、ここまで感動的に思えるのは——ああ、凄いな。まるで、大きな宝石箱だ」

彼の感動を、邪魔してはならない。ウォン・ライは、しばらく沈黙した。

新鮮な感情を自覚して、それを樂しむのは若者の特権だ。老人はただ傍に控えて、若者の喜びを無言で言祝ぐのみ。

「……この世界は、どんな生き物がいるのだろう。人がいるなら、異形種がいるとしたら、俺たちは分かり合えるのかな。……これだけ綺麗な世界を、汚したくはないが」

モモンガは、自身が異形であることに後ろめたさはない。骸骨の化け物となつた己を肯定するのは、これで案外難しくはなかったから。だから、この世界で異形種に出会つても、自然に対応できると思っている。

ただ、まったくかわりのない他者がどう感じるか。そこまでは、流星に読めない。

情報が集まっていない現状、全ては未知数である。自然に分かり合えると思うのは、夢想だろう。

自ら行動しなければ、得ることは出来ない。そう考えれば、これからの出来事全てに、関心を持たねばならぬ。

「ウォン・ライ」

「……」

「……ん。私は、ナザリツクを守りたい。それは紛れもない本心だ。だが、それと同じくらい、ナザリツクの皆とこの世界を楽しみたいと思う。可能なら、アインズ・ウール・ゴウンの名を、この場に刻み付けたい。私たちはここにいます。ここで生きて、この世界を受け入れたい。そう願うよ——」

モモンガは生のままに、気分の高揚を隠さず言う。下手に取り繕うよりは、率直に感情を述べて、自身の感性を自由に表現したかった。己が感ずる前向きな気持ちを、友人に理解してほしかったのだ。

ウォン・ライは、そうした彼の内心を、正しくくみ取った。

「目的は、早々に決まりましたな！」

「……ええ、そうですね。まずは、この世界を堪能する。第一に、この生を楽しまなくては損だ。そして、私たちがここで何をなせるのか、それを考えよう。……そしたら、我々の名を、ここに残そう。伝説の英雄になってみるのも、面白いかもしれない」

ウォン・ライは、モモンガが本音で語っていることを理解していた。友として、あるいは忠誠を誓う臣下として、それに応える義務が、彼にはあった。

「ならば、そうでしょうか。何、難しいことではない。きっと上手いく」

「ああ、そうだな。そうあってほしい」

出来ると信じて、前を向く。それが全ての始まりである。

モモンガは、充分な気晴らしになった、と思う。支配者としての重圧から離れて、ただ純粹にリフレッシュ出来た。それだけでも、表に出た価値はあったのだ。

未知の世界が広がっている、という感覚は、気を大きくさせる。現

実がどうであるか、という検証はさて置いて、モモンガは自ら感ずるところを述べた。

「ウォン・ライ。この世界に来ているのは、本当に私と貴方だけだと思うか？ ……もしかしたら、気づいていないだけで、他のメンバーも来ているんじゃないか？」

「さて、どうかな。わからないが——今は来ていなくとも、これから先、どこかで出会うことがないとは言い切れん」

「なら、皆がこの世界に来た時に、ナザリックがどこにあるか、知らせておかなくては不便だ。……出来るなら、メンバーが現れた瞬間に、こちらが把握できるような仕組みを作っておきたいな」

これまた夢想である。現時点では、実現可能なこととは思えぬ。

そうとわかっていて、二人は意見を交わした。ここで追及を諦めてしまえば、二度と手が届かなくなるような、そんな気がしていたから。「ああ、そうだ。やっぱり、アインズ・ウール・ゴウンの名が世界に轟くくらいことは、しておくべきだ。誰かが来た時に、すぐに会えるように。ここにいろぞと、伝えてあげなくてはいけない」

「——では、なってみますかな？ 英雄とやらに」

「それを目指す心意気くらいは、持つことにしよう。……すると、さしあたって情報収集が、ひどく重要な仕事に思えてきたな。人選は、本気で慎重に決めなくてはいけなくなつたか。第一歩で躓くと、後々まで響きそうだ」

モモンガもウォン・ライも、最高レベルのユグドラシルプレイヤーである。

だが、それがこの世界における強者の地位を保証してくれるとは限らない。そう思えば、いかにして情報を収集するか。その手段から、考えていく必要があるだろう。

周辺を窺うだけなら、こうして空から観察すればよい。おおよその自然環境を知るだけならば、それで済む。

だが、それより先の、より深い世界の実情を知ろうとするなら、人間を筆頭とする知的生物との接触が必要になる。せめて言葉だけでも通じてくれればよいが——と、どうにもならぬ懸念を抱きながら、

モモンガは空から降り、地に足を付けた。

「モモンガ様、ウォン・ライ様」

「ああ、デミウルゴスか。ナザリックの隠ぺい作業は、上手くいつているかな」

帰還した二人を出迎えたのは、デミウルゴスだった。彼は、ナザリックを外部の知的生物に気取られぬよう、これを秘匿する作業に従事している。

よって、地表に出て働く必要があったから、こうして出会うのも必然であつたといえるだろう。

「はい。ただ今、作業の工程を半分ばかり終えたところです。まずは速度を重視して、警戒網の構築から完成させました。たとえ害意のある存在が近づいてきても、相手に特別なスキルがない限り、地表の霊廟を発見するより早く、我々が捕捉できるでしょう」

「そうか。元より、お前の仕事を疑う気はない。隠ぺいについては、任せて問題ないとして——警戒網が一本だけでは、いささか不安だな。アルベドと相談して、なるべく複数……可能ならば、警戒網を三つは用意しておきたい」

デミウルゴスとモモンガは、隠ぺいの進行具合やら作業方針やらで、いくらか打ち合わせを行った。

モモンガはこれで、細かいところによく気が付く。ウォン・ライが指摘する必要もないほど、彼は詳細を詰めた。

「承りました。——モモンガ様の、これからのご予約をお聞きしても？」

「そうだな。……しばらくは思索に時間を取りたいが、それはそれとして。お前の仕事ぶりを、私は評価しなくてはいけない。もちろん、良い意味でだ」

モモンガは、考えるところがあつた。NPC達を信用すると決めたのだから、半端な態度は取らず、いつそ思い切るべきだと結論付けている。

彼は、一つの指輪を取り出した。デミウルゴスが目を見張る。

「それは——」

「リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。これを与える。メンバー以外に配るのは、これが初めてだな。それを以て、お前への榮譽とする。……分かるな？」

「……光栄の極み。必ずや、ご期待に応えます」

モモンガとしては、適当にそれっぽいことを言っただけで、恩を着せたままのこと。そこまで深刻に受け取ることもないと考えるが、デミウルゴスはうやうやしく受け取った。

ウォン・ライの方を見やると、満足そうにうなづくばかりで、言葉にしてくれない。言ってくれなければわからないとばかりに、伝言で聞いたです。

『ちよつと、これはいい反応なのか？ 悪い反応なのか？ その場のノリで渡してしまっただが、問題はないよな？』

『はは。まったく、モモンガ殿は人たらしだな。それも無自覚と来た！ 今後は実に楽しみだよ』

『はぐらかさないでくれませんかねえ』

『うむ、実際、良い手だ。信頼で人を縛る、というのは言うほど難事ではない。特に、相手が強い倫理観を持っている場合はそうだ。デミウルゴスの仕事ぶりは、今後も磨きがかかっていくだろうよ』

モモンガがああ指輪を渡したのは、大いに意味がある。それも、真つ先に与えた、という部分が何よりも大きい。

つまり、NPCの中では、彼の信頼を第一に受ける立場なのだと、そう伝えたに等しい。

デミウルゴスは、ナザリックの中ではアルベドよりも立場は下である。が、それとこれとは全くの別物。至高の方々が与えた地位に、そもそも彼らが文句など付けるはずもないのだ。

よって、モモンガが誰をひいきしようが勝手、という論理も成り立つ。

『デミウルゴスがアルベドに嫉妬される——という事態にもなりかねんが、実際に見事な仕事をしたのは、確かなのだ。彼に名誉を与えるのは正しいし、モモンガ殿がこうした手段で評価したのは、最善と行って良い』

ギルドマスターは、彼らにとっての神なのだ。だからこそ、態度に表れる評価の形は、NPCにとって最高の褒美となる。

褒めるだけでも充分だ、というのが皆の本音であろう。それに褒美の品までついてくるのだから、感動して当然だった。

そして、それを当然と見なさない謙虚さが、モモンガの美点でもあった。

「デミウルゴス。お前には、今後とも期待している。他の皆をないがしろにするわけではないぞ？ リング・オブ・アイنز・ウール・ゴウンは、守護者たち皆に与える予定なのだ。お前ならば、わかってくれると思うが——」

「守護者の安全と、防衛における利点を考慮した上でのことだと、理解しております。——とすれば、私に仕事を与えてくれたこと、実力を示す機会を頂いたこともあわせて、二重に感謝すべきですね。——ありがとうございます」

もちろん、モモンガにそこまで深い考えはない。ほぼ反射で応えているだけだ。

思わず、ウオン・ライと目を合わせる。

『結果良ければすべてよし。自覚もなしに、あれほどの男をたぶらかすとは、罪な人だな』

『……殴りますよ？』

『やめておいた方がいいな。オーバーロードの腕力程度では、拳を痛めるのが関の山だろう』

『からかうのはやめてくれ。これで、結構いっぱいいいんだ』  
『しかし、演じられている。なら、そのまま突っ走ることだ。何、ここまでは見事に進めている。貴方は自分で思っているより、ずっと支配者に向いているよ。自信を持つことだ』

戯言とわかっていて、二人は内緒の会話を楽しんだ。一時に過ぎなかったが、気分がほぐれる。

モモンガは、ナザリックの支配者として、相応しい態度を取らねばならぬ。臣下と語り合うのに、緊張してばかりではどうしようもない。改めて、彼は忠義に報いる魔王としての貌を見せた。

「よろしい。お前には期待している。必要があれば、資材や人材の持ち出しも許す。警戒網の構築も重要であるから、事後承諾でよい。なるべく早く態勢を整えるのだ。——良いな?」

「はい。そのようにいたします。……これは仕事とは別の話になりますが、一つお聞きしたく思います」

「いいぞ。話してみるといい」

デミウルゴスが、自ら求める質問である。彼の有能さに敬意を表して、モモンガはこれに真摯に答えるつもりだった。

「——この世界が、欲しくはありませんか?」

だから、即答は出来なかった。まったく考えないでもない欲望でもあったから、余計に言葉が出なかった。

空から見た光景は、まだモモンガの頭に焼き付いている。高揚した気持ちは冷めておらず、欲しい、という言葉も、すんなりと内から出てきそうだった。

「この世界は美しい。私などでも、そう思うのです。モモンガ様もそう感じていらつしやるでしょうし、ウォン・ライ様はブルー・プラネット様に負けず劣らず、自然を愛するお方だ。ならば、そうした思いを抱いたとしても、不思議はございません」

ウォン・ライは、長く生きている分だけ、自然環境に対しても思うところが大きい。若者たちに、より良い環境を与えてやりたいと願うからこそ、自然を慈しんで後世に残りたいと強く思う。

そうした気持ちを愛と表現されたのは、何となく据わりが悪い——が、とがめるようなことでもなかった。

「モモンガ殿。思うがままを述べるがよろしい」

「ウォン・ライ。それは——」

「英雄を目指すならば、方向性を決めておくことだ。統治を行う王も兼ねるか、ただの個人の英雄となるか。より大きな権限を求めるか、最小の労力で目的を目指すか、それだけの違いに過ぎないのだから」

ウォン・ライは、格別支配欲など感じなかった。生きているときでさえ、それは義務感に近いもので、単なる欲望とは趣を異にする。

だから、モモンガの意思一つ。それこそが、重要なのだと思う。

「……我々には、何ができるかさえ分からない」

弱気な発言と言えば、そうであろう。デミウルゴスは思わず気を揉んだが、ウォン・ライは静かに見守る。

「だが、それはかつてと同じであったはずだ。あの大樹の下で、皆と競い合っていた頃でさえ、敗北はすぐ傍にあった。ただ一人でさ迷っていた頃は、無力なまま無様に朽ちることさえ、珍しくはなかった。——だが、それでも私は、我々は、前に進む意思を捨てなかった。それをなくしてしまえば、この世界で生きる意味がなくなる。……生きながらに死ぬくらいなら、死ぬほど真剣に生きようと。そう、思っている」

モモンガの声は静かだったが、迫力があつた。スキルを発動しているわけでもないのに、デミウルゴスは気圧されるようで、表情がひきつる。

「そうだ。私は、この美しい世界で、生きてみたいんだ。——皆と、共に。叶うなら、かつての仲間全員と」

夢だ、とモモンガは微かにつぶやいた。これは、他愛のない夢だと。

仲間全員と、という希望は、あまりにも現実的ではなかった。もう、ギルドメンバーは二人しかない。

だが、それでもアインズ・ウール・ゴウンは健在である。ならば、マスターとしてギルドの名誉を維持しなくてはならぬ。探求心と向上心を持って、この世界に挑まねばならぬ。委縮して脅えるばかりでは、かつての仲間たちにも申し訳がない、とモモンガは思う。

「世界を欲する？ そうだな。そうともいえよう。私は、この世界を知りたい。この世界に刻み付けたい。我らが名を、我らが生を、かつての仲間たちの下へ届くほどに。——デミウルゴスよ。これが、私の答えである」

デミウルゴスは、なおも顔をひきつらせたままだった。ひきつらせたまま、笑った。

「どうだ、参考になったか？」

「はい。これ以上ないほどに。——モモンガ様のご意思、よくわかり



ました」

それは、こころよい笑いであり、敬意から心服した者の笑みである。彼は、尊敬の感情をそのままに、湧き上がる畏怖の念を感じながら、言葉をつむいだ。

「ぶしつけな質問でありました。——どうか、お許しを」

「構わないさ、デミウルゴス。ところで、なぜそのようなことを聞いた。お前なりに、思うところでもあったか？」

モモンガなりの疑問である。彼はナザリック一の知恵者だ、という認識が先にある。

その当人がわざわざ聞いたのだから、当然意図があるだろう。それは何か？ 気にならないとは、言えなかった。

「はい。ここがユグドラシルではないことは、私も確信しております」  
「うむ、それは私にもわかる。未知の世界だな」

「まさに、未知。……そして、この世界を美しい、と感じるのは私も同じ。臣下の身としては——きらめく宝石のような世界を、至高のお方に捧げたい。そう思うのは、ごく自然なことなのです」

モモンガは、手を顎に当てて考える。この献身を真に受けてよいものだろうか、と。

別に疑っているわけではないし、今更あれこれ難癖をつけたいわけでもないのだが、どうも引つかかった。彼は、その疑問を言葉にするのに難儀したが、ウオン・ライが代弁する。

「一応、聞いておきたい」

「なんででしょうか、ウオン・ライ様」

「お前は、我々ならば賛同してくれると思って、世界征服をすすめたのか？ あるいは、己はそう進言するべきだ、と純粹に考えて、発言したのか？」

ウオン・ライの発言を聞いて、モモンガはすぐに納得できた。

引つかかったのは、それがデミウルゴス自身の野望からきているのか？ それとも自分たちに対する、純粹な敬意からなのか？ その判断がつかなかったからだ。

「……それは」

「ああ、どちらであつても責めるつもりはないのだ。ただ、下手に取り繕うような答えは困る。……わかりやすく、率直な返答を望むぞ」

「はい。私は、至高の方々の望むものを、望む形で献上したいと思つたのです。決して、独りよがりな欲望から、申し上げたわけではありません。我々は、常に役に立ちたいと思い、そのために働くことを生きがいとしているのです。……どうか、お許しを」

「許すも許さないもない。……その気持ちは、純粹に嬉しい。なるほど、そうか。働く機会が欲しいのか。——我々が生きる証を刻みたい、と思うように、お前たちも生きがい欲しいのだな」

「——はい」

「ならば、私があればこれということもない。……モモンガ殿」

このまま話を締めてくれるのかな——と期待していたところで、唐突に話を振られたモモンガは、軽く慌てた。

「アツ、はい。……どうした」

「一人で英雄を目指す必要はない。貴方の生き方を、ナザリック全てで応援する。そういう路線を行った方が、誰にとつても良いと思う。……いかがかな？」

いかかも何も、そうした方向性で行くものと、モモンガは思い込んでいた。デミウルゴスが純粹な敬意から、我々に世界を献上したい、と思うなら——これは本気で受け止めるべきだろう。

慣れぬことだから、困惑することしきりである。だが、それでも求められたなら、応えたいと思う。その想いだけは、本物だった。

「私は、自分一人で戦えるとは思っていないぞ。もちろん、手を貸してもらおうとも」

「では、そういうことだ、デミウルゴス。しかと、肝に銘じておくように」

モモンガ自身は、特に思案せず、思ったところを述べたまでである。それをうやうやしく聞き、真面目すぎる態度で臨む二人を怪訝には思ったが、指摘することは、はばかられた。

なぜなら二人とも、とても楽しそうな表情だったから。ここで口を挟むのは、何やら無粋に思えたのである。

一通り外の風景を堪能すると、モモンガは満足して再び墳墓の中へと戻っていった。

リフレッシュが終われば、仕事の時間である。今度は表層から深層に向かって歩きながら、思考をまとめようとした。

——そろそろ、本気で考えないとな。

情報収集に、単独で赴くのは愚策であろう。だからパートナーが必要になるのだが、これがなかなか容易には決まらない。

アウラとマールが優秀であることに疑いはないし、自らアピールするほどやる気もあるとなれば、充分検討に値する。

問題は自分も含めて、異文化コミュニケーションに不慣れである、ということだ。モモンガのような存在が、子供連れでやってきて、どのような目で見られるのか。外見は偽装できるが、実際に人々と接触して交流するとなれば、注意すべき点多かろう。

——そうだ、ここは本物のファンタジー世界なんだ。完全に異文化で、今までの常識が通じない土地じゃないか！ よく考えてみると、これはとんでもないことだぞ。

どのような言葉、行動が、その文化におけるタブーとなるか、わかったものではない。改めて意識してみれば、不安だらけではないか。

とはいえ、過剰に警戒しても仕方ない部分でもある。この手の繊細な情報は、実際に交流せねばわかるまい。徐々に適応していくほかはないが、そうすると人選はより悩ましくなる。

——子供にそんなコミュニケーションを期待するのは間違いだから、俺自身がコミュニケーションを頑張らないといけないわけだ。アウラとマールは、俺がこちらの常識に慣れるまでは、温存するのが無難だろう。ここは異世界である。自分とは違う文化的背景で育った相手に対し、どう接するのが正解なのか。モモンガは営業マンとしての経験から、いくらかのマナーや作法をわきまえては、いる。

だが、それは現代日本という同一文化の下でこそ有効なもので、異世界においても有用かと考えると、やはり確信はない。

となると、頼るべき人物に頼るのが、正解に思われた。

「ウォン・ライは、異文化コミュニケーションは得意な方だったな？」  
「工作上、外国の色んな種類の人物と接してきたのでね。任せてくれて、大丈夫だ」

「そうか。ああ、そうだったな。……二人して出ていく、という案が途端に魅力的に思えてきたぞ」

「実際、手ではある。もつとも、守護者たちが気を揉むから、護衛は仰々しいくらいについてくるだろう。共に行く場合、この点をいかに解決するかが、問題になる」

といって、モモンガの方は自重するつもりはなかった。自ら携わったわけではない仕事で、間接的に集められた情報など、とても信頼に値しないと思っているからだ。

現物をその目で見て、生きた情報をそのまま血肉としてこそ価値がある。彼は慎重な人間だが、リスクを恐れるばかりでは先に進めないことも理解している。

「まあ、ほとんど力技だが、単純な手で解決可能ではある」

「とぅーとぅー」

「うむ。いつそナザリック傭兵団とか、ナザリック商隊とか、何かしらの名義をつけて集団行動すればよい。それなりの馬車を用意すれば、格好はつくだろう」

力技にもほどがあった。モモンガは、初手でそこまで大胆な手は打ちたくない。世界に対して無知である以上、強引で派手な手段は、ひどい損害を招く可能性がある。

何より、情報を収集するために、こちらの情報を喧伝して歩くというのは、いかにも下策であった。

「却下だ。大勢で動けば、それだけ情報漏えいの危険も増す。……好ましくない」

「当然だな。するとやはり少数、モモンガ殿も含めて、三人くらいが好ましいだろう」

その提案は、先ほどよりよほど現実味があった。検討に値するが、やはり人選を考えねば話が進まない。モモンガはとりあえず、率直に

聞いてみた。

「共の二人は、誰が良いと思う?」

「これは私の思い込みだが、まず、人間を相手にすることを考えた方がいいだろう。人間はどんなファンタジー作品の中でも、もつとも一般的な多数派で、大勢力だ。だから人間を見て、過剰反応をしない者、柔軟な対応ができる者を選ぶのが良いだろう」

なるほど、とモモンガは思う。もし相手が異形種なら、偽装を捨てて身をさらせばよいだけだ。

しかし、柔軟な態度を取れるかどうか。これはハードルが高いように思われる。知識面でもつとも頼りになりそうなデミウルゴスは、仕事の最中だ。一朝一夕で終わるものではないから、今は表に出したくなかった。

となると、一気に選択の幅が狭くなる。セバスは安定しているが、それだけに独立して動かして、手数を増やす方に使いたい。己の供をさせるのは、もつたない配置に思えた。

「そういう意味なら、セバスが一番適しているな。——だが、任務への適応能力が高いなら、それはそれで別の使い道がある」

モモンガが自身の意見を述べると、ウォン・ライは得たり、とぼかりに所見を述べる。

「まさに。ここは、二手に分けるのが最良。モモンガ殿の一隊と、セバス率いる別動隊。この二線を軸にして、情報を収集するべきだ。……世界は広い。人ひとりの行動にも限界がある。ゆえに、手分けして進めるのは正しいことだろう」

モモンガは、自分の提案を正しく把握し、評価してくれたことに安堵した。実際、己が表で活躍するなら、別動隊から得た情報も吟味する価値が出てくる。

同じ世界を味わっている、という共感は、何よりも得難いものであるし——多方面から得た情報を付き合わせれば、より正しく分析できる事柄もあるだろう。

——すると、セバスの共にはプレアデスの誰かをあてるのが無難か。

こちらの人選はすぐに決められた。セバスなら、いかようにも御すだろう。

駄目なら駄目で、その時はその時だとブン投げる。何もかもを想定するには、モモンガの精神は強くない。ある程度の妥協は、どうしても必要だった。

「よし、ならばそれでいこう。セバスはすぐに動かしてもいいが——」  
「焦ることはない。こちらの方針を決めてからでもいいだろう。人選と、情報の集め方、その方向性を定めてからでも、動くのは遅くない。違うかな？」

「……そうだな。まずは、決めることを決めてしまおうか」

改めて、モモンガは悩まねばならなかった。人間に近い見た目で、反感を抱かれにくい者と言えば、やはりプレアデスの誰か、ということになるだろう。

あくまでも直感だが、ナーベラルが適しているように思われた。美女であるし、戦力と見てもちょうどいい塩梅だろう。人間種であれば、あの手の美しさは好意的に迎えられるはずだ。

人間に対して柔軟な姿勢を維持できるかどうか、それはこちらでフォローすればいい。それくらいの技量は、自分にもあるつもりだった。

「二人目は、ナーベラルかユリでどうだろう。カルマ値を考慮するなら善性のユリが一番だろうが、純粋な力量ではナーベラルも捨てがたいところだ」

「いずれであつても、一長一短。後は人間に対して、温和な態度がとれるかどうか……。できなければ、モモンガ殿が心労を負うことになるので、私としてはユリを推したいが」

「しかし、荒事を任せるなら、やはりナーベラルが一番だろう。外に出れば、どんな危険が待っているかわからん。……やはり、ユリは温存しよう。多少の苦労くらいは、負う余裕もあるしな」

期待はしても、失望はするまいと、モモンガは己に言い聞かせた。人員にさほど余裕があるわけではないし、他の有為の人材は、後々のために温存しておきたい。どうせ知るべきことを知れば、あれもこれ

もと思いつき、多数のNPCを派遣することになるのだから。

そもそもナーベラル一人、御せぬようかどうかと、モモンガは気を引き締める。

「なら、もう一人は私の息子を推しましょう。リジンカンなら、温和で柔軟な対応が期待できる。ナーベラルに問題があっても、それとなく諭すことくらいは、やってのけるだろう」

郷に入っては郷に従え、というが、これから挑むのは未知の世界。郷に入っては郷に気付け、という精神で備えるのが良い。そうした意気度表に出るなら、NPCの中ではリジンカンがもつとも適任と、ウォン・ライは推した。

「ああ、ウォン・ライのNPCだったか。どんな人物だったかな。ドツペルゲンガーで、火力偏重の前衛職だったことくらいは覚えてるが」  
「だいたい合っている。趣味丸出しで、恥ずかしい限りだが、温存するような手札でもないと思うのでな」

リジンカンは、そんなNPCだったような気がして、確認を取った。肯定されたところを見ると、モモンガの認識にズレはないらしい。

攻撃を受け止めるのではなく、回避を前提とするスタイルは、ウォン・ライとは正反対だった。一言で称するなら、軽戦士のアタッカーと言ったところか。

軽戦士系の職業は、高機動力、特化した回避能力、多彩な物理攻撃スキルを誇る。高レベルの熟練者であれば、同格相手の多対一の戦闘であつても、早々後れはとらないものだ。

その分、一撃でも喰らえば敗北に直結するピーキーな点もあつた。相当な戦巧者でなければ、許されない職業と言つていい。

しかし、それを受け入れてなお、高火力で見栄えのいいスキル群に恵まれており——ユグドラシルにおいては、人気職の一つであつたと言える。

「個人的なロマンを詰め込んだ奴だから、実用一点張りの廃人プレイヤーには負けるが、前衛のアタッカーとして、不足はない。……ナーベラルに後衛を任せ、モモンガ殿が二人のフォローに回れば、かなり優位な立ち回りができるだろう」

「なるほど、悪くない。——いや、おそろく最善だろう。これで人選は決まりだな。しばらくは、あの二人を連れて動くとするか」

あれこれ話しながらも、モモンガとウォン・ライは墳墓の深層へと足を進めていった。

時には話を中断して、ナザリツクの威容に見惚れながら、二人は三階層へとたどり着く。

「ここらは、まだシャルティアの領域だったかね。いや、久しくログインしていなかったから、色々とうろ覚えだな」

「ああ、地底湖はもう少し先だから、まだ彼女の担当の部分だな。墳墓の管理は、彼女の責務になる。——しかし、実際に歩いてみると、何度でも新しい感動があるよ。散歩は、気分転換にいいものだな」

シャルティアに会ったのは完全な偶然だったが、それでもこちらから声をかける程度には、モモンガも気分がほぐれていた。

「シャルティア、こんなところで会うとは、奇遇だな。お前も散歩か？」

「これはモモンガ様、ウォン・ライ様、ご機嫌麗しゅう」

そうして、彼女は優雅に一礼してみせた。思わず見惚れたモモンガは、己に同じことができるかどうか考えて、軽く自己を嫌悪した。こうした時、自身がただの一市民に過ぎないことを、どうしても思い知らされる。

——俺は、俺にしかねない。それでいいんだ。むしろ、これはよく出来た部下を持ったことを喜ぶべきだろ。

それでいて、劣等感に支配されず、真摯に相手と向き合う誠実さが、モモンガの美点であった。彼はねぎらうように、シャルティアに応える。

「はい、散歩を兼ねた見回りでありんす。こう見えて、適度に管理してやらないと、見栄えが悪くなりんすから」

「墳墓の管理は、お前がやっているのだったな。色々と見て回ったが、手入れが行き届いている。良い仕事をしている様子で、私も嬉しいぞ」

「恐縮でありんす。そう評価してくださると、気合が入りんすわ」



彼女は、ほころんだような微笑みをモモンガに見せた。

褒めて、喜んでもらえる。実社会では、部下など持ったこともない彼だったが、こんな当たり前のことが、ひどく嬉しくなる。

余裕がないうちは自覚も薄かったが、よく周りを見れば、自分を支えてくれる相手は、いくらもいるではないか。

シャルティア、デミウルゴス、アウラにマーレ。親しく言葉を交わせば、素直な好意を向けてくれる。心が温かくなるような、そんな想いをモモンガは感じていた。

「そうか、またいづれ、シャルティアにも出勤を命じることがあるだろう。その時を楽しみにしていてくれ」

「お役に立つ機会を下さるのなら、これに勝るものはありません。いつと言わず、今からでも命じてくだされば、ご期待に応えるであります」

彼女の口調は、前向きな感情が表れているようだった。決して軽薄な気持ちからではなく、懸命に働こうとする意欲に満ちている。頼もしいと、モモンガは素直に思った。

同時にその期待が重い、と改めて自覚せねばならなかったが、それはさておいて。

——シャルティアは、使い出のある戦力だ。防衛ばかりに回すのは、もつたいないな。セバスに続いて、二つ目の別動隊を率いてもらうのも、一手か。

守護者たちと接していくうちに、モモンガは皆を本当の意味で、信頼するようになっていく。

口で語るのと、心から納得することは別である。心に余裕があると、見るべきものが正しく見えてくるものだ。切羽詰まっていれば、相手の気持ちをおもんばかることすら、出来なくなろう。

そう考えれば、やはりウオン・ライの存在は大きかった。傍にいてくれるだけで、ずいぶんと安心感が違う。

戦力として頼もしいのはもちろんだが、何より適切な助言を受けられるというのが、一番うれしかった。

——信頼は重荷だが、俺は一人じゃないんだ。重い荷物は、二人で

運べばいい。分かち合うっていうのは、そういうことだろうか？

孤独に必死に前だけ見て進む、というやり方もあるうが、今更一人で思い悩むつもりもない。そうならなくてよかったと、モモンガは思わずにいられたかった。

「今すぐは、少し難しいな。お前はナザリックの中でも、有数の戦闘能力の持ち主だ。軽々に動かしては、私の采配が疑われよう。切り札は、時期を待って、確実に運用してこそ意味がある。——わかつてくれるな？」

「モモンガ様の仰せとあらば、異議などありません。その時を、楽しみにお待ちしているであります」

とりあえず、この場はそれらしいことを言って、ごまかしておく。多少ぎこちなかったが、それなりに無難な対応ができただろうか、とモモンガは振り返る。

社交辞令のようなものだったが、付き合いは長くなるのだ。こうしたやりとりでも、重ねることに意味がある、と何となく思う。

そろそろ話を切り上げようかと思ったところで、モモンガはまた別の人物から声を掛けられた。今度は本当に、意外な人物からだった。

「これはモモンガ様、お久しぶりうございますな。どうです、適当な所で一杯やりませんか」

「……おいリジンカン、酔け過ぎだ。主君の御前である。厳粛な顔をせよとは言わぬが——せめて、場をわきまえんか」

ウォン・ライがたしなめた相手は、その当人が作ったNPC。リジンカンと呼ばれた男は、さわやかな笑顔で、モモンガに話しかける。

これといつて接点はなかったのだが、ギルドマスターとして、大まかな性能や経歴については理解していた。軽い性格も社交的と見れば、表に出す人員としては、有能であるかもしれない。

「親父殿は、そうおっしゃられるが、モモンガ様はいかがです？ 男同士で、酒など酌み交わしませんか？」

「……別に嫌なわけではないが、この体で酒は飲めんな」

モモンガは、くだけた口調で話しかけられるのが、意外と嫌ではなかった。

立場は自覚するべきだが、感情はまた別のものである。リジンカンの声は親しげで、悪意などみじんもない。これを無下にする気分には、どうしてもなれなかった。

「そこはそれ、親父殿の技能があるでしょう？ 鬼の上位種族には人化の術がある。本来は自身を人に化えるだけの、他愛もない技能ですが——」

「本人のみを対象とするスキル・魔法を、隣接する味方にも使用することができる。そうした効果を持つアイテムがあつたな。……どれ、都合よく持っていたかどうか」

リジンカンから目配せされたウオン・ライは、正しく意図を読んで、手持ちのアイテムを探った。

自身の個室には、多種多様なアイテムが保存されているが、手持ちはさほどでもない。それでも見てみれば、適合するものが一つある。

「ふーむ、『魔法の射程が一段階上昇する』指輪があるな。鬼神の人化の術は魔法扱いだから、これでも可能かもしれん。……どうしたものか、モモンガ殿」

「うん？」

「御身に対して、正しく魔法が効果を及ぼすか、それを確かめる機会でもある。いささか人体実験じみているから、あまりすすめられないが——それでも人の身になって、酒でも飲んでみようか？」

それはそれで魅力的な提案だった。不安がないでもないが、試してみたいという気持ちが強い。

オーバードロードとなつたこの身に、不満があるとは口にしたくないが——それでも、かつての肉体に未練がないとも言いきれなかった。出来そうだと知れば、たとえ一時でも、人間に戻りたくなる。

「無理に人間にならなくともよいのでは？ モモンガ様は、そのままが美しいのでありませんから」

「よし、決めた。ウオン・ライ、やってくれ」

シャルティアの言葉が後押しになった。美しい、という言葉は、思ったよりモモンガの心に刺さる。

彼女に他意がないのはわかるが、そのような称賛は、彼女にとっては

厳しいものであったらしい。

「では、地底湖の見晴らしがいい所で、宴席など設けてみましょう。何、ゆつくり歩いてきてくださればよろしい。そこに来るまでには、準備を整えておきますので」

人化の術を施す前に、リジンカンは心得たとばかりに応えた。彼がそう言ったということは、本当にそれらしい宴席を作ってくるだろう。

「リジンカン。わたしも参加していいんでありんすか？ 仕事は一段落したところだし、構わないでありんしょう？」

「もちろんだ。美人に来てもらえれば、場が華やかになる」

「……口説いても無駄でありんすえ？」

「知っているさ。ただ、美人と言ったのは本心からだ。酔った美人を鑑賞するのも、いいものだからな」

そこにいてくれるだけで、価値があるとリジンカンは付け加えた。シャルティアは笑み一つ浮かべないが、嫌悪している風ではない。嫌われてはいないにしても、関心を抱くような相手でもない、ということか。

しかし、風流を解するのも考え物だと、ウオン・ライは思わずため息をつく。

「では、失礼。——場所は、そうとわかるようにしていますので、ご心配なく」

リジンカンはそれだけ言い残すと、素早く去っていった。断られるとは、最初から思っていなかったのだろう。最低限の準備は、あらかじめ整えてあったに違いない。

「モモンガ殿、申し訳ない。ああも自由な男として作った覚えは……まあ、あるが。こんな状況で、突発的に言い出すとは、私にも読めなかった」

「読めるわけがないさ。皆、生きているのだから、予想通りに動いてくれることばかりではない。——構わないとも。私は、ああいう男が嫌いではないらしい。自分自身、意外なことだが」

モモンガは、きちんとした肉体があれば、笑顔を見せていたところ

だ。それでも、ウオン・ライは頭を痛めていた。

権威を意に介さぬ無頼ぶりは、自ら設定したものだ。息子を持たないがゆえの願望と、現代日本的なだけな親子関係に、憧れに近いものを持つていたから、そうしてしまった。

結果、モデルとなった人物からは、いささかかけ離れてしまったが、それでも近いものはある。風流人、という部分がそうであるし、酒好きなのも同じだ。

女好きだが色事は不器用で苦手、というところにもまで思い出して――重要なことを忘れているような気分になった。

なんであつたか、と考えたところで、モモンガから話しかけられる。「わざわざ一杯やりたいなんて、どんな意図があつて誘つてきたのか。興味深いとは思わないか？ その態度からして、ナザリツクの他のものとは違つて、異質に見えるが」

「さて、何ともいえない。愚かな男にしたつもりはないが、知謀に優れた男にしたつもりもない。単なる思い付きかもしれないが……まあ、酒を酌み交わせばわかることか」

義理堅く筋を通す好漢、という設定が正しく発揮されていれば、無駄に無礼な態度もとるまい。モモンガに悪感情を持たれず、無難に終われば良いのだが――と、彼はやきもきしながら、地底湖へと向かつていった。

## 第七章 酒宴

地底湖を歩くと、なるほど、確かにわかりやすい目印が置いてある、と思う。

セバスの姿が、すぐに目についた。彼も巻き込まれたと思うと、リジンカンの行動力には驚かされる。

「セバス、お前も呼ばれたのか」

「はい、モモンガ様。しかし、そのお姿は……」

「ウオン・ライが、人化の術を使ってくれてな。……まあ、地味な顔だと思うが、意外か？」

「そのようなことはございません。モモンガ様は、至高のお方。地味だなどとは、思われません」

本気の敬意は、下手な追従より扱いに困る。モモンガは、セバスが本気で言っているとわかっていたが、返答はひかえた。ここは、話題を変えることで眼をそらす。

「さて、主催者の姿が見えんな。酒宴の席は、まだ先か？」

「はい。ご案内します」

ともあれ、宴席にたどり着かねば来た意味がない。セバスの先導に従い、三人は歩みを進める。

シャルティアは雑談にも参加せず、周囲をながめるだけだった。もし二人がいなければ、リジンカンの誘いなど一蹴していただろう。

そう思うと、義父として申し訳なくなってくるウオン・ライであった。

「リジンカンが無理を言ったようだな。セバス、嫌なら嫌と言ってやってくれ。あれは、いささか奔放な所があるのでな」

「ウオン・ライ様の御息は、聡明で優しい方です。もし、私にほんの少しでも迷惑に感ずるところがあれば、彼とて付き合いませようとはしなかったでしょう」

セバスは、ウオン・ライの言葉を否定して、リジンカンの人格を肯定してみせた。

こうした気遣いのできるNPCを残したあたり、生みの親である、

たっち・みーの性格も見て取れよう。モモンガは思わず、胸が熱くなつた。

雑談もそこそこにして、歩くこと、しばし。ようやくリジンカンの用意した舞台へと、彼らはたどり着いた。

「飾り気はあまりないが、地底湖を見下ろせる位置だな。——ん、悪くない」

湖と言つても、おおきな水たまりではないか、という意識がどこかにあつた。だが、一望できる位置から見下ろせば、これでなかなか壮観である。

穏やかな光源に照らされる水面は、どこまでも透き通っていて、底まで見通せるほど。所々で起きる水の波紋が美しく、時に様々な色を見せてくれる。周囲は灰色の岩盤ばかりだが、全体の造形は一種の芸術のような趣もあつて、なかなか味がある。

席の用意はと言えば、野外なりに趣向を凝らした出来で、『花見』や『月見酒』といった、22世紀には廃れてしまった——古い道楽を思い起こさせた。

しかしこの場において、景観はただの舞台以上のものではないのだろう。酒の他にも、結構な量の肴も盛られていた。料理長辺りに用意させたにしても、なんとも本格的で、モモンガも苦笑したくなるほどである。

「まったく、そんなに酒宴がしたかったのか？ お前は」

「親父殿は、俺がどんなに酒好きかご存じだろうか？ こういう席で、手はぬかないさ。まあ、どうせ色々考えが行き詰まっているだろうし、気分転換もよかろうと、気を回した結果でね」

ウオン・ライは、咎めるような口調ではなかったが、あきれている様子だった。いたずらをした子供を諭すような顔で、リジンカンを見ている。

「そうでもないぞ。すでに行動方針は決めている。具体的な内容も、ほぼ決定した」

「おや、親父殿は案外聡明であられたらしい。いや、むしろモモンガ様が果断だった、というべきかな？」

「モモンガ殿は、必要なだけ悩んだ。そして答えを出した。これは、それだけの話だ。……お前が邪推していいことではない。わかるな?」  
「もちろんだ、親父殿。俺は親父殿にとって、良い息子でありたいと、常に己に言い聞かせているのだから」

モモンガは伴侶も子供も持たないが、親子関係というのは、ここまでの緊張を必要とするものだろうか、とつい考えてしまった。

もしかしたら、お互いに他愛のないやり取りだと思っているかもしれないが、見ていてハラハラする。リジンカンが不敵に笑っているのに対し、ウォン・ライが厳しい表情を崩そうとしないのも、その印象に拍車をかけた。

「ウォン・ライ。息子を咎めるのも、そこまでにしてやったらどうか。私は気にしていないし、むしろ酒が飲めるのを楽しみにしているくらいだ」

「モモンガ様は話が分かる。酒は、当然ですが上等です。料理長が選別して、酒肴もとびきりのものを揃えました。人化しているうちに、味わう楽しみを堪能すべきでしょう」

「それはいいな。——美食なんて、生きていくうちにはあまり縁がなかったんだ。機会があるうちに、楽しんでおきたいものだ」

モモンガは、食欲がわいてきた。荒廃した世界で生きてきた彼にとつて、美食は新鮮な驚きである。

美味しいものを一度も食べなかった、とは言わないが、ひどく貴重であったことは確かだ。まず彼は料理が下手だったし、出来合いのものを適当に胃に入れるのが日常であったから。

「モモンガ殿がそういわれるなら、楽しむのも悪いわけではないが」  
「なら、ウォン・ライも気兼ねせず楽しんでくれ。せっかくの誘いだし、私もナザリックの酒を味わいたいしな」

「——人化の術は、丸一日持つ。しばらくは、頭を空っぽにして遊ぶのもいい。モモンガ殿、貴方は決断した。今日は仕事を収めて、くつろいでいいと思うぞ」

モモンガは食欲に正直になっただけだが、ウォン・ライは穏やかにそれを肯定した。



組織の頂点に立つ者にとって仕事とは、決断を任され、その責任を負うことに他ならぬ。それを為した彼は、少しぐらい休んでもいいと思うのだ。だから、これは純粋な気遣いである。

「そうか？　なら、甘えよう。——乾杯の音頭は、私がとつた方がいいか？」

「貴方以外の誰がするのだ？　さ、始めてくれ」

モモンガは杯を手にとつて、乾杯した。ささやかな酒宴は、酩酊の喜びと共に始まったのである。

酒を入れるのが、こうも快いものだったとは、モモンガも知らなかった。量産されたアルコール飲料では、決して得られない上質の酔いを、彼は感じていた。

「酒が進み過ぎて、悪酔いしそうだ」

「料理長の仕込みは確かですよ、モモンガ様。悪酔いするような酒は持ってきてないので、気兼ねなく飲兵衛になればよろしい」

リジンカンが冗談交じりに言った。実際、人化の術を解いてオーバードの姿に戻れば、酔いも何も無い。骸骨が酒におぼれることなどないのだから、好きなだけ飲める。そう思えば、美酒を楽しむ機会を得たことを、素直に感謝したくなった。

「——ちよつと物足りないであります。もう少し、度数の高いのはないの？」

「上等のマオタイ酒がある。火を噴きそうになるくらい強いが、良い酒だぞ。相応にクセはあるがね」

「……んー、何というか、ちよつと好みには合わないであります。ウオツカはないのウオツカは」

「冷えている奴を用意させているとも。果実もあるし、混酒もいい。この俺が、女性の好みを忘れるわけがないだろう？」

リジンカンは、シャルティアとも打ち解けて話していた。彼女の方は、好意というよりは、無関心からの寛容さであろうか。彼が何を言おうとも、適当に流す態勢に入っている。

「セバス、お前もたまには羽目を外せ。真面目なツラも、たまには緩め

てみるもんだ。堅苦しく黙っているよりも、笑いかけて口説いた方が、女にモテるぞ」

「……性分ですの」

セバスに対して、リジンカンは臆せず自ら思うところを述べた。奔放な性格をしているのだな、とモモンガは見ていて思うが、やはり悪感情は浮かばない。

「お前とて木石ではあるまい。美味しい酒を飲めば気分が良くなるし、美しいものを見れば心が華やぐ。そうだろう？」

「肯定します。ですが、羽目を外していい理由にはならないかと」

「なら、自分に許せる範囲で気を緩めろ。張りつめた弦は、切れやすくなる。どんなに賢くても、感情を持て余すのがヒトの性だ。後で引き締めるために、今を楽しむ、というのは、結構重要なことだと思うがね」

本物のイケメンは同性からも嫌悪されず、むしろ好感を抱かれるというが、リジンカンはどうであろう。

言うことはキザで、もつともらしいが——その軽快な口調と穏やかな表情は、相手をさわやかな気持ちにさせる、不思議な魅力があった。「責任ある立場にあるものが、傍若無人な振る舞いをするわけにも参りますまい。楽しむにしても、控えめなくらいでちょうどいいと、私は思います」

「それが悪いとは言わんよ。控えめであっても、楽しむ気持ちを持つてくれれば、俺としては満足だ。……セバスは善人すぎるからな。問題を抱え込むことも、これから出てくるだろう。そんな時にも余裕を保てるよう、気晴らしの習慣は身につけた方がいい。俺でよければ、いつでも付き合うさ」

モモンガはリア充爆発しろ、と素で言えるほど荒んではないが、嫉妬の感情くらいはある。

それでもリジンカンの振る舞いに、腹が立つどころか陽気な笑いさえ出てくるのだから、感心しなくなった。

「セバスには、早々に働いてもらったからな。私としても、この場で楽しむくらいのゆとりは、与えてやりたいと思うよ」

「モモンガ様……」

「これから、セバスには色々頼むことになるからな。私のために働いてくれる者をねぎらうのは、当然のことだ。恐縮することはない」  
モモンガの言葉に、セバスは感動した。自身の働きが認められるということは、忠節を尽くすものにとつて、何よりの褒美となる。

「いえ、ならば仰せの通りに。最大限、宴を楽しむようにいたします」  
「そこまで硬くならなくともいいのだが……まあ、許そう。適度に羽目を外せ」

そうした言葉を受け取った以上は、楽しむ努力しなくてはならない。セバスはどこまでも真面目な男だったが、酒杯を重ねることくらいは出来た。

モモンガとしては、そんなに重く受け止めることはないのに、とかえって心配になる。そうした彼の心配を察したわけでもあるまいが、リジンカンはセバスにからみ続けた。

「一人で手酌酒をあおるのは、酒宴を楽しむ態度とはいえんぞ？　ほら、注いでやろう」

「リジンカン。貴方は全く、何と行って良いやら、困りますよ」

「いいから飲め。乾杯だ、乾杯。……巻き込んでやったこと、感謝してくれてもいいんだぞ？」

リジンカンは、あれこれと世話を焼くように、酒肴の用意やら雑談の話題やらを整え、セバスと語り合った。その顔は楽しげで、悪戯小僧のような稚気にあふれている。

「そうそう、デミウルゴスの奴も誘ったんだがな。『俺と酒を飲むと不味くなる』なんて言ってくれてな。その点、お前は素直に応じてくれるし、友達甲斐がある」

「——彼が、そのようなことを？　そこまで言うこともないでしょうに」

「ああ、いや、これは俺が悪いんだ。あまり、あいつを悪く言ってくれな」

セバスは嫌悪感を隠し切れない様子だった。言い方というものがあるだろう、と思ったからだ。デミウルゴスがそこまで露骨な表現

を使うというのも、妙な話であった。

セバスは彼が苦手だが、それでもナザリック内部の者に辛辣に当たっている姿は、見たことがない。リジンカン自身、己に問題があったといっているし、そういうこともあるのだろうか、と疑問に思う。「あいつと酒を飲むときは、たいがい俺の方が甘えているんだ。見せなくていいものまで、見せてしまったり、な。だから、俺が誘っても断られるのは、仕方がないことだ」

デミウルゴスに対して、甘える、などと臆面もなく言つてのけるのは、ナザリック広しといえどもリジンカンのみであろう。

軽く驚きだが、この軽妙洒脱な好漢であれば、さしたる難事ではないのか。なにせよ、セバスには理解が及ばない事柄であった。

「甘える、ですか。なかなか想像しづらいところですよ」

「デミウルゴスは、気立てのいい奴だぞ。付き合ってみれば、案外話せるし、面白い。先入観や一時の感情で遠ざけるのは、もったいないと俺は思う」

「……それは」

「あいつと何か話したくなったら、俺の方から仲介してやってもいい。ただし、酒は忘れるなよ? ははは」

それだけ言つて、リジンカンは離れていった。言うべきことは言つた、と態度で表しながら。

セバスは酒杯を持ったまま、少しの間だけ思索にふけたが、すぐに宴を楽しむ努力を再開した。心なしか、表情が穏やかになったように見える。

その様子まで含めて、二人の支配者たちにとっては、一種の見世物のようであった。

「リジンカンって、ああいう奴だったっけ? 妙に甲斐甲斐しいというか、なんというか……」

「我が息子のことながら、わからん。設定は、割と適当であいまいな表現が多かったから、その辺が影響してるのかもしれない。モデルとなった人物にも近いような、遠いような。……いや、自分の理想を節操なく詰め込んだわけだから、細かな差異が出るのは当然だが」

モモンガは思わず素で問うたが、ウォン・ライとしても、ここは頭を抱えるところである。

自業自得と言え、確かにその通りなのだが、実際に動き出すと、何とも恥ずかしくて堪らない。己の子供じみた部分が、どことなく影響されているからだろうか、と彼は思う。

「まあ、あれだ。見ていて飽きない人物に仕上がったようで、何よりじゃないか」

「……面白がっているな、モモンガ殿」

「良い奴だ、と言ってるんだよ。悪いことじゃない。——しかし、モデルがいたのか。それは初耳だ」

「ああ、リジンカン、という名も日本語読みでな。ある武侠小说の主人公をモデルにした。子供の頃に読んだものだが、これまで触れた作品の中でも、一番好きな主人公だった。中国ではテレビドラマにもなつて、かつてはそれなりに知名度もあつたんだが——」

「聞いたことはないな」

「だろう、と思う」

もはや二十世紀の遺物であり、古典と言っても良いくらいである。そもそも武侠小说というジャンル自体、すでに廃れているのだから、日本人の彼が知らなくて当然だった。

「しかし、セバスも息抜きができたようだなによりだ。私も酒が飲めて気分転換になったし、リジンカンには感謝しないとな」

「モモンガ殿、人化の術はステータスこそ変えないが、スキルに大幅な制限がつく。異形種の特性もほぼ全て無効になっているから、不調を感じたらすぐに言つてほしい」

「……ああ、酒に酔えているのは、そのせいかな。まあ不調というほどじゃないし、気にしなくていいだろ。うん」

人化の術は、弱体化と引き換えに、外見を変えるだけのネタ魔法である。ゲームではまともに使つたことはないから、現実でどのような不具合が出るか分かつたものではなかった。

だが、モモンガの様子を見る限り、問題はなさそうである。外で情報収集する際は、使いどころがあるかもしれない。

「シャルティアも、あれで結構イケる口なのだ。大まかなプロフィールは把握しているつもりだったが、こうして現実接してみると、やはり色々新鮮に感じてしまう。わかっていたつもりなのに、実感が伴うと、まるで印象が変わってくる」

モモンガは、シャルティアがかばかば杯を空けていく様を見て、微妙な気持ちだった。彼女は友人の娘とあって良い存在なのだが、そうした相手が酒豪として見事に振る舞っているところを見ると、何やら負けたような気がしてしまう。

もちろん、そんなところで個性を競つても、意味がないとは思うのだが——これもまた、男の矜持、というやつかもしれない。

「他にも、どんな顔を持っていることや。設定は、そこまで熟読していないしなあ……。ウオン・ライは、全部目を通していいのか？」

「……目を通した気もするが、大体は忘れているな。リジンカンの設定は、少し見直したが——あ」

ウオン・ライは、リジンカンの設定を思い出した。これまで失念していた、細部に至るまで。だから、思わず真顔になって、真剣に焦り始めた。

「いかん。これは——いや、まずい。どうしたものか……」

「どうしたんだ？ 何か、あったのか」

「思い出した。思い出した。……リジンカンの奴、そうか。それで——」

ウオン・ライの様子は、ただ事はない。モモンガも問い質さずにはおれなかった。

「二人で納得してないで、話してくれ」

「ああ、うむ。リジンカンの設定なのだが——その、あれだ。色々と考えているうちに、興が乗ってな。他のメンバーも交えて、あれこれ追加していったのだ。元ネタらしく、片思いをしているといい。相手とは絶対結ばれないような、悲恋がいい、とな」

ひどい設定だ、とモモンガは言うことができなかつた。ゲームの中なら、それはただの設定上の文章に過ぎないのだから。

遊び心として、そうした要素を詰め込むのは、別に悪いことではあ

るまい。こうして現実のものとなるなど、どうして考えられよう。

今リジンカンは、シャルティアの傍で飲み比べをしていた。遠目から見てもわかる。楽しんでるのだろう。そうした感情は、素直に見せる男だ。そのように、ウォン・ライが作ったのだから。

『話しくいなら、こちらで話そう。その方がいいか？』

『頼む。恥をさらすようで、申し訳ないが』

『気にしないでくれ。ギルドマスターとして、相談に乗ろうじゃないか』

メッセージ  
伝言による秘密の会話。二人は不審に思われないう、酒と肴をつまみながら、裏で話し合った。そうした彼らの態度に、NPC達も何かを察せずにはいらなかったが、邪魔をする者はいない。

『ありていに言うと、リジンカンはアルベドに惚れている』  
『——え？』

その一言に、モモンガは固まった。思考まで止まってしまいそうだったが、今は棚に上げておく。ともかく、話は聞くことに集中した。『生みの親とも話し合つて、許可を取つたうえでの話だ。タブラさんは快く受け入れてくれたし、気兼ねなく片思いの設定を盛り込んだ』  
『はー。それはまた、何というか』

よく手間をかけている。NPCを偏愛するのは、プレイヤーとして正しいのだが、仲間まで巻き込んで設定づくりをするのは、少数派だろう。

『ついでに、それを他の誰かにも知られていて、妙な気遣いをされている——という設定も入れた。これは、デミウルゴスがいいかと思つて、ウルベルトさんにも話してな。彼も問題なく了承してくれた。……お互いに、相手を親友だと思つている、という一文も付けてくれてね。当時は嬉しく思つたものだ』

ウォン・ライは、マオタイ酒を杯に注いで、一気に飲み干した。コリアン  
高粱の風味を感じさせる逸品だが、クセの強い味で度数も高い。それでも気を紛らわすことは出来ないらしく、表情にはいまだ強い後悔の色が出ている。

『えーと、事情はわかったが、そこまで深刻な事態か？ 片思いは問題

と言えは問題なんだろうが、それだけだろう？ 叶わないと決まってるなら、本人だつてそのうち割り切るんじゃないか？』

『叶わないとわかっていて、一生想いをひきずって生きていく、と書かれていてもかね？ 私は今、後悔しているよ。もう少し、救いのある書き方をすればよかった、と』

モモンガは、ウォン・ライの苦悩を理解することは出来ない。恋愛など、まともに経験したことのない身である。

ただ、新しい相手に苦しい生き方を強いてしまって、悔いている。その気持ちだけは、伝わってきた。だから、適当な言葉でお茶を濁すようなことはしたくない。

『なら、変えればいい』

モモンガは、真剣な口調でそう言った。自らウォン・ライの杯に酌をし、慰めるように。

『設定を書き換えろと？ だが、ここはすでに現実だ。コンソールからの書き換えは出来ない。いや、やれるとしても、やりたくはない』  
『そうじゃない。変わるからこそ人間。成長してこそ人、だろ？ リジンはドツペルゲンガーだが、それは大したことじゃない。生きていけば、良くも悪くも変わっていく。アルベドが振り向くことはなくとも、それを苦にしない生き方だつて、あるだろう。私はそう信じたんだよ、ウォン・ライ』

アルベドに関して、モモンガはまだウォン・ライに言っていない。自分から設定を書き換えたことを告げるには、タイミングが悪すぎた。ともかく、一時忘れて彼は己の見解を述べる。

『大丈夫。きつとうまくいく。リジンは、新しい恋でも見つけてもらえばいい。失恋を引きずっていくとしても、幸福な人生まであきらめるような、殊勝な男には見えないしな』

『簡単に言ってくれるが、あれは結構めんどくさい男だぞ。……いや、貴方が表に連れていってくれるのだったな。情報収集のついでに、息子の仲人もお願いできるのかな？』

モモンガは、ギルドメンバーに頼られるのが好きだった。役に立たなければ、己を純粹に肯定できるから、よく相談事には乗ったものだ。



行動を伴うものでも、ためらうことは少なかった。

『仲人プレイは、難しいからなあ。ここがゲームの舞台でないことも考えると、いささかハードルが高くはあるが』

『……仲人は冗談だが、出会いの機会は、与えてやってほしい。頼めるだろうか?』

『それくらいなら、簡単だ。請け合うとも』

ここで悩みを口にしてくれたことを、感謝したいくらいである。ウオン・ライの後悔は理解出来ずとも、力になることは出来る。

励ましであれ、気休めであれ、それを糧にして行動できる人だと、わかっていくからこそ——モモンガは言葉を重ねた。

『彼はなかなか、凶太い神経をしているように見える。もしかしたら、あつさり解決するかもしれないぞ』

『それは流石に樂觀が過ぎるな。だが、期待も後悔も、動かなければ始まらぬ。行動が全てを解決に導くのだ。——モモンガ殿、やはり貴方は、今でも確かなギルドマスターだよ』

リジンカンの方に目をやれば、彼はシャルティアが酒杯をあおるさまを楽し気に見ていた。酒豪の女性が、好みなだろう。

恋する相手でもないのに、美しい女性であれば節操なく称賛する。あの性格であれば、案外実らぬ恋とやらも、吹っ切ることができるかもしれない。生きていけば、変化していくのは当然なのだ。

ならば、これは可能性なのか。相手が誰であれ、ウオン・ライはリジンカンに幸せになってほしいと思う。

「もう、いいのか?」

「充分だ、モモンガ殿。相応の答えはもらったからな」

モモンガは、酒を注ぐのを止めた。いくら飲んでも酔えない鬼は、悩みを振り切った顔をしていた。内緒話も、充分だと答える。

「気遣いの人だな、貴方は。日本人らしいと思うし、貴方らしいとも思う。どちらが正しいのかな?」

「さあ、わからないな。だが、これで思い悩むことはないだろう?」

モモンガは、メンバーを思いやる気持ちは、誰より強い男だった。思いやりも気遣いも、その情の深さから来るものである。だからこそ

頼りがいがあるといえるし、支え甲斐のある人でもある。

ウオン・ライは嘆息した。こうした純朴な人格が、汚されることなく存在することに、感心しながら一言つぶやく。

「まさに。貴方には敵わないな」

「それはこちらの台詞だよ。これから、私を支えてくれ。愚痴でよければ、いくらでも聞く」

そうして、気分が柔らかいだけおかげだろうか。セバスやシャルティアも、傍に来て酒を酌み交わす。あれこれと世話を焼いてくれるのは嬉しかったが、モモンガにとっては戸惑うことも多かった。

——飲みニケーションって、こういうものだったか？ 上司の役なんてやったことないから、よくわからないが。

酒が入っていたせいもあってか、気兼ねなく歓談できた。他愛のない話ばかりで、モモンガはつい疑問など抱いてしまうが、それも宴会の妙であろう。

NPCは、一個の人間も同然である。お互いに話をして、理解を深めるのは有益なことだ。

「モモンガ様、私たちばかりがこうした役得に恵まれるのは、いささか心苦しく思います。また機会があれば、他の者たちにも、モモンガ様と酒宴を共にする榮譽を与えてくだされば——」

「セバス、まどろっこしい言い方はよすでありんすえ。……モモンガ様、楽しゅうございました。次は、もっと盛大な宴を催しましょう」

モモンガは、頷きながら相槌をうった。酒が美味しいのは、ただ上質なだけではない。美味く酔える雰囲気演出することこそが、肝要であろう。彼らは酔いに身を任せて、宴が終わるまで、その快い感覚に浸っていた——。

宴の片づけは、メイドたちを呼んで、任せればいいことだった。

至高のお方に手伝わせるなど恐れ多い、とばかりに働く彼女らを見て、モモンガもウオン・ライも苦笑した。人を使う立場なのだ、メイドらの待遇も、いずれ見直す必要があるだろう。

「人化の術を解かなくとも、しばらくは不都合もないだろうに。今日一日くらいは、気を抜いてくれてもいいんだぞ?」

「そうもいくまい。睡眠を必要としない身であるし、休養は充分だった。行動はまだ先にしたいが、あまり人の身に慣れすぎるのも、気が抜けてよくないだろう」

すでにモモンガは元の姿に戻っている。体に不調はないが、酒の酔酩が急に冷めた感覚で、少しびっくりしまった。人化が嫌になったわけではないが、たまに、でいいと思う。

何しろ、これから先の見えない仕事が続いている。あまりだらけてもいられない、というのが本音であった。

すでにセバスにもシャルティアにも、本来の仕事に戻るよう伝えられている。部下を働かせる以上は、上司として務めを果たしたかった。

「……この世界に来てからワーカーホリックになるとか、割と笑えない話だが、何事も最初が肝心だからな」

我々がしなければならぬことは、まだまだ多いのだからと、モモンガは続けた。そうまで言われてしまえば、ウォン・ライとしてもあえて否定はするまい。

早々にこの場から離れようとしたところで、リジンカンが二人の前に現れる。道をふさぐのではなく、寄り添うように、さりげなく近づいてきた。

それを奥ゆかしいと取るか、図々しいと取るかは、人によるであろう。

「リジンカン、お前はお前で、何の用だ? 酒宴は終わったぞ」

「そうつれないことは、言わないでほしいな。一応、息子としてそれなりの敬意は持っているし、親しみたい気持ちもあるんだ」

「率直に言え」

「……一杯やって、モモンガ様も気も晴れたろう。人の感覚を実感してくれたから、外で人間と接する時も、いくらか共感しやすくなったはずだ。『化け物は、人の皮をかぶることを覚えねばならない』——親父殿の持論だったな」

どこから聞きつけてきたんだ、とばかりにウォン・ライは胡乱な目

を彼に向けた。

「口にした覚えはないな。どこで知った？」

「……そうだったか？ 何かで見たか、聞いたような覚えはあるが、まあ大したことじゃないだろう。それより、モモンガ様」

急に、リジンカンはモモンガに話を持ってきた。

口調は軽いが、表情は真剣だった。それでも、主君と臣下という身分はわきまえているのだろう。

そうした態度を取られたなら、彼の方も主君としての顔を見せねばならない。モモンガはウオン・ライと顔を見合わせ、うなずいた。スイツチを切り替える儀式は、それで済んだ。

「何か？」

「情報収集の役目、どうかこのリジンカンにお任せ願いたく。僭越ながら、モモンガ様は至高のお方。こうした役目は、下々の者にやらせるのが適任かと愚考致します」

うやうやしく、頭を下げて願い出る。その姿は、先ほどまでの騒ぎで見せていた顔とは、まったく別のもの。あるいは、これは計算ずくであったのか。

——飲みニケーションついでに根回し、っていう感じか？ いや、どうかな。

酒宴の口実でモモンガに酒を入れ、高揚させる。その上で自らの申し出を受け入れやすくした——と、見ることも出来た。だが、ただの思い付きで、物のついでに言ってみた、という風にも取れなくはない。いずれが本心であるか、確認するのは無粋であろうか。

だが、男がいくつもの顔を持つことを、もはや不思議とは思わないモモンガである。受け入れて寛容に接することくらいは、わけもない話だった。

「私は、自分の目で世界を見たいのだ。こうした欲望を、俗なものと思うかね？」

「……いいえ」

「必要に迫られて、いやいや出ていくのではない。自ら望んで行うのだ。お前が言うところの『実感』というものは、そうして育むもの。そ

うではないかな？」

「まさに、その通りでしょう」

「ならば、異論はないということでしょうか？ いずれまた、呼ぶ。それまで待機しているといい」

モモンガの答えは、リジンカンの意にそったものであったか、どうか。

その顔を見やれば、彼は微笑んでいた。軽妙洒脱な男の表情を、わずかに見せ、口を開く。

「ならば、俺の提案にも異論はないということ、よろしいでしょうな？」

「む？」

「モモンガ様が隊長を務めることに、文句を言いたいわけではありません。情報を集めるうえでは、俺が独自の判断を持って動くことを了承してほしい。これは、そういう話ですよ」

リジンカンは、自分が選ばれたことを、すでに確信しているらしい。明言していないのに、目ざとく己を売り込んでいくスタイルは、人によつては鼻につくであろう。

モモンガには、この態度は押しつけがましくも見えるのだが……あまりに、堂々としているせいだろうか。嫌悪より面白味が先に立つ。「独自に動くのなら、わざわざパーティで動く必要性が薄れてしまうぞ？」

「何事も臨機応変に、ですよ。基本的には、まとまって行動するとしても、必要があれば柔軟に対処すべきです。時には単独で偵察に出ることが、有効に働く場面もあるでしょう。そうした際、自由に動ける裁量が欲しいのです。その許可を、いただきたく」

現場の判断を重視したい、と願っているようでもある。だが、現場に出るのはモモンガも同じであり、彼の判断より己の判断が優れていると、言外に表現している風でもある。

そうであるなら、なるほど、僭越である。ウォン・ライはこれを聞き、割り込みたくなかったが、それより先にモモンガが言った。

「堅苦しい言い方はしないでいい」

「と、申しますと……」

「酒を自由に飲む権利が欲しい、ということだろう？　いちいち咎めるようなことじゃないさ、好きにすればいい」

こともなげに言う。あきれているのでも、怒っているのでもない。モモンガは、言い訳を盛るくらいなら正直に言いたいことを言え、と思いつながら答えた。

そういうことなんだろう？　と意味ありげな視線を向ける。それくらいなら、行動を縛ろうとは思わない。

「リジンカン。お前には、私のパートナーとして表に出る役を与えよう。おおよそは共に行動するが、自由な時間が欲しいなら、機を見て許可する」

「流石はモモンガ様。太っ腹ですな」

「ただし、飲み食いを許すのは、予算の範囲内で、だ。我々は、まだ外の貨幣を持っていないのだからな。私としても、金をどんぶりで勘定したくはない。これだけは、譲ってやれんぞ？」

モモンガが言うべきことは、それだけだった。これは束縛というより、生活の知恵とでも言うべきものである。小さくて細かいことにごだわる、とも言えようが、大枠で部下の自由を許そうというのだから、寛大というほかない。

「さて、話は以上かな。ならば、これで失礼させてもらおう」

放蕩息子に財布は任せない。たったそれだけのことだと、ギルドマスターは話をまとめた。

ウォン・ライは、思わずうなる。ここまで言われては、リジンカンは奮起して仕事に励むしかない。

自ら申し出て許可され、仕事を共にすると主君から直々に伝えられたのだ。これで期待に応えられなければ、自身の格を下げるだけだろう。

「充分以上の返答を頂きました。決して、期待は裏切りません。——最後に、一つだけ」

「何かな？」

「他に、女性を伴う予定はございませんか？　一人くらい、綺麗どころ

がいた方が、仕事はかどると思われませんが——」

「ナーベラルを予定している。不満はないだろう」

「それはもう。……あれだけの美女を伴うのなら、相応の仕事が出来なければ、不釣り合いというものでしょう。では、その時を心待ちにしております」

リジンカンは一礼して、去っていった。言いたいことを言い切ったような、そんな爽快感が顔に表れていた。

「アルベドに、片思いしてるんだっただな？　それで、よくもまあ、あんな軽口が叩けるものだよ。あきれを通り越して、感心してしまうじゃないか」

「……お恥ずかしい。恋には奥手で女好き、などという妙な性格付けをしてしまつて。もう少し、単純な表現にするべきだったか」

容姿を褒めたり、裸を見るくらいは平気ですが、実際に手を出すのはためらう、というタイプであった。付け加えるなら、本命の相手にはそれすら難しくなる。

ただのヘタレじゃないか、と当時はタブラやウルベルトに突っ込まれたが、否定しきれないウオン・ライであった。

「いやいや、ああいう男は嫌いじゃない。何というか、妙に愛嬌のある奴だと思う。雰囲気をやかにする役としても、連れ歩く価値はあるだろう」

「そうかね？　ただの不遜だけではないのか」

「他の……そうだな、例えば守護者たちと比べてみても、軽く付き合える感じがする。何というか、絶対的な忠誠を捧げられるような、重い感覚がまつたくない。接していて楽なんだ」

意外なことに、モモンガからは高評価だった。しかし、詳しく聞いてみれば、わからなくはない理由である。

リジンカンは、モモンガにあからさまな忠誠を見せない。言葉にも態度にも、重い期待を乗せてこないのだ。これを、彼は長所と見る。「話してみると、結構気持ちがいい。嘘も偽りもなく話す、何てのは当たり前だが——。踏み込んでも近づきすぎず、率直でも言い過ぎない。遠慮がないように見えて、気配りをしないわけでもない。——言

葉にするのは難しいが、やっぱり嫌いになれないな、ああいう男は」  
ウオン・ライとしては、そこまで複雑な性格にした覚えはないのだが、やはりそこは生きているからこそその、複雑さであろうか。

一旦、二人はそこで話は打ち切った。仕事の時間なのだから、雑談に時間を割くよりも、建設的なことをやるべきだった。

とりあえず、思いついたことは試すべきだな、とモモンガは思っていた。外の様子を確認するのは、自らの目で見ればかりではない。調子を確かめる意味合いでも、やって損はないことだろうと、彼は足取りを早める。

そして、モモンガはこの世の現実を知ることになり——結果として、それがこの世の歴史に刻む、最初の一步となったのである。

遠隔視の鏡をいじりまわしながら、モモンガは思索にふけっていた。

手をかざし、動かすことで、外の風景も変化していく。鏡の中に映ったそれは、ただの映像に過ぎない。リアルタイムで監視カメラを操作しているようなものだが、こちらはもう少し高性能である。

墳墓近くの草原を、空から俯瞰して見る。周囲をぐるりと回って、それから徐々に遠くへとスライドしていった。単調な作業だったが、鏡の使い具合を確かめるためにも、必要な仕事であった。

単調な作業は、考え事に向いている。モモンガは適当に外界をながめながら、思考を巡らせた。

——こうして一人になってみても、不安が全くわいてこない。むしろ、未知の出来事を楽しみに思えている。

周囲には誰もいない。メイドや守護者のみならず、ウオン・ライも今は席を外していた。モモンガ自身が、自分だけの時間を持ちたがった結果である。

一人きりになって、物思いに浸りたかったからだが、そう思えたのは、なぜなのか。自分のことながら、不思議だった。



己は、そこまでタフな人間ではなかったはずだ。肉体が変化したことで、精神まで変わってしまった、と見ることも出来よう。だが、それだけではないと、彼は自覚する。

——同じ境遇の仲間が、ここにいてくれるからだ。同じ経験を持って、同じ感情を共有した友人が、傍にいてくれたからだ。

モモンガは、決して自分を過大評価しない。彼が信頼する心の拠り所は、現実の自分の中にはないのだ。

ただ一つの拠り所、アインズ・ウール・ゴウン。今はナザリツクこそがそれだ、と言つてもいい。ここは己が誇るべき場所で、一番の思い出が詰まっている場所だ。そうした人生の一部だからこそ——最高の価値を示せる。ひいては、自分自身をも認めることができる。

——ログインしても、いるのは自分一人だけだと確認して、いつも悲しかった。悲しくてもやめられなくて、認めたくなくて、ずっとギルドを維持することばかり考えた。

一人になったのは、精神的な重圧から離れる、という意味合いもある。しかし、孤独になればなつたで、余計なことまで考えてしまうのは、どうしようもないことだった。

孤独を思い出せば、同時に浮かんでくるのは、かつての想い。処理していたはずの感情が、再び表に出てきてしまう。

——なくした面影ばかり追つて、苦しくなつたこともある。でも、皆との思い出に嘘はなかったと信じている。仲間との一体感、一緒にやってこれたという達成感。何より、楽しみを共にしたという幸福感。それを忘れて生きるなんてことは、俺には出来なかつたんだ。

くるくる、くるくると鏡の映像は回る。手の動きは単調すぎて、何が見たいのかわからない。ただ頭の中と同じように、風景は同じ場所を写し続けていた。

——駄目だな、俺は。すぐに頼りたくなる。もし、一人だったら、もっと気合を入れて、頑張れたんだろうか。

きつと、頑張りすぎて、気張りすぎて、何かが壊れたかもしれない。今の自分では、いられなかつたかもしれない。なら、これは祝福なのか。最後の一人だけ居残ってくれたことを、素直に己の人徳と言い

切ってよいのだろうか。

モモンガは、悩み続ける。己に問い続ける。不毛だとわかっているも、すぐに答えを出してしまえるような、軽い話ではないとわかっているから。

——弱気になるな。現実から目をそらすな。俺の命も、俺の名誉も、自分一人だけのものでは、もうないんだからな。

心しろ、と己に言い聞かせる。アインズ・ウール・ゴウンの看板は軽くない。それを背負って立つことは、昔は誇りだった。

今もそれは同じであるが、責任は格段に重くなつた。モモンガという皮をはげば、凡人の自分が残るだけ。そんな男でも、戦う意思だけはきちんと持っているのだと、常に自覚せねばならない。

頭の中を整理するように、ゆつくりとこれまでの出来事を追い、自身の立ち位置を確認する。自分一人の今だからこそ、やっておくべきことだった。

——俺はそんなに頭がいい方じゃないから、何度も自覚するくらいで、ちようどいいんだ。漠然と過ごしていたら、きつと背負つた重みを忘れてしまう。

手を回しながら、具合を見る。鏡の扱いは、だいたい把握した。思索に意識を集中しつつも、モモンガは冷静に仕事をこなしていた。微調整も、今となつては容易である。思い切つて、一気に視界を広げてみた。鏡が映す範囲に限界はあるが、ギリギリの線を見極めるつもりで行う。

「ん？ やけに明るいな。火がついている。……祭りか？」

声に出して、確認するように言った。返答してくれる者はいないので、空しく響いたが、気にせず思考をまとめる。

視界の端に、明るい点が点在していた。建物のようなものが、多数見受けられることから、集落か村か……そんなものだろう。

——俯瞰図を拡大して……。

詳しく知ろうと、間近で見ても——モモンガは正確に事態を把握した。

村人と思しき人々が、全身鎧の騎士どもに追い立てられ、殺戮され

ている。それを動揺することなく、彼は観察していた。

まずは両者の武装を確認し、その動きを見て取り、脅威かどうかを見定める。その上で、視覚から得られる情報を精査しようとした。

「あれ？　なんで……」

倫理観の欠如に気付いたのは、その時だった。モモンガは、自分の心に初めて疑いを抱いた。

「何も、感じない……？　いや、おかしいだろ。スプラッター映画なんて大嫌いだったし、現実で本物の殺人現場なんて見たら、気絶したつておかしくはないはずなんだ」

鏡で映しているため、テレビを見ているような感覚が、どこかにある。だが、それにしたところでこの気持ちの冷淡さはどうであろう。肉食動物と草食動物の食物連鎖、自然界の弱肉強食を目にしているような感覚だった。

同情も憐憫も、憤怒も焦燥も覚えない。自分からどうにかしよう、助けてやらなければ——といった義務感がわいてこないことを、モモンガは自覚した。

——俺は人間だ。人間のはずだ。……なのに、目の前に映る虐殺される人々に、共感できていない。同族という意識が、ない。何故だ？

しばし動揺し、正当化のための理由探しに、彼は時間を使わねばならなかった。頭を抱えて、鏡の前でうなり続ける。目に見える映像と、自身の倫理観について、とにかく考えようとした。

一定以上の動揺は、種族の特性によって抑えられたが、じくじくと感じる弱い違和感は、そのまま持続している。

すつきりしない感覚に気を取られて、いくら頭を使おうとしても、集中することは出来なかった。そのまま数分間、彼は無為に時間を費やす。

今、このとき。村人たちが蹂躪されているのだと、わかっているにも拘らず。

『ウォン・ライ。来てくれ、今すぐ。今すぐにだ、確かめたいことがある』

『了解した、すぐ行く』

モモンガは、仲間にすがった。他人の命を救うためでなく、己の人間性を確認するために。

——酒の味は、すぐにでも思い出せる。頭がおかしくなったわけではない、はずだ。

自分は先ほどまで、人間らしい感情を十分に堪能していたはずだ。オーバーロードであることと、鈴木悟であることは、矛盾せずに両立していたのだと、彼は思ったかった。

だから、ウォン・ライが駆けつけてきたとき、即座に自らの心情を吐露した。それは鏡の映像を確認させるより早く、相手に状況を把握させる程度の気遣いさえ、この時は忘れていた。

「ウォン・ライ、私はどうかしてしまったのか？ わからないんだ、教えてくれ」

口調こそ穏やかだったが、わずかに焦りが見えた。むずがゆい疑問の答えが知りたくて、たまらない。そうした様子を察したのか、ウォン・ライは少しだけ声を強めて言った。

「モモンガ殿、落ち着いてくれ。何があつた？」

「あ、ああ——そうだ。うん、これを見てくれ。どう思う？」

ウォン・ライに鏡の映像を見せる。虐殺はまだ続いていた。

人々の尊厳が犯されている現場である。女子供でさえ、暴力からは逃れられない。騎士らしき者どもは、暗い欲望を満たすように、悪意のままに無辜の民を食っていた。

「私は、何も感じないのだ。ひどく冷徹で、嫌悪感すら覚えない。私は、そんなに自分がおかしくなったように思えて、仕方がないんだ。ここに来るまでの自分なら、絶対に何かしらの感情を抱いたはずなのに」

剣で犯す。強者が弱者を思いのままに傷つける。

男が犯す。獣欲のままになぶり、責め、さいなむことを楽しんでいく。

それをウォン・ライは黙って見ていた。表情はそのまま、口は開かない。モモンガが不安に思っ、うながすように言う。

「何か言ってくれ。私は——」

「モモンガ殿」

機先を制するように、ウォン・ライが言った。だが、ようやく口を開けたかと思えば、こちらを向いて、じつとモモンガの顔を見つめるだけ。

彼は、いたたまれないような気持ちだった。どうしたのかと、改めて聞きたくなったが、ウォン・ライの発言を邪魔したくはない。その一心で、ただ待った。

「……失礼。何、大丈夫だ。モモンガ殿は、至って平常だと、私は思う」「そうか？　だが、こんな事態で平常なら、なおさら——」

「成長なされたのだよ、モモンガ殿。男子三日会わざれば括目して見よ、というだろう？　異常と言えば、これ以前から異常なのだ。骨の身を得たついでに、かつてとは違った見解を得たと思えばよい。ならば価値観が変わるのは、むしろ当然だ。そうではないかな？」

ウォン・ライは真面目に言っている。それが伝わってくるから、モモンガも反論はしなかった。論理はともかく、言われてみればそのよくな気もしてくるのだから、不思議なものだった。

「私の目から見て、モモンガ殿は以前と変わったようには見られない。自分の手に余りそうだと思ったら、ためらわずにメンバーに頼ることができている。不安になったら、隠さずに打ち明ける。昔と同じだ。——違うかね？」

モモンガは、ギルドマスターとしてはかなりフランクな方で、礼儀はわきまえつつも、割と率直な振る舞いをしていた。

自分で対処できることはするが、難しそうなら見栄を張らずにメンバーと共に行動する。偉ぶらずに丁寧な、メンバーとも対等に接した。その軸がぶれていない以上、モモンガはモモンガで、ありのままに存在するのだと、ウォン・ライは諭す。

「……そうかもしれない。でも、現実として、この光景を見て、何も思わないのは」

「ならば、なぜ私を呼んだ？　無視しても良かったのではないかな。本当に何も思わないなら、見なかったふりをして、忘れればいい。そうしたところで非難するものなど、いないのだから」

どうかかしたい。そうした思いが、心の奥にあったのだ。だから、仲間に頼ろうとしたのではないかと、ウォン・ライは言った。

そうして言葉にされると、確かに納得できそうだった。モモンガの不安は、完全に払拭されたわけではない。だが、この状況で悠長に自己分析に浸るのは、何かが違う。

モモンガは、悩まないことにした。彼が信じてくれた自分になるう、そう決断したのだ。

「……行こうか、悩む時間も惜しい」

「ああ、共に行こう。事後承諾になるが、アルベドに伝言メッセージで伝えておく。——ついてきてもらうのも手だが、どうだろうか？」

「来るな、と言えば後が怖いな。そうしよう」

ウォン・ライの申し出を受け入れる。アルベドは前衛として優秀だ。居てくれれば、打てる手は広がるだろう。

モモンガは、たち・みーのことを思い出していた。あの尊敬すべき先達は、何と言っていたか、それを思う。

「誰かが困っていたら、助けるのは当たり前……か」

「たち・みー殿は、良い人だった。立派なメンバーに見習って、今は行動しよう。——よろしいな？ モモンガ殿」

あの人の、この言葉がなかったなら、今のモモンガはない。

そして、現在。この言葉によつて救われるのは、自分たちだけではないのだと思えば、やはり尊敬の念は変わりなく、ここにあった。

「この世界での戦闘は、いずれ試さなくてはならない。これは、良い機会だったと思おう」

「理屈の上でも、合理的ということだ！ いや、モモンガ殿は人を動かす術を心得ておられる。これで、守護者の小言を聞き流すことが出来るぞうだ」

勝手に出ていったとなれば、アルベド辺りは、ひどく気を揉むことだろう。後から付いてきた時、苦言を聞かされると思うと、なにやら気が重くなる。

だがそれも、事情が事情であつたと。好機を逃す手はなかったのだといえ、名分は立つ。

何より、もう動くことは決めているのだ。彼女の思いがどうあれ、なし崩しに事態は動く。いや動かしてやる——と、彼は決意を固めていた。

「転移門<sup>ゲート</sup>を開く。ウォン・ライ」

「ああ、わかっている。私が前で、貴方が後衛。この身が減じるまで、貴方には手出しはさせんさ」

縁起でもないことを、とモモンガは思ったが、あえて口にはしなかった。

自分がしつかりしていればいいのだ、と思い直したからだ。自分が退けば、彼も退く。重視すべきは情報と、生存。決して敵に勝つことではないのだ、と思い直す。

——生き残らなければ、人助けも出来ない。瀕死の人間が、他人を救うことなどできはしない。

モモンガは、これからのことに全力を尽くすつもりだった。そのために必要なら、いくらでも知恵をひねるつもりで、緊張を維持したまま打って出た。

だから、であろうか。

傍の仲間の心情に気付けなかったのは、この緊迫した状況のなせる業であったのだと、後からならいくらでもいえる。

ウォン・ライの表情が、いつのまにか暗い怒りに染まっていたことに、気付けなかった。

その拳が硬く握りしめられ、わずかに震えていたのだと知るには、モモンガは若すぎた。未熟過ぎたのだというのは——酷であったろうか。

## 第八章 カルネ村

モモンガは、まず転移が阻害されなかったことに安堵して、次に騎士どもが撤退していないことに安堵した。彼の視界には、数人の騎士がいる。全体の数はもつと多いだろうが、とりあえず彼らを相手にしなくてはならない。

——連中が消えていないのなら、まだこの場には人々が生き残っている、ということだ。

モモンガは、暴力とは無縁の人生を送ってきた。初の実戦を前にして、気後れする可能性も考慮していたが、どうということもなく。

まるでここがユグドラシルであるかのように、気構えは自然にできていた。

——さて、戦闘開始だ。まずは一手。

突然現れた二人の異形種を前にして、騎士どもは剣を向ける。無理もない反応だと、モモンガは冷静に受け止めた。そうしたうえで、これからこいつらを殺すのだと、自らに言い聞かせる。

手を広げ、伸ばす。魔法の発動は、彼らが剣を振るうのより、はるかに速かった。

グラス・ハート  
「心臓掌握」

第九位階の魔法は、正しく効果を発揮する。一人の男が、心臓を握りつぶされて死んだ。

確かな感触をその手に感じながらも、モモンガは無感動のまま。

ただ、虫をこの手で潰したような、妙な嫌悪感だけを覚えていた。

「後は任せられよ、モモンガ殿」

この場にいたのは、彼だけではない。ウオン・ライは、ここからは己の仕事だとばかりに、他の騎士どもと相對する。

いきなり襲われ、死人が出たことで、動揺もあつたのだろう。だが即座に隊列を整えて、敵に對抗する意地を見せた。これでなかなか、士気が高い。この騎士どもは、正式な訓練を受けていると、彼は判断した。

だから、ウオン・ライは油断を捨てた。魔法には弱い様子だが、物



理はどうか。一足飛びで距離を詰め、全力で殴りつける。

「——む？」

ウオン・ライは困惑の声を出した。殴った後、追加でスキルを発動しようとしたのだが、不発に終わる。

肉片となつて碎けてしまつては、どんな追撃も意味を成すまい。そのあまりのもろさ、弱さに、彼もモモンガも拍子抜けしてしまつた。「参つたな、私程度の腕力で壊れてしまうとは。……お前たちが弱いのか、私たちが強いのか。もう少し、検討する必要があるそうだ」  
ウオン・ライは、騎士どもから見れば筋骨隆々とした大男であり、一撃でその身を屠るほどの力を持っている。

撤退も、やむなき判断であつたらう。彼らは皆、恐怖して逃亡しようとした。これは流石に、整然とはいかない。そうした一時の混乱を見逃すほど、モモンガは甘くなかつた。

「おい、女子供は追い回しても、同格以上の相手は駄目なのか。——それは、都合が良すぎだろ？」

最初から、一人たりとも逃がすつもりはなかつたのだ。

せつかくの機会である。外道をなす輩を討伐する、という名目がある以上、遠慮は不要であろう。

モモンガは、さらに敵を試すつもりで、第五位階の魔法を使用した。  
ドラゴン・ライトニング  
「龍 雷」

彼にとつては、かなり弱い魔法である。これでどの程度のダメージが入るか、観察したかつたのだが——。

これもやはり、騎士どもの命を一瞬で奪つてしまつた。こいつらは、装備に電撃耐性の一つもつけていないのか、とあきれてしまう。  
——生き残りはいない、か。この程度で判断するのは早いが、どうも自分たちは、この世界では強者なのかもしれない。

肉の焼けこげる匂いが辺りに充満したが、そんな中で冷静に考察ができているのだから、やはり自分は変わってしまったのだらうと、モモンガは思う。

溜息をついて、周りを見回す。生存者は、いながつた。

「モモンガ殿」

「……ああ、どうした」

「とりあえず一戦したが、彼らが特別弱い部隊であった、という可能性もある。油断せず行こう」

ウオン・ライの発言は、ごく当然のことだった。油断するつもりなど最初からないが、モモンガも気を引き締める。

「それは、もちろんだ。……わかつている」

「そうだな。モモンガ殿には、不要な言葉であった。許されよ」

ウオン・ライは注意を喚起したが、むしろモモンガは、彼の方に焦りに近いものを感じてしまった。実際、すぐに背を向けて探索に乗り出している。

モモンガは何かそれについていくのだが、急いで歩を進める彼の姿に、鬼気迫るものを感じた。助けたい気持ちだが、よほど強いのだろう。

「人々の悲鳴が聞こえる。こちらだ」

モモンガには聞き取れなかったが、まだどこかで殺戮の続いているのだろう。そう思えば、余裕のない振る舞いも当然か。

——結局、全員死にました、では格好がつかないからな。

誰かを助ける。そのために出てきたのだと、改めて肝に銘じた。それでも撤退の手順だけは、頭の中に焼き付けておく。

まだ、何が出てくるかわからない。奇襲だけは受けられないようにと、モモンガは気を張っていた。

ただ、自分が誰と一緒にいるかを考えて、無用の心配かと思いつく。

「周囲はどうだ？ 閻魔王ヤムラージには、索敵用のスキルがあつたはずだが」

「使っている。閻魔王ヤムラージの前には、どのような隠ぺい手段も無効化される。見逃すことはない。……よし」

ウオン・ライは駆けだした。何かを見つけたのか。あるいはきつかけをつかんだのか。

モモンガも追いかけてしようとしたが、無用であつた。彼の大きな体が、死角を作っていただけだと、すぐに気づく。

さほど離れていないところに、少女が二人。そして彼女らを害そうと、今まさに騎士どもが、剣を振り下ろそうとする。

「間に合ったか」

そして彼が呪縛弾を放ち、効果を発動させる気配を感じた。何をどうしたのかは、すぐにわかった。

「……え？」

「——あ」

ウォン・ライのすぐ傍には、二人の怯える少女がいた。正確には、すぐ傍まで引き寄せられた、と言うべきだが、当の本人たちには何が何やら、であろう。

そして状況がつかめなかったのは、騎士どもも同様だった。困惑し、警戒する様子が見て取れる。容易に撤退しようとしなのは、こちらをあなどっているせいか。

——しかし、即座に斬りかからないあたり、あちらにも不安があるのか。ある意味当然だが、弱気にも見える。これはひよつとすると……？

もし先ほどの戦闘を知っていたら、こんな悠長な態度にはなるまい。そして、こちらの情報を把握していないのなら、相手もその程度の手合いだということ。

そう思えば、いくらかの余裕も保てるとモモンガは思う。

「大丈夫か？ けがは、ないだろうか」

ウォン・ライは、他の何者も目に入らぬ様子で、助けた二人の少女に声をかけた。

穏やかで、落ち着いていた口調である。騎士どもに背を向けてまで、彼女たちと向かい合っていた。脅威と感ずる相手ではないと、彼も理解しているのだ。

「あ……はい。けがは、ない、です」

「それは良かった」

年長の方の少女が、答える。恐怖が完全に去ったわけではあるまいが、この場で理性的な対応をしてくれる相手にすがりたいのだろう。それでも、目の前にいるのは、明らかに異形の鬼。何が起こって、どうなったのか。理解したところで、受け入れるのは難しい。

だが、彼女は一人ではない。幼い方の少女は、まだ震えていた。そ

れを抱えながら、彼女は自らを奮い立たせ、赤い鬼に話しかける。

「あなたが……助けて、くれたんですか？」

「まだ、これからだ。あの連中を始末せぬことには、助けたとは大声で言えないだろう」

騎士どもは動かない。その場の隊長らしき者に、部下らしき男たちが目配せするが、判断がつかないらしい。

退くべきか、斬りかかるべきか。……悩むくらいならば、逃げてから考えればいいものを——と、モモンガなどは思うのだが、余計なおせっかいであろう。

どうせ、こいつらは皆死ぬ。なら、過程が多少違うだけで、彼らの行動などさして問題ではないのだと、モモンガは見切っていた。

「……どうか、助けてください」

少女は、そういった。頭を下げて、悲痛な声で、懇願するように。……お父さん、お母さんも。村の皆を、助けて……ッ」

モモンガは、少し離れたところから見ていた。今は空気を読むべきかと、割り込むことも避けた。

こうして見ると、やはり映画の台詞のように聞こえてしまう。端的に言って共感しづらく、相手の想いは理解できても心が揺れない。

冷静でいられるのはありがたいが、あまりにも感情が欠落してはいないかと、逆に自分を心配したくなる。

——かわいそうだな、とは思える。力になってやろうという気持ちに、変わりないんだが。

先ほど心臓を潰した時もそうだった。モモンガの精神は、一切動くことはなく、だからこそ己の変質を嫌でも自覚せねばならなかった。

しかし、ウォン・ライはどうであろう。生身の体は、そこまで大きな差をつけてしまうものか。まったく以前と変わりないように見えた。

安心させるように、彼は穏やかに微笑む。偽りではない、本当に生きている感情を見せ、赤鬼は少女の願いを真摯に受け止める。

「わかった。……死んでいなければ、助けよう。それでいいか？」

「はい。……はい、お願い、します……ッ」

少女にとって、ウオン・ライがどのような存在であるか、明確には理解できないはずだ。ただ、この場で助けてくれたという事実を以て、救いを求める。

とても人間とは思えない赤い肌に、大きな体。それだけでも、通常ならば忌避の対象であるはずなのに。

「安心するといい。君たちは、必ず守る。それだけは、確かに果たす。——信じてくれるな？」

鬼の言葉は、どこまでも優しくかった。だから少女は、うなずいて託した。己と、抱きしめている幼い命、そのすべてを。

ウオン・ライには、それで充分だった。ただ、その場で目を閉じて伏せているようにと、言い聞かせる。

「さて、待たせたな。斬りかからず、さりとして逃げもせず。何を考えているのか、聞いてもいいかね。できれば、手短に済ませたいのだが……？」

ウオン・ライは、ようやく騎士どもと向かい合った。そして彼らは、これまで迷い続けていた代償を支払わねばならない。

隊長らしき人物が、前に出て、口を開こうとした。問われたから、交渉の余地があると思われたのだろう。

「我々は——」  
彼がこの世に言い残したことは、何であったのか。結局、誰も知ることはなかった。

口を開いたまま、その男の頭が弾けて散って、脳漿が周囲にぶちまかれた。何が起こったのか、モモンガにはわかっていた。

ウオン・ライの手には、石が握られていたのだ。それを指弾として飛ばし、男に直撃させた。結果、頭を吹き飛ばしたという、それだけの話だった。

投擲系のスキルは地味だが、ちよつとした事の役に立つ。『指弾』は威力は低いが、得物を選ばず、暗器として優秀なことから、前衛職ならば習得する価値があるものだ。

「……ああ、すまない。勘違いをさせたな」

ウオン・ライの声は、どこか冷たい感情がこもっていた。あまりに

低く響いたから、独り言のようにさえ聞こえる。

ナザリックの赤鬼。その名は、『鬼のような苛烈さ』からも来ている。殺すべき敵に対して、彼は容赦なく、どこまでも冷徹になれた。「答えを聞きたいわけではなくてね。一呼吸、置きたかったただけだ。」

——さて、これで詰みか」

残った連中は当たり前のように逃げ出そうとしたが、その周囲を囲むものに気付く。

ウォン・ライが仕込んだ、呪縛弾の群れである。一度当てれば、引き寄せることができる。

そして引き寄せの距離は、最低保証を除けば、相手との魔力の差によつてのびていく。100レベルでも鬼種の魔法攻撃力はお粗末なものだが、それ以上に騎士どもの魔法防御力は貧弱であった。

悲痛な顔を見せながら、ずるずると閻魔王ヤムラージの前に引きずられる罪人たちが。その運命はと言えば、一つしかありえなかった。

「眠れ。地獄はその先だ」

ウォン・ライは、殴りつけて彼らを全員昏倒させた。『手加減』のスキルを用いて、ぎりぎりの瀕死状態で気絶させたのである。そして念入りに呪縛弾を重ね掛けして、幾重にも縛りを追加する。この魔法はひどく燃費が良いので、いくら使ってもMPの枯渇を気にすることはない。

死、という慈悲を与えなかったのは、彼なりに思うところがあったのだろう。モモンガとしても、情報収集の素材が手に入ったことを思えば、異論はない。

「さて、後はアルベドが追いつき次第、ナザリックに送るとしよう。——モモンガ殿」

「ああ、一人潰れてしまったが、気にしなくていい。どうせ、まだ他にもいるだろうしな」

小隊未満の集団一つで、この惨状を作り出したとは思えぬ。だから、モモンガも取りこぼしを責めはしなかった。

少女二人はまだ伏せていた。モモンガが近づいたことにも気づいてはいないが、骸骨顔を見せて驚かせるのも気が引けた。

とつさに適当な頭装備を取り出して、かぶる。デザインがいまいちなマスクであったが、怖がられるよりましだろう。

「……さあ、二人とも、終わったぞ。顔を上げなさい」

ウオン・ライが、少女たちに声をかける。恐る恐ると目をあけて、周囲に目をやると、騎士どもが倒れている。助かったのだと、ようやく安堵した。恐怖を吐き出すように、深く息をする。

「——終わった、んですね」

「ああ、当面の安全は確保した。連中はよく眠っているから、安心するといい。……その子は、妹かね？」

「……はい。ネム、と言います。私は、エンリ・エモットと申します。……貴方のことは、何と呼べばいいでしょうか？」

「私は、ウオン・ライ。こちらの——魔法使いは、モモンガという。気を楽にしてくれ。私たちは、君らを助けに来たのだ」

二人の少女と、モモンガは顔を合わせた。エンリと名乗った少女は、怪しむ様子も見せず、ただ誠実に、礼をもって応えた。

「ありがとうございます、ウオン・ライ様。……そちらの貴方は、モモンガ様とおっしゃるのですね？ 改めて、お礼を言います。本当に、ありがとうございます」

頭を下げて、謝意を示す。単純だが、それだけに純粹な好意の形であった。

これだけでも、二人にとって好感の持てる相手である。異形、人間の別なく、他者に対する気遣いが出来ているのだ。なら、救済の対象として申し分ない。

「魔法使いのモモンガだ。我々は他の村人を助けに行くが、君たちはここで待っていてくれ。心配はいらない。守りを残していく」

そうして、魔法を唱える。敵は物理攻撃しか手段を持たないようだったから、その系統の守護で済むだろう。

少なくとも、それなり以上のレベルがなければ、攻撃が通らない壁を周囲に張った。これでよほどの強敵にでも襲われない限り、二人は安全だろう。

「生物を通さない守りと、射撃を阻む魔法をかけた。しばらくは、安全

でいられる。念のためにこれも渡しておこう」

モモンガは角笛を二つ取り出すと、彼女らに渡した。アイテムの説明をして、危ないと思ったら迷わず使うように、と言いつける。これで最低限の仕事はこなせたと、彼の方も安堵した。

「さて、これからどうしたものか。案はあるか？」

「モモンガ殿。約束した手前、見栄を張らせてほしい。……については、一つ協力してほしいのだが、良いかな？」

「もちろんだ。何でも言ってくれ」

「——では、死体が一つ、あるだろう。アンデッド作成を試して、どう仕上がるか見てみたい。実験と戦力の確保、同時に試みるのが手だと思うが、いかがか？」

お安い御用だと、モモンガは答えた。これは人間の死体だというのに、もはやただの素材にしか見えぬ。ウォン・ライにとっては、どうか。もう少し、複雑な感情を抱いているのだろうか、思わぬでもない。

——後で聞いてみようか。自分が変化したように、彼も変化していると思うべきだし、どの程度違和感を覚えているか、確かめておきたいな。

ともあれ、実験である。アンデッド作成のスキルを発動し、死デスナイトの騎士を生み出した。……その過程において、使われた遺骸は見る影もなく変貌し、人にとって恐るべき異形と化する。

傍にいた二人の少女が、息をのむ。恐れを感じるのは、人間としてごく当たり前の反応であろうから、とがめたりはしない。モモンガも、それを受け入れるくらいには、己の異質さを自覚していた。

「この村を襲っている騎士——そうだな、あれらと同じ格好をしている者たちを、殺せ。他の者には、手を出さぬよう」

死デスナイトの騎士は、地の底から響くような、おぞましい咆哮をあげ、飛び出していった。

自律して索敵し、標的に仕掛ける。その程度の知能は、おそらくあるのだろう。命令したのは、いわばノリのようなもので、その通りに動けるかどうかは確認がなかったのだが。

——現実がクソゲーとはよく聞かすが、さて、この世界はどうか。



本来、死デスの騎士は護衛用のユニットであり、柔軟な指示など聞き入れる余地はなく、運用の手段は限られていた。

精神的なつながりは、何となく感じる。もしや、と思いはしたが、本当にこの現実の自由度が高い。

融通が利く、ということとは、良いことか悪いことか。凝り性のモモンガとしては、やりがいがある、と思うべきところだろうと、前向きにとらえることにした。

「命令を聞いて、行動する。やはり、こちらとあちらでは、仕様が変わっているようだ。また、色々と試したいことができたな」

「閻魔王ヤムラージには、あの手の作成スキルはない。助かるよ、モモンガ殿」  
「お互い様だ。今更、細かいことは言いつこなし、だろ？」

あまり、悠長に話し合っている暇もない。まだまだ村から脅威は去っていないのだ。二人は索敵を再開する。

「では、私たちは行く。終わったら、ここに戻ってこよう」

「それまで、良い子にしていってくれ。——助けられる命は、必ず助ける。約束は守るのが、私の信条だ」

モモンガとウォン・ライは、少女たちに一声かけた。そして彼女たちは、彼らを畏怖しながらも、感謝の気持ちを忘れなかった。

「ありがとうございます！」

「助けてくれて、ありがとうございます！ 本当に、ありがとうございます！ ……凶々しいとは思いますが。でも、他に頼れる人がいないんです。どうか——」

少女の信頼を裏切るような男は、この場にはいない。モモンガはその意を充分に示した。ウォン・ライも、笑って応える。最大限、期待には応えると。

「この赤鬼が請け負う。——民を慈しむのが、君子というものだ」

二人は、この世界における最初の戦闘を終えて、殺戮の余韻さえ残さぬまま、仕事にかかった。戦うべき理由、人を助ける名分のある戦いは、ひどく甘美であった。

特にウォン・ライにとっては、そうだった。彼は餓えていたから。人の持つ美しい感情。言葉に表すならば聖、仁、あるいは義。それ

を探し求め、追求しながら、体現することはおろか、徹底することさえ出来なかつた。

えせ君子と言うなら言え、夢が続いているなら、夢を叶えて何が悪い。そう自嘲しながら、ウオン・ライは駆けた。今生では取りこぼすまいと、強い決意を抱きながら。

少し離れた位置から、死デスナイトの騎士の雄叫びが聞こえてきた。あちらは任せてよいと判断しながら、ウオン・ライは自分の役割を完全に果たしていた。

騎士と思しき連中を、見つけ次第なぎ倒す。一人でも多くの村人を助けるなら、時間は敵である。速やかに村全体を掌握する必要がある。たので、モモンガも個人的な実験は自重した。友の想いを汲んだ結果である。

——モモンガ殿には、割を食わせてしまったな。

後で何かしらの埋め合わせをしなくては、とウオン・ライは思う。これは自分のエゴであり、たっち・みーの言葉に影響を受けたわけではない。彼ほど清廉でもなければ、高潔でもない、彼は自身の性分をわきまえていた。

敵対する騎士どもも、出来る限りは生かしている。死んでいないというだけで、ナザリックに送られれば、生き地獄に近い処置が待っているだろう。そうとわかっていても、彼は殺害することを好まなかつた。

ただ殺すだけでは足りぬ。良民の平穏を乱した、という一点だけでも、ウオン・ライの精神的トラウマ外傷を刺激するのだ。いかなる手段で処分するのであれ、自ら手を下さねば、気が済まなかつた。

敵を索敵し、縛り付ける過程で、発見した村人は全て助けている。エンリとネムの姉妹と同じ場所へ誘導したから、よほどのことがなければ大丈夫だろう。

「ずいぶんと確保したものだ。これは、ナザリックに運ぶだけでも結構な手間になるな」

「——いや、すまん。存外に連中が弱すぎるので、欲をかいてしまった。呪縛は半日くらいは持つし、情報収集のサンプルは多いに越したことはないと思うのだが、過ぎるか」

「悪いことではないとも。どうしても無理なら、それから処分しても間に合うだろう」

二人があれこれと話しているところで、アルベドが転移門を介して現れた。全身鎧の完全武装で、全力戦闘を想定しているのだろう。無理もないことだが、この場では過剰戦力ともいえる。

「準備が時間がかかりまして、申し訳ございません」

「いや、気にはしていないさ。むしろいいタイミングだ。そうだろう？ ウオン・ライ」

「もちろんだ。そこらに転がっている騎士どもの処置に、困っていたところだ。事が収まり次第、手伝ってもらおうとしよう」

アルベドは油断なく、戦闘態勢を崩さなかった。

そうして、不満の意を押し殺している。ウオン・ライは、彼女が纏っている空気から、何かしら不穏なものを感じていた。

戦闘を期待していたのに、雑用を言いつけられたことによる、不満だろうか。害になるものではないと思いい、あえて指摘はしなかったが。

「索敵は終了した。近辺にいる騎士どもは、全て撃退したようだ」

「ふむ、ならば死の騎士デスナイトにも命じておこう。今、息をしている連中は、生かす価値がある。利用方法は、それこそいくらでもあるだろうしな」

モモンガが思念を飛ばし、受諾させる。これで死の騎士デスナイトも大人しくなるだろう。

村を救えたと確信できたなら、今度はその実感が欲しくなる。あの姉妹の下に、村人たちは固まっているはずだ。会っていくらか話をするのでもいいだろう。

アルベドを含めた三人は、そうして村人と接触し、対話を試みる。まず声をかけたのは、モモンガだった。

「ここにいる皆に伝えたい。この村は、危機を脱した。脅威となる悪

党どもは、全て排除した。どうか、安心してほしい」

ウオン・ライとアルベドは、傍に控えている。こうした場面では、まずモモンガを立てる。この認識だけは、確実に共通している二人であった。

「ありがとうございます。村長として、お礼を申し上げたい。モモンガ様、ウオン・ライ様、ネムとエンリがお世話になったことも含めて、感謝いたします」

村長を名乗ったのは、初老の男だった。いや、もしかしたら、もう少しは若いのもかもしれない。年齢は、おそらく五十には達していないであろう。

日に焼けた肌と、がっしりした体格は、まだまだ現役の雰囲気がある。ただ、気苦労を感じさせる面構えが、思ったより老けた印象を与えてしまうのだろう。

ともかく、村人の中では頭一つ抜けている容貌だった。村長というのも、納得である。

礼を言われたところで、モモンガはウオン・ライと目を合わせた。『ところで、これからどうしたものだろうか。個人的には、適当に切り上げて、さっさと捕虜から情報を得たいんだが』

『モモンガ殿は、後ろでどっしりと構えてくれればいい。村人との話し合いは、私が主導しよう。大きな決断が必要そうなら、話を振るということで、よろしいかな?』

『ああ、頼む』

村長の男は、彼らの内心を推し量ることも出来ず、通り一遍の世辞を述べ続けていた。

ウオン・ライは早速、話を進めるために口を開く。

「感謝の気持ちは、よくわかった。村長、詳しく話し合いたいが、ここで立ち話というのも不都合だろう」

「これは、気が利きませんで。——ああ、申し訳ないのですが、貴方様のぐい立派なお体を収めるには、我が家はみすばらしく……」

「問題ない。ごく普通の、人間の体になれば良いだけのことだ」

ウオン・ライは、己に人化の術を施した。そうして人間の身になる

ところを見て、村人たちはどよめいたが、多少驚いたくらいで収まった。

皆を助ける過程において、二人の異常性はすでに知れ渡っている。特に魔法の技術に関して、彼らは暗い。

わけがわからないが、こういうこともあるのだろう。結果として、村人たちの間では、それくらいの認識になった。

「もしかして、それがリアルでの姿なのか？」

「ああ、モモンガ殿に見せるのは初めてだったか。……ずいぶんと若返っているが、そうだな。その認識で、間違っではない」

ウォン・ライは、人間にしては長身、という程度の体格になっていた。

容姿から推し量るに、年齢もおおよそ四十代後半くらいの、壮年の男に見える。若くはないが、老いたと表現するよりは、成熟しきったという言葉が似合う頃合いで、ちょうど働き盛りの年代である。

髪に白髪がちらほら見えるが、顔の発色は良く、肌の艶もあり、シワは浅い。老いや劣化の印象はなく、年を重ねてなお、みなぎる様な精気の強さを感じさせた。それは威厳の表れのようにも見え、どこか高貴な雰囲気さえ感じられた。

顔立ちは整っているが、美男と評するのは、ためらわれる。そんな華美な言葉は相応しくない風格があり、どんな激務にも耐えられそうな頑丈な体つきは、頼もしささえ覚える。

やや細身だが、大柄な体格だ。服装は一転して、中華の伝統衣装である長袍チャンパオへと変化し、この国のものと比べて、あきらかに異質に見える。

しかし、その異質さを受け入れさせる力が、ウォン・ライにはあった。何より、彼に似合っている。単純なことだが、それが何より重要であった。

「いや、立派な男ぶりです。どこの御大尽かと思いました」

「村長、褒めてくれるのは嬉しいが、そろそろ話す場所を変えよう。おそろく、長い話になるぞ」

間違いない、この場の主導権を握っているのは、彼である。村長の

言葉を制するように、一言入れる。

重ねた経験の深さが、厳格な雰囲気を出していた。近寄りがない、と言うのが正直な感想であろうか。村長も、緊張の度合いが増したようで、口調が硬くなる。

「——は、はい。では、こちらに」

そうして、アルベドを含めた三人は村長宅へとやってきた。謙遜する程度には、さびれた家屋である。

それでも、村をまとめる者の家として、相応しいくらいの広さはあった。家具は粗末であったが、この場合は窮屈な思いをせずに済むだけ、充分であろうとウォン・ライは思う。

「貧しい村なので、たいした御持て成しはできませんが」

「いや、充分だ。これでも子供の頃は貧乏をしていたのでね。あれこれと求めたりはせんよ。——持て成そうという想いだけで、私は御馳走でも食べたような気持ちになれる」

ウォン・ライは、硬い表情をゆるめて穏やかに笑い、そう言った。そのままと厳しそうに見えた顔が、笑みを浮かべたとたんに、明るい印象になる。表情の変化で雰囲気が変わる人は多いが、彼はそれが顕著に表れる人物といってよい。

近寄りがたい、と思われたのも、こうなってしまうえば一目で見方も変わる。村長は、緊張を解いたように一言述べて見せた。

「そうなのですか。貴方のような方でも、貧乏を経験された。貴族は貴族として、変わらないものだと思っていました」

身なりの良さから、貴族ではないかと思われたのであろう。体さばきや、一つ一つのしぐさからも、育ちの良さがにじみ出ている。

これを評価しての世辞であろうが、ウォン・ライはそれを否定するように言う。

「いや、地主とか、貴族の出身ではないんだ。——私は、没落した官吏の一族の生まれだね。祖父はそれなりに有能な役人だったが、父は厳格で潔癖すぎて、失脚してしまった。……私が物心ついたころには、すでに職を失った後だったよ。貧乏との付き合いは、それから長く続いたものだ」

落ち着いた語り口は、心地よい声と共に耳に入り、すつと頭に染みわたる。微笑みをたたえたままの表情からも、知らず知らずのうちに目が離せなくなっていく。

理屈では説明できない、見る者を引き付ける輝きがあった。苦笑一つとつてみても、ひどく魅力的に思えるのは、どうしたことか。

『そういうえば、そんな個人的なことは初めて聞いたな。話していいのか？ 結構デリケートな問題だと思うんだが』

あまりにさらりと言うから反応が遅れたが、モモンガは思わず伝言で彼に話しかけた。人間の身になったせいかな、心理的な距離が縮まったようで、気兼ねなく問う。

『なに、必要なことだ。辺境の民衆というものは、とにかく都会の貴族というものを忌避する。——誰がお上でも俺たちの知ったことか、とばかりにな。で、普通なら聞き流すところだが、あくまで自分は村人たちと同じようなルーツを持つのだ——と主張しておけば、わずかでも共感を見せてくれるものだよ』

モモンガも場に流されていたが、面と向かっていた村長も、空気の変化をごく自然に受け入れてしまっていた。

ころころと印象が変わるのに、むしろ前向きな感情を相手に感じさせる。これもまた、ウオン・ライという人物の不思議さであろう。

「貧乏暮らしが長かったから、こうした武骨な手作りの雰囲気は、私には馴染み深いものだ。……貴族的なものとは、結局ずっと縁がなかったものでね。あまり高級な物に囲まれると、むしろ落ち着かなくなる」

彼とモモンガが座った椅子は、少しでも動くときと軋んで音が鳴った。おそらく手作りのもので、家具の職人などはいないのだろう。きつと、そこに力を注ぐだけの余裕がないのだと、推察できる。

アルベドは、傍で立ったまま控えていた。あくまでも、従者として振る舞うつもりなのだろう。すすめられても、無言で断った。兜も外さず、素顔をさらすことを拒んでいるようでもある。

彼女にとつて、人間の価値は低い。ウオン・ライが会話を主導しているうちは、自発的な行動はするまい。

「そうなのですか。……いやはや、意外ではありませんが、なるほど。同じ平民同士であれば、気後れせずに付き合えそうで、なによりです」  
「この家の主は貴方だ。気を楽に、思ったことを言ってくれていい。……貴族的な腹の探り合いなど、我らには無縁のものだ。そうだろう？」

「——はは、気を楽に、ですか。言われてみれば、そうですね。今更思い悩むなど、余計なことでした」

彼らを通されたのは、貧相なつくりの部屋だったが、ウオン・ライが席に着いて話し出すと、ふんわりと柔らかい空気が作り出されたように、部屋の印象そのものが変わったように見える。

会話もその空気に触れて、だんだんと和やかになっていく。村長の顔にも、笑みが表れるようになった。

「ところで、御三方の御関係など、聞いてもよろしいでしょうか。お仲間であることは、よくわかるのですが……」

「ああ、そうだな。まず、こちらのモモンガ殿。彼がパーティのリーダーだ。私は彼の友人で、行動を共にする仲だ。たまには、こうして交渉を任されることもある。……隣の女性はアルベドという。私と彼にとっては、友人の娘と言っている。特別な相手だから、よく覚えていてくれ」

「——はい。いや、余計な詮索でありましたか。なににせよ、皆さま方が恩人であることに変わりはありません。どうぞ、遠慮なくおくつろぎください」

そして二言、三言と、少し言葉を交わしただけなのに、気安く話しかけられる雰囲気を出した。作為的にやったのか、素のまま無意識に行ったのか、それを見極めるのは至難である。

村長も、何かしら感じ取ったに違いない。それが良い方向に作用したのだろう。すっかり緊張が解けて、気持ちも軽くなったように見える。

「これ以上なく、くつろいでいるさ。だから、安心して話を続けよう。

——私はモモンガ殿から、今回の件について、委託されている。そして私も、なるべく穏やかに話を進めたいと思うのだ」



ウォン・ライの言葉は、どこまでも優しく響いた。多くは語らずとも、落ち着いた声と口調から、気遣いの色を見せる。厳しさと穏やかさは、両立しうるのだと、彼と接していると強く思うところだ。

だからこそ、というわけでもあるまいが——村長は大きく息を吐くと、決意を固めたように、話を切り出した。

「助けてくれたこと、感謝いたします。本当に、ありがとうございます。——何度言っても言い尽くせぬほどの恩義を、我々は受けました。この気持ちをどう表せばよいのか、私にはわかりません」

ウォン・ライは、少しだけ目を細めた。モモンガはそれを見て、何かしらの合図だろうかと思ったが、あえて反応はしなかった。

彼の目は、村長に向いていた。観察している様子が見て取れたので、今割り込むのは悪いだろうと気づかった結果である。

「……言葉で示し、態度で示した。これ以上のものを期待しては、こちらの方が申し訳ないというものだ」

「何と言いますか、お恥ずかしい限りです。もう少し、豊かな土地であれば違うのですが、このカルネ村は富となり得るものが少ないのです。——お許しください」

報酬の話だったのか、とモモンガはようやく気付いた。自分なら、もっと率直に話を切り出しただろう。

しかし、こうなると得たものは、捕虜の騎士どもだけ。なるべくなら、こちらの貨幣も手に入れたいと彼の方は思っているのだが、ウォン・ライの考えはわからない。

「……そう固くなりなされるな。私は、ないものをくれと言いたいわけではない。気持ちを受け取った、と言っただろう?」

「しかし、それではあまりにも——その」

あなた方が報われない、とでも続けようとしたのだろうか。だが結果的に、村長は最後まで言葉を続けられなかった。

細めた目が、温和に和らいで、村長へと向けられた。ウォン・ライは、彼を制するように言う。

「気が済まないというなら、そちらの感覚で、感謝の気持ちを形にしてくればよい。私たちは、拒まずに受け取ろう。貸し借りは、それで

清算したということにしよう。いかがかな？ モモンガ殿」

いきなり決断を迫られたモモンガは、反射的にうなずいた。付け加えるように、一言申す。

「そ、そうだな。金額にして、いくらぐらいが相場だろうか？」

「申し訳ありません。街の方には、大きな依頼を出したことはありませんので、こうした事態の相場などは何とも。……村の財産を整理すれば、おそらく、銅貨三千枚くらいにはなるでしょうが」

銅貨三千枚が、どの程度の財産であるか、判断は難しい。

モモンガは、ウォン・ライに視線を向けた。彼が誘導した展開なのだから、話を収めるのも彼の責任であると、言外に示す。

「それが村長の、村の総意として、これが妥当だと思ふのなら、それで充分と言っておきましょう」

ウォン・ライの答えは、これだった。不満など欠片も感じさせず、微笑んで言う。

その態度に何を見たのだろう。村長はさらに頭を下げて、わびた。「まさか、そんな！ この程度の金銭で足りると思うほど、傲慢ではありません。差し上げられるもので済むのなら、私もこうも心苦しく思ったりはしません」

己を恥じるように、村長は言った。悔いる様子に嘘はないと、モモンガは見る。

ウォン・ライはそれを確認するように、一呼吸おいてから答えた。「我々の働きに見合うだけの、見返りを用意できない。それを、貴方は心苦しう思っておられる。そういうことで、よろしいか」

「……はい。物資などを含めても、お渡しできる財産は、多くないので。村は、多くの働き手を失いました。備蓄は絶対必要なのです。……言い訳になりますが、そういう意味でも、多くの報酬を用意することは、とても——」

村長が言い淀んでいる間に、手元に白湯が運ばれてきた。こんなものでも、辺境の村では馳走になる。

手間をかけたのは、村長の妻だった。その気持ちを思えば、口をつけるのが礼儀だろう。ウォン・ライは当然のように飲み干した。器を

口に持っていく動作さえ、優雅に見えるのだから、たいしたものだった。

モモンガの方は、マスクを取るわけにもいかず、やんわりと断る。

「この辺りは、餓えることが多いのか？」

「食うに困る、ということとは、時折あります。ですが、餓死するということは、まれです」

「まれ、か。餓死者も、出る時は出る、ということか」

村長は、否定しなかった。ウオン・ライは、はた目にもわかるほどに、苦悩する様を見せた。

顔を渋く曇らせ、頭を押さえていた。口元は固く結ばれ、真剣に憂いていることが、態度だけでわかる。それがあまりにも痛々しくて、見ている方が気遣いたくなるほどだった。

「助けた相手を困窮させては、本末転倒だ。こちらとしても善意から助けたのだから、報酬も是非に、というわけではない。三千枚の銅貨も、辞退した方が良さそうだな」

「まさか、そのような！」

「いや！——よくよく考えれば、報酬を求めるのも筋違いだ。我々は依頼されて来たのではない。善意を押し売りしておきながら、助けてやったから金をよこせ、では無法者同然だ」

話の風向きが変わってきたな、とモモンガは感ずるが、やはり沈黙を守る。

村の惨状を見つけたのはモモンガで、助ける意思を見せたのも彼だ。なら、いかなる結果であれ、受け入れるのが上司のあるべき姿だと思う。

「この村には、以後の苦難を乗り越えるためにも物資が必要だろう。これを横から奪うのでは、あの騎士どもとどう違う？」

「違います！ あなた方は、助けてくださった。それを卑下なさつてはいけません！」

「……ありがとう。その言葉は、嬉しく思う。だが、まかり間違つて餓死者など出しては、悔やみきれん。私にも、餓えた経験はあるのだ」  
ウオン・ライの表情は、深く憂慮するように、曇ったままだった。

さつきまで微笑んでいた顔が、苦悩に満ちる様は、ひどく鮮やかで。モモンガでさえ、見ていて辛くなる。

彼も思わず本気で心配しそうになった。が、それも次の言葉で、すぐに消えた。

「お互いに、落としどころを見つけたい。報酬は必須でない可我々を見るが、村長は受け取ってもらわねばメンツが立たぬという。なら、こういうことでどうか？」

考え事をするように、あごに手を当てながら、ウォン・ライは提案した。

「見ての通り、我々は異国の出身でね。この地方には来たばかりで、情報が少ない。常識知らずで、この国の情勢などにも暗く、色々と不都合がありそうなんだ。……だから、あなた達から、情報をもらいたい。その教えを乞うという事で、今回の件は収めてくれまいか」

ウォン・ライの目が、鋭く輝いたように、モモンガには思えた。初めからこの結論に持っていくつもりだったのだと、ここで理解する。

「……わかりました。村として、協力は惜しみません。私たちにわかることなら、どんな情報でも話しましょう。とても、この程度で恩を返せたとは、思えません——」

ナザリツクにとつて、貨幣以上の価値を持つのが情報だ。ここで大きく補強できるのなら、そちらの方が良い展開である。

この話の運び方、明らかにウォン・ライが誘導している。モモンガは、裏で確認を取るように、彼に語り掛けた。

『もしかして、計算ずくで誘導したのか？』

『もしかしなくとも、そのつもりで話していたよ。ま、この結論は話の途中で考えたものだがね。そう悪くない結果だと思うが、どうかな？』

『……情報を得られるのは、そうだな。良い話だ。よくやってくれたと思う』

『何、結果だけなら、さしたるものではない。……重要なのは、次につなげることだ。村長は我々に負い目を感じている。慎重に詰める必要はあるが、次回話し合う時には、少しくらい乱暴に押しでも大丈夫

だろう。もちろん、過ぎては逆効果だが』

ウォン・ライは、また用意された白湯を、今度はちびちびとすすった。無償で助けるような態度を取りながら、自身の利益確保のため、相手からむしり取る準備をする。この矛盾をどう解釈すればいいのか、判断がつかなかった。

顔つきも穏やかなもので、先ほどの憂慮の表情はどこにいったのかと、モモンガはあつけにとられてしまう。

それでいて、傍目には嫌味さをまったく感じさせないのだから、彼の人物の複雑さは筆舌につくしがたい。

『出したりひっこめたり、笑ったり沈んだり。それに今後の押し引きか。そんな交渉術、どこで習ったんだ？』

『——そうだな。モモンガ殿も、中華の暗黒面にどっぷりと浸れば、これくらいは簡単にできるようになるさ。もし帰ることができて、機会があつたら試してみるかね？』

『勘弁してくれ。一営業マンに何を期待してるんだ』

中華の暗黒面なんて、底が見えぬほど深いに決まっている。溺れる前に、モモンガは追及を避けた。

裏で語り合いながらも、ウォン・ライは村長から情報を聞き出し、必要事項を頭に叩き込んでいた。

相手の方が考え込んだり、思い出すのに多少時間を置いたりしていたから、間にモモンガとの会話をはさんでも、支障はないのである。

「——ああ、そうだ。ちよつといいかな？」

村長があれこれ話している途中で、モモンガが口をはさむ。一つ、気がかりな点があつたから、それについて釘を刺しておきたくなつたのだ。

「情報はありがたいが、それを我々に漏らした、ということとは秘密にしてもらいたい。今回の出来事は、表ざたにして良いことではないと思うのだが、どうか」

「……わかりました。決して、よそには漏らしません」

「結構。私は魔法を使えるが、そんな手で村を縛りたくはない。村長らの人間性を信用しよう」

情報を得ることと、同じくらいにこちらの情報の秘匿は重要だ。村を救ったこと自体は、いざれ明るみになるだろうが、自分たちの手の内までさらしたくはない。

モモンガとウォン・ライの二人は、さらに話を続けて、村長から必要な情報を引き出し続けた。

アルベドは、終始無言のまま、その場で立っていた。一段落するまで数時間を要したが、その間も苦とすることなく、ただモモンガだけを見つめていた。

マジックキャスター  
魔法詠唱者というものは、常人からは変人のように映る。

だからモモンガの詮索に、時に幼稚に映るものがあつたとしても、村長は違和感をそのままに、忌憚なく答えるのみだつた。

「白湯は、好みではありませんか？ 茶があれば良いのですが、来客用のものは切らしております」

「いや、お気づかいは結構。それより、興味深い話だつた。充分な報酬だつたと思う」

情報を聞き出す段になると、話を進めたのはウォン・ライではなくモモンガだつた。

譲るべき点は譲る。上位者を認める態度として、正しい振る舞いであつたらう。実際、モモンガは聞きたいことを聞きまくつた。

『ユグドラシルのような世界を予想していたんだが、まったくの別世界らしい。ユグドラシルの魔法が使えるから、何かしら関連があるのではないかと思つていたんだが』

『当たり前だが、周辺国家は、どれも聞きなれないものだ。北欧神話にかすりもしないし、地球の国家と比べてみても、まだまだ幼い印象を受ける。案外、国家としての歴史は浅いのかもしれん』

外交の内情までは、流石にわかることではない。だが、国家の概要を知れただけでも意味はある。

所詮は村人レベルの理解であろうが、最初から全てが得られるわけ

もなく。現時点で、村長の意見は貴重なサンプルであつたといえる。「連中の鎧を見る限り、あの騎士どもはバハルス帝国に所属していると思われる、か」

「はい。刻まれていた紋章は、まさしく帝国のもの。……王国の民として、敵国を憎まずにはいられません」

モモンガの言葉に、村長は同意した。しかし、モモンガはこれが欺瞞工作である可能性を、早くも考慮に入れていた。

これほど派手な虐殺行為を、自らの所屬を喧伝しながら行う馬鹿がいるものか。村人を皆殺しにできれば問題はないが、逃げす可能性は絶対に残る。そうなれば悪名を残すのみだ。盗賊なり傭兵なりを偽装して行うのが普通だろうと、彼は考えた。

——いや、しかし、そもそも村人を殺す意味って何だ？ 兵士じゃないんだぞ。戦闘力を削げるわけでもないし、王国というほどの規模なら、寒村の三つや四つ焼いても、生産力の低下なんて誤差の内だ。すると、欲しかったのは名分か。帝国に悪名を着せ、その行為の非道を主張することが目的。想像が正しければ、実行犯は帝国ではないことになる。

連中が帝国の鎧を着て、意味のない殺戮をこれでもかと披露してみせる。衆目にさらして、怒りと憎悪をあおるのだ。

そうすることで、帝国を攻める理由を作れる。悪い評判というものは、これでなかなか厄介だ。アインズ・ウール・ゴウンもそうだった。

——気持ち悪いな。もしこれが策なら、きつと考えたのは嫌な奴だ。

とにかく、敵対行為を正当化する理由として、もってこいなのだ。悪い奴から殺して奪っても、誰も非難しない。なんとなく許されてしまふ。

事実かどうかは関係ない。こいつは悪者だ、と皆に認められてしまったら、その時点でおしまいだ。誤解を解く努力は、たいてい無駄に終わるものだから。

そこまでモモンガの思考が飛躍して、頭の隅がうずくように感じる。弱い嫌悪の表れだと、すぐに気づいた。

『もしこの世界に、ユグドラシルのプレイヤーがいたら、私たちはどう思われるんだろうな。アインズ・ウール・ゴウンは悪名高いギルドだったから、殴りかかられてもおかしくはない、か?』

『そこまで浅慮な手合いなら、返り討ちにしても文句は言われんだろうよ。我々は、この村を救った。いわば地域限定の英雄だ。その名声を無視して殴りかかるなら、そいつはその程度の馬鹿だった、ということだ』

ウオン・ライの言葉は、モモンガに大義名分の重要さを教えてくれた。なるほど、確かに今回の仕事は、村人を殺戮から救う結果となった。

かつての悪名を名分とする相手には、カルネ村の人間が武器になる。彼らがモモンガらを弁護してくれるなら、その善意でなだめることができるだろう。

「悪くないな」

「……は、どうか、されましたか?」

「いやいや、なんでもない。色々と想定外のことばかりで、つい、な。それより、話の続きが聞きたい」

思わず声に出して、村長に気を使われたが、話をせつつくことごまかす。

それから聞いたことだが、ユグドラシル同様、この世界にはモンスタ―がいるらしい。人間とは別の、亜人種もいると聞いて、妙な同一性に首をかしげたくなった。

直接の関係はなくとも、薄いつながりくらいはあるかもしれない。自分たちがここにいること自体、そうしたつながりに説得力を持たせていたから、考えてみれば納得出来る。

問題は、冒険者の存在だった。モンスタ―の討伐を主眼とした、人間の組織。最寄りの都市には、冒険者のギルドまであるという。これは大きな情報だった。

その都市は、エ・ランテルという。これについては情報があいまいで、やはり直接出向く必要があった。冒険者の存在は気にかかるので、確認は早い方が良さだろう。



『街に行つて、実際に暮らしてみるのが一番だろうな。細かな常識を得るためにも、これは必須と思う』

『まさに。モモンガ殿が直接行くのだったな。ナザリックのことは、私に任せてくれていい。捕虜の尋問も、こちらで済ませておこう』

二人が裏で話し合っているところで、部屋のドアが叩かれた。村長が礼をしてから、それに応える。

話を聞けば、葬儀の準備が整つたらしい。情報はまだ精査がいるとはいえ、ここで得られるものは得た。留め置くのも気の毒だろうと、彼らは村長に伝えた。

ぜひとも、村を救つてくれた英雄として、見送りに参加してほしいといわれれば、拒むことも出来なかった。

葬儀が終わり、夕暮れになった。モモンガはぼんやりと夕日を眺める。

ウォン・ライは変わらず、人化した姿のまま傍にいた。アルベドは、騎士どもをナザリックに押し込む作業中である。

死デスナイトの騎士にも手伝わせたが、かなり時間がたつたはずなのに、消える気配もない。現実としての仕様変更だろうと思えば、今更疑問もわかなかつた。

『王国、帝国、法国か。どこに所属するのが無難と思う？』

『現時点では何とも。無所属でやっていくという手も、ないではない。……個人的な意見としては、その決断は出来るだけ引き伸ばしたいな。得た情報が常に正しいとは限らないし、国家の様式とて絶対的なものではなく、変化し得るものだ。——特に中世的な独裁国家なら、なおさらに』

モモンガの問いに、ウォン・ライは慎重な態度を崩さなかつた。まったくもつて正当な主張であり、同意できる。国家に属するメリット、デメリット、いずれも深く考察してから結論を出すべきだった。

さしあたつては、エ・ランテルという街に、冒険者として出向くのがいいだろう。人選は決まっているから、行動に支障はない。

そろそろ帰ろうか、と思つたところで、村長が慌てた様子で飛び込んできた。また厄介事かとモモンガは頭を押さえたが、ここで放置も  
ないだろうと、話を聞く。

すると、この村に戦士の格好をした者たちが、近づいてきているとのこと。敵の増援か、王国からの援軍か。いずれにせよ、備えは必要であろう。

「わかつた、お助けしよう。乗り掛かつた舟というものだからな。ここで見捨てては後味が悪い」

「おお、ありがとうございます。重ねて、お礼を申し上げます」

村長からの感謝も、今は聞き流す。アルベドに伝言で状況を聞くと、捕虜は全てナザリツクに移したと報告が入つた。

死の騎士デスナイトも連れて、こちらに戻つてくるよう伝える。村長から、戦士たちがやってくる方角を聞き出し、共に適当な場所で待機する。

もし相手が王国の兵であれば、村長ぬきで話を進めることは叶うまい。戦闘になつても、この場にはウォン・ライがいる。何も問題はなかつた。彼の方からも忠告が入らないなら、危惧するような事態ではないかもしれない。

ほどなく、その姿が見えてきた。戦士たちは馬に乗っており、先ほどの騎士どもとは装備が違う。別の所属であることは、それだけで見て取れた。

「私はリ・エステイーゼ王国、王国戦士長のガゼフ・ストロノーフだ。この近辺を荒らしまわっている帝国の騎士たちを討伐するため、村々を回っている」

ガゼフ、と名乗つた男は、モモンガたちを馬上から見据えた。その後方に、戦士たちが集結し、隊列を組む。

まずは村長が代表するように、応えた。

「これは、ご苦勞様でございます。我らカルネ村も襲撃を受けましたが、こちらの方々の活躍により、どうか助けられました。この方々が居なければ、村は全滅していたことでしょう」

微妙に、トゲのある言い方だった。彼らは来るのが遅すぎた。いかなる事情があろうとも、間に合わなかった連中に対して、愛想を振りまく理由はない——と。村長は、態度で語っている。

彼がモモンガらを一通り紹介したところで、戦士長は馬から降りた。そして、視線をこちらに向ける。

「……そうか、なら、私からも礼を言わねばなるまい」

ガゼフという男は、そういってモモンガと向かい合った。いつの間にか、ウォン・ライとアルベドは一步引いていて、彼が先頭になっている。

『ちよ、私が応対するのか！ ウォン・ライ、貴方がやれば間違いはないだろ？』

『ぶっつけ本番での話し合いも、経験してみるものだ。必要ならフォローはする。安心してくれ』

モモンガが苦情を言い立てている間に、ガゼフは目の前まで来ていた。そして頭を下げ、口を開く。

「よく、助けに来てくれた。村を救っていただき、感謝の言葉もない」  
戦士長という地位は、おそらくそれなりのものに違いない。後方に待機する戦士たちは、統率がとれていた。こうした兵を部下として持つ以上、王国での地位が低いとは思えぬ。

そうした存在が、身分も定かでないモモンガに頭を下げ、礼を言ったのだ。彼の人柄も、わかるうというものだろう。

「私が、自ら望んでやったことだ。村人からも感謝してもらったし、もう充分報酬ももらった。気にしなくていい」

「報酬？ ……すると、モモンガ殿は冒険者なのか？ それで、駆けつけてくれたと」

「まあ……似たようなものか。こちらでは、無名だがね」

なるべくへつらわず、対等の立場であろうと接した。モモンガはアインズ・ウール・ゴウンを代表する、ギルドマスターなのだ。たとえば、相手が誰であれ、下手に卑屈になることは出来なかった。

ウォン・ライの視線を、背中に感じる。そう思えば、いくらか気分が楽になるようだった。

「そちらの方々にも、お礼を申し上げる。よくぞ、村人たちを助けてく  
ださった」

死デスナイトの騎士が反応しないのは当然だったが、アルベドはガゼフと顔を  
合わせようとすらしなかった。

ただウオン・ライだけが、その礼に応えた。無言で一礼してから、モ  
モンガへと視線をやる。

——私が話を主導するんだっただな。ああ、わかっているとも。

ガゼフは礼を言うのと、それで満足したのか、再びモモンガと顔を合  
わせる。詳しい説明を聞きたい、と言われれば、無下にも出来ぬ。彼  
の方も開き直って、説明することにした。

死デスナイトの騎士について、明らかに不審な目を向けていたから、そのこと  
についても聞いてくる。モモンガは適当に説明して、追及を逃れた。  
こちらの情報を秘匿するためにも、うかつに正直な答えは口にできな  
い。

ただ、自身が魔法詠唱者マジックキャスターであることは話した。それから雑談に近い  
形で、詳細を尋ねてくる。モモンガはこれをあしらうのに苦労した  
が、どうにか言葉をにごしてごまかした。営業マンのスキルが、何気  
に役に立った瞬間である。

「詳しく現場を検証するのは、明日にするとして……今少し、話を続け  
たいところだ。村長殿、申し訳ないが、一晩の宿を借りたい。対価も  
用意しよう」

ガゼフはまだまだ話したいことがある様子で、明日に持ち越す気で  
満々だった。実際、モモンガからは怪しすぎる。その自覚があるだけ  
に、こちらから強く拒むことも出来ない。

戦士長は、善性の人物である。あの騎士どもとは違う。そう見え  
ば、悪い印象もなかなか抱けなかった。

「はい。では、宿泊の準備などを——」

「戦士長！ 周囲に複数の人影、村を囲むような形で接近してきます  
！」

村長が答えかけたところで、後方からやってきた戦士から、急を要  
する報告が入った。

やれ、またかと。モモンガは肩をすくめた。それでも戦うつもりで、後ろを見やった。

「——モモンガ殿、私は人化を解けない。彼らの目があるからな」  
ウオン・ライはすぐに答えた。村人には見せたのだから、今更……  
と思っただが、王国兵と戦士長を警戒しているのだろう。この線から国家中枢へと情報がもれるのは、確かによろしくない。

赤鬼の力を当てにするつもりなら、連中を遠ざけねばならない。どうするか、と考えようとしたところで、彼の方から提案してきた。

「だが、私を外そうとはしないでくれ。この件、徹底的に関わるつもりだ。それをモモンガ殿に了承してもらいたい」

「いや、それは構わないが、なぜそこまで」

ウオン・ライは、モモンガの疑問に答えようと、さらに言葉を尽くす。

「……トラウマ、とても言うべきかな。自分の勝手な事情だ。理不尽な暴力を、見逃したくはない。出来ることなら、自らの手で人々を守ってやりたい。……わかってくれとは、言えないが」

言い淀んでいるが、意思是伝わってくる。モモンガとしても、彼がそこまで主張するなら、無理に来るなとも言えなかった。

——個人的なこと、聞いた方が良いのかな。過去を知りたいと思うのは、友人として正しい姿勢なんだろうか。辛いことを思い出させて、傷つけたくはないんだが。

トラウマ、とウオン・ライは言った。心の傷を、彼は持っている。それをつつくような真似をしたくはないけれど、知るべきなのだろうか。

いや、と思い直す。ここは、彼の方から話してくれることを、待った方が良い。

——思わせぶりな態度だけで、何も語らずに済ませるような人じゃない。

モモンガは、ウオン・ライを信頼していた。だから、今は目の前のことを処理しよう。

それからのことは、それからのことだと。彼は、割り切ることにし

た。

## 第九章 解決、そして

ガゼフを先頭にして、モモンガとウォン・ライは現場へと急行した。アルベドと死の騎士<sup>デスナイト</sup>は、やや後方にいる。

いきなり戦闘に入るのではなく、まずはガゼフらの手並みを拝見したい、というのが二人の見解である。

——油断は禁物だ。常に敵が己より弱いとは限らない。

防御がもろくとも、攻撃力に特化した手合いがいるかもしれない。であれば、初撃を食らうのは避けたかった。

少なくとも、敵の情報を得られるまでは、自分から仕掛けるリスクを負わずに済ませる。そうした方針を、モモンガは定めていた。

『くれぐれも、先走らないように。捨て駒になりそうな者がいるのだから、遠慮なく使わせてもらおうじゃないか』

『……モモンガ殿は、慎重だな。いや、正しい姿勢だ。ここで警戒するべきは、己自身の油断と慢心か』

先ほどまでの戦闘が、あまりに圧倒的に優位であったためか、モモンガは却って警戒を強くしていた。簡単に勝ち過ぎた後こそ危ない、というのは当たり前前の教訓だが、実際に一度経験すれば、嫌でも意識するようになる。

意図的に相手の勝利を演出して、調子に乗った敵を死地におびき出す。それに類する手は、対人戦においてむしろ定石であり、考慮しない方が間抜けだと言わねばならぬ。

もつとも、理解していてなお、勝利の美酒は甘い。ゆえ、モモンガは気を引き締めた。自分一人であれば、慢心もスリルの一種として許容したかもしれないが——。

「報告通り、確かにいるな。——見える限りでは三人、周囲のあれは、天使どもか」

ガゼフの言葉が、モモンガに現実を認識させた。彼の視線の先には、なるほど、それらしい連中がいる。

あまりにゆっくりとした歩み具合は、やはり策略の匂いを感じさせたが、ともかく村に入られるまで、もう少し時間はある。重装備をし

ていないところを見ると、三人は魔法詠唱者と見て良い。

『炎の上位天使？ まさか、ユグドラシルと同一の……？』

『何とも言えん。ガゼフ殿に殴らせてみれば、結論は出るだろう。まずは挙動を見て、判断すればいい』

モモンガの問いに対して、ウオン・ライは単純かつ現実的な手段を伝えた。

それが、もつともリスクの少ない手であろう。とすれば、ここでの身の処し方は一つしかない。

「モモンガ殿、できれば御一行、我々に雇われてくれないだろうか？」  
「お断りしよう」

ガゼフの提案に、モモンガはノータイムで答えた。そう来るであろうことは、察しがついていたから。

「報酬は、用意する」

「……ガゼフ戦士長、貴方にそんな権限が？」

「手持ちはないが、帰還してから国に申請しよう。いくばくかの金貨は調達できるはずだ」

「そんなあやふやな物を信用しろと言われても、困るな。こちらにメリットがない」

ガゼフは報酬の額を明示しておらず、調達できるはず、などという言葉で濁している。

こちらとしては、彼らが玉砕してから、手負いの敵を迎撃する手もあるのだ。そうした方が労力が少なく済むのだから、彼の提案を真に受ける必要性など、どこにもない。

「死の騎士<sup>デスナイト</sup>。あれを貸してくれるだけでも、良いのだが」

「……それは、いや、やはりお断りさせていただこうか。悪いが、そちらの手で御せるような代物ではなくてね。万が一の話だが、もし暴走したら、どう処理されるおつもりかな？」

それらしい言い訳をして、断る。失っても痛くはない戦力だが、初志を変えさせるほどの利益が見込めない以上、貸し与えるのはためらわれた。

自己中心的に過ぎはしないかと、モモンガ自身も思わなくもない



が、この程度の後ろめたさならば抑え込める。

「そうか、残念だ。……命令できる立場でもないし、強制できるだけの力も、我々にはないのだろう」

「物分かりが良いようで、何よりだ」

モモンガの後ろには、ウオン・ライとアルベドが目を光らせている。アルベドは兜さえ取っていないから、表情は読み取れない。それでも、無礼な振る舞いは許さないと、気を張っている様子はわかる。

ここに至って、ガゼフはあきらめたらしい。一息ついて、苦笑を浮かべると、切り替えたように明るい声で言った。

「この村を救ってくれたこと、改めて礼を言わせてほしい。ありがとう。彼らと同じ平民として、感謝を述べたい」

この一言は、モモンガに新鮮な驚きを与えた。ガゼフという男は、厳格な戦士としての雰囲気から、余計に意外であった。

「本当に、本当に感謝する。無辜の民を虐殺の手から守ってくれたこと、言葉では言い表せぬほどに、恩義を感じている。……その上で、申し訳ないが、一つ我がままを聞いていただきたい」

「……聞くだけだぞ」

モモンガは、目の前の男がまぶしく見えた。真に人格者らしい振る舞いだと、認めてしまいそうだった。辛うじて、一言だけ返す。

だが、ふてぶてしい態度を維持できたのは、そこまでだった。

「この村を、守ってほしい。我々が全滅した後で、村人たちが害されることのないように」

ガゼフの言葉に、モモンガは言いようもない感情を覚えた。口を開こうとしたが、何も言えなかった。

彼は、自分の命より他者の命を第一としている。村人たちのためなら、死んでも仕方がないと思っっているのだ。そうした精神を美しいと思うのは、己が凡庸な愚者だという自覚があるからか。

モモンガは、知らず頭を押さえた。そうした行動が、彼にも不安を与えたのだろう。改めて、付け加えるように言う。

「まことに申し訳ない。確たる報酬は約束できないが……このガゼフの願い、なにとぞ聞き届けてもらえまいか。彼らの平穏を守りたい。

もし守れぬなら、他の誰かに託してでも、と願う」

ガゼフの言に嘘はない。そういう男なのだ、モモンガにもわかる。わかるからこそ、余計な感情を抱いてしまいそうだった。

後ろを見やると、ウォン・ライは黙ってうなずいた。アルベドは、ガゼフなど気にもしないで、ただモモンガだけを見ている。それで、彼の気持ちは固まった。

「了解した。村人は必ず守り通そう。——これで良いかな？」

「充分だ。感謝するモモンガ殿。これで、後顧の憂いはなくなった。私は、前だけを見て進むとしよう」

ガゼフは今にも飛び出していきそうだったが、その前にモモンガは彼に向かって、一つの彫刻を手渡した。

彼の目には特別なものに映らなかつたろう。いぶかし気にそれを見るのみだったが、お守りのようなものだと言え、素直に受け取ってくれた。

「武運を、戦士長殿」

「ああ、モモンガ殿も、無事であることを祈っているよ」

ガゼフは部下を率いて、前進した。それが死の行軍になるであろうと、モモンガは何となく察しながらも、見送った。あれが英雄というものかと、ふいに思う。

もしかしたら、英雄とは、ああした行動を自然に取ってしまう者のことではないか。ただ強いだけの相手なら、こうも敬意を抱かなかつただろう。

「……どうも、な。初対面の相手なら、冷徹に接するのもわけはないんだが。余計にいろいろ話してしまうと、情がわく。仕方がないことと、受け入れるべきなんだろうか、これは」

「思うがままに、成したいと思うことを成されればよろしい。モモンガ殿、貴方はそれが許される立場にいるのだ」

モモンガの疑問に、ウォン・ライは明確に答えた。やりたいようにやればいい、と。

「死を覚悟して、彼らは行った。私ならば出来るだろうか。大事なものを守るために、己の命を懸けることが。……あそこまで強い意志を

持つて、進むことが、可能だろうか」

モモンガは己に問いかけた。ウオン・ライも、これには即答を避けた。必要なのは、他者の言葉ではないと思っただけから。

「モモンガ様は、慈悲深いお方です。それだけで、私たちは充分報われます。——悩まれるようなことではありません」

ただ、アルベドだけは、彼を肯定しようとした。彼女の言葉は、モモンガの心にどこまで刺さったのか。それを外から推し量るのは、難しい。

「アルベド」

「はい」

「お前のことだ。周囲に適当なシモベは配置しているな？」

「——もちろんでございます。使用されるかどうかはともかく、ある程度の備えは必要かと思ひ」

「伏兵の確認だ。周辺を探り、敵の全容を把握しよう伝達。いた場合は、意識を奪って捕獲するように。お前自身は、私の供だ」

モモンガの命である。アルベドは、承知した。兜の中の表情は、どうであったか。それを知ることまた、難しい。

「では、そのように。……モモンガ様、村長が来ます」

アルベドが半歩退くと、モモンガの視界に村長が入ってきた。不安に駆られているのだろう。焦りの感情が、はつきりと見て取れた。

「モモンガ様！……私たちは、どうすればよいのでしょうか。戦士長は、行ってしまわれました。私たちは、身を守る術すらないのに、どうしたら……」

「村長殿、あまりガゼフ殿を責めてやるな。……彼は、村人たちを守るために、迎撃に赴いたのだ。村を戦場にするよりは、そちらの方が、被害は抑えられる。そう思っただけの行動だろう」

モモンガは、ガゼフの弁護をした。そうしたい気分だったから、そうした。

村長は、その弁護を聞いて、落ち着きを取り戻す。吹きだした汗をぬぐうと、改めて問うた。

「ならば、私たちはこのまま村にとどまっていた方が？」

「そうしてくれ。追加で守護の魔法を入れて、死デスナイトの騎士も守りに回そう。——決して、出ていこうなどは思わぬように。私としても、無理をされて被害が出ては、そちらの方がやり切れん」

愛着というほどではないが、村人たちにも情を移し始めている。そんな自分を自覚しながらも、決して不快に感ずることはない。

これも誰かさんの影響だろうか、モモンガは一人思う。ウォン・ライの方を見やれば、厳しい表情を保ったままだ。

それでいて深刻な雰囲気はなく、いつでも話しかけられるような、気安さがどこかにあった。

緊張と楽観、厳しさと優しきは、彼の中では矛盾せずに両立している。ウォン・ライが傍に控えているというだけで、楽な気持ちになった。優秀なタンクだが、それを考慮の外においても有能な相棒である。

「さて、では機を見て動くか」

「遠目からでも、手を尽くせば状況は見える。モモンガ殿、判断は任せよう。私はいつでも対応できるよう、準備しておく」

ウォン・ライの言葉にうなずきつつ、モモンガは悠々とした態度を保っていた。

手札をどこまで切るかは、状況次第だろう。なるべく簡単に済ませたいと思えば、ガゼフらの奮闘を期待したくなる。

首尾よく生き残れたならば、彼には相応の見返りは用意してやらねばなるまい。

もし、何かの間違いで死んでしまったら？ ——さて。その時はその時だと、割り切るべきであろう。

結論から言うならば、ガゼフは奮闘した。

奮闘して、なお届かなかった。モモンガの期待に応えたとは、いかにも言いづらい状況であった。

——だが、最低限の仕事はしてくれた。

敵の情報を得る。その得難い機会を提供してくれたのだから、やは

り感謝はするべきだろう。たとえば、相手が格下であっても、初見で事故れば死が見える。ユグドラシルとは、そういうゲームであった。

ゆえにモモンガも、油断は捨てている。ガゼフらとの戦闘を観察する限り、敵は脅威とはいいいがたい。しかし、こちらが把握していない切り札があるかもしれず、なめてかかるつもりはなかった。

「そろそろか」

モモンガは、ウォン・ライの方を見やると、彼は無言でうなずいた。同意は得た、とばかりに行動に移す。

厳密に狙ったわけではないが、こうしてガゼフは死の直前で、村へと転移された。生き残ったのは紛れもなく、彼自身の功績だろう。

そして、彼に代わって戦場に出でたのは、三人。モモンガ、ウォン・ライとアルベドである。

「はじめまして、皆さん」

モモンガは、開口一番にそう言った。

今までガゼフと戦闘していた連中——異国の部隊であろう。現代風の言い方をするなら、特殊工作部隊、とでも名付けるのが正確なところか。

ともあれ、そうした精兵と言えど、この急展開には動揺が走った。突如現れた不審人物たちに、警戒の念を露わにする。攻撃の意思は消さず、観察のために一時場が硬直する。

モモンガは、そうした連中の思惑など何処吹く風、とばかりに続けて言った。

「私の名はモモンガ。後ろの二人は、私の仲間だ。——あえて紹介はしないが、少しばかり私の言葉に耳を傾けてほしい」

ガゼフに対するのと同じように、問答無用で仕掛けてくる……のであれば、それはそれで楽な話なのだ。

しかし幸か不幸か、この部隊の練度は先ほどの騎士どもとは、また違う。さらに一段階は高みにあり、うかつに攻めてこようとはしない。

「聞く耳がある様子で、結構なことだ。用件は難しい話じゃない。——お前たちでは、私一人にさえ勝てない。大人しく降伏すれば、まと

もな扱いをしよう。だからお互いに矛を収めようじゃないかと、そういう話でね」

受け入れるわけがない、と見越しての発言である。モモンガも営業トークの一環として、ある程度の交渉術は心得ていた。

出会い頭に大口を叩いて、機先を制する。相手がこれを鼻で笑うか、心して油断を消すか。あるいは同様に大口を叩き返して、同じ交渉の舞台に立つか。

いずれにせよ、最初に口を開いたモモンガに主導権がある。彼は相手の反応を見ながら、慎重に情報を探るつもりでいた。

「――馬鹿げたことを」

反応したのは、部隊の中でも一番偉そうな男だった。部隊の兵が、彼のことをニグン隊長と呼んでいた。

「何を言うかと思えば、降伏しろだと？ そのような言い方で、本当に降伏する馬鹿がいるなら、ぜひ見てみたいものだ」

隊長というからには、彼が部隊の指揮官と見るべきであろう。ニグンとやらは、不敵に笑って、モモンガに応えた。

「馬鹿げた？ それはどうだろう。そもそも勝利の確信がなければ、ガゼフを退避させるだけでいい。わざわざ目の前に出てくることはない。……そう思わないか？」

「いいや、やはり愚かだ。我々は何も、全ての手札を見せたわけではない。どこで監視していたかは知らんが、その浅慮を悔いることになるぞ」

やけに自信満々な態度である。モモンガは認識を改めた。こいつが馬鹿か大物かは別として、傲慢になるには相応の理由があるはずだ。

自尊心の元になる実績があつてこそ、この態度。そう思えば、やはり彼らはこの世界において、明確な強者としての地位にあるのだろう。

こいつの――ニグンとやらの力量を確認することで、王国だけでなく、近隣諸国の戦力レベルも知れる。となれば、ここで戦闘を回避する理由はなかった。

「たいした自信だが、その根拠はあの天使どもかな？ それだけというなら、あまりに貧弱だろう。……ガゼフはそれなりの強者だろうが、あのレベルで対抗できるなら、私にとって脅威とは——」

「ストロノーフをどこへやった？」

モモンガの言葉に割り込むように、ニグンは言った。ガゼフ、という名に反応してのことだろうが、彼の人物は礼儀というものを知らぬらしい。

「……村の中に転移させた。そんなこと、いちいち確認することでもあるまいが」

「どこに隠したか、と聞いている」

こいつ、実は頭が悪いんじゃないか、それとも耳がおかしいのか。モモンガはそんな感想を抱いたが、そもそも転移の魔法を知らないのかもしれない。とすれば、無知ゆえの傲慢か。

まさかと思ったが——そうであるならば、真面目に付き合うこともなかった。

「なるほど、結構。そちらに対話の意思はないようだし、あくまで力を使用するというなら、こちらも同様に振る舞うだけだ。……こうも不快感をおおってくれなければ、もう少し穏便に済ませてやっても、構わなかったのだがね」

そうなるわけがない、と確信しての行動だったが、こちらの意図を外して賢明に振る舞うなら、却って別の利用価値を見出しただろう。穏便に生かして帰す、という手段さえ、取ったかもしれない。もちろん、仮定の話ではあるが。

「時間が惜しい、天使達を突撃させよ！」

ニグンの号令が、全ての運命を決した。

「ああまったく、時間が惜しいな。……すでに充分、時間は稼いだのだから」

モモンガはそう言って、振り返った。

戦場で長話するとき——たとえそれが交渉であれ、あらゆる意図が込められている。

「もう良いな、モモンガ殿」

「頼む。存分にやってくれ」

ウォン・ライは呪縛弾の仕込みを終えていた。人の身での制限に、この魔法は引つかからない。

よって遠慮なく、ニグン一人に呪縛弾が降り注ぐ。

「あ？ が——」

「そら、確保。……さて、隊長を捕縛したぞ。君らはどう出るね？」

ニグンはあらゆる行動の自由を奪われて、ウォン・ライの下に引きずり寄せられた。突撃に備えていた天使たち、部隊の兵どもも、これによって動きを封じられる。

ウォン・ライは、手際よくニグンを後ろ手にねじりあげ、ひざまずかせて拘束する。まるで手慣れた作業のようで、モモンガは見ていて少し驚いた。

「……結構簡単にやるんだな。意外だ」

「昔取った杵柄、というやつだ。思い出したくもないが、体の方が覚えているらしい」

ニグンはひどい声でうめき、叫んだが、ウォン・ライには情けの欠片も見られない。人化の術が効いているはずなのに、人としての顔と鬼の顔が、ダブって見えるような気がした。

「モモンガ様」

「ああ、アルベド。そうだな、うつぶんを晴らさせるのもいいか。——許す。残りの処分は、お前に任せよう」

アルベドが、兜の下で笑ったような気がした。後がどうなったかは、記すまでもないだろう。

返り血を洗い流すと、彼女の鎧は元の光沢を取り戻した。遺骸の処理は、後で死の騎士<sup>デスナイト</sup>辺りに任せてもいいだろう。

アルベドが展開させていたシモベからも、いくらかの収穫があったらしく、まとめてナザリックに送るよう伝えた。

捕縛した敵の処理はゆっくり考えればいいが、ただ一人、この場で



生きている人間がいる。これは早々に始末をつけねばなるまいと、モモンガは語りかけた。

「ニグン、と言ったな。お前に聞きたいことがある」

あれほど傲慢だった男が、今では震えて縮こまって、言葉を発するのにも苦勞するありさまだ。大見得を切るからこういうことになるのだ、とモモンガは冷淡に考える。

同時に、油断がこの結果を生んだのだと思えば、反面教師として受け止めることも出来る。今回はたまたま上手くいったのだと、そう思い直した。

この世界において、ナザリックの戦力は破格のものなのだろう。自身の強大な力を自覚すると共に、その使い方を誤ってはならないと、モモンガは自戒の気持ちで新たに思った。

「聞こえているな？ ニグン、返事をしないか」

「は、はい……」

「モモンガ殿は、貴様に語り掛けておられる。求められていることは一つ、問いかけに答えること。それだけだ」

嘘をついたらどうなるか。ウオン・ライは、いちいちそんなわかりきったことを言うつもりはなかった。

閻魔様に嘘をついたら舌を抜かれるぞ、とモモンガは子供の頃、どこかで聞いた覚えがあった。

この場合、舌を抜かれる程度で済まないだろう。ちよつとした嗜虐の味を覚えながら、彼は問うた。

「二応聞いておこう。お前の所属、目的、とりあえずはそれだけでいい」

予想がついている部分もあるが、当人からの答えがもつとも正確だ。嘘があれば、ウオン・ライが看破するであろう。

閻魔王ヤムラージには、敵の情報を見破るスキルがある。ユグドラシルでは事前に仕込んだ魔法・スキルの内容や、持続時間に待機時間。装備品の詳細なども把握することも出来た。場合によっては、設定上のプロフィールさえ覗ける。

この現実において、それらがどのような変化を遂げたのか。モモン

ガは確認していないが、まさか別物に変化した、とも思えない。ならば、その能力は尋問においてひどく役に立つものであるろう。

「は、話します。しゃべります。だから、どうか……」

「聞かれたことにだけ答えよ。——モモンガ殿は、お忙しいのだ」

ウオン・ライは、ニグンの足を踏みつけた。骨折しない程度の力で、念入りに痛めるように。

えぐいことするなあ、とモモンガも若干気の毒に思ったが、どうでもいいことだった。それにしても、ここまでしておきながら、ウオン・ライには嗜虐を楽しむ雰囲気がない。

アルベドはあれで、残虐行為を楽しむ余裕を持っているのだが——彼のそれは余裕どころか、ある種の痛みに近い、憂いのようなものさえ感じられた。

向いてないことを、無理矢理やっているような。どんなに手際が良くても、違和感をぬぐいきれない。それがまた、どうにも鈴木悟としての意識をくすぐるのだ。

——あの人に、こんなことをさせてはいけない。させたくないと感じるのは、俺の人間性の証明になるのだろうか？ それとも、ギルドマスターとして、メンバーを心配しているだけ？

村長の前では、あれほど優雅に振る舞えて、あたたかな言葉もかけてやれる人が。いくら計算高くても、要所で思いやりを忍ばせる奥ゆかしさ、優しさを持つ人が。意に添わぬ暴力行為に身を染めている。

この背徳感を、何と表現したものか、モモンガはわからない。もつとも、この場において有用な技術を腐らせることは、賢明ではないだろう。

ニグンから必要な情報を得ると、改めてモモンガは思考に浸った。連中がスレイン王国の所属であり、ガゼフの暗殺を狙っていたこと。その二つを聞き出したところで、ウオン・ライが止めた。

「尋問に関する魔法がかけられているようだ。詳細までは把握できないが、特定の状況下で質問に3回答えたら死ぬ、というものらしい。この男への尋問は、まずは打ち切るとしよう」

モモンガは驚いたが、彼の言葉を疑う理由もない。それならそれ

で、扱いに困るのだが、ウォン・ライが提案した。

「質問に答える、と明確に定義されているのがミソだな。意思表示を明確にさせず、体の反応だけで読み取れば、発動することはないだろう。口をふさいで体を拘束し、本人が答えようもない状況さえ作り出せば、好きなだけ尋問できよう。……ナザリックには、その辺りの専門家もいることだしな」

その手があったか、とモモンガは感嘆した。いや、むしろ疑問に思うべきだろうか。

育ちのいい、官吏の一族の彼が、どうしてそんな知識に精通しているのか。ウォン・ライの過去とは、何なのだろう。

「モモンガ殿、そういうことで、どうか？」

「……専門家か、ニユーロニストがいたな。あれなら、いい具合に加減してくれる、と思う。いいんじゃないか？ 具体的な尋問内容は、こちらで指定する必要があるだろうが……」

「大丈夫だ。それも含めて、任せてほしい。なに、人面獣心の愛国者殿の扱いは、慣れている。むしろやるだけ、むしろやるとしよう」

ウォン・ライは、自信満々に言い切った。何か変なスイッチが入っていないかと心配したが、そこまで追及する勇気をモモンガは持たない。ニグンを連れて、先に帰ると言われれば、そのまま受け入れるしかなかった。

——やれやれ。ともかく、仕事は終えたな。

逃がしてやったガゼフとは、自分が直接話さなくてはならない。村長に会って挨拶の一つもしなければ、礼を失するであろう。

モモンガにとつては気が重い役割だが、それはウォン・ライも同じはずである。奮起せねばなるまいと、きびすを返して村へと向かう。

「少し、よろしいですか？ モモンガ様」

「どうした、アルベド」

人目がない今だからこそ、アルベドの方も気兼ねなく話す好機である。それを彼も理解したから、足を止めて付き合った。

「ここまで人間に好意的になる必要が、果たしてあったのでしょうか？ 命を助けるだけならまだしも、あれこれと配慮に苦労しているよ

うに見受けられます」

「む……まあ、それはな。村人たちは、自分から関わったことだからな。責任を持って、最後まで助け通すのが筋だろう。……それに私は、言うほどの苦労はしていないよ。細かく配慮したのは、ウォン・ライの方だ」

「そこです。私にはわかりません。彼のお方が、そこまでの思いやりを示すほどの価値が、彼らにあると?」

アルベドは、異形種らしい人間軽視の価値観を持っている。認識を改めろ、と命令するのは容易いが、感情に嘘はつけないものだ。

ため込ませるより、少しくらいは吐き出させるかと、彼は腹をくくった。

「人間を弱者と思うか? 弱者には価値がない、と言って良いものかな?」

「至高なるお方には、深淵なお考えがあるのでしよう。私などには理解の及ばぬこと、なのかもしれません。私の価値観など、些細なことなのでしよう」

彼女は、素直に肯定しなかった。同時に否定もしなかったが、これはアルベドなりの苦悩なのだ。モモンガは受け取った。

彼には負い目がある。設定を書き換えた、という負い目が。それゆえ、ここでさらりと流すことは出来なかった。

罪滅ぼし、ではないが。彼女のために言葉を尽くすくらいは、最低限の義務と思う。

「アルベド、私はお前を信頼している。これから、その力を当てにしたいと思っている」

「はい」

「お前の強さ、賢明さ、実務能力。全てを高く評価している。私はお前を、得難い存在だと認識している」

事実である。モモンガは、正直に自らの想いを述べているに過ぎない。

だが、この純真さがアルベドの心にはよく刺さるのだ。まるで楔を打つかのように、彼女の中に言葉が入ってくる。

「光栄です、モモンガ様」

「だからこそ、あえて言おう。驕るな、と」

胃がきりきりと痛むような気がした。もちろん錯覚だが、自分を省みれば、あまり偉そうなことは言いたくないというのが本音だ。

それでも、指摘しておくことに意味がある、と信ずる。モモンガは、アルベドに油断という悪癖をつけてほしくはなかった。

「お前には、これからも苦勞を掛けることになるだろう。それゆえ、一層の注意を払ってもらいたいのだ。人間を劣等種族と見る、その価値観を変えよとまでは言わぬ。……だが、その人間の中に、傑出した個人がいることも、覚えておくのだ。あるいは、そうした一握りの人種が、我々に大きな貢献をもたらしてくれるかもしれない」

「——なるほど。使いよう次第で、有益な存在足りえると、モモンガ様はお考えなのですね？」

「そうだ。我々は比類なき強大な存在であるかもしれない。だが、戦力には限りがある。常に、どこにでも手を伸ばせるとは限らん。この世界全体の人口と比べれば、あまりにも小規模な勢力と言えるだろう。……数は力だ。人的資源は、あればあるほど良い。私の言っている意味が分かるな？」

一気に言いたいことを言ってしまったが、何とかアルベド自身に考えさせる方向に持っていった。

彼女は聡い。優秀な人材であればこそ、自ら考えさせた方が、適当な結論を出してくれるだろう。

モモンガは、さほど己の知謀を評価していない。具体的にあれこれと指示するよりは、おおまかな方針だけ示して、方策そのものは当人に立案させようと思っていた。

「承知いたしました。当面は、村人たちとの折衝が問題となりますか。どこまで関わるか——干渉の度合いについて、後ほどにでも詳しく指定してくださいれば、実務的な作業はこちらで行います」

「ああ、頼む。……しかし、一仕事終えた後だ。数時間は休息をとって、それから考えよう」

それほど勤勉な性格でもないつもりだが、幸いというべきか、肉体

的な疲労は感じていない。

しばらく頭を休めれば、存分に働ける状態になるだろう。一連の出来事を振り返って、色々と検討することもあろうし、今は時間を置きたい気分だった。

「かしこまりました。では、そのように」

「——しかし、あれだな。今回の件で、ウオン・ライの過去について、興味がわいてきたな。今思えば、付き合いが長いわりに、個人的なこととはあまり語り合わなかった。私は、彼が鬼種としてユグドラシルに現れる以前のことを、何も知らないのだ」

モモンガとしては、さしたる考えがあつて、そうしたことを言ったわけではない。ただ、場の雰囲気切り替えるために、緊張を解くつもりで一言述べただけだったのだ。

「ウオン・ライ様について、ですか？」

「うむ、そうだ。もしかしたら、彼の方が、ギルドマスターに向いているかもしれない。人を導く術も知っているだろうし、他者を引き付けるカリスマも強そうだ。私より、よほど上手にナザリックを運営するかも——」

「ありません」

アルベドの声は、ひどく冷たかった。まるで冷水でも浴びたかのように、モモンガは驚きそうになった。

種族の特性のおかげで、大部分は抑制されたが、疑問は残る。

「どうした。ありえないと、断言する根拠でもあるのか？」

「——モモンガ様に不満を持つ者など、ナザリックにはおりません。それで充分でございます」

アルベドの態度は、頑なな態度を崩さなかった。彼女なりに、思う所でもあるのか。

ウオン・ライは、確かに一度はギルドを抜けた。だが、戻ってきたときに不満を漏らした物など、やはり皆無であったはず。

「余計なことを申し上げました。……気分を害したのであれば、お詫びいたします」

「いや！ 余計なことを言ったのは、お互い様だ。だから、アルベドが

申し訳なく思うことはない。……さあ、村に戻るぞ。演技を忘れるな」

モモンガは、この問題を直視することを避けた。先送りは問題の解決にならないが、アルベドの感情を解きほぐすというのも、仕事の片手間に出来ることではあるまい。

女性経験のない彼に、複雑な女の想いを察しろというものも、それはそれで無茶なことであつたらう。

——さて、ガゼフにしろ村長にしろ、この世界における貴重なサンブルであることに違いはない。人格的にも信頼できそうだし、長く付き合う方針で、接し方も考える必要があるか。

村に戻るなり、村人たちの歓迎に囲まれながら、モモンガは頭を切り替えていた。

人としての共感は、相変わらず感じなくても。それでも、人は愚かなばかりではないと、彼は実感と共に受け入れることができた。

ウオン・ライの心には、深い闇がある。

それは中華という文化の闇であり、中国という国の病であり、大陸という大枠にはめられた、一種の思想と違って良いかもしれない。

だが、ここで重要なのは彼の中の闇ではなく、それを御している理性である。この理性が何かの拍子にゆるんでしまえば——その時の判断次第で、いくらでも酷薄に、冷淡に、自身の暗部をさらすことができるのだった。

ウオン・ライのカルマ値はゼロ。さらに特殊な条件を揃えているため、属性でいうならば『真なる中立』である。闇魔王ヤムラージの種族特典として、この属性で固定されていた。

それは悪にも善にも偏らないということであり、同時にどちらでもありうる、という事実も示している。なればこそ、彼の行動に矛盾は

ないと捉えることも出来よう。

「そろそろ頃合いかな？ デミウルゴス」

「聞くべきことは聞いた、という感があります。ですが、せっかく確保した時間です。もう少しくらい、話していく余裕はあるでしょう」

ウォン・ライは、デミウルゴスと共にニグンへの尋問に参加していた。老獪な支配者を前にして、この悪魔はただ恐縮するばかりであったが、それでも仕事は滞りなく進んだ。

「ニューロニスト、楽しんでるか？」

「はあい。でも、そろそろ賞味期限も切れそうですね。もっと、趣向を凝らす時間があれば、別なんですけれどお」

この段階において、すでにニューロニストは実行者に過ぎなかった。ただ言われるままに、ニグンの体に『質問』し、『応え』を引き出している。

彼女（この表現が適切かどうかは置く）は、人間の扱いに関しては手抜きというものがない。生かさず殺さずの加減をよくわきまえていて、助手としての力量は確かであった。

「声が聞こえていることはわかっている。さて、これも独り言だ。――スレイン 法国の民は困窮しているのか？ 食うものに困っているのではないか？ 私は心配だな」

ニグンは寝台に縛り付けられており、わずかに手足が身じろぎする程度の余裕しかない。

拷問の痕が生々しく体に残っているが、簡単な治癒魔法で消える程度のものだ。肉体的な負担を最小限に、精神的な苦痛は最大限に。こうした仕事をさせれば、まさにニューロニストは一流だった。

「凶作になれば人は餓えるし、戦争などで需要が跳ね上がったも人々は困る。そうした地域で治安が乱れれば、さらに多くの人が困窮する。そうした事態が起こっていたら、私の心も痛むというものだが――」

彼の視界は閉ざされ、口もふさがれていた。しかし、拷問室は魔道具によって五感が鋭くなる環境が整えられており、ウォン・ライの言葉、その一語一句が彼の脳内にすべり込んでいく。



表面上、体に変化はない。すでに刺激に慣れた体は、多少のことで驚かない。思考も鈍化して、次第に対応が遅れるものだ。

これを覚醒させるのに、一番手っ取り早いのは激痛である。

「ニューロニスト」

ウォン・ライがうながすと、彼女はニグンの指を折った。

痛みを悶えながら、彼は『なんとか意思を示そうと』足首から先を横に動かした。否の合図である。

もちろん、事前に教え聞かせて、ニグンの行動を指定したりはしない。拷問らしく、それなりに適当に痛みを与えながら、お互いの反応を探り合った結果である。

これが肯定、それが否定をあらわす行動だ、と悟るまでに数時間を要したが、ささいなことであろうとウォン・ライは思う。

「さて、話し疲れたな。少し休憩しよう。——ところで、デミウルゴス。人間についてどう思うか？」

「愚かな劣等種族です。本来ならば、関わらずとも良い相手ですが、今は状況が違う。我々が支配して、導いてやるべきでしょう」

「なるほど、お前らしい見解だ。——うむ、それもありだろう。人間が本当に愚かであれば、それが人民のためでもある」

ニグンは痛みで頭が覚めていた。だから、腕をばたつかせて応える。

強い否定をあらわす、『お願いだからやめてくれ』の意思表示だった。

「だが、その時期ではあるまい。人間は愚かな者もいるが、賢明な者もいる。もし『この場にいれば』、自由に議論したいものだ。そうだな、仮に目が見えない賢者がいたら、その『目が見える』ようにして、お互いの立場を明確にして、対等に話し合いたいものだ」

ニグンの足が、貧乏ゆすりをするように細かく震えた。彼の肯定の意を、ウォン・ライは見取った。

ニューロニストに身振り手振りで合図すると、ニグンの目隠しと猿ぐつわが外される。彼は、わずかな希望を見出したような、そんな目の色をしていた。

——かかっている魔法は、融通が利かん様子だ。そして、当人の心も折れている。確認は終わったのだし、時間を浪費するのもここまでだな。

ウォン・ライは、本気で全ての情報を、これで得るつもりはない。彼に対する教育は、これからが本番だが、まずは一段落したと考える。痛みの際は、思考に踏みこむ。それは、いくらか時間をおいてからの方が、負担も軽く済んで効率的であろう。

ニグンは、どのように弁護しても残酷な殺戮者に違いはなく、どのような扱いをしてもモモンガを悩ませることのない、貴重な資源であった。

老獪な老人は、感情を封印する術を心得ている。だが、いくらか成熟しているとはいえ、多感な青年には配慮が必要だ。

相手が悪い奴なら、あらゆる行為は正当化される。倫理観も無意識に鈍くなり、自覚は薄くなる。犯罪者が拘束されるのは当然で、場合によっては死刑も妥当。

ならば、この行為も刑罰のようなものだど、モモンガはわかってくれる。何より現場さえ見せなければ、精神的に負担を感じさせず、利益につながるのだ。出来るだけ使い潰そうとして、当然だった。

「これまでだな。後ほど処置する。……牢につないでおけ」

ウォン・ライは、もうニグンの方を見ず、デミウルゴスを連れて部屋を出た。

後ろから悲鳴が聞こえたような気がしたが、聞こえないふりをしていた。

「見事なお手並みです。私やニューロニストだけでは、彼を殺してしまったかもしれません」

「……そうか」

褒められて、嬉しいようなことではない。

拷問の手並みなど、上手い方がおかしいのだ。悪魔の価値観でデミウルゴスは讃えているが、ウォン・ライの感性は人間的である。

人間でありながら、悪魔的な行為が出来る。その事実がいとわしい。友人の息子に対して、そのような本音を漏らしたくないから、不

愛想にうなずいただけで済ませた。

近しい者を傷つけたくない、と思いつながら、別の人物をさいなむ。ひどい偽善だと理解しながらも、安易な自嘲には浸りたくない。

全ては己自身の夢のために。そのためならば、多少のことは許容すべきだった。

「厄介な魔法がかかっているように、事前に分かれば手も打てる。手を尽くして、こちらで魔法を解除できるかどうか、試すでしょう。それまで、ニグンとやらには生きてもらわねばならん。——他の連中はどうしている？」

「同じく、牢につないでおります。警備は整えておりますので、逃げ出す心配はございません」

「ならばよし。人は有効に活用すべきだ。無駄は悪徳、資源は有限、無理なく進めていかねばな」

何事も、一気に発展とはいかぬものだ。都合のいい妄想で、現実はい動いたりしない。身の丈に合った成長、確かな歩みで進んでいくことの大事さを、ウォン・ライはわきまえている。

だから、先の戦闘で得られた戦果も、重視はするが過剰な期待はしない。期待に応えられないからと言って、失望もしない。それが正しい態度というものであろう。

「連中の装備品、身につけていた道具を見る限り、法国の実働部隊の水準は低い。だが、例外もあろう」

とにもかくにも情報が足りない。半端な知識は逆効果にもなりうる。敵から得た物の中には、欺瞞情報も含まれるのが普通だ。

傲慢な力押しは、こんな序盤から取れる手ではない。下手な判断はするまいと、気を引き締める必要があった。

カルネ村との関係も、これからは重要になってくるだろう。ナザリックの存在をどこまで匂わせるべきか、その点も含めて後ほどモモンガと協議するべきか。

「ウォン・ライ様。——提案がございます」

「どうした？」

「捕虜を使って、牧場を作りましょう。繁殖させれば、様々な実験に使

う余裕ができます」

デミウルゴスの意見は、聞くべきものがあつた。こうして自ら提案するからには、明確に利益が見込める、高度なプランも頭の中にあるのだろう。

彼はそこまで出来る男だと、ウオン・ライは評価していた。盟友の息子なのだから、それくらいは出来て当然だと確信する。

「……まずは見積もりを作ることだ。箱の作り方から、運営の方針まで。詳細を私のところに持つてくるように。それまでは、軽率な行動はひかえろ。良いな？」

「——承知いたしました。二、三日中には、必ず」

そのまま通せば、非人道的な経営になるのは目に見えていた。だから、彼は書面で明確に記すよう求める。そうすれば、修正も容易になると計算してのことだ。

ウルベルトは悪を好んで演じた。悪役ロールプレイというものは、洒落だとわかっていれば許容しやすいが、本気で現実に行うとなると、やり方を考えねばならない。

デミウルゴスは、本物の悪魔だ。なればこそ、ちよつとしたやり取りにも気を抜けない。

ウオン・ライは、常に人民の味方でありたかつた。人々の安寧を守り、その幸福に寄与したかつた。だから、牧場の案にタダ乗りするのは避けたのだ。

「話は変わりますが、リジンカンについて。よろしいでしょうか？」

「あれのことで、私が話を避けることはない。忌憚なく話すといい」

「では、少し。……彼がアルベドに横恋慕していることは、ご存知ですか？」

「——ああ、知っている。だが、彼女にはモモンガ殿がいる」

デミウルゴスにとつて、リジンカンは友人である。それをウオン・ライは知っていたから、話題に出ても驚きはしなかつた。

「アルベドがモモンガ様を慕っていることは、はた目にも明らかです。モモンガ様は、アルベドを娶るおつもりなのでしょうか？」

「いずれは、そうなるもおおしくはないな。時期について、明確なこ

とは言えぬが、リジンカンに目がないのは明らかだ」

アルベドはビッチ設定になっていたが、その時点でもリジンカンについては、『彼だけは男として意識できない』ときちんと書き込まれていたはずである。

どこまでも報われぬ恋に身を焦がす男、そうなるのだと決めていた。よって、これはウォン・ライの罪である。

「彼が外に出る任務に就くと、本人から聞きました。そうであるなら、一つお願いがあります。……彼に、出会いの場を作ってやっていただきたいのです」

「——あいつめ、口の軽い。いや、それはいいだろう。……それにしても、わざわざ外に求めることかな？ ナザリックの中では、それほどリジンカンは女受けしないのか」

「メイドの中でも、恋愛の対象として見る者はいません。女性の守護者たちは、そもそも彼を男として意識しているかどうか……」

不敬になることを恐れ、言葉をにごしている。そうしてデミウルゴスの態度を見れば、察するのは容易だった。

ウォン・ライであれば、ナザリック内で誰それを娶れ、と言えば否やはない。だが、恋愛ごとをそうした力技でどうにかするのは、流石に邪道というものであろう。

ここは、彼の気遣いに感謝するべきだ。息子を気にかけてくれる友人が、ここにいます。そう思えば、悪い気はしなかった。

「わかった。リジンカンには、不毛な恋に捕らわれてほしくないからな」

「ありがとうございます。これで、肩の荷が下りた気分です」

「……実は、すでにモモンガ殿には、似たようなお願いをしている。冒険者として各地を巡ることになれば、出会いも多いだろう。機会さえ与えられれば、あいつくらいの伊達男なら、異性に困ることはないはずだ」

それを聞いて、デミウルゴスは喜色満面という風だった。そこまで心配されていたとなれば、リジンカンの方も幸福だろう。

良い友人に恵まれること以上の幸運は、そうない。ウォン・ライも

また、嬉しくなった。息子の前途が明るくなったように思えて、笑みも浮かぶ。

「そうだ、これから時間があるなら、自室まで来ないか。リジンカンの奴も呼んでやろう。——モモンガ殿が表に出る分、私はナザリツクで待機する役割だからな。時間的にも、ゆとりがある」

「喜んで。酒は、メイドにでも命じて持ってきてさせますか」

ナザリツクの知恵者に、相談すべきことはいくらでもあった。日常的な、こまごまな事を決めるのにも、良い機会である。

そうした場であれば、リジンカンも賑やかしくらいにはなるだろう。あれの陽気は、それくらいの役に立つ。

ウォン・ライにとつても、息子の存在は大きかった。初めて得た、現実的な存在であるのだから、それは当然と言えるのだろう——。

## 第十章 街に目を向けて

カルネ村の事件が終息した、その次の日。

早くもナザリックの首脳陣は動いていた。外の世界へのつながりが見えた以上、とにかく行動を起こすのは確定事項。方針は定まっているから、詳細を詰めるのみだった。

「報告を」

モモンガの求めに応じて、アルベドは各種報告書を取り出した。いずれも、数分前に完成した、最新の情報である。

まず提出されたのは、捕虜の尋問に関する記述だった。これはウォン・ライが自ら作成しており、出来上がったものを最優先に持ち込んできたので、アルベドらもまだ見ていない。

「――達筆だな」

手書きの原稿は、書き手の性格が表れる。モモンガの目には、すつきりと見やすく、それでいて美しく整った字が映っていた。内容も簡潔で平易だから、わかりやすい。

読み手にとって、こうした気遣いは好印象である。営業畑のモモンガは、事務方との繋がり薄いのが、立派な書類を書く人は、だいたい高学歴だったり出世頭だったような覚えがあった。

一語一句、間違いなく綺麗に字を書くというのは、案外難しい。相應の訓練が必要とされるものだが、これは流石に官吏の一族の末裔、と褒めるべきだろう。

他の報告書も軽く流し読むが、こちらはデミウルゴスからの近況報告や、セバスからの周辺地形の調査関係など、急を要しないものばかりである。

「尋問の結果に嘘がないとしても、裏を取って確認しておきたいものだ。となると、国家の内部に入り込む必要があるが――」

「物理的に入り込むなら、エイトエッジ・アサン八肢の暗殺蟲を送り込むのも手かと。力量に差があるのなら、あれらに任せても相応に結果を出すでしょう」

「……いや、そこまで先走ることもない。腰を据えて、長い目で見るとしよう。まずは近場から探っていきたいが――さて」

手が足りない現状、はつきりした言い方は難しい。上位者の威厳を保つことを考えるなら、失敗は極力犯したくないとも思う。

目下、最大の関心はナザリツクの対抗勢力となりうる存在——近隣諸国の、具体的な内情である。そうした意味でも、捕虜の尋問は重要な仕事だった。

ただ、今すぐに良い成果が認められるものではないし、情報を引き出し終えた後は、いかに処理するかが問題になる。面倒な話だが、あまり長く飼いつけるのも考え物だ。

「ウォン・ライが戻り次第、相談するでしょう。彼にもいろいろと、苦労を掛けてしまうな」

彼の過去については、まだ聞いていない。顔を合わせると、どうしても詮索の言葉が出なくなるのだった。

——そのうち聞こう。そのうちに。急ぐようなことじゃないさ。

優先すべきは、目の前の情報である。まず注目すべきは、スレイン法国の内情に関すること。大雑把で、ニグン個人に依存するものだが、意味はある。

隊長として、相応の地位にあつたのだから、法国の戦力分析には一定の評価を与えられよう。

一国の国力を測るとなれば、たった一人の情報源など取るに足りぬ。だが、特定の分野の長からの、嘘偽りなき反応から得られたものである。

分析のとっかかりとしては、悪くはないだろう。ニグン自身については、今後思想教育を施して、ナザリツクへの忠誠を刷り込むのとだった。

——物騒な単語に聞こえるが、ウォン・ライのことだ。きつと上手くやるだろう。

不安はなかった。彼に無理なら、デミウルゴスやアルベドでも可能であろう。人間に関することでは、ウォン・ライの右に出る者はいないと、モモンガは確信する。

他の兵どもに関しても、おいおい調査を行うとのことだった。可能ならばカルネ村の一角を借りて、和やかに話し合い、情報交換に近い



形で試みたい——とのことだったが、どうなるか。

一兵卒の情報など、たかが知れているのではないか、と思わぬでもないが……ウオン・ライが自ら望んだことである。意味はあるのだろうか。

「考えることは多いが、悩むばかりで委縮しては、何も得られんだろうな。ならば、わずかでも光明を見出そうとして、動くことは正しい……か」

希望的観測だが、巧遅より拙速が正しいと信じた。ウオン・ライもそう思ったからこそ、行動を求めたのだろう。

モモンガは今でも憶病な己を自覚しているが、小さなリスクは許容できる。個人的な興味が本題とはいえ、冒険者として外に出ていくことも、そのリスクのうちだった。

「しかし、よろしかったのでしょうか？ カルネ村との折衝は全て、ウオン・ライ様が担当なさるとのこと。——人と接する心構えはしておりますし、認識は改めました。私が行って話をつけてもいいのでは、と思います」

「いや、アルベドはなるべくナザリツクの運営に集中してほしい。よく考えれば、お前を外の業務につけては、内部の仕事がとどこおったとき、迅速な対応が取れなくなる。勤務体制や警備の見直しで、しばらくは様子を見てもらいたい部分もあるしな。……万一に備えるなら、アルベドが内勤、ウオン・ライが外勤という体制が一番だと思うぞ」

カルネ村と今度、どう付き合っていくか。その点も重要だ。おろそかには出来ぬからこそ、もつとも信頼できる人物を派遣した、と言える。

先日は上手くいったが、外部との付き合いは、モモンガの悩みのものである。友好的に接したいところだが、文化、常識の違いは大きい。タブーが分からぬ以上、こちらも慎重に対応する必要がある。つまらぬ争いを起こして、情報源を失っては馬鹿らしいではないか。ウオン・ライが気にかけている様子もあるし、現に彼に任せている。上手くいけば良いのだが……今は、待つしかない。

他にも、細かな点はいくらも思いつく。色々と頭に懸念が浮かぶが、自分だけで抱えても仕方のないことでもあった。

——悩ましい。休息を含めて、冒険者として出立するのは、一日くらい遅らせてもいいな。それにしても。

人化した彼の姿を、モモンガは思い浮かべた。ウオン・ライの顔つきは、どこかで見覚えがあった。何で見たかは、微妙に思い出せないが……ともかく。

彼自身、有名人であることには、自覚があるらしかった。ユグドラシルが終わる直前の会話を思うに、本名を知れば、自分でも知っている人物なのかもしれない。

チュウ・ダーランと、実名らしきことも聞いた。ただ、どんな字で書くかはわからない。中国のピンインと、日本語の読みとでは、響きが異なる。

まして、同音の漢字もあることを考えれば、独力で正しい本名に行き着くのは、難しい気がした。この程度なら、正面から聞くのもいいか——と、思考が脱線しかけたところで、アルベドが口を開く。

「他にもご懸念などがありましたら、どうぞ遠慮なく。私で良ければ、モモンガ様の思考を整理する手助けをしたく思います」

「——ああ、助かる。まずは、この件についてだ」  
そうして、モモンガは一つ一つの報告書を確認するように、アルベドと検討を始めた。

ナザリツクの隠ぺいを含めた、警備体制の再確認。地勢や植生の面から見た世界の考察、捕虜の装備や能力からみられる国家の技術面について。

「情報をまとめた限りでは、外の世界は思ったほどの脅威ではないようです。油断は戒めるところとしても、卑屈になることはないでしょう。——モモンガ様は、思うように行動なさるべきです」

「警備は万全。周囲の状況を把握した以上、攻めこまれても容易には落ちぬ態勢は整えたつもりだ。……積極的に動くことを、ためらう状況ではないか。さて、すると出ていく前に、出来る限り内部の処理を終わらせておこう」

些事も含めれば、モモンガが決定すべきことは多かつた。中には判断しづらいものもあつたが、形だけでも方針を定めておかねばならぬ。

後々変更は出来ると思つても、組織の長に収まるというのは、これも面倒なものかと改めて認識した。

——早く冒険に出てみたいものだ。ナザリックは大事だが、期待の重みが辛くなることも、ないではないしな。

冒険者としての旅立ちには、モモンガにとって息抜きの機会でもあつた。それが待ち遠しくなる程度には、彼も仕事漬けで過ごしたのである。

昔の話だが、ウォン・ライはその気になれば丸二日、四十八時間ぶっ続けで仕事をする事ができた。会議への移動時間などを含めると、五十時間を超えることさえあつたが、当然そんな無茶の後は、ひどく心身が疲労する。

翌日は仕事の能率が落ちるし、いいことはない。——しかし、仕事中毒の人間に、そうした忠告は無意味であつた。もう、今となつては懐かしい過去の話である。

生前から激務とは親しい付き合いをしており、頭も体も酷使することには慣れてる。流石にナザリック内では、そこまで彼個人が処理すべき案件などないが、外向きの業務に関しては別だ。

運営の方針を定めるのも、冒険者となつて出向くのも、モモンガの役目。アルベドらは内務を担当する。よつてウォン・ライが担うべきは、ナザリックに最も近い外部——すなわち、カルネ村との折衝であつた。

これは外交、と言い換えても良い。それだけ、重要な仕事でもあるからだ。

「なんというか……意外ですね」

「そうかな？」

ウォン・ライは、先の騒ぎで救出した少女——エンリと、適度に会話を挟みながら手を動かしていた。

村長との話し合いは終わっており、交渉の結果として、ナザリックと村の関係はビジネスパートナーとして、協力し合うことになった。ナザリック側は、村の復興と発展のために、いくらかの人材と資源を提供する。カルネ村は情報の提供を引き続き行い、外部との交流の窓口となるのだ。もちろん、必要とあらばちよつとしたお願いも聞いてもらうことになる。

村長は、終始申し訳なさそうな顔をしていた。受け取るばかりで、恩を返せていないと思いついていたのだろう。そうした道徳をもった相手だと理解できたから、ウォン・ライの方はむしろ安心したのだが。

以後もたびたび話し合うことになるが、これからもカルネ村とは良い関係を築いていける。そうした確信を持った以上、実務的な事柄で、彼が処理すべきことは当面ない。

だからこそ、エンリと他愛もない会話も楽しめるといふものだが……。

「いえ、本当にびっくりしました。——糸紡ぎ、上手いんですね」

「困窮した時期が長いものでね。こまごまとした仕事は、たいてい出来るようになってしまったよ。機を織るための糸は、どこでも入用だったからな。……貧しい農村では、女だけではなく、男も糸を紡ぐことがあった」

ウォン・ライは、器用に糸車を回しながら、細く糸をより合わせていた。糸紡ぎとは、収穫した綿花を加工し、糸にしていく作業のことである。

この仕事は、素人がすぐに出来るような簡単なものではない。誰でもはじめは、糸が均一につむげず、太かったり細かったりする。不慣れな者はすぐに糸を切らしたり、回転する紡錘に引っ掛けてしまうことさえあるのだ。

その点、彼は玄人らしい腕前を見せた。ウォン・ライが紡ぐ糸は均一で細く、長い。上手に糸車を回し、右手で引っ張って糸を送る。そ

の手つきはまさに、長年の経験がなせるものであった。

「少人数の村で衣食を充実させるのは、本当に難しいことなのだ。そこに男女も、身分の違いもない。誰も彼もが手足を動かし、その日をしのでいく。……エンリ。私がこうした雑事に長けているのは、それだけ貧しく生きていくことであり、お前たちと同じような働きをしてきたという、何よりの証なんだよ」

エンリの妹のネムが、興味深そうに彼の糸紡ぎを見ていた。妹の方は、こうした複雑な仕事はまだ不慣れであるらしく、羨ましそうな様子うかがえた。

「どうやったたら、そんなにうまくできるの?」

「実践だ。それしかない。——とにかく、昼も夜も糸を紡ぐ努力をするんだ。私は上達が遅い方で、何度も乳母にあきれられたよ。勉強をしながら、弟たちの面倒も見て、日々の生活を営んでいくのは、実際苦労したものだ」

しみじみと、苦労をにじませながら。しかし、穏やかに微笑んで、ウオン・ライは語った。

辛苦の中にあつたのは、事実なのだろうと、エンリは思った。だが、決してこの人はそれを嫌に感じたことはないのだと、そんな印象を抱かせる表情だった。

仕事そのものを愛しているというより、実際に人々に尽くすことに意義を感じる。そうした人種を、彼女はこれまで知らなかった。

この人は、思ったより自分に近い人で、親しく付き合える人なのだ、エンリは直感で悟った。だからこそ、素朴な疑問も口に出せる。「弟さんが、いたんですか?」

「ああ、二人。といっても、かなり年が離れていたから、息子のようなものだな。それなりに問題はあつたが、とても優秀な弟たちだった。……ああ、心配はいらない。どちらも私よりは長生きするだろうし、もう孫もいる歳でね。だから、気遣いはしなくていい」

家には、少女が二人いるだけだった。先日 of 惨劇の影響は、まだ村に影を落としている。

彼女らには、保護者がいない。両親は犠牲になって、親類も残らな

かった。エンリとネムには、お互いしか頼るべきものが存在しないのである。

ウオン・ライは、それが不憫だった。多少なりとも、関わったものとして。いくばくかの繋がりを持とうと、こうして家事を手伝っている。下心もないではないが、まずは尽くすことを彼は考えたのだ。

「エンリは、機織りは出来るかね？」

「あ、はい。人並みには」

「それは良かった。私にできるのは糸紡ぎだけで、機織りは乳母に任せつきりだった。だから、そちらは手伝えそうにないんだよ」

「いえ！ 大丈夫です！ ……これだけでも、充分助けになりましたから」

糸紡ぎだけで、機織りができないというのは、一貫性に欠ける。だが、エンリは奇妙には思わなかった。

こんな人に乳母がいたなら、きつと機織りにまで時間を割かせようとは思わないはずだ。

彼には、彼にしかできない、特別な仕事がいくらでもある。だから、こんな些事につき合わせることでさえ、本当は許されないのだと、彼女は思う。

エンリも糸車を回して、二人はそれから一時間ばかり、黙々と仕事を続けた。下処理をした綿は、あらかた糸にしてみました頃に、外からお呼びがかかる。

「親父殿——と、お仕事の邪魔をしてみましたかな？」

「ちようど、一段落と言ったところだ。リジンカン、わざわざ迎えに来てくれたのか？」

「ああ、報告の伝言は受け取っていたらしいが、モモンガ様は心配性らしい。帰りが遅れるなら、迎えに行つてやれとのことだ。 ……親父殿には、無用の心配だと思いがね」

エンリの家に、颯爽とした青年が突如現れる。リジンカンが、見栄えのする男であったためか、エンリは思わず彼に目を奪われた。

恋をした、というのではない。ただ、目を引き付けるだけの何かが、この青年にはあったのだ。それは純粋な魅力とも、魔性の性質ともつ

かぬ、例えがたいものである。

「あの、その……ウオン・ライさん。この方は？」

「私の息子だ。血はつながっていないが、家族であることに違いはない」

「にしては、他人行儀な所があつて、困り者だが。——やあ、お嬢さん。親父殿が世話になつた。礼を言おう」

リジンカンは、頭を下げて謝意を示した。エンリはただ恐縮するばかりだったが、彼の方はあくまでも気軽に接する。

「まあ、なんだ。付き合つてくれてわかつたと思うが、うちの親父殿は仕事中毒でね。とにかく働きたがる。……どうせ無理を言つて、糸紡ぎをさせてもらつたんだろう？ なら、やはり感謝すべきだ」

リジンカンは、視線をウオン・ライに向けて、意味ありげに片眼をつむつた。

そういうことでもいいかな？ と、言外に指摘されているようで、義父としては複雑な気持ちになる。

「まったく。口の減らぬ子だ」

「親に似ず放蕩ばかりの子で、悪いとは思っているさ」

リジンカンは、笑みの表情を崩さなかつた。他愛のないやり取りさえ、好ましい。そうした雰囲気を感じ取れるから、誰も彼に悪感情は抱けなかつた。

どこまでも陽性の空気を振りまく男であり、いい意味でも悪い意味でも衆目を引き付ける青年でもあつた。そういう意味ではトラブルメーカーに近いが、ここではそれも役に立つた。

「お兄ちゃんも、糸つむぎ、できるの？」

ネムが、無邪気にそういつた。リジンカンに、糸紡ぎが出来るかどうか。それはウオン・ライにもわからない。

「……親父殿」

「ああ！ やつてみるか！」

だが、微妙な顔で見返してくる彼の様子から、経験なしとウオン・ライは見た。

よつて、こちらとしては良い笑顔で勧めるしかない。

「ちよ」

「うむ。ではこちらに來い。一から教えていこう。ネムも一緒に見てみようか」

「はいー」

リジンカンは何か言いたそうにしていたが、ネムが楽しそうな表情をしているのを見て、あきらめた。

今、この少女の笑顔を引き出せるなら、道化を演ずるのもよし。そうした決意ができる程度には、彼は思いやりのある青年であった。

「それで、帰りが遅れたと」

「うむ。悪いとは思ったが、これも一興と思つてな。リジンカンには割を食わせてしまったが」

ウオン・ライは帰つてモモンガと顔を合わせると、まずは弁解から始めた。悪意があつて遅れたわけではないと、言い訳をしたのである。

「俺は構わないんですがね。……結局、糸紡ぎはまともにできなかつたんですが」

「ネムは笑つていたな。あれなら、あの幼子の方が上手いぞ」

「糸車なんてものに触つたのは、初めてなもので。作成用のスキルがないんですから、紡げなくても仕方ないでしょうよ。アルベド辺りは、上手くやるかもしれませんが」

口調は恨みがましいが、リジンカンは苦笑していた。笑い話に出来るなら、そう悪い方向には転がるまいと、モモンガは判断する。

スキルがないのであれば、どちらにせよ特別な効果のない、ただの糸だろう。モモンガは器用な方ではないから、少しだけ羨ましく思つた。

「まあ、過ぎたことは良い。それより、これからのことだ、リジンカン」  
「はい、モモンガ様。なんなりとご命令を」



「お前には、これから私の供をすることになる。ナーベラルもだが、彼女とは顔を合わせたか？」

「いいえ。彼女は美人過ぎて、自分から近づくにはとても恐れ多いもので——と。それを言えば、ナザリックの女性陣全てがそうですが」  
「……そうか。なら、ここで会わせておこう。ナーベラル」

モモンガの声に応えるように、プレアデスが一員、ナーベラルが目に見える位置へとやってきた。この展開を読んで、待機させていたのであろう。こうした細やかさは、彼独自の感性によるものである。

といつても、たいした理由があるわけではない。一緒に仕事する者同士、事前に打ち合わせの一つでもどうか、と思っただけだ。

「御前に」

「ナーベラル。事前に伝えていた通り、お前は冒険者のナーベとして、私と共に旅立つことになる。その際、このリジンカンも供をすることになった。——三人パーティだ。仲良くやるように」

モモンガは、上司として振る舞うことに慣れていない。とりあえずそれらしいことを言つて、場をつないだ。あとは、二人で何とかしてくれるだろうと期待して。

「では、よろしくお願いします。リジンカン様」

「ああ、よろしく。——これからはナーベ、でいいのか？ とすると、俺も偽名を考えるべきなんだろうが」

リジンカンは頭をかしげて、考えている様子であった。

偽名というものを、リジンカンは好かない。己に偽るところなし、と言えるほど潔白な性質でもないが、名というものはこれで結構、重いものだ。

特に対象が自分自身となれば、なおのこと。それを見越して、ウォン・ライはあらかじめ考えていた。

「フェイ・ダオというのはどうだ？ お前にふさわしい偽名——いや、称号のようなものだが、ぴったりではないかと思う」

「飛刀フエイダオか。……なるほど、流星は親父殿だ。確かに、俺に相応しい」

リジンカンは、懐の短刀に手を伸ばし、触れる。彼にとつての切り札がそれであり、短刀による一撃必殺の投擲術——すなわち、『飛刀』

こそが、リジンカンの真価といって良い。

それを己の名とするならば、これ以上のものはないだろうと、納得する。

「では、そうしよう。ナーベ、これからは俺のことをフェイと呼ぶといい」

「はい、フェイ様」

「様はいらん。俺はまあ、確かにお前よりは強いが、目上の立場になった覚えもない。呼び捨てで頼む」

「……わかりました、フェイ。ウォン・ライ様の御子息に対して、不敬でなければいいのですが」

俺は義理の息子で、後継者でもなんでもない——と、リジンはナーベラルに言い聞かせた。不敬でも不遜でもないから、気楽に接してくれ、と拝み倒すように。

どこかしら、引つかかる部分もないではないが、ウォン・ライとモモンガは安堵した。とりあえず、二人の仲は良好である。これならば、仕事をする上で支障にはなるまい。

「まずは、お互いを知ることだ。これまでは、交流もさほどなかったろう。準備……というほどの準備もいるまいが、二人で相談でもしながら、外出用に装備を整えておくように」

モモンガは、両者にそう命じた。結果として適切な準備ができなかったとしても、直前に指摘すれば修正は容易である。重要なのは、ナーベラルとリジンカンが、共同で作業することに慣れることだ。

「数時間ばかり、余裕を与えよう。時間が余ったら、一杯やつてもいい。——娯楽を共有するのは、親睦を深めるのに最適だろう」

せめて、連帯感を持つという意味でも、共に作業することを覚えさせてやりたかった。彼にとつて、ナザリックの者たちは皆身内であり、友人の子供同然である。細やかに気を使ってやりたいと思うのは、当然の心理であった。

とはいえ、干渉し過ぎではあるまいかと、モモンガ自身思わぬでもないが——。

「はい。では、仰せの通りに」

「了解しました。ナーベの付き添いは、お任せください」

ナーベラルもリジンカンも、あっさりとこれを受け入れた。ナザリックに所属するものとして、あたりまえの態度である。

わずかな反発さえ感じさせぬ、完璧な礼を見せられると、モモンガも毒気を抜かれた。そのまま二人が退室するところを見送って、ウォン・ライに向かい合う。

漠然とした不安は、まだ心の内にある。否定も肯定もしづらい、微妙な感情は、ここで吐き出してしまうべきではないか。彼はためらいながらも、自身の懸念を口にした。

「……上手くいくと思うか？」

「リジンカンのことならば——冒険者フェイ・ダオを演じるのに、不安はあるまい。ナーベラルの扱いについては、今ここで心配しても始まらないだろう」

モモンガは気がかりだったが、始まってもないうちから気を揉んでも仕方ない、という意見には賛同できる。

「そうだな、それはそれとして。……村との折衝は、どんな感じだった？」

「何事もなく、無難に収まったとも。詳細については、本日中に報告書をだそう。——ああ、村の人々とも少し接してみたが、相手方の感情は悪くない。ナザリックの領地にするつもりなら、時間をかければ可能だろう」

「……魅力的な提案だが、カルネ村は王国に所属している。表だって従属させるのは下策だ」

モモンガは、現状そこまでのものは求めていない。ウォン・ライとて本気で言っているわけではあるまいが、提案するからにはすでに検討しているのだろう。その上で可能と、彼は言った。

「この世界に名を刻み、我々が生き残る証を残す。——その目的を達成することが、最優先だ。今のところ、領土拡張などは考えていない。今後、必要になるかもしれないが……その時はその時だ」

モモンガは、曖昧な言葉で濁した。領土を得てしまったら、統治を行わねばならぬ。そこまでの負担は、負いたくなかった。いずれしな

くてはならないとしても、気構えをする時間が欲しかった。

だが、村との関係が良好であれば、打てる手筋も広がる。いずれ立ち寄る機会もあろうし、その時にそれとなく村の様子を探るのも良い。

「モモンガ殿がそう言われるなら、そうしよう。現状維持、ということを決まりだ。……しかし、我々はすでに王国に戦士長という知己を得た。そして、一端ながら力を証明してしまった。いずれ面倒に巻き込まれることは、覚悟しておいてくれ」

そう言われて、ニグンらのことにモモンガは思い至る。捕虜の扱いはウオン・ライに任せていたが、最終的な処分をどうするのか。ここで明確にせねばなるまい。

「気になっていたんだが、捕虜をどうする？ 情報を集めたら、用はないだろう。すつぱりと処分しておくか？」

「モモンガ殿は果断なお方だ。もちろん、その手が一番後腐れがない」  
ウオン・ライは微笑んだ。ごく自然に残酷な手段を受け入れるのは、彼の心にも悪性が存在するからか。

しかし、善性もまた同時に内包している。だからこそ、彼は改めて口を開いた。

「だが、法国にハツタリをかましてやりたいなら、いつそ全員帰してやるのも手だ」

「……手の内を見せるのか？ 兵が帰れば、当然事情聴取される。情報流出が問題だが、それをどう防ぐ？」

「死人に口なし。洗脳したうえで蘇生制限をかけ、帰国の直後に自爆テロでも起こさせてやるのが、一番の脅しになるだろう」

この世界に死人を生き返らせる術がある以上、口封じも楽ではない。楽ではないというだけで、手段があるのは幸いであるが、モモンガは躊躇した。

道徳的な配慮ではなく、そこまで手を尽くすようなことだろうか？

という疑問を抱いたからである。テロが成功するとは限らず、ニグンらが捕縛されてしまえば、洗脳の実態やら何やらが明るみになってしまうかもしれない。彼は、それを心配した。

「難しいな。成功率は未知数だし、失敗が怖い」

「本気で脅すつもりなら、それくらいはするべきだ。それが嫌なら、スパツと殺して『見せしめ』にした方がリスクもない。——ハイリスクハイリターン、ローリスクローリターン。モモンガ殿なら、どちらを選ぶね？」

その手の二択なら、モモンガは後者を選ぶ。序盤から賭けに出るのは、彼の望むところではない。

だが、こうした言い方をしておきながら、ウォン・ライは最後に一言付け加えた。

「ただ、中間の策もある」

「……ほどよい提案があるなら、そちらの方が良さそうだな。言ってくれ」

「うむ。隊長のニグン、ただ一人を洗脳する。彼に忠誠心を植え付けて操縦し、残りの兵士を引き連れて王国に投降させるのだ。一人に集中する分、手間が省けて済むし、確実性も増す。そして近場の王国なら、監視の目も届きやすい」

モモンガは、思考に時間を掛けねばならなかった。ウォン・ライの意図を理解しかねたのだ。

「……洗脳と軽く言うが、魔法でも使うのか。魅了や支配の状態は、解除されてしまえばそれで終わりだぞ」

「そんな無粋なことはしないとも。——手を尽くして説得すれば、きっと彼もわかってくれるだろう。その点は、自信を持って保証しよう」

「そんなに簡単にいくものかな？ 人の心は頑強だぞ」

「柔よく剛を制す……と、言うのは適当な表現ではないかもしれないが、ご安心を。中華の闇は、あらゆる文化を侵食する。見事、彼の心を私の色に染め上げてみせましょう」

「——そ、そうか。うん、わかった。疑わないでおこう。……で、洗脳して、兵どもを王国に売るのはか。結果として、我らは何を得る？」

モモンガは深く考えないことにした。中華の闇、と言われれば、何でも納得できそうになるから不思議である。

だが、それは別としても、ナザリツクに得るところがなくてはならない。ウォン・ライは、何を狙っているのか。彼はそれが知りたかった。

「これは、時期を見測らねばならん。今すぐ、というものでもない。……主目的はガゼフの暗殺だが、法国が謀略を以て帝国を陥れ、互いに争わせようとした、その確実な生き証人たちなのだ。ニグンの身分は確かだ、自らの所属と目的を証明する手はいくらでもある。となれば、その証言にも重みが出てくるものだ」

「なるほど。……悪事が証明されてしまえば、法国に対して、王国と帝国は憎悪を向ける。結果として、法国は大きなペナルティを負うことになる」

「外交上の妥協を迫られるだろう。妥協しなければ、二国から宣戦布告される危険がある。そこまできかなくとも、断交の可能性は少ない。敵の出方をみるという意味では、有用ではないかと思う」

三つの勢力が存在する、というのが要点である。法国は悪を成した。王国は被害を受け、帝国は名誉を失うところであった。

敵の存在が団結を生むとすれば、悪役の法国は孤立せざるを得ない。ナザリツクは二国に恩を売って、法国を殴りやすい状況に持ち込めるのだ。

「悪くないな。——ん？ いや、しかしこうなると、法国との敵対が決定的になるか。別にそれが嫌なわけではないが、今から殴りに行く準備を整えるのも、面倒だな」

「モモンガ殿は、せっかく冒険に出る準備を整えたのだ。今更新たに面倒を抱えるのも、楽しくはあるまい。ゆえに当面は、情報収集を優先する。時間を置いて、調べた結果を見て、改めて判断するのはどうかかな？」

「そうだな……いずれにせよ、捕虜の扱い自体が外交の手札になる、か。なら判断を急ぐことはないな。連中はそのまま、牢に置いておくことにしよう」

牢の居心地は悪かろうが、それくらいの悪事は成したと思えば、モモンガに負い目はない。

決断は済ませたのだから、保留にも意味がある。生かしておけば、後で気が変わっても、その都度対処の仕様があるというものだ。

ウォン・ライは、決断を迫るようであり、柔軟な対応をモモンガにすすめたともいえる。それが何となくわかるから、彼の方も苦笑してみせた。もつとも、骸骨の顔では、上手く表現できるものではないが――。

はかりごと「謀とは、こうするものだ。いや、もちろん手管は一つではないし、最善手が何であるか、事前にわかるものでもない。それでも、何かしら感じ取ってくれたなら幸いだ」

「……面倒くさいものだ。ウォン・ライは、こんな世界を生きてきたのかな？」

「後半生に限るなら、そうだとも言える。私にとっては不本意だったが、それでも……それでも、手段を選べるほど、私は強くなかったのだ」

モモンガは、他愛のない一言のつもりだったが、彼の方はそうではないらしい。

過去の傷を開いてしまったかと気遣う一方で、やはりウォン・ライの経歴に、強い興味を抱く。

いずれ、はつきりさせたいと思いつつも、モモンガは準備にかかった。ナーベラルとリジンカンも、そのうちに済ませるはずだ。自分だけが遅れるようでは、沽券にかかわるではないかと、彼は急いで行動に移したのである。

リ・エステイーズ王国の都市エ・ランテルは要所であり、それだけに騒乱の種が絶えない。

冒険者を多く抱え込み、軍事系統の設備が整っているから、治安は良い方であるが――それでも国境が近いため、種々のいざこざに巻き込まれる。

バハルス帝国、スレイン法国の二国と接する境界にある以上、戦争

が起これば拠点となって防衛の要にもなるのだ。王国にとって軍事的に重要な地であるのは確かだが、同時に交易の観点から見ても要所である。

帝国と王国は公然と敵対しているが、人と物の交流まで完全に閉ざしてはいない。暗黙の了解として、節度のある付き合いが求められるが、断交するところまではなかなかない、というのが現状である。物流を担う商人の欲望と、お上に依存しない庶民のたくましさ、それを可能とされていた。エ・ランテルの役人たちも、民に暴動でも起こされてはたまらないから、目に余らない限りは放置するのが常である。

ゆえにこそ、定住せず自由に活動を行う職業——冒険者たちも、ここでは一定の地位を得ていた。彼らの武力をあてにするのはもちろんだが、他国にも容易に出ていける冒険者の存在は、各地の情報を収集役目も担っている。

街の冒険者ギルドには、誰がどのように活躍し、いかなる結果を出したのか、その詳細な情報が積み上げられている。これを分析することで、街の有力者は多くの利益を得ているに違いなかった。

そうでなければ、ここまでエ・ランテルという都市が繁栄するわけがなく、また王国から承認されるはずもない——というのが、リジンカンの言である。

「……よく、そこまで分析できたものだ」

「いやいや、多少市場で聞き込みを行って、そこらの組合の近くで安酒でも適当に飲んで粘れば、案外情報は得られるもんですよ。モモン殿は色々と忙しかったようなので、情報収集はこちらで適当にやっておきました」

評価していただけならば幸い、とリジンカンは付け加えた。実際、ここまで彼が切れ者であるとは思わなかったため、これは嬉しい誤算である。

モモンガは宿の手配やら、面倒くさい輩にからまれたり、気の休まる暇がなかったが……リジンカンの方は首尾よく成果を挙げている。



彼らは宿の一室で話をしていた。安宿に過ぎないが、忍び込んで密談をするには、悪くない場所だと思う。

ナーベラルも同席していたが、静かに控えている。恐れ多くて口が開けない、というよりは、そもそも話に割り込むつもりがないらしい。遠慮をしているのか、リジンカンを信頼しているからか。モモンガは確かめたく思ったが、率直にこの場で聞くのも妙な気がした。

「情報は確かに有用なものだった。単独行動を許した甲斐があったぞ。リジン——いや、フエイ。これからも、その調子で頼む」

「お任せあれ、モモン殿」

「モモンさん、と呼んでくれていいんだが」

「そっちはナーベの領分、ということにしておいてください」

リジンカンは、冒険者フエイ・ダオとしてこの場にいるのだが、モモンガと違って宿はとっていない。その気になれば不眠不休で活動できるだけに、必要性が薄いといえば薄いのである。

共に行動するなら、もっと人間らしい生活をしてほしいとも思うが、有能な者を縛り付けるのもよろしくないだろう。報酬として、一段落したら良い部屋の一つも用意せねばなるまい。

「どうも、王の権力はそこまで強くない様子ですな。ここは国王の直轄地らしいのですが、税収がどこまで国庫に入っているやら、怪しいもんです。……富裕層は、王族以上の暮らしをしている、なんて噂でも聞くくらいですから、よほど羽目を外す連中が多いのでしょうか」

「そして官憲は、羽目を外す富豪を見逃している、と。商人が逮捕された、という話は？」

「聞いたことがない、そうで。……腐敗しているのは政治か、商人か。あるいはどちらもか。難しいところですね」

商人の大富豪が、国家以上の財産を持つ、というのは地球でも例がある。だからモモンガもそれくらいでは驚かないが、富の独占が政治に影響を与えることを、初めて知った思いであった。

しかし、先入観を持ちすぎるのも良くない。リジンカンの意見は邪推に近いようにも思われるし、頭から決めてかかることはないだろう。

「さて考察の続きですが、庶人の力が強いということは、それだけ公権力が割を食っているということでもある。冒険者は、いわば権力に従属しない暴力の塊です。それが、ここまで大手を振って歩いているのなら、王の権力とやらも知れたもんじゃないでしようか？」

「……断言するのはどうだろうな。国王の懐が、それだけ大きいという証かもしれないぞ？」

「モモン殿、ここは中世です。文化的に推測するに、それくらいの水準ですよ。——で、中世において、王にとっては自分の権威と権力が全てです。それを少しでも侵すものが居れば、過剰反応せずにはいられないはず」

「——ああ、わかった。国王に力があれば、もっとエ・ランテルは締め付けが厳しいはずだと。それが出来ていないところを見るに、国王には現状を変えるだけの力がない。政府の規模が小さくなっている……ということだな？」

「おそらくは。——まあ、限られた情報で立てた、穴だらけの仮説ですがね。当たらずとも遠からず、だとは思いますがよ」

ガゼフの立場が、あまり強そうに見えなかったのも、それが遠因かとモモンガは察した。戦士長という肩書は立派に見えるが、権限はそこまで強くないのかもしれない。

経済活動に介入できない政府は、小さくまとまらざるを得ない。小さいから安上がりだが、経済を民間に依存するため、財力のある者が強い権限を持つようになるのだろう。

ただリジンカンの言う通り、これは一都市から得た雑感に過ぎない。別の地方をながめれば、また感想も変わるかもしれない。

やはり、冒険者として各地を回り、実際にこの目で見える以上の方法はないと、深く確信する。

「似合っていますな、その黒い鎧」

「——ん？　そうか」

唐突な称賛に、モモンガは少し驚くが、軽く流した。

リジンカンは、いたずらっ子のような笑みを浮かべたまま、話を続ける。

「今まで言いそびれていましたが、モモン殿には黒がぴったりだ。豪傑を演じるのは、難しい部分もありましようが、実力はあるのです。実績さえ積み上げれば、皆がひれ伏すのも時間の問題というもの」

「あまり、持ち上げてくれるな。取らぬ狸のなんとやらだ」

「……失敬。しかし、追従はお嫌いな様子で、なによりです。ナーベはどうも、忠誠心が強いあまり肯定するばかりで、対応に困るでしょう。これからは、俺もなるべく同行します。期待してくださいって、かまいませんよ?」

リジンカンの口調は、おべつかというより、軽口に近いものを感じさせた。こびて取り入ろう、などといった勝手な欲望は感じられず、悪友の戯言のような感覚である。

「自信家だな。ウォン・ライとは似ても似つかないが、それがお前の良さなんだろう」

「せっかく羽を伸ばしているんですから、親父殿の話題は、しばらく置いておいてください。——では、また明日。ナーベも、もう少し話に入ろうとする癖をつけておいてくれよ? 対人恐怖症でもあるまいし、な」

それだけ言って、リジンカンは去っていった。ナーベラルの小言を避けてのことだろう。実際、彼の最後の振る舞いはいささか礼を失していたから。

「……困った人です。明日会ったら、何と言って注意してやりましようか」

「そうだな。ま、広い心で許してやれ。機会があつたら、軽口でやりかえしてもいいぞ、ナーベ」

この後も、ナーベラルはしばらく憤っていたが、モモンガはこれをなだめた。

リジンカンは間違いなく有能であり、彼の視点から見えるものや、率直な意見は貴重であると理解したからだ。

明朝、彼らは冒険者組合に出向くことになる。モモン、ナーベ、そしてフェイ・ダオ。彼らの名が歴史に刻まれるのは、これからすぐのことであつた。

## 第十一章 冒険者として

ウォン・ライは、申し訳なきさうにうつむいていた。何しろ、勝手な都合で部下のプランを却下するのだから、気が重くなって当然である。

捕虜の扱いは、モモンガとの話し合いで決めてしまった。もともと、人間牧場の採用には慎重を要すると思っていたから、即決することとはまず無理であつたらう。

しかしそれらはこちらの都合。デミウルゴスは、真面目に完璧な牧場の絵を描いてみせたというに、今は我慢しろと言わればならぬ。

「お気になさらず。また改めて、機会をうかがえばよいこと。ウォン・ライ様が心を痛めるようなことではありません」

「いや、お前の努力を無にした。それは確かだ。……すまない。捕虜の連中は、あまり大々的に使いつぶすことができなくなった。ほかの使い道を見出してしまつてな。悪いと思つている」

デミウルゴスは、捕虜の数を考慮して、穴のない繁殖計画と牧場経営を、書面で立案してみせた。つがいの作り方から、箱の規模まで詳細に詰められている。

組織の経営と維持については、ウォン・ライも一家言ある身であるが、彼のそれは文句のつけようがなかった。もちろん、倫理的な——人道的な見地からいえば論外だが、悪魔の論理はどこまでも効率のみを追求する。

——モモンガに相談できることではない。心労はなるべく減らしてやりたいし、草案段階なら握りつぶしても言い訳が聞く。……実行に移すとなると、報告せんわけにもいかなくなるからな。

そしてナザリックの利益がすべてに優先する以上、単純に慈悲や人情けやらを示すわけにもいかない。愛すべきギルドマスターは、それが有効と理解したなら、不快であっても許可するだろう。そして、自らの決断を嫌悪しても、皆で決めたことだからと我慢するに違いない。

わずかな心労でも、積み重なれば悪影響は出る。ウォン・ライは、モ

モンガの精神を荒ませたくなかった。せめて段階を追って、成長させていくべきだと考えていた。

嫌なことを先送りにしただけ、と言われれば、そうであろう。それでもモンガには、適応のための時間が必要なのではないか。

「牧場という規模を維持するには、どうしても数がある。しかし残りの捕虜を丸ごと実験的に消費するのは、今となっては都合が悪くなつてしまった。下手に潰してしまえば、柔軟な運用ができなくなるからな」

「お二人が話し合つて決めたことです。私に異論などありませんか」

「——すまない。せつかく有用な計画を立ててくれたが、今は見送らせてくれ」

ウォン・ライは、改めて頭を下げた。その顔には苦渋がにじみ、心痛を思わず察してしまいそうな、悲痛な雰囲気を感じられる。

だからこそ、むしろデミウルゴスは焦ってしまった。この程度、何ほどのことではないのに。悪魔の頭脳からすれば、今回の件自体が遊びのようなもの。ご破算になったとて、痛手はないのだ。

それを、『部下の楽しみを奪った』くらいの軽い話で頭を下げられては、恐縮するばかりである。

「そのような……こちらこそ、お許しください。私から、勝手に申し上げたこと。そこまでに気にかけてくださっているなら、もう少し融通の利く計画にすべきでした」

「いや！ お前は完璧だった。どのような仕事でも、完璧にこなしてみせる。それがデミウルゴスという知者の価値なのだ。——控えめにやろうなどと、考えてはくれるな。お前は、そのままがいい。何ら負い目を感じることなく、これまで通りいい仕事をしてくれればいい」

デミウルゴスの牧場は、書面において完璧だった。非の打ちどころがなく、完全に、無駄なく、効率的かつ現実的な地獄を生み出すところであった。

まさに、完璧すぎたといつてよい。あらゆるものを使いつぶし、余

すところなく利用しつくす計画は、完成度が高すぎたために些細な狂いさえ許されていかなかった。

これは彼なりの完璧主義の表れであろう。それだけ力を入れて、貢献したかったに違いない。目に見える成果を出して、役に立っているという実感を得たいのだろう。

——そうした心情も見えるから、一概に切って捨てることもできぬ。うつぶんをたまらせるのは、よろしくない。『先送り』という形で希望を持たせねば、彼とてやり切れぬ思いをするだろう。

計画だけを見るなら、彼自身の運営能力と、捕虜全員を十全に使い切る状況さえ整っていれば、問題なく機能したに違いない。

優秀な男であるのは確かであった。だからこそ、自らの力を認めてもらいたい気持ちも、人一倍強いのだろう。これを無下にするばかりでは、やる気をそぎかねない。何かしらのフォローが必要だと、ウォン・ライは考える。

「いえ、こちらにも急ぎすぎました。熟慮して、案を練り直せばよいことです。今しばらくの時間を、いただけますでしょうか」

「ああ、もちろんだとも。——無理はしないようにな」

計画の修正は、おそらく容易であろう。当初予定した規模と範囲を狭めて、そこそこのものを作り直すことはできる。

ただ、その時になってまた修正が入ってやり直し、では面目が立たぬ。少々のアクシデントが起こっても問題ないよう、入念に準備しておきたいと、デミウルゴスは考えた。そのためにも、様子を見る時間がある。

そうした意思を、ウォン・ライの方も感じ取ったのだろう。ねぎらうように、付け加えて言った。

「……仕事続きで、疲れているだろう。今日一日は休暇を取るのほどうだ。差し迫った仕事もないことだし、気分転換も、たまにはいい」  
「そうですね。——お言葉に甘えさせていただきます」

デミウルゴスは、決して反感を抱いたわけではない。ただ、残念には思っているから、気分を切り替えたい気持ちはあった。

ウォン・ライの言葉には、温情が感じられた。失望されているので

はなく、ただ案じられている。そうした気遣いも理解できているから、彼の心にしこりはない。

「急な休みができる、時間のつぶし方に困るものだ。……実務を離れて、趣味に興じるのも手だ。その気があるなら、私の方から一つ貸し出そう」

「は、それは……？」

「なに、ただの余興だ。休めと命じたのだから、それなりにリフレッシューしてもらわねば、意味がないだろう？ いい話だと思いがどうか。貸し出すのは、先日の人間だが」

ニグンと言ったが、そんな名札は忘れて遊んでよい、とウォン・ライは言った。物足りないなら、度が過ぎない範囲で、つまみ食いも許すと。

さしたる気負いもない、穏やかな声である。子供におもちやを投げ与えるように、赤鬼の態度はあっさりしたものだった。

「遊びがいのある玩具をいただき、ありがとうございます」

「壊さなければ、どんな楽しみ方も許そう。気兼ねなく、休養を取りなさい」

ウォン・ライは微笑んでいた。残酷なことを口にしてしているとわかっ  
ていて、なお笑った。

そして、デミウルゴスも感謝の意を笑顔で示した。悪魔の笑みはどこまでも邪悪に見えたが、鬼の笑みには相手への慈しみ、身内への愛情が感じられるほどだった。

「ならば存分に。今日一日は、弄り回すことにいたしましょう。——なるべく、長く楽しめるようにした方がいいですね」

「ああ、教育に協力してくれるなら、願ってもない。ナザリツクに早くなじめるなら、その方が彼のためでもあるだろう。——苦痛を感じる時間は、短いほど良い。デミウルゴス。君にその気があるのなら、彼に自らの幸福を実感させてやりなさい」

残酷なまでの冷淡さと、あたたかな情愛を同時に抱いて矛盾しない。中立の属性も、見方を変えればどこまでもおぞましくなる。

その例として、ウォン・ライほどふさわしい者は、他にないであろう

う。彼はどのような残酷な行為の後でも、変わらない笑顔で子供たちを愛せる人物であった。

「はい、了解いたしました。——まこと、あれは幸福です。ナザリックにおいて、至高のお方に気にかけるほど、幸せなことは他にないのですから」

デミウルゴスは、心から享樂に浸るつもりだった。愉悅の感情が、笑みを凶悪なものに見せる。

ウォン・ライは、それを許した。彼にとっては、この程度の邪悪は何ほどのことでもない。必要な悪は許容するのが、その男の倫理であった。善行を行うのと同じ感覚で、ウォン・ライは悪行を成してしまえる。

生前、彼は二十二世紀の中国という、暗黒大陸を導いた指導者でもあったのだ。それほどの偉業を成した男が、単純な聖人君子であるわけがない。

愛情に満ち溢れていることと、外敵に対して非情であること。心優しいことと、残酷であること。それらの両立を、彼はまさに体現していたのだ。

慎重さにおいて、モモンガはそれなりに気を使っているつもりであった。

油断していたつもりはないし、臆病さは常に心の中にある。だが、どこかで傲慢であったのだろうと、彼は思い知らされた。

『文字が読めない、というのは結構面倒なもので、周囲に知られれば侮られて不利益を招く。そして文字が分からなければ、依頼書から適切なものを見つけるのは難しい。なら、人を介して依頼を得ればいいわけ———どうか、事前に話をつけられました。リーダーとして、対応をお任せしますよ』

言語の違いという事実に打ちひしがれたモモンガは、頭を抱えると



ころだったが、リジンカンの伝言によつて、気持ちを切り替えることができた。彼はいつの間にか姿を消していて、ちよつとした商談を成立させたらしい。その行動力は称賛に値するし、短時間に話をまとめる交渉力は、モモンガにとつてもいい意味で予想外である。

——状況に迷っていたから、この申し出は渡りに船というもの。まったく、よくぞ優秀な義息を持つてくれたと、感謝すべきだな。

冒険者組合に来て、さてどのような活動をすればいいかと、依頼書に目をやってみた。するとどれもこれも、モモンガに解読できる文字ではなく、独自の言語でつづられている。

手に負えないとわかると、ナーベに助けを求めたが、彼女も読めない様子であった。だから、リジンカンが早々に手を回してくれたのは、彼にとつて幸いであつたといえるだろう。

『びつくりするほどの確な行動だな。……よく気づいてくれたと褒めたいが、話がうますぎる。どうやって依頼を調達した?』

『昨日のうちに、組合には顔を出しておりましてね。あれこれと冒険者を観察して、適当な能力があつて、適度に困りごとがありそうな連中を見定めておきました。——伸びしろがあつて、ある程度の稼ぎを必要としながらも、後一步が足りない手合い。その中でも人格が良さそうで、協調性のあるパーテイを選んだつもりです。ま、気楽に接してやってください。悪いようにはならんでしよう』

彼は用意周到だつた。単独行動によつて、いち早く広く活動していたから、この手の問題にも気付けたのだろう。そして即座に対応してみせ、利益を呼び込んでくれた。

話の中には、手柄を強調するための、いくらかの誇張もある。だがモモンガの求めるフォロー役として、十分な成果である。このリジンカンの才覚は、どこから来ているのか。

華僑の商才は、日本人にも有名である。もしかしたらウオン・ライは、やり手の企業家で、リジンカンにもその才能が受け継がれているのかもしれない。詳細な設定まで把握していないモモンガは、とりあえずそのような解釈をすることにした。

「貴方がモモンさんですね? 私はペテル・モークと申します。フェ

イさんから、話を聞きました。何でも、凄腕の戦士であるとか」

「——さて、こちらの冒険者の水準はまだ把握していないので、何とも。しかし、それなりに経験は積んでいるつもりです。足手まといには、なりませんよ?」

リジンカンが連れてきた冒険者たち。そのリーダーらしき男から声を掛けられる。

紳士的で、礼儀をわきまえた人物らしかった。これなら、モモンガとしても対応しやすい。漆黒の剣、というパーティを名乗った者たちは、それぞれに自己紹介する。

名前と顔を覚えるのは、モモンガの得意分野である。初対面でも親しく接して、警戒心を解くこともまた、経験豊富な分野であった。

ちよつとした話し合いの中でも、相手への敬意を忘れずに応待すれば、より踏み込んだ話がしやすくなる。経験則として、モモンガはそれを知っていた。日本の社会人として、それも営業として職歴を重ねてきたことは、無駄ではなかったらしい。

——こちらの把握していない分野、その内容は確実に理解しておくべきだ。機会は逃さないようにしないと。

会話の最中に、生まれながらの才能——タレントについても知れたのは、思わぬ僥倖であった。他にも知らなければならぬことは、いくらかでもあるだろう。

「話は分かりました。討伐依頼を行うから、戦力の増強として、我々の力を借りたい。そういうことですね?」

「はい。フェイさんは報酬は折半でいいとおっしゃっていましたが、リーダーはモモンさんでしょうか? 問題はありますか」

「それで結構です。お互いに冒険者として、対等な付き合いが出来るのなら、それが一番いい。どうぞ、よろしくお願いします」

「いえいえ、漆黒の剣のリーダーとして、こちらこそよろしく願います。モモンさんは、装備からして只者ではない様子ですし、ナーベさんは第三位階まで魔法が使える。フェイさんはよくわかりませんが、お二人と組んでいる以上は、優秀な戦士なのでしょう。期待させてもらいますね」

相手方のリーダーであるペテルは、和やかな雰囲気維持したまま話を進めた。社交的で、他のパーティとも上手く接する術を心得ている。

いかにも中堅どころらしい冒険者である。彼らをモデルとして、冒険者のレベルを測るのもいいとモモンガは考えた。力量はもちろんだが、知識、教養なども付き合う内に引き出しておきたい。

冒険者には相応の振る舞いというものがあり、生まれ育った文化の差異もあるだろう。そうした日常的な分野は、なるべく早く知るにこしたことはないのだから。

「こちらは、もう準備を済ませてあります。モモンさんがよろしければ、これからすぐに動きたいと思っていますのですが」

「いくらか、食料の補充が出来ればと思っています。手持ちが少し、心もとないので」

「ああ、それならさつき、フェイさんが手配していましたよ。なら、心配はいりませんね」

食料など必須ではないが、カモフラージュのために、多少は必要だろうと思っていた。

だがリジンカンは、そこまで気を使ってくれたのかと、思わず彼の方を見やる。

「カウンターに用意してくれてるんで、ちよいと取りに行つてきます。すぐに戻つてきますから、それから出立ということでもよろしいですか？ モモン殿」

「ああ、そうしよう。——漆黒の剣の皆も、それでいいかな？」

彼らの方も、否やはない。決まることが決まったのなら、後は出立するだけだが……。

「あ、ちよつといいですかね、モモンさん」

「はい。ルクルット……さんでしたね。なんでしょう？」

「お三方はどんな関係なんでしょうか！ 特にナーベさんとの関わりについて詳しく！」

ルクルットの問いは、お決まりの社交辞令から、一步踏み込んだものである。

お互いの素性を知るのは大事なことだが、詮索嫌いの人間はどこにでもいるもの。紹介した以上のことは、あえて聞かないのも、付き合いうちに含まれるものだが――。

しかし、あれこれと情報を一方的に引き抜いて、こちらは何も語らない、では不公平もいいところだ。そうした負い目は、モモンガの心に良くないものを残す。

「……仲間です」

モモンガは、相手の意図を知るために、あえて一言だけ答えた。それで義理は果たしたと思うことにする。ここからどこまで突っ込んでくるかで、ルクルットとやらの器量も知れる。

共に行動する相手、その性格を知るための、彼なりの手管であった。だが、そうした思惑などぶつちぎって、ルクルットは言う。

「ナーベさん！ 貴女に惚れました！ 一目ぼれです、付き合ってください！」

鼻息の荒さから、ジョークでないことは一目瞭然であった。これにはモモンガも一瞬、思考が止まった。

ここではむしろ、ナーベラルの方が臨機応変に対応できた、と言える。

「黙れナメクジ。舌を抜きますよ？」

「ありがとうございます！ 友達から始めるということでもいいですね！」

「死ぬウジムシ。誰が友人になるって？ その挑発的な目をスプーンでくり抜いてやりましょうか」

適切な対応であったかどうかは、さておき。ともかくナーベラルは拒絶した。ならばモモンガとて、その意思を尊重したいと思う。

とりあえずこの場を収めようと、モモンガは口を開こうとしたが、それより先にペテルの方から詫びてきた。

「仲間が、ご迷惑をかけます。申し訳ありません」

「いえ、こちらこそ。……ナーベ、そこまでにしておけ」

「ルクルット、強引に迫るのはよくありませんよ」

リーダーの声を無視するほど、二人の物分かりは悪くない。

ただ、それは自重したという意味であって、気持ちを入れ替えたというわけではないのだ。ルクルットは露骨な視線をナーベラルに向け、彼女もまた蔑みの目で彼を見ている。

困ったものだと思いつながら、何とか折り合いをつけるしかないか、とモモンガはあきらめた。どうせ、そう長い付き合いにはなるまい、と思つたから。

「さ、こちらも準備は整つたぞ。物資は買い足しておいたから、あとは出発するだけかな？ モモン殿」

「ああ、リ——、フェイ・ダオ。お前を待つていたところだ」

頭を悩ましていた時に、頼もしい従者が帰ってきたと、モモンガは安心する。気休めに近いが、彼が間に入ってくれば、ナーベラルの態度も軟化するのではないか。

それくらいの期待をしてもいいだろうと、なんとなく彼の方を見やる。すると、心得ましたとばかりに微笑んで、リジンカンはナーベラルに声をかけた。

「どうしたナーベ、せっかくの美人がもつたいない。しかめつ面よりは、無表情の方がお前らしいぞ」

「……貴方には関係ないでしょう」

「そう怒るな。口説かれるのは仕方ない。美人だからな、お前さんは——どうだルクルット、うちのお嬢様は綺麗だろ？」

「おう、これまで見たことがないくらいに美人だ！ まったく、よく紹介してくれたよ！」

ルクルットの元気のよい返事に、思わずナーベラルはリジンカンを責めるような目で見た。

この結果は貴方のせいかと、問うような視線であつた。

「おいおい、紹介までしたつもりはないぞ。彼女が大層な美人だとは言つたがね。——気難しいから、付き合うのはあきらめろ」

「そりやないぜ。いい女を口説いて何が悪い。無理強いしてるわけでもなし」

「これから、一緒に仕事をする仲だ。焦つてがつつくほうが印象が悪い、だろ？ ……ま、本当にその気なら時間をかけることだ」

ルクルットとリジンカンは、友人のような、気安い会話を続けた。

その態度にいら立ちでも感じたのか、二人の会話に割り込むように、ナーベがつぶやく。

「フェイ。私はソレに付き合うつもりなど、これっぽっちもないのですが」

「無視したければそうしたらいいし、目障りならはつきり言ってやればいい。ナーベ、美人として生まれたなら、男のこうした態度には慣れる。——そのうえで、羽虫には羽虫なりの習性やら道理やらがあることも、理解できるようになったらいい」

男は馬鹿だから、美人が多少つれなくしたところで、それも魅力だと勝手に納得するからな——と、リジンカンは軽く言い放った。ルクルットも、笑ってそれを肯定した。

——リジンカンは言葉とは裏腹に、ナーベラルの想いをくみ取っている。巧みにルクルットの視線をさえぎったり、彼女の目に彼が映らないよう振る舞って、緩衝材の役割を果たしてくれている。

モモンガとして意外ではあったものの、リジンカンは確かに、自らを推すだけの能力を持っている。ナーベラルの強烈な排他性も、彼のおかげで、少しは大人しく演出できただろう。これだけでも連れてきて正解だったと、思わせるほどである。

「ところでモモン殿、追加で依頼が入ったようだ。競合するような内容ではないので、同時に受けて構わないと思うが、どうか」

「まずは、話を聞こう。その依頼人とやらは？」

「こちらだ。いや、受付嬢から、ちよつと話を聞いてね。……俺も確認したが、相応に訳ありだ」

断るのはよしたほうがいい、とモモンガにだけ聞こえる声量で、リジンカンは言った。

どういふことか、モモンガは頭をかしげざるを得なかったが、疑問はほどなく氷解する。

「ンファイレア・バレアレと申します。モモンさんに依頼をお願いします。……どうか、僕の話聞いてください」

宿屋で冒険者を吹っ飛ばした件が関わっていると聞いて、モモンガは自省せざるを得なかった。

そして薬草の採取と警護の依頼と、ンファイレアが薬師であること。それを聞いて、色々と思うところがあつたが、考えるのは後回しにした。

色々と振り返つて考察すれば、気づくことはあるだろう。だが、まずは依頼人と仕事を共にする者たちに、誠実に接するべきだった。それが、モモンガの人としての感性であり、彼なりの矜持でもあつた。

モンスター討伐と護衛を兼ねて、モモンらと漆黒の剣はカルネ村へと進路を取つた。

村に向かうのはンファイレアの事情だが、途中で森の周辺を経由するため、モンスターとの遭遇を期待できる。首尾よく討伐数を稼げば、一挙兩得と言えるだろう。

効率よく依頼をこなすための知恵であるが、実力がなければ不可能といつてよい。ただ今回、戦力は十分そろつているという自負があつた。

『伝言も含めて、外にいるうちは、俺のことはフェイ・ダオで通してください。いちいちリジンカン、と呼び直すのも面倒でしょう』

『では、私のこともモモンと呼べ。外では、冒険者として徹底するつもりだからな。ナーベラルのような、妙な呼び方をしてしまうのも、されるのも結構だ。……ついでに、敬語もいらん。ナーベラルは気性的に仕方あるまいが、お前とは対等に接したほうが、むしろ自然に見えるだろう』

ナーベラルの態度は、彼女だから許される、という感覚的な部分が大い。モモンガとしては、リジンカン——いや、冒険者フェイ・ダオには大いに期待したく思うのだ。

『これまでも、ずいぶんと気安く接していたつもりですがね？』

『外では、伝言を通じて普通話してくれていい。こういうことは、

徹底したほうがいい結果が出るものだ』

『まあ、努力しますよ。敬うよりは、親しみたいというのも本音です。……ただ、ある程度、丁寧に接する分には許容してください。結局、主従の序列が乱れてしまつては、本末転倒ですんで』

妙なところで遠慮するものだ、とモモンガは思うが、これも彼なりのけじめというものだろうと受け入れる。

身内同士の内緒話もそこに、相手方のリーダー、ペテルの方からも話しかけてきた。移動中、馬車の中は手持無沙汰で、周囲の警戒ばかりやつてはいられない。

装備品のチェックは事前に済ませておくものだから、ここはむしろ、同行者との交流を深めて、連携を取りやすくするというのが無難な手であるのだろう。

いくらかの基礎知識や、近隣諸国への雑感、ついでに魔法や戦闘の技術について軽く話し合ったあと、ペテルは神妙な面持ちで問いかけてきた。

「モモンさんは、冒険者になつてどれくらいになりますか？ 知識は浅いように見受けられますが、場慣れしている風でもある。ああ、気に障つたなら申し訳ないのですが——」

「……王国に来たのは最近です。登録したのは昨日なので、まあ、なつたばかりといつてもいいのですが。ただ、こちらに来る前は、あれこれと経験を積んできています。足手まといにはなりませんよ」

「——なるほど、他国で活躍されていた、というわけですか。いや、装備からしてただものではないと、思っていたところですよ。鎧といい、大剣といい、並みではありません。目利きが利くほうではありませんが、それでも相当高価なものだとわかります」

モモンガとしては、そこまで高位の装備を持ち出したつもりはない。見栄えるように、相応のものを見繕つてはきたが——本気で全力戦闘を行うつもりなら、さらに豪華な武装を持ち出してきていたろう。

それをあえてしなかったのは、この国における、常識的なレベルに合わせたからだつた。情報不足なので不安はあつたが、ペテルの反応



を見る限り、うまい具合にちょうど良くできたらしい。

「そうですね。しかし、私は自分などよりも、さらに凄い戦士を知っていますよ」

「モモンさんより、ですか。世の中は広いですね。上には上がいる。当たり前のことですが、頂点は遠い。……自分たちは、果たしてどこまで力を伸ばせるのか。たまに不安になりますよ」

ペテルは、視線を馬車の外にやった。遠くを見るような視線だが、警戒している風でもない。

何か、気に障ることを言ってしまったらどうかと、モモンガは不安になった。が、ここでリジンカンが口を挟む。

「難しいよな、強くなるっていうのは」

「……フエイさん」

「強くなればなった分だけ、責任が増える。できることをやらなかったと、責められることもある。少しでも保身に走ったら、それだけで非難されることもあるんだ。……強くなりすぎるのも、困り者だと思わないか?」

モモンガは驚いた。彼が思ったよりも神妙な表情で言うものだから、何があつたのかと勘繰りたくなるほどだ。

厳しい、苦い表情である。飄々とした、いつもの態度からは、想像しにくい顔つきだった。

さほど深い付き合いではないモモンガでも、この発言が本心からのものだとわかる。それだけの感情が込められているのは、なにゆえか。

「俺の親父は、それは立派な人物でね。色々なことを成し遂げて、多くの人を救った。だが、それだけ出来てしまう人だと、批判も多く受けるもんだ。『あなたなら、もっと多くの人を助けられたんじゃないか』『身の安全を図りすぎて、仕事に手を抜いたんじゃないか』……勝手だよな。あんなに強い人だからと、人々に期待されて、それで少しでも希望が満たされないと、大衆って連中は途端に非難しだす。——なあ、ペテルさん。あんたには、あんたに見合った力つてもんがある。侮辱するわけじゃないが、自分の限界は見極めたほうがいい」

「それは——」

「幸福になることは、強くなることよりずっと難しい。焦ったり、無理をしたりして、大けがしたら何にもならないだろう？　高みを目指すのは、まあ、俺たちのような冒険者にとっては本能みたいなもんだ。——だが、身の丈に合った成長をして、そこそこの成功で自分を満たしていく。そうした気持ちを持った方が、人生楽しいぞ？」

自分の父親——ウォン・ライについて、彼が語ったのは初めてのことだろう。

モモンガ以上に付き合いの浅いペテルに、その言葉がどこまで届いたのかはわからない。だが、自分たちを思ってくれている。そうした心遣いは、十分伝わったようである。

「お気持ちは、ありがたく。ですが、早々にあきらめたくもない。それもまた、本心です」

「ああ、そうだろう。まあ、なんだ。あまり気負うなよ。不安を持つのは仕方ないが、できることからやっていけばいい。……それなりの対価さえ用意してくれれば、俺だって協力はしてやれるしな」

「考えておきますよ。——モモンさんほどではないにしろ、あなたも腕が立ちそうだ」

お互いに、何かしら通じ合うものがあつたらしい。ペテルは気分を害した風もなく、微笑んで返した。モモンガには、やはりわからないが……うまくいっているならいいだろうと、鷹揚に構えることにした。

なんといつても、不景気な顔で黙り込んでいるナーベラルと比べたら、そちらの方がよほどいいと思う。

「仲間が歓談している間も、気を抜かずに警戒を続けている俺って、かっこよくない？」

「いえ、別に」

「いやいや、これでも警戒と索敵には自信があつてね。これまで何度もパーティに貢献したもんだよ。な、リーダー？」

相も変わらず、ナーベラルにアプローチするルクルット。その会話に引き出されたペテルは、苦笑しながらもうなずいた。

「否定はしませんよ。実際、優秀だと私は思います」

「だろ？——な、これで結構仕事はできるわけ。見直した？」

「モモンさ——ん。これを黙らせる許可をいただけますか？ 具体的には、一昼夜ほど」

モモンガは呆れるように頭を振って、明後日の方向へと視線を向けた。ナーベラルの人間嫌いは困ったものだが、ルクルットにも問題なしとは言えない。さりとして、これから初仕事を控えて身としては、なるべく争いを起こしたくないというのも本音だった。

しかし、彼の浮かれた言動を止めたのは、意外にもリジンカンであつた。

「ルクルット、少しを気を抜いたな？」

「ん？ フェイか、なんだよ急に」

「気を張り詰める。お前なら気づいていいはずだ。——そら、あの辺じゃないか？ かすかに気配がする」

フェイ、という呼び名になれるのに、時間がかかりそうだとモモンガは思う。

リジンカン——この場ではフェイ・ダオと呼ばれる男は、森の一角を指さして言った。それに従うように、ルクルットが目を細めて見やる。

なるほど、そこには確かに不審な影があつた。敵の種類と規模を見定めて、ようやく彼は自戒した。

「ああ、くそ、どっか浮ついてたな。……悪い」

「危険がない範囲だし、脅威とも思えん相手だから無理もない。もう少し近づけば流石に気付いたろうし、まだ余裕はある。今のうちに、準備を整えておけ」

リジンカンはすでに戦闘態勢だった。上着に仕込んでいた、いくつもの短刀を差した帯を取り出し、身に着けている。彼は軽戦士であり、むろん剣術の心得もあるのだが、一番の得手は投擲術。飛刀こそが、リジンカンを一級の凶手たらしめている。

「剣は使わないのか？」

「まあ、今回は必要ないだろう。モモン殿は優秀な戦士だ。打ち漏ら

した小物を狙い撃つなら、これが一番手間がかからない」  
「俺の弓と、どっちが優秀かね。——ま、お手並み拝見」

ルクルットは、自然とリジンカンに好感を抱いたようだ。同時に對抗心も持っている様子だが、きつとすぐに思い知るだろうと、モモンガは思う。

『見せ場は譲ってくれるだろうか?』

『ええ、わかっていますよ。——とりあえず、大物は任せます。小物は適当につぶしておきますので、ナーベラルと一緒に活躍なさるとよろしい』

リジンカンとの伝言でのやり取りも、ずいぶんと気安くなった。しかしナーベラルとは、まだ主従の関係を強く意識せねばならない。

彼女の意識の問題でもあるのだが、無理に訂正させるのも酷だろう。モモンガはナーベラルと顔を合わせて、一言だけ告げた。

「ナーベ。気を引き締めろ、蹂躪するぞ」

「はい。モモンさ、ん」

まだ反応がぎこちないが、許容範囲だろう。何より、戦闘中にボケるほど、愚かな僕ではない。モモンガは、ナーベラルを信頼すると決めていた。だからこそ、彼女に働くべき機会を与えたのだった。

敵は、半分ずつ受け持つことになっている。相手は小鬼ゴブリンと人食オーい大鬼ガだが、油断は禁物である。

モモンガにとって、これがユグドラシルの舞台であれば、難なく倒せる存在に過ぎない。しかし、現実とゲームは違う。実際に見てみると、外見だけでも様々に個体差があり、同一個体が群れて出てくることはなかった。

ある種の個性というものが、存在するのだろうか。とすると、力量にも差があつて当然。この時点で、すでに舐めてかかる気は失せている。

——考えてみれば、当たり前のことだが。

未知のモンスターを相手にしているようで、モモンガは違和感を覚えた。実際に未知といつてよい相手なのだが、かつての経験が半端に

認識を阻害している。とはいえ、自覚さえしていれば、さほどの問題はあまるまい。

「モモン殿、連中とはまだ距離がある。さっそくナーベに働いてもらうのも、手でしょう。今から仕掛ければ、相当の敵を巻き込めると思いますがね」

「ん、そうだな。開戦の号砲として、やってもらおうのもいいか。さて、ペテルさん」

リジンカンの提案に、モモンガは素早く答えた。ペテルの方を見やり、声をかける。

戦闘のタイミングを計るという意味もあるが、それ以上に自らの力を誇示する機会である。後々の宣伝のためにも、順当に段階を追って、こちらの能力を思い知ってもらわねばならぬ。

「はい。行きますか？」

「ええ。ナーベがまず、広範囲の魔法で敵を分断します。そちらは、分断された一方を叩いてください。こちらは、残りを担当します」

ペテルの問いに、モモンガはそう答えた。やれるという自信があったから、断言した。

事実、ナーベラルの実力であれば——敵がユグドラシルと変わらぬ能力しかなければ、成立する作戦である。

「わかりました。——ご武運を」

ペテルをはじめとした、他のメンバーも臆した様子を見せない。彼らで対応できる手合いなら、まず苦戦はするまいと確信する。

それでも社交辞令として、モモンガは一言だけ告げた。

「そちらこそ、ケガなどなさらぬように」

彼らは、笑顔で返した。ナーベラルは無関心なまま。リジンカンは、同様に笑顔で。

そしてモモンガは、皆の反応など確認せず、すでに戦闘へと思考を切り替えていた。

当たり前の話だが、チームプレイを円滑に行うには、技能以上に信

頼と経験が必要になる。ペテルらのそれは、まさに熟練の域に達しており、絆の深さを感じさせる。

時折援護を入れることさえ忘れなければ、ンファイレーアの護衛は、彼らの働きだけでも十分に間に合うだろう。

実力を見るに、それなりに組んで長いのだろう。互いの呼吸をわきまえていないと、細部に不備が出るものだが、彼らにはそうした様子もなかった。

——いいチームだ。まあ、羨ましくなんてないが。

アインズ・ウール・ゴウンの絆は、今もなお断たれていない。メンバーの子供たちを率いていると思えば、なおさら気も引き締まる。

自らも剣を振るいながら、モモンガは周囲に視線をやった。思考は戦闘を意識したまま、パーティーの動向も同時に把握する。

集中力の切り替えと、短期間に抑えた並行作業は、マルチタスク高レベル同士での差し合いを前提とするなら、必須の技能である。長期戦まで考慮に入れると、さらに重要度は増す。

ユグドラシルにおいて、一級の廃人とそれ以外を分けるものは、投入した金額以上にこうした経験、技能がある。想定した戦術を有効に生かすためには、何よりも自身の能力の向上、キャラクターとしてではなく、プレイヤーとしてのスキルがものをいう。

モモンガ自身、自覚はないことだが、彼のそれは最上級にまで研ぎ澄まされていた。リジンカンとナーベラルの様子を一瞬で見取り、理解するくらいは容易くやってのける。

——当たり前の話だが、二人とも有能だ。こちらの意図をくんでくれる。

ナーベラルは、開始の一発で敵を驚かせた。実際の魔法の威力だけでも、分断には充分であったが、ペテルのパーティーはそこに付け込んで強く攻め立てている。

さりとて、敵も数だけが多い。特に小鬼は、ゴリン弱い部分を見つけて攻める程度には、狡猾さもある。

モモンガは大物の相手をせねばならぬし、ナーベラルも加減させているので、打ち漏らしはどうしても出る。放置しておけば、ペテルら

に負傷者が出ることは确实だった。

「かなり、やる。連れてきて正解だな」

しかしリジンカンは、そうした敵の思惑を潰すように、飛刀で小鬼ゴブリンの喉元を貫いていった。

手に持っていた小刀が、次の瞬間には消えている。そして同時に、敵が一体倒れるのだ。時として飛んでいった刀が、一体目を貫通して二体目を刺し殺すこともある。いずれにしろ、彼の飛刀が仕損じることはない。

小刀を投擲する、というスタイルは、一般の冒険者にとっても奇異に映るものらしい。弓ほどではないにしろ、戦場に影響するほどの射程があり、しかも目に映らぬほどの速度で飛ぶ。

あのパーティーの中に、リジンカンの飛刀をとらえられるものはいない。小鬼ゴブリンにしろ人食い大鬼オウガにしろ、それは同様であった。

モモンガでさえ、戦闘の片手間では見切れなかった。それほどの技量である。

——腕前を確認できて安心した。あちらの援護は、任せてもいいだろう。

モモンガは、人食い大鬼オウガを一匹切り捨てた。味方の感嘆の声は捨て置いて、状況を見る。

旗色は、こちらが有利だ。このまま状況が推移すれば、問題なく終わるだろう。

ペテルのパーティーも、やや危なそうに見えた場面もあったが、リジンカンのフォローがあれば心配いるまい。

モモンガも、歯ごたえのない相手と剣を交えるのに、飽きてきた。とすれば、そろそろ詰めに入る段階だった。

「ナーベ、やれ」

控えていたナーベラルが、電撃ライトニングを放つ。後は、流れ作業のようなものだった。

戦闘が終わってみれば、傷らしい傷を負ったものは、誰もいなかった。

た。想定以上の圧勝と言ってよい。

「お前、すげーな。飛刀？　ってやつ？　投げナイフの名手でも、あんな命中率と威力はそうそう出るもんじゃないぜ」

「いや、まことにたいしたものである！　フエイ殿は投擲の名人であるな！　そして、モモン殿も実に素晴らしい戦士である！」

ルクルットと、ダインがまず称賛する。負傷は回復魔法で直すことができるが、節約しておくにこしたことはない。

そうした意味でも、的確にフォローしてくれたリジンカンには、感謝したくなるのだろう。もちろん、モモンガの活躍も、それに負けないくらいには印象付けられたが。

「敵いませんね、どうにも。英雄とはきつと、あなた方のような、隔絶した実力を持つのでしょうか」

「どうでしょう。そこまでの自覚はありませんが——」

「いえ、モモンさん。あなたの力は、立派に誇ってよいものです。それは、きちんと理解するべきですよ」

リーダーであるペテルも、メンバーに続いてモモンガらの実力に感嘆した。そこに皮肉は感じられず、さわやかな感情があるばかりである。

——実力の差を自覚しながら、気軽に接してくる辺り。案外、人格者の集まりと言って良いかもしれないな。

少なくとも彼らの態度から、嫉妬のような感情は感じられない。素直に感嘆し、モモンガらを称賛してくれている。

都合がよすぎるくらいで、これも己の運なのかと、不思議に思う。

『いい気性の手合いです。まあ、友好的に接しておけば、こちらの実力を適当に吹聴してくれるでしょう』

『ああ、よく見つけてきてくれた。感謝するぞ、リジンカン』

『今はフエイ・ダオですよ、モモン殿。——目的地まで、まだ距離はある。もうしばらく、気を抜かずに参りましょう』

もとより、油断などしてはいない。だが、後ろを振り返るようなことも、しなかった。

危機感には敏感なモモンガだが、パーティ内に不和は感じなかつ



た。ならば、これ以上気を使うこともあるまいと断ずる。

「本当に、モモンさんは『違う』んですね。……羨ましいですよ」

ペテルらの羨望を、些事と切つて捨てる。モモンガは、そうした鈍感さのある男であり——別の言葉で表現するなら、ある種の残酷さを持つ人物でもあった。

野営という未知を楽しみながら、モモンガ一行は順調に旅程を消化し、ついに目的地までたどり着いた。

『やつと到着だな。悠長な道程でもあったが、新鮮な経験だった。——フエイは意外と、不器用なところを見せてくれたが』

『言いっこなしですよ、モモン殿。細々な家事やら工作やは、得意じゃないんで。戦闘以外で期待はしないでほしいもんです』

そうは言うが、暇なときには木彫り細工もしていただろう——とモモンガは指摘すると、あれは自分の存在意義だからだと、彼は答えた。よくわからないが、彼の中ではそれで正しいのだろう。

リジンカンは今も懐に、作りかけの木彫り彫刻を入れている。どこかしら女性をかたどっているようにも見えたが、ともかく完成してから感想を言おうとモモンガは思う。

——人当たりはいいし、食事時も危うげなく対応して、連中と一緒に盛り上がっていた。NPCの中でも、一番人間臭いな。親の影響かとも思うが、ウォン・ライはどんな設定をしたのだろう。

とはいえ、今さら設定をのぞかせてほしい、とも言いつらい。どうせ長い付き合いになるのだし、おいおい理解を深めていけばいいかと気楽に考えた。

「あと少しで、カルネ村ですね」

同行していたンファイレアの声は、モモンガにその現実を直視させた。

すでに一度訪れていた村だが、今は立場が違う。正体がばれないよ

う、慎重に行動する必要があった。

『フェイ、少し心配なのだが——』

『ああ、俺は一度来ていますがね。……大丈夫。あの姉妹以外には、素顔は見せていませんから』

リジンカンには、村に滞在していたウオン・ライを迎えに行ったことがあり、その時のことに思い至ったのだが——。モモンガの懸念は、彼の発言でほぼ払しょくされた。

『村に着いたら適当に理由をつけて、雲隠れしておきますよ。また森に出る頃には馬車に入っていますんで、ご心配なく』

『そうしてくれ』

彼は自由人気質である。そうした行動も、許されるような雰囲気を作って、適当に抜けてくれるだろう。そう思えば、あとは自分とナーベラルの動きが問題となる。

へまをするつもりも、させるつもりもないが——と思考を進めたところで、パーティ内が騒がしくなった。その違和感には、モモンガもすぐに気付く。

「以前と様子が違う。何かあったのかな」

ンファイレーアの発言を皮切りに、様々な疑問が表に現れる。かつてとは随分様子が変わったのは、確かであるらしい。

その違和感は現実となって、パーティの行動を制限するものかと、一時は危ぶんだが——結果的に、それは杞憂に終わった。

かつて村を救ったことが、こうした形で影響してくるとは。モモンガは驚きを感じつつも、奇妙な達成感を覚えていた。

——エンリという少女、なかなかやるじゃないか。

ここは確かに現実で、自ら動いた結果が、誰かの運命を変えることもあるのだと。確かな実感を得たのは、これが初めてだった。

紆余曲折あって、モモンガ一行はエンリと顔を合わせている。主と

して接しているのは、依頼者のンファイアだが、いつこちらに話題が振られるかわからない。そうした点でも、気を抜けない状況ではあった。

問題のリジンカンだが、まさか冒険者フェイ・ダオとして顔を見せるわけにもいかず、いつの間にか姿を消している。

『何かあったら、伝言でどうぞ。すぐに駆け付けますよ』

『——ああ、そうしよう。言い訳は適当にしておく』

『世話をかけます。では、失礼』

伝言を通じるなら、モモンガとしてはたいして問題ではない。唐突にいなくなった彼を、ペテルらはいぶかしく思うだろうが、すでに実力は見せた。心配されるようなことはないだろう。

ともあれ、そうして場を取り繕いながら、一行は村の中に入った。ゴブリンらの歓待は、さほど悪影響を残さず、順調に話を進められたと言えるだろう。

「モモンガさんに、ウォン・ライさんか。エンリが助けてもらったなら、僕の方からお礼を言わなきゃね。いつ会えるかは、わからないけど」

「いい人たちだから、きつとンファイアも歓迎してくれるよ。……モモンガさんはわからないけど、ウォン・ライさんなら今日も来ているから、挨拶がしたいならすぐに会えるよ」

ウォン・ライには、村との折衝をすべて任せている。一日二日で進展があるとも思っていないが、滞在中に会ってしまったら、冒険者のモモンガとして接しなくてはならない。

モモンガとしては、距離感を縮めている自覚があるだけに、改めて初対面を演出できるかどうか、不安な面もあった。

——まあ、何とかなるか。

今からでも打ち合わせは可能であろうが、せつかく気分転換も兼ねて外に出ているのだ。その場の流れに身を任せるのも手であろうと、割り切ることにする。

「それじゃあ、後で挨拶にいくよ。薬草を摘んでからになるから、夕方くらいになると思うけど」

「じゃあ、空き家の掃除をしておくね。皆さんの宿も入用でしょう？  
食事の手配は、こちらでしておくから。……気を付けて」

エンリとンフィーレアの会話は、適当なところで打ち切られた。パーティで行動しているのだから、皆の都合もある。そもそも護衛は村までで終わりではなく、これから薬草の採取に取り掛からねばならぬ。

リジンカンはまだ戻らない。皆にはとっさに『斥候に出ているのだろう、いつものことだ』と答えておいたが、どこまで誤魔化せるものか。

——あまり、ぶしつけに伝言を使いたくはないな。彼には彼なりの理由もあるだろうし、もう少しだけ待つか？

薬草は、森の中に群生している。村を出ればそう遠くない位置であるが——ちようど出入り口の付近で、ウオン・ライの姿を見かけた。

モモンガの視界に入っただけで、挨拶するほど近い距離ではないが——何かしら、作業をしている様子だった。内勤はアルベドに任せきつているとはいえ、勤勉だと思う。

「ん？ リ——フェイの奴は、何をしているんだ？」

よく見ると、ウオン・ライの傍にはリジンカンがいた。驚いたせいとか、モモンガはつい本名を言いかけてしまった。

村を出ても戻らないなら、何かしら策を考えねばならないところで、多少は気をもんでいたのだが……なるほど、ウオン・ライと顔を合わせてしまったなら、話が弾んで時間を忘れても仕方がない。親子なのだから。

しかし、これではナーベラルを笑えないな、と思ったところで他の連中も気づきだす。

「あいつ、いつの間にあんなところに。おーい、フェイ！ なにやってんだ——！」

ルクルットが、声を張り上げて呼びかける。それで、リジンカンも気づいたのだろう。彼の方も、こちらに視線を向けた。

もつとも、このパーティに気づいたのは、彼だけではないが。

「こんにちは。ウオン・ライと申します。息子がお世話になったよう

で、お礼を申し上げます」

「ああ、いや、こちらこそ……どうも」

ウォン・ライは丁重に一礼した。物腰といい、雰囲気といい、無教養な庶民とはとても思えぬ。

「皆様方も、いずれ劣らぬ冒険者と見えます。息子はまだ未熟で、至らぬところもあるでしょう。ご指導を賜られるならば、これ以上のことはございません。——どうぞ、よろしく願います」

「お、おう……あ、うん。まあ、俺たちにできることなら、協力する——いや、します。な、みんな」

初見でルクルットは圧倒された。礼の力は、時に人を圧倒する。一目で格の違いを自覚させるのに、礼ほどの効力を持つものはない。

頭を下げているのはウォン・ライの方なのだが、落ち着かないのはペテルらの方だった。人化したウォン・ライは、容貌も立派である。服装こそ村人に合わせて粗末なものだが、あきらかに高度な教育を受けた者の態度である。

嫌味さなど欠片もなく、好意的に礼を示されているのだ。ここまで丁重に、礼を尽くされた覚えなどない彼らは、戸惑いを隠せなかった。「もちろんです。冒険者の先達として、できることはいたしましょう。どうか、顔を上げてください」

「——ありがとうございます。父として、息子には大したことはしてやれませんでした。皆様に礼を尽くすことで、いくらかでもあれに良くしてくれるなら。頭を下げることにくらい、何ほどのことでありましようか」

モモンガは黙っていた。この時点では、どう接してよいか、わからなかったからである。

彼は伝言でモモンガにあれこれと話すこともできたはずだが、何もなかった。だがここでは、反応を示さないこと自体が答えになる。

——どう接しても、完璧に答える用意があると、そういうことだな？

ならば、静かにしていようと、モモンガは思う。彼らとの会話をしばらく観察していると、ウォン・ライの傍に人が寄ってきていた。彼

は彼で、村人たちに復興の工事やら耕作やらの指導をしているらしい。それもまた、援助（あるいは投資）の一環と思えば、むしろ推奨するべきか。

頼りにされているのは明らかで、彼が指導に戻ることを期待している様子であった。これなら、あえて口を挟まずとも、話しは適度なところで切り上げられるだろう。

そうと察すれば、口出しせず流れに任せるのが無難なところか。

「親父殿。そろそろ居たたまれなくなってきたから、いい加減切り上げてほしいんだが」

「そうか。——では、そうしよう。皆様、くれぐれもよろしくお願いいたします」

ペテルらのパーティは、気恥ずかしそうに挨拶して、別れた。ンファイレアも面と向かって礼を言われたようで、少しだけ顔が紅潮している。

「いいお父さんですね」

「よしてくれ。過保護なだけだ。……まあ、親父殿は、俺以上に人民に甘い。別に特別、俺を愛しているわけじゃないさ」

リジンカンの言葉に寂しさを覚えるのは、モモンガの洞察力が優れている証拠であろうか。いずれにせよ、口に出して確かめる勇氣はなかった。

馬車は森に向かっていく。ウオン・ライの姿も見えなくなった。人は感心するほどの相手に出会おうと、当人が見えないところであれこれ語りたくなるものだ。自然と、話題は決まってくる。

「よくわからないけど、なんとなく、威厳のある人だったな」

「立派な御仁に見えたのである。人々に奉仕することを、心から望んでいる人なのであろう。実に楽しそうに働いて、よく村人たちに声をかけていた。人々と対等の目線で、よほどの思いやりがなければできぬことである」

わずかな時間であったが、他者に感銘を与えるほどの人格を、ウオン・ライは見せたらしい。モモンガは本物の彼を知っており、付き合いも長いせいか、さほどの意識はしなかったのだが。

「フエイが自慢したくなるのもわかりますね。……何をしてきた人なのか。どのような人生を歩んできたのかは、理解が及びませんが——ともかく。きつと、尋常の人ではないのでしょうか」

「元貴族なのかな。あの礼の作法は、教育を受けた人でないととてもできない。……王国の貴族の中にも、ああした人がいればいいのに」馬車の中が、彼を称賛する声に満ちた。モモンガも誇らしい思いだが、話に入ると余計なことまで言ってしまうそうなので、やはり口をつぐんだ。

——さあ、仕事だ。頭を切り替えよう。

予想外のこともあったが、ンファイレアの護衛はこれからだ。これで気を抜いていては、真面目に仕事をしているウォン・ライにも申し訳が立たぬ。

モモンガは、今後の行動に対して、思いをはせた。英雄たる道は、これから始まるのだ。そのための手は、整えてある。

あとは失敗しないことが肝心だと、気を引き締めた。英雄モモン、その軌跡が語られるのは、まさにここからであった。

## 第十二章 奉仕者

ウオン・ライは、カルネ村への投資を主導していた、と言える。本人が村に出向き、実際に復興を指導しているのだから、相当な力の入れようだった。

モモンガであれば、村人に同情はしても、直接的な手助け——現場での労働などは忌避するであろう。他にやるべきことがある、そこまでの義理はない、と考えて。

それは確かに正しいのだが、ウオン・ライはモモンガほど村人たちを突き放せなかった。同情を超える共感が、彼をそうさせた。

——人民に奉仕する。まさに、彼らの従者サブバンのように尽くすのだ。

底辺の農民の苦悩を、彼は知っている。人々が日常的に感ずる、現実的な苦しみを、ウオン・ライは若いころから見てきたのだ。

そして彼自身、実感している。だから、眼の前に困窮する者たちがいたら、どうしても助けてやりたくなる。

——飢えの苦しみを知る者は、同じように飢えた人を見捨てられない。子供を失った親は、同じ苦しみを抱えた相手がいると知れば、慰めようとするだろう。これは、そういうことだ。

とはいえ、指導するといつても、そこはやり方がある。いくら村にとっての恩人でも、上から目線で押しつけて良い道理はないのだ。それをわきまえている彼は、まず形から入ることにした。

「やあ、村長。作業は順調かな」

「これは、ウオン・ライ様。このたびは何用でしょう」

「なに、ただ村の復興を眺めているばかりでは、どうにも据わりが悪くてな。私にできることはないかと、考えているところだ」

「……今は、荒らされた畑や建物を修復しているところです。欲を言うなら、防衛用の柵も村の周囲に巡らせたいのですが、そちらには手が回りません。エンリが何やら、ゴブリンたちを呼び出したとかで——彼らに任せてはおりますが、どうでしょう。それなりに、上手くやれてはいる様子ですが」

村長に進行具合を聞けば、やはりいくらかの不安要素があるらし



い。柵は外敵への備えとして、とにかく被害を受けた村人たちの精神を落ち着かせるためにも必要だった。

頑丈さより、防壁に守られている、という安心感を皆に与えたい。村長はそうした気持ちで言っているのだとわかる。そして、言葉には出さなくとも、エンリらに複雑な感情を抱いていることも。

復興への手助けにはなる。実際に行動してくれている。しかし、それが村のものではない、外部の者——それもゴブリンであることが懸念されている。

異民族への蔑視、というほど深刻でもあるまいが、こうした寒村では、仕方のないことであろうとウオン・ライは思う。

「そうか。……忙しい事情は理解した。女子供は、どうしている？」  
「手伝えるところは、手伝ってもらっていますよ。家事も女どもの仕事です。子供たちは……難しいですな。利発な者は、どこでも使えるのですが」

村長は言葉を濁した。その理由を、なんとなく察する。

なにしろ襲撃から間がないのだ。身内を失い、心を病んだ子供たちは、食い扶持だけを消費する負債になる。真面目な話、立場の弱い老人や子供は、苦境に陥れば真っ先に切り捨てられる対象だろう。

若いころの経験から、これをウオン・ライは身に染みて理解している。だから、手を差し伸べることを躊躇わなかった。

「では、手が空いている者を使わせていただいても、構わないだろうか。働く気力を失った者を立ち直らせるには、まずは強引にでも仕事をさせてやるのがいい。自分が必要とされていると、しつかり自覚させてやるのが、一番の薬になる」

「……ありがたい話ですが、そこまで負担させては、申し訳なくも思います。我々はいつたい、そのご厚情にどう答えたらよいのでしょうか」

村長は、相も変わらず恐縮していた。それを笑い飛ばすかのよう  
に、ウオン・ライは努めて明るく言った。

「気にしてくれるな。やりたいから、やっているだけのこと！ だからどうか……気に病まず、幸福であってくれ。せめて目に見える範囲

だけでも、人々を幸せにしてやりたいと、そう願う。そうであればこそ、私も働き甲斐があるし、生きている甲斐もあるというものだ」

まあ、老人の道楽というやつだよ、とウオン・ライは軽く言い放つ。しかしそこまで利他的な欲望を、ごく自然に口にできる彼は、一体どのような人生を送ってきたというのか。村長には想像もつかず、言葉が出ないままであった。

「まあ、なんだ。……この年になるまで、苦しむ人々を、それこそ精神が摩耗しかねないほど多く見てきた。汚職官吏に苦しむ者、村の悪人に苛まれる者、農民だというだけで、抗う力を持たぬというだけで、虐げられる人々……。そういった人民を、泣きたくなくなるほど多く知っている」

私は、彼らの悲しみを背負うことで生きてこられたのだ、とウオン・ライは語った。

そして、これ以上はもう背負いたくない、と。積み重ねるなら、もっと楽しい方がいい。人々と喜びを共にして、笑いあえる世の中であつてほしいと述べた。

「だから、せめて、ここでは幸せでいてくれと願うのだ。——どうか私に、あなた方を救わせてほしい。そうすることやっとならば、私も救われた気持ちになれる」

私はあくまで、自分自身のためにあなた方の力になるのだ、とウオン・ライは付け足した。

それを聞いて、村長は彼の心の底に潜む闇を、垣間見た気がした。きつと、想像もつかぬほどの、おぞましい悪意にさらされた経験があるのだろうか。そうして出来た心の傷を、今も抱えて苦しんでいるのか。

そこまで察したからには、この好意を断る方が無礼と言える。むしろ、遠慮なく甘えてこそ、その好意に報いることができよう。

「ならば、お任せします。私は、あなた様がなさることを、すべて受け入れます。だからどうか、我々を助けてください。……重ねて、申し上げます」

「良いとも。是非にも、助けさせてくれ」

ウオン・ライは微笑んでいた。その笑顔の中に、どれほどの感情が秘められているのか。村長は、やはり理解することはできなかった。

手が空いている者は、子供に限らなかつた。いくらか、体格の良い大人が含まれている。この辺りは、村長が手をまわしてくれたのだろう。最低限でも仕事ができるようにと、気遣いをされている。

さりとて、大半が力仕事には使いつらい、成長期すら終えていない子供たちであることに、変わりはなかつた。

——人民に奉仕するとは、単純な労働だけに限らない。人々の求めに応じ、その願望を満たしてやること。この世には救いがあるのだと、そう教えてやるのが、何よりの薬となることもある。

仕事自体は、他と変わらぬ。焼けたり破損した家屋の修繕、荒らされた畑の整備が主である。

指示をされれば、その通りには動く。しかし動きが鈍いのは、精神の傷が体を重たくさせるからか。そうした症状には覚えがある。ゆえにこそ、対処もわかつていた。

まず余計なことを考えられぬ程度に、体を動かさせる。一通りの作業を終えると、いい具合に疲労がたまってくる。すると自然と、時間も飯時になった。

そうして、昼食を共にする。寒村では食材も知れているが、ウオン・ライは貧乏舌だ。栄養補助食品だろうが、未熟なモロコシだろうが、問題なく食することができる。

同じ釜の飯を食う、という諺があるように。食事を共にすることは、帰属意識を高めさせるものだ。平たく言えば、親近感を持たせるのに良いのである。

「ウオン・ライさんのような、品のいい方には口に合わないかもしれないかもしれませんが……」

「なに、雑草の煮込みでも口に入れた私だ。ひどく苦く青臭いアレに比べれば、穀物の粥は十分ぐちそうだよ」

「……それ、食べられたんですか？」

「ああ、まあ、三度は口にしなかつたよ。体にも悪い。まっとうな食べ物と比べるものでは、やはりないかもしれないな」

食事当番の若者が、遠慮がちに声をかけてくれた。村人の食事は、舌の肥えた人にはつらいだろうという気遣いである。実際、この国の標準で言えば、いくらか貧しい食事と言えた。

村人のだれもが、ウオン・ライを貴族と信じて疑わなかつた。それだけの貫録を感じるからだ。そうした人が自分たちより酷い食事をしてきたと聞けば、少なからず驚く。

——老いてからは、粗末な合成食品の味にも慣れた舌だ。自然食品など、いつぶりに口にするのだらう。

現実の地球では、もはや食せる雑草さえ存在しない。決していい思いで出ではなかつたが、それを懐かしく思い出しながら、ウオン・ライは努めて明るく言った。

「それとも何かね、君たちは、こんなおいしそうなものを独占しようというのかね？　少しぐらいは、この年寄りに分けてくれてもいいじゃないか。そうだろう？」

食料の備蓄は、余裕がある。若者は粥を一杯盛って、ウオン・ライに差し出した。

彼は、顔をほころばせながら、うまそうに粥を口に運んだ。音一つ立てず、味わって食す。

村人たちにとっては、ありふれた食事に過ぎないが、ウオン・ライはおろそかな食べ方はしなかつた。

乱暴に、粥をかきこむことしか知らない若者たちは、食事の作法にうとい。うといからこそ、感じ入るものもある。目の前にいる貴人は、こちらの目線に立って、こちらの価値観に寄り添ってくれていると、様子を見るだけでわかる。

「おいしい、ですか。親と比べると、炊事は得意じゃないんで……」  
「ああ、美味いとも。君たちも一緒に食べようじゃないか。今度は私一人で独占しているようで、申し訳なく思ってしまう。——さ、座つて」

いつの間にか、ウオン・ライは彼らの輪の中に入り込んでいく。

若者たちの中に、壮年の男が一人いる。浮いて見えても不思議はないのだが、誰も彼がここにいることを、当たり前のように感じていた。上下関係を感じさせず、するりと他人の意識に入り込む。具体的に言動がどうか、雰囲気かどうかという話ではなく、ごく自然な所作で、彼はそうすることができた。異才、と言つてよい。

「仕事はつらいかね？ 村を立て直すまで、今しばらくは重労働が続いてしまうと思うが……」

「いえ、そうでも。体を動かすのは、嫌いじゃない、です」

「そうか。いいことだ。せつかくの健康な体、活用しなくては損というもの。——丈夫に生んでくれた親に、感謝しようじゃないか」

「あ、はい。……そう、ですね」

「私も、君たちの両親に感謝したい。よき若者を、私の前に送り出してくれたことを。……わかるとも、よい両親だったのだね。年長者としての礼儀が、きちんとできている。私に対して、という意味じゃない。年下の子供に対して、年長者がいかに振る舞うべきか。いかに見本となるべきか、わかつているように見えるよ」

教育において重要なのは、洗練された礼法とか、学識とかではない。子供自身に、幸福になるための道筋を示すことだ。そのために必要な技能、知識を与えることだと、ウォン・ライは語った。

「君は、炊事を不得手という。しかし、こうしてどうにか、ありあわせのもので食事をこしらえたじゃないか。調理の技能は、まだ追いついていないかもしれないが——必要十分の成果を出せた。それだけの、努力をしてくれたのだ。他人への思いやりがなければ、そこまで出来ることではない」

君自身のやさしさが、そうさせたのだろう。そう、彼は付け加えた。褒められた若者自身としては、赤面するしかない。そこまで評価されることなどは、思っていなかったから。

とはいえ、好意を言葉にされれば、口も軽くなる。ウォン・ライはこれをきっかけに、様々な話をした。傍にいる子供たちに限らず、場にいる全ての者たちに語り掛け、向き合い、ゆつくりと彼らの気持ちを持ちを理解していった。

食事が盛られた器は、空になった。そのうちに、貧しい粥は全員の腹を満たしていた。

「君たちは、これまでよく生きてきた。だからこれからも、充分生きなくてはいけない。両親から受けた愛情を、君たち自身の手で、君たちの子供たちに伝えなくては、不義理というものだろう。……そうして、日々を懸命に生きて、幸せになってほしいと心から願う。親というものは、いつだってそう考えて、家族に接するものなんだ」

ウォン・ライに慈愛の心があるとすれば、それは実に効果的に作用した。限られた時間だったが、一人一人に語り掛けて軽く話し合えば、皆が皆、生氣を取り戻していく。

言葉だけで、人格が変わるわけではない。少しだけのやさしきで、全てが救われれば世話はない。

だが、一時を安らかに生きることではできない。心の重荷を下ろして、穏やかな空気に触れれば、己を含めた周囲をかえりみる余裕ができる。

そうすれば、生きる意志も、自然とわいてくるというものだ。人間は、後ろ向きに生きるよりは、前向きに生きたいと願うもの。きつかけさえあれば、悲しみに沈んだ心を浮き上がらせるのは、難しいことではなかった。

——今は調子が落ちていたとしても、本来は元気でたくましい若者たちだ。働く意欲が出てきたのなら、ほどなく立ち直ることだろう。彼らは仕事を再開すると、見違えたようによく働いた。お互いに励ましあつて、いきいきと動いているさまを見ると、子供と言つて侮るのはよくないと、改めて思う。

ウォン・ライは、彼らのそんな姿を見て、うれしくなった。己の言葉が届いたから——ではない。ただ単純に、人々の明るい姿がまぶしかっただけだ。

彼らは、もともと健全だった。良い家庭、良い隣人に恵まれ、健やかに育った。そうであれば、愛郷心など自然にはぐくまれる。

やるべきことを自覚さえすれば、迷うことも悔やむことも後回しにして、がむしやりに生きることができるのだ。そうした彼らの姿が、

ウォン・ライには愛しかった。

——この小さな村でも、人間関係は良好だったらしい。日常的に付き合いがあつて、誰もが顔見知りだから、連携もうまくいく。彼らの様子を見るに、悪人らしい悪人はいない村だったのだな。

こうなれば、彼の仕事など見守るくらいしかかない。どうしても協力し合わねばならぬ、力仕事だけは手を貸したが、それでも必須というものはあるまい。

ウォン・ライは、知らずと笑っていた。見違えるほどの、言葉にするのが惜しくなるような、清らかな微笑みであつた。

「……どうしたね。この通りの年寄りだが、気兼ねはしなくていい。作業を続けようじゃないか」

そうして、彼らは仕事を続ける。村の復興は大事だが、それ以上の大事があつたように見えたのは、気のせいであつたのか。

ともあれ、疑問をさしはさむ余地がない程度には、やるべきことは山ほどあつた。

供給する物資は、そのすべてがウォン・ライの私物である。ユグドラシル時代にため込んだ物資（かのゲームには、食料品や資材の類も、多種多様に用意されていた）は相当な量があり、寒村の蓄えに費やしても、まったく問題にならぬほどである。

しかし、あらゆる物資が無尽蔵にあるわけではない。使えば減る。補充されねば、いつかは尽きるのが道理だつた。

——これは、代償行為だ。現実で出来なかつたことを、完璧にやり遂げたいという欲望。抑えがたく、抗いがたい欲求が、私を突き動かしている。

ウォン・ライは知っている。思い切りの良さは、時に無謀な決断も容易にさせてしまうことを。感情や欲望を律することを美德とする、儒教的価値観から言つても、これは好ましい傾向ではない。

慎重さを投げ捨てた投資は、財産を投げ捨てる蛮行にほかならぬ。

だからこそ、物資の投入には明確な目的と計画を持ってされるべきだった。今していることは、その原則から外れているのではないか。そうした疑念を、常に己に投げかけている。

——まだ大丈夫だ。行きすぎてはいない……と思いたいが、どうか。

村への投資は、長期的な事業になる。長い目で見て、ゆっくりやっけていくのが一番ではないか。そうは思いつつも、つい性急になってしまいがちなのが、現実というものだ。

自己のみの判断では、時として都合の悪い事実を無視することもあろう。今日の作業が終わったら、アルベドあたりにでも相談を持ち掛けるのもいい。

一番の相談相手はモモンガだが、外に出ている彼を巻き込むのは気が引けた。報告書は後日出せばよく、即日で知らせるほどではあるまい。

モモンガは冒険者として、新鮮な体験を楽しんでいるであろう。そこに実務的な仕事を持ち込んで、無粋というもの。

カルネ村の復興作業も、今のところ異常はなかった。ならば、今は目の前の仕事に集中すればいい。そう、結論付けたところであったが。

「奇遇だな、親父殿」

「……リジンカンか。何かあったか？」

「格別は、なにも。モモン殿に従って、仕事として村に来ていてね。……見かけてしまったから、つい声をかけてしまった。その程度のことだと思ってくれ」

思わぬ再会であったが、そういう事情であれば、顔を見せに来るのも自然な流れであろう。それでも接近に気づけなかったとは、いささか油断しすぎていたか。

「ああ、ちょっと気配を消して近づいてみたんだ。だから、気づかなかったとしても、無理はない。……こんな、のどかな村だ。常時警戒することもないだろうさ」

リジンカンは、下手な笑顔で養父に接した。遠慮がないくせに、己



への態度はどうも妙な感じがした。現実では息子など持たなかったためか、どうしても違和感をぬぐいきれない。

電子上のデータではなく、実際に生きているのだから、微妙な差異はあつて当然だとも思うが——さて。

「あの方が近くまで来ているのか。しかし、お前は傍を離れてもいいのか」

「安全を確認せずに遠出するほど、俺は不誠実じゃあない。それに今は、席を外した方がいい状況でね。……嘘じゃないとも。息子を信じてほしいもんだ」

「リジンカン。私はお前を疑ったことなどない。頼むから、茶化してくれるな」

「ああ——悪かったよ。冒険者モモン殿は、護衛の依頼を遂行中だ。俺はその付き添いで、いくらか貢献させてもらっている。親父殿が心配するようなことは、何もないさ」

ウオン・ライは、厳しい表情を崩さなかった。

リジンカンも、能面のように笑顔を維持していた。

「ここに私がいることは、わかっていたはずだ」

「そして、俺がここに来ることを、親父殿は知らなかった。当然だな。モモン殿が、この村への依頼を受けなければ、こうも早く再会することとはなかったろう。意外と言えば意外だが、言つてしまえば些事だ。大勢に影響はない、そうだろうか？」

「……確かにそうだが、意味ありげに言うことか。私たちは親子のはずだ。持つて回つた言い方をする必要はあるまい」

何かしら雰囲気を感じたのか、周りで作業していた村人たちは、邪魔をせぬようにと離れていった。村人たちに聞かれたとて、どうこうなる内容ではない。それでも、彼らには温情を施されている側だという自覚がある。

万が一にも不都合があつてはならぬ。身内同士の話し合いなどは、聞かなかつたこととして、耳目を閉じようとするは、当然の態度であつたらう。

そこまで仰々しく構えずとも——と、ウオン・ライは言いたかつた

が、これは彼らなりの好意、あるいは好奇心か。

リジンカンという、見慣れぬよそ者に対して、どういう反応をするのか。そもそもどのような関係なのか、遠目から観察したいのだろう。親子ではあるらしい、と会話からは判断できるだろうが。

「……お前は、何がしたいのだ？」

「哲学的な問いだな、親父殿。その質問には、やりたいようにやるさ、と答えるしかないね」

とはいえ、そうした他人の目など、今は気にすることではない。

いささか短絡的だが、ウォン・ライは率直に問うた。その返答は、どうにも抽象的であったが。

「おい、リジンカン。私が聞きたいのは、そういうことでもないのだ」「もちろん、わかっている。ああ、わかっているから、今はこう答えるしかないんだ。……モモンガ様への忠誠は、尽くす。それだけは約束する。だから、理解してほしいんだ」

親子と言っても、内実は微妙なものである。身内としてお互いに認識しているものの、距離感はやや遠かった。実際、親子として接した時間など、皆無に等しいのだから仕方がない。

「理解とは？」

「俺は、俺の感情に正直に生きる。生き方を曲げることはできない。……だから、明言しておきたい」

それだけに、リジンカンの言葉はウォン・ライの心に響いた。本気の言葉で、真心の発露だと察せるだけに、真面目に受け止めようと思う。

「俺は忠義をたがえない。俺は親子の情を裏切らない。そして、愛する人への想いを捨てない。——大丈夫だ、親父殿。あなたが心配するようなことは、何もないんだ。本当に」

「疑ったことはない、言ったはずだが？」

「誤解しないでくれ。これは、ただの念押しなんだ。——疑念のあるなしは重要じゃない。一応、面と向かって明言したほうが、後腐れもないだろうと思っただけ」

彼が明言する以上、その内容に疑いをもつべきではない。余計な嘘

など、吐かぬように作ったのだから。

だが、彼がここまで仰々しく語らねばならぬほど、状況は切迫しているのだろうか。ウオン・ライにはわからなかった。

あるいは、リジンカンの気まぐれであろうか。そうであるとしたら、いちいち深く考えることではないかもしれない。

「俺は、身近な身内の中で、一番苦しんでいる人の助けになりたい。叶うことなら、その人の周囲に広がる、大きな輪をも守りたい」

「輪？ それはあれか、人間関係の輪、という意味か」

「和と言ってもいいな。モモン、いやモモンガ様は大きくなる。必ず大きなことをして、その世界を広げていくはずだ。……あの人の、幸福の手伝いをしてやりたい。親父殿も、まさか反対はなさるまい？」

そう言われれば、ウオン・ライとしても否定のしようがない。実際に感じていたところであるから、むしろその望みが好ましくさえある。

「和、和か。……和して同ぜず、の一節を思い出す。君子として、理想的なふるまいだ」

「あの方は、立派な君子になる。もしかしたら、堯舜にも匹敵する王になるかもしれない」

「……君子は、仁を目標とする。だが、堯や舜に匹敵するともなれば、仁どころではない。『聖』と言うべきだ」

「そいつはいい。聖王モモンガ！ 素晴らしいじゃないか。そうだろう？」

まさに理想である。だが、こうして楽し気に喜んでいるリジンカンの本音は、一体どこにあるのだろうか。

先ほどは正直な言葉を聞いた。それは確かであろうが、肝心な彼自身の欲望がどこにも見えてこない。気分屋のお人よしであることは確かだが、善と定義するには、いささか曲者過ぎるのがリジンカンという男である。

その精神の悪性を見極める、とはいかずとも、せめて欲望の方向性くらいは見定めておきたかった。おそらくそれは、設定だけでは測れない、生身の感情であろうから。

「ごちやぐちやと考えている顔だな。……俺は、あんたの写し身だよ、親父殿」

「——む」

「ま、深く考えるもんじゃないってことさ。要は、あんたの息子は、親の意を汲めるいい男だってことでね。話はそれだけだが、親父殿の方からは、何かあるかい？」

ウオン・ライは、この察しの良すぎる息子を、どう扱うべきか悩んでしまった。

結局、以後は意味のない雑談を適当にかわすだけで、なんら建設的な話はできないまま——ついに、モモンガと再会する。

「こんにちは。ウオン・ライと申します。息子がお世話になったようで、お礼を申し上げます」

モモンガだけではなく、パーティの仲間たちとも顔を合わせて挨拶する。実際、初対面の相手として接するのだ。礼儀をわきまえねばならぬと思い、つつしんで対応した。

それが、不思議な感心を買ったらしい。少なくとも、悪印象は持たれなかったはずだと、ウオン・ライは思う。

人柄はいい様子だった。そもそも見込みがない相手と、モモンガらが付き合う理由はない。だから、これからの結果も期待していいだろう。森の中へと向かっていく彼らを見送ると、ウオン・ライは若者たちと共に、再びを作業を再開した。

——もう少ししたら、今日の作業も終わりにしようか。そうしたら、解散させてねぎらって、明日使う資材を用意しなければ。これでは、モモンガ殿にかかわっている暇もないか。

おそらく、モモンガが戻ってくる頃には、己はナザリックに戻っているだろう。そう思うと、少しだけ寂しくなった。

森の賢王やらンファイア関連やらで色々あったが、ともあれ仕事

は完遂できたことに、モモンガは安堵した。

カルネ村ではそこそこに歓待もされたが、ウオン・ライと話せなかったのは残念でもあった。

——いや、しかし、今は冒険者モモンな訳で。距離感がつかみづらいな。まあ、どうにでもなっただろうとは思うが。

エ・ランテルに戻ると、ペテルらとはすぐに別れた。組合の申請も含めた雑務の処理もあり、自然な成り行きでそう決まったのだが。

「俺も連中についていきますよ。こちらからも、一人くらい手伝いに行かせた方が、印象も良くなるもんです」

こっそりと、耳打ちするようにリジンカンが言った。そう言われては、モモンガも行くなどは言えぬ。彼を送り出して、モモンガはナーベラルや賢王と話しながら、組合に向かった。

別に、何かを期待していたわけではない。名声を高めるにも、これから継続的に仕事をするべきだし、まずは一つ一つを丁寧になさしていこうと、モモンガはそれだけを考えていた。

——リジンカンは、自由にさせた方がいいだろう。好きにさせてやれば、それなりの成果は持つてくる、と思いたいな。

神の如き力は持つていても、全能にして万能とはいかないものだ。よって、彼がンファイレーアを襲ったイレギュラーを予測できずとも仕方がないであろう。

そして、リジンカンの行動を制御できなかったことも、モモンガの過失というには、酷に過ぎるであろう——。

最初に違和感を覚えたのは、ンファイレーアだった。言葉にはできないが、いつもと家の雰囲気が違うているように感じた。

ちよつとした錯覚だろうと、気にせず全員で薬草を下ろして安置する。仕事を終えたところで、ようやくそれが勘違いでなかったことを理解した。

「お帰りのさーい。ずっと待ってたんだよっ」

ンファイレーアとペテルらは、その声に不信感を抱いた。困惑するままに、その声の主を確認する。

外見は、かわいらしい女性であった。短めの金髪に、整った容姿。しかし、彼女の浮かべる笑みには、どこか不安を感じさせるものがある。

「……どちら様でしょう」

「私はね、君をさらいに来たんだあ。適当にいい感じな道具になってくれると嬉しいんだけど。おねーさんのお願い、聞いてくれるよね？」

そもそも、勝手知ったる自宅で見知らぬ女性が声をかけてくる。この状況自体に不吉なものを覚えてしまうのは、当たり前であった。

ンファイレーアは問うたが、まともな答えは返ってこなかった。女性からの返答は、敵対宣言と言つてよい。

「ンファイレーアさん、ここから逃げてください。——あの女はたぶん、私たちを容易く殺せる。それだけの力があるのでしよう」

ほぼ直感だが、こうした嫌な予感ほどよく当たる。その勘を理論的に説明するのは簡単だが、そうしたところで結果が変わるとは、ペテルには思えなかった。

「ニニヤ、お前も逃げろや。やることがあるのは聞いているし、ここにいても結果は変わんねえだろうしな」

ルクルットは即座に戦闘態勢に入り、武器を抜いた。ンファイレーアと、ニニヤを逃がそうと、体を張って足止めするつもりだった。

そしてそれは、敵側にとつても予想の範疇であった。

「んー、やっぱり逃げるよね。逃げようとするよねえ？ ……それはちよつと困るから、あんまり遊べないかなー」

でも、無駄なんだけど——と。そう、女は続けるつもりだった。

彼らの後ろの扉には、仲間のカジットがいる。この程度の冒険者のレベルなら、挟撃すれば終わりだと、彼女は知っていた。

だから、その扉から病的に白い、痩せた男が姿を見せたとき、パーティは一瞬にして絶望の色に染まった。

「——が」

そして、その絶望がぬぐわれるのも、また一瞬であった。姿を見せ、何かしら女に声をかけようと思ったのだろう。

口を開きかけた、その瞬間。病的な男の喉に、小刀が吸い込まれるように穿たれた。

信じられない、と男の顔が語っていた。喉を押さえて、出血で手を染めながら、前のめりに倒れる。

死体のように青白く、骸骨のように骨ばった男は。しかし、本物のアンデッドのように、起き上がってはこなかった。

「この飛刀に、仕損じはない。俺がこの場にいたのが、あんたの運の尽きだ」

リジンカンが、淡々と言った。手の中には、新たな飛刀がある。これまで何の動きも見せなかった彼が、ここで牙をむいた。

共にいたのはただの気まぐれだが、ここで見捨てるのも違うだろう、とリジンカンは判断する。

ペテルらは、モモンガに対して誠実に対応した。有益な情報を提供したし、ここから生き延びれば、自分たちの名声を高めるのに一役かってくれるはずだ。

そうした利害関係も理由だが、やはり一時でも楽しくやった手合いを失うのは、感情的にも惜しいと思うのだ。

「飛刀？ ……聞かない武器だね。どんな魔法を使ったの？ いや、その飛刀つてのが特別製なのかな？」

彼が手にしているものは、カジットの喉に突き刺さっているものと、同じ形だ。女はそれを見て取って、計算が狂ったことを知る。

あれが何らかの魔法の武器だとしたら、その予備がいくらかもある、ということだ。

そうでないとしたら、単純に技量が優れているということ。そして何よりも肝心なことは――。

「すごいね。油断はしてたけど、本当に見えなかったよ。それなりに、皆の動きには気を配ってたつもりんだけどー」

女――クレマンティーヌは、自分が優れた戦士であることを自覚している。

この場にいる誰よりも、強いという自負を持っていた。だからこそ、口調は軽くても事態の深刻さは理解していた。

もう一度、あの飛刀が飛んできたら。……己の方に向かってきたとしたら、見切れるのか。

見切ってみせる、と気を張ると同時に、容易い相手ではないとも認めねばならぬ。確実に仕留めるなら、雑魚（ペテルらのパーティー）を排除するのは当然として、いくらか肉盾を用意しておきたいところだ。もつとも、事態はそこまで都合よく進むものではない。

「この距離で向かい合うのは、ちよつとアレかも。まあ、難しいってだけで、無理だなんて思わないけどね」

一芸に特化した相手なら、こちらの剣の間合いまでつめられれば、勝てる。そのように彼女は考えた。分の悪い賭けであるか否か。クレマンティーヌは、リジンカンの手を注視しながら、足に力を込めて――。

「己の未熟を言い訳するなよ、女。素直に見逃してくれと乞うなら、この場では追わない」

「へえ？ 油断を誘ってるつもり？ 後ろを向いたとたん狙い撃たれる、なんてのは勘弁だけど」

「嘘じゃないさ。追わないし狙わない。もつとも……」

この男の取り巻きは別だが、とリジンカンは言った。その言葉で動きを止めたのは、己にとつても悪い展開ではないと、クレマンティーヌなりの計算が働いたからである。

「本気で言ってる？」

「疑つてもいいが、するとこの場で全面戦闘だな。多対一の状況で、俺の飛刀を見切れればいいが」

クレマンティーヌは、改めて己の不利を悟らねばならなかった。ただあの男の存在だけが、全てを狂わせる。

熱を持った感情が、精神を焼くような感覚。それに身をゆだねたい欲求を抑え、舌打ちして、リジンカンをにらみつけた。

「ま、土産に俺の働きを見ていけばいい。そうすれば、逃げ帰るのが一番楽だとわかるだろう」



リジンカンは、倒れたカジットに視線を向けた。

当然蘇るわけではないが、カジットは、一人でここに来たわけではない。遺骸に駆け寄り、安否を確かめようとするものもいれば、加勢するどころか逃げようとするものもいる。

察するに、奴の部下か弟子か——どっちも似たようなものか、と彼は無感情につぶやく。万が一にも取り逃がさぬよう、戦力を集中して持ってきたのだろうが、かえって一網打尽にされてしまえば、元も子もなからう。

「再度言うが、仕損じはない。あきらめて、ここで死んでいけ」

リジンカンは飛刀から直剣に持ち替えると、一足飛びに接近し、カジットの遺骸に群がる者どもを斬り捨てる。そして逃げ出した連中は、残らず飛刀を投げて処理した。

クレマンティーヌは、隙を見出すどころではなかった。彼女も軽戦士であり、素早さには自信がある。だが、彼はおそらく己と同等か、それより僅かに速い。あの刀の投擲も含めれば、技術的にも後れを取っている可能性すらある。

この不利な状況で、真正面から斬りかかるのは、愚か者のすることだった。

「さて、そろそろ結論も出たろう。実際、あんたには消えてもらった方がありがたいが、どうするね？　俺は、本気であんたとの戦闘は避けたいんだが」

「後悔するよー？　ほんとに逃げるからね。恥も外聞もなく逃げて、そのうちその心臓を突き殺してやるんだから」

「ああ、できたらいいな。期待して待ってるから、そろそろ帰れ」

「……クレマンティーヌ」

「うん？」

「私の名前！　あんととか女とかじゃなくて、クレマンティーヌって呼んでよ」

「そうか、さあ行った行った」

リジンカンが、追い払うように手を振った。その屈辱に唇をゆがめながらも、クレマンティーヌは去った。

あいつ、名乗り返してくれなかった——と、それだけを口惜しく思  
いながら。

「……フェイさん、ありがとうございます。貴方が助けてくれな  
ければ、きつと全滅していたでしょう」

「礼はいいぞ。勝手にやったことだしな。お互い、仕事を共にした仲  
間だ。危機となれば、助け合うのが当然ってもものだろ？」

ペテルからの礼を、彼は素直に受け取らなかった。

何しろ、ここで彼女を仕留めようと思えば仕留められたのだ。それ  
を見逃したのは、完全にリジンカンの勝手な感情ゆえ。

クレマンティーンと名乗った女は、間違いなく極悪人であり、殺さ  
ない限り多くの被害者が出ることは確実である。見逃した以上、これ  
から彼女が誰かを殺せば、それはリジンカンが殺したも同然というこ  
とになる。

「どの面さげて、感謝しろって言えるものか」

「——は、何か？」

「いや、何でもない。それより家を確認したほうがいいぞ。不審人物  
が出入りしていたんだ。何かしら盗難やら仕掛けやらしていたら厄  
介だ。——死体の方は、どう処理したもんかね。ンフィーレア、何か  
しらツテでもあるか？」

リジンカンは、どうにか場をごまかしながら、後片付けに奔走した。  
ンフィーレアの祖母であるリージー・バレアレが、モモンガと共に帰  
宅した際、この騒ぎの内容を二人は知ったが、あまりの急展開にしば  
らく言葉を失ったという。

ウォン・ライはナザリックに帰っていた。デミウルゴスはお楽しみ  
中だったので、アルベドとあれこれ相談しながら、今後の方策を練る。  
「とりあえず、カルネ村に関しては、私から言うべきことはありませ  
ん。ウォン・ライ様の思うとおりになさるのがよろしいかと。持ち出

した物資も、価値としては最底辺のもので、まず問題は起こらぬと思われまます」

「——で、あれば幸いだ。自分の判断力が鈍っていないとわかれば、安心できる」

ウォン・ライは、自分が庇護すべき人民に対して、時に甘くなりすぎることを見ている。

だからこそ、第三者の目は絶対に必要であり、アルベドにその役目を求めたのは、おそらく間違いではないだろう。

「しかし、今後カルネ村のような例があった際、今回のような大盤振る舞いを毎度続けられては、流石に許容範囲を超えることになります。

——今回限り、という前提であれば、これから投入される物資についても、モモンガ様は黙認なされるでしょう」

「……使うのは、私が個人的に貯めていたものなのだが」

「今後、何度でも使う機会が来るとしたら、消費される一方ではいずれ枯渇します。そうなれば、モモンガ様とて苦言を呈せざるを得ないでしょう。……できる限り、自重を求めます」

アルベドとしては、直接発言できる範囲で、最大限の諫言をしているつもりなのだろう。

ならば、こちらとしても譲歩は必要であろう。カルネ村は特例として、以後は過剰な支援はやめようと誓う。

「もう一つ、懸念事項が」

「問題があるなら、ぜひ聞いておきたい」

「村への支援が手厚いのは、この際結構でしょう。ただ、それが外に知られればどうなりますか？」

「外……国家か。なるほど、不自然に急速に復興する村があれば、政府としても気になるだろう。被害の大きさについては、すでに戦士長から報告が言っているはずだし、村が異様に発展しようものなら、調べに来ないとも限らない。そして調査の手がカルネ村に入れば——」

ウォン・ライは言葉を止めた。どうあっても、愉快的結果にはならないと確信したからだ。

なるほど、アルベドとも話してみるものだ、と彼は心底思う。も

し相談相手がモモンガであれば、ここまで気づいただろうか。

モモンガは安定した先進国に住んでいた人間であり、程度の低い役人というものを知らない。あるいは、教育が行き届きすぎている役人の、質の悪さというものを。そしてアルベドは、そうした人間の愚かさを懸念しているのだ。

——これは、あまり支援を継続するのも考え物だな。少なくとも、大っぴらに庇護できる状況が整うまでは、自重するのが無難だろう。まだまだモモンガ殿は、外の世界で地盤を固めている最中。こちらの不始末で、面倒をかけさせてはならん。

自然に復興した状況ではなく、何者からの援助の跡が見える。誰が、どのような理由でと突き詰められれば、ほどなくウオン・ライにたどり着く。さらに調査が進められれば、ナザリックの存在が明るみになる危険性すらあるのだ。

まだまだ時間的に余裕はあろうが、楽観して放置するのもどうか。対策はいくらかもあるが——と考えたところで、彼はアルベドと目を合わせて、言った。

「計画の前倒しをするか。いささか時期尚早だが、王国が我々を捕捉するまで、出来ることをしておかねばなるまい。可能であれば、国家との直接的な接触も、こちらの想定通りに事を進めたいものだが」

「失礼。計画とやらの内情は、こちらは把握しておりませんが……もしモモンガ様に、この上さらなる負担を押し付けようとなさるのならば。——ナザリックの統括者として、素直に賛成は致しかねます」

「道理だ。……が、何をもって余計な負担というべきなのか。今、モモンガ殿は楽しんでおられる。冒険者としての生を謳歌しておられる。多少は張り合いを持たせる方が、緊張感も出て良いと思うが」

「——結果良ければすべて良しと？ そのお言葉、そもそもモモンガ様なら拒否されることもあるまいと、たかをくくっておられるようにも見られます。……ギルドマスターに対して、僭越とも取れる態度ではないでしょうか」

アルベドは、必死に己を抑えている様子であった。表情は動いていないが、目の色が変わってきている。実際、目は口程に物を言うのだ。

彼女の中に、いかなる感情が渦巻いているのか。これまた捨て置くのは危険、とウォン・ライの勘が働く。愠気であれ怒気であれ、ため込んでよいことなど、一つもないのだ。

——アルベドが腹に一物抱えていることは、なんとなくわかる。余裕があるうちに、吐き出させておくべきだろう。ならば、ここで一手加えるか。

演技をするように、悩まし気に自身の頭を軽く叩きながら——これを行きすぎたお節介と取るな、とウォン・ライは答えた。

声色も開き直ったように、あえて明るく軽く、しかし不自然でない程度に馴れた口調で続けた。

「モモンガ殿は寛大で、理性的なお方だ。私が必要と断じて、それなりに合理的な理屈を適当に述べれば、納得してくださるとも。そして、彼は頼られること、必要とされること、何より仲間に認めてもらうことを非常に重視している。このウォン・ライが『頼む』と言えば、拒否はなさらぬだろうさ」

「どうして——そこまで、身勝手になされるのです！ ……モモンガ様が、貴方を！ 貴方がたのことを！ 何より大事にしているということ、まさか知らぬとは申されますまい！ ……もし、あのお方を傷つけてごらんない。たとえ至高のお方であろうと——」

アルベドは、そこまで言つて、口を切り結んで、噛みしめた。発言してよい言葉ではないと、理性が感情を押しとどめた結果だろう。

まず感情を引き出させただけで、結果は上々かとウォン・ライは満足げに微笑む。それがまだ彼女の想いをひどく刺激させるのだが、わかっていて彼は口舌を踊らせた。

「ふむ、正直に言えたな。私に対して、思うところがあるようだ。……一応答えておくと、酷使するとしても、リジンカンと私自身だけだ。モモンガ殿に影響がないとは言わないが、常にアクシデントは起こりうる。いちいち腹を立てては、この先、持たないぞ？」

「……左様で、自身が原因であるというのに、そのふてぶてしい態度。尊敬に値します。流石は至高のお歴々、ギルドマスターへの好意的な態度さえ崩さねば、全ては許されると確信しておられるようで、

実に羨ましい御身分ですわ」

アルベドがここまで感情的になるのは、きつとウオン・ライが煽つたせいであろう。続けて一言、二言と続けければ、面白いほどに乗ってくる。モモンガが主題であるだけに、容易く受け流すということもできない様子だった。

——いやいや、わかりやすく恋する乙女だ。いいものが見れたと思うが、さて、アルベドの設定はどうであったか。年を取ると物覚えが悪くなっていかが、やはりモモンガ殿に特別な感情を抱いていたとか、そういう設定があったらしい。

もちろん、当人は理解してやっていた。彼自身はその気で振る舞えば、うぶな生娘を転がすくらいは訳はない。

彼女は極めて優秀な頭脳を持っているし、謀略にも相応の適性があるのだろう。そうでなくては、曲者ぞろいの守護者をまとめられるわけがあるまい。

ただ、数十年に及ぶ中国大陸の混乱期を生き抜いた、老獪な悪党の手管には及ばなかった。それだけの話である。

「時にアルベド」

「……はい、何でもございましょう」

「私が憎いか」

「——失礼。なんとおっしゃったのか、もう一度繰り返していただいてもよろしいでしょうか」

また、これがアルベドができる、最大限の譲歩であることも、ウオン・ライにはわかっていた。

暴言らしきものは吐いていたが、決定的な亀裂は避けていた。それくらいの分別は、今の彼女にもあると、外面を見ていれば察せられるものだ。それでもなお、彼は踏み込む。

「私が、憎いか、と。そう、言った」

強調して、大きく、ゆっくりと言った。アルベドは、なおも沈黙を守った。話題を変えれば、何事もなかったように話に乗るだろう。その確信を得ながらも、彼は彼女の返答を待った。

ウオン・ライは意味ありげな微笑みの態度を崩さない。アルベドは

諦めたように、それでいて呆れたように、確認するように言った。

「……意図を計りかねます」

「正直に述べればよい」

「後悔なさるかもしれませんよ？ どうしてか、今の私は取り繕う余裕すらないようですから、思ってもいないことを、勢いに任せて言ってしまうかもしれません」

「それで処罰しようとは思わぬし、モモンガ殿に孤独を味わせたという点で、どんなに糾弾されても仕方がないと、私は思っている。――さあ、この場にモモンガ殿はいない。そのまま、アルベドの想いを吐き出してくれないか」

アルベドは、無表情を保ったまま、しばし目を泳がせる。

だが、それも数秒のこと。しつかりとウオン・ライの目を見据えて、口を開いた。

「嫌っております。ええ、憎んでおりますとも。愛するモモンガ様を傷つけておきながら、何食わぬ顔で出戻って、そのくせ喜んで受け入れられた。――本当に妬ましい。私が同じことをしたら、果たしてモモンガ様は同じような態度をとってくださるかしら？ いいえ無理ね。それがわかるから。特級の特別扱いをされていると、見せつけられているから、不快で仕方がない。ああ……憎らしいですわ、ウオン・ライ様。なのに同時に貴方を敵に回したくないと思う自分がいる。嫌悪と憎悪を抱きながら、感嘆を感じずには居られませんの。どうしても貴方は、私の感情をここまで引き出せたのでしょうか。デミウルゴスに対しては、誤魔化すこともできたというのに、まことに不思議なことではございません？」

必要以上に饒舌になっている。口調の崩れは、心の乱れでもある。良い傾向だと、ウオン・ライは笑みを深くした。

笑うしかなかった。ここまでモモンガを想ってくれるNPCが居たとは予想外であり、本気で嬉しかったのだ。

至高の存在と、一緒くたに纏めてあがめられるよりはずっといい。その方がずっと、人間らしく女らしい。そうした女性を得られるモモンガは、本当に幸せ者だと思いうくらいだ。

彼はもつと報われていい。寂しい思いをさせた分だけ、暖かい心で包んでやりたかった。対象がアルベドならば、これ以上ないほど都合がいいだろう。

「それだけ愛情が深かったということだ。想い人の言動に、一喜一憂するのが恋する乙女というもの。それにここまで情に厚い女は、男にとって得難い宝と言える。アルベドに愛されているモモンガ殿は、幸福だな」

皮肉で言っているのかと、アルベドは顔をゆがめて視線だけで彼に伝えた。意図を正確に受け取りながら、ウオン・ライは上機嫌なまま口を開く。

「お互いに、認識のすり合わせが必要だとは思わないかね？ モモンガ殿を第一に考えて、何より彼のために生きたいと願っている点では、我々は同志だ。協調も協力もできようし、相乗効果でより為になる働きができるはずだ」

「物は言いよう、とはこのことですね。——ええ、結構！ その寛大さに感謝して、とことん話を詰めようではありませんか」

「前向きになってくれて、結構なことだ。いや、一戦やらかすことも覚悟していたが」

「……そこまで短絡的でもございません。いえ——失敬。そう思われなくても仕方がないほどには、感情を吐き出した自覚がありますが」

「すべては、自覚するところから始まる。お前が私の失点を指摘してくれたように、その愛情の行方も、これからの行動でいくらでも変わらう。まずは、モモンガ殿にわかっていただくところから、始めようじゃないか」

それから二人の会談は一晩中続いた。建設的で有意義な時間であったのは間違いないだろう。

モモンガにとって、どのような意味で幸いであったのか。詳細を知るには、今しばらくの時間が必要ではあるうが——ともあれ、好ましい形で終わった話であるのは、確かであった。



## 第十三章 英雄の誕生

モモンガはともあれ、事態の把握に努めた。ペテルのパーティが無事だったのは何よりだし、ンファイアも傷一つない。その結果だけでも、まずはリジンカンの働きを褒めねばならなかった。

ちよつとしたことからリイジーと出会ったモモンガは、自然な流れで彼女の自宅へと招かれたのだが、帰宅してみればこの通り。リジンカンがここにいてくれたことは、バレアレ家にとっては幸運であつたろう。

「何がどうなつたのかは、わかつた。結果として、女戦士の方は逃がしたと」

「俺が全部片付けたら、モモン殿が活躍する余地がなくなる。悪い判断ではなかつたと思いますがね」

バレアレ家で二人は話していた。本当は、もっと落ち着いた場所でも話したかったのだが、事態が事態である。リイジーはこの街では結構な重要人物であり、その家で騒ぎが起こつたとなれば、どうしても大事になる。

—— 込み入つた話は、他人に聞かれると困るんだが。

モモンガは警戒を解かなかつた。再度の襲撃が、いつあるかわからぬ。そのうえ、外部の者に話を聞かれていると思えば、うかつな言葉は口には出せない。

家の外にナーベラルを待機させているから、異常があればすぐにわかるだろうが—— 気を許せる状況でないことは、確かであつた。

ともあれ、概要を聞き出したモモンガは、当座の対応を迫られていない。撃退したとはいえ、ンファイアアの安全は、いまだ保障されていない。帰宅までの護衛は果たしているが、このまま去つては、なんとなく仕事をやり残したような気分になる。

—— 無視できないわけではないが、どうにも、な。重要クエストを放置するようで、もつたいない気がする。

これからの行動が、今後の展開に大きく影響するものだと、彼はなんとなく察していた。熟考の上で、決めねばなるまい。改めて、リジ

ンカンと向かい合う。

「現場の判断だ。それを悪いとは言わないが……なんというか、お前の方は大丈夫か？」

露骨に見逃したようだし、不審に思われてたりはしないか——と、モモンガは暗に問うた。大丈夫か？ とはそういう意味であり、お互いに正確に力量を把握しているからこそその質問である。

「ペテルのパーティは、誰も彼もが気持ちがいい連中だ。この点は、モモン殿にも同意いただけると思う。……助けてくれた相手に、余計な疑念など持ちますまい」

リジンカンは、その意図を理解して答えた。モモンガは満足そうにうなずいて、さらに一言。

「どこまで見せた？」

「飛刀を数本。一足飛びに数人斬った。——モモン殿が危惧するようなことは、何も」

不要な手札は見せていない、とリジンカンは答えたのだ。ただの軽戦士としての力しか見せていないと。

とすれば、敵はリジンカンの力を過小評価した可能性が高い。飛刀は彼にとつて切り札には違いないが、奥の手は複数持つのが基本である。油断させていれば、それらが刺さる機会もあるだろう。

「手ごわい相手か？ お前が本気になるほどの」

「いいや？ 半分眠りながらも、あしらえる手合いでしような。あの女は、たぶんこの国ではそれなりの使い手だろうと思うが、脅威とはいいがたい。お任せくださるなら、適当に処理しておきますがね」「状況次第だ、何とも言えん。……ペテルらとは、話をしなくてもいいのか？」

人格的に信が置けるとしても、これからどう付き合い合っていくかが問題だ。モモンガとしては、あまりズブズブの関係にまで持っていきたくはない。

何といっても、そこまで深い付き合いをする余裕はなからう。一連の事件は突発的だが、街にとっては大きな問題になる気がした。

そうした大事を目の前にして、しがらみを増やしたくないというの

が本音である。いざという時は見捨ててもいい。距離感としてはそれが最適だと、彼は考えていた。

しかし、リジンカンはどうかとモモンガは思う。もし、この盟友の息子がひいきをしたいというなら、無茶を聞く用意はあった。

「言うまでもないでしょうよ。まあ、ここは藪をつついて蛇を出す、なんてことになっては間抜けというもの。距離感をもって、適切に対応するのが一番では？」

「……確かに。ならば過剰に心配することでもない、と私も同意しよう」

リジンカンは、気遣い無用と答えた。ならばよし、とモモンガは頭を切り替える。

何よりも今は情報がほしい。接触したらしい女戦士には逃げられしたが、死体はいくらか残っている。

遺骨は語る、という。現代日本ではただの比喩に過ぎないが、この世界においては実際に可能なことであろう。

すでにギルドの手に渡って処理の最中だが、出し抜こうと思えば不可能ではない。

——しかし、それがリスクであることに変わりはない。それを冒すのは、最後の手段としよう。

モモンガはまだ思考に浸りたいところであったが、ここはバレアレ氏の家である。まずは家長である祖母の出方を見たい。そちらに目を向けると、祖母と孫は話し合っている最中であった。

「ンファイレアや、怪我はなかったかい？ 妙なことをされたりは？」  
「大丈夫だよ。……みんなが、守ってくれたから。ああ、でも、ギルドへの説明はどうしようか。どうにも僕自身を狙ってたみたいで、死んだ相手も色々怪しいところがあるとかどうとか」

今日と明日は、ギルドの職員が調査と警戒に当たってくれるらしいとも、ンファイレアは言った。祖母のレイジーは、それを聞いても安心した様子はない。どうにも、彼自身を狙ってきたという点が気がかりらしい。

「ふん！ 楽しくない話だね。どこのどいつか知らないが、よからぬ

ことを考えている奴がいて、よりもよつてわしの孫を標的にしてる  
ときた！ 逃げた奴がいるってことは、まだ事態は解決してないって  
ことじゃないか。……嫌な予感がするよ」

何はともあれ、備えが必要だ——と、レイジーは不機嫌そうにつぶ  
やいた。そうして、彼女の目が行く先は、孫を守ってくれたという冒  
険者たちに向く。

ペテルらのパーティは、まだこの場にとどまっていた。なんとなく  
く、仕事をやり残したような気がして、解散する気になれないのだろ  
う。誰も彼もが、深刻そうな面持ちである。

——ちよと目を離したら、もうくつろいでいる。ここが他人の家  
だつてわかっているのか？

いつのまにか、リジンカンだけは、気楽そうに椅子に腰かけていた。  
適当にくつろいでいる様子で、緊張など少しも感じられない。図々し  
さもここまで極まれば、逆に感心しそうになる。

彼は、机に置かれていたティーポットを手に取り、直接口に持って  
いって、流し込むように茶を飲んだ。野蛮で無作法な動作であるはず  
だが、リジンカンがやると妙に格好がついてしまうから不思議であつ  
た。様になっているから、見とがめるものもない。

——イケメンは得だな、まったく。

モモンガが世の理不尽を嘆いている隙に、レイジーはペテルらに話  
しかけていた。内容はと言えば、襲撃されたときの詳細について。

耳を澄ませて聞いたが、やはり注目すべきところはなかった。これ  
からどうしたものか——と軽く考えをまとめようとしたが、ふいにリ  
イジーと目が合った。

「……ん？」

レイジーは、モモンガとリジンカンを往復するように視線をやり、  
それから考え込むように目を落とし、うなつた。

一呼吸して、ため息を吐いてから、彼女ははつきりとした足取りで  
モモンガの方へ歩みだす。

「仕事を受けてくれないかね。ギルドを通さず、個人的に」

「個人的に？ ……報酬は」

「弾んでやるさ！　そうさな、前金で金貨三十枚。成功報酬でさらに五十枚。悪い話じゃないと思うがどうだね？」

さっさと話を進めたい、とばかりにリイジーは早口で薦めた。

セールストークとしては褒められたものではないな、とモモンガは内心で批判したが、受ける受けないは別のこと。あえて焦らすように答える。

「まずは内容を聞いてみないことには、な。護衛任務であれば、期間を指定してほしいものだが」

「護衛は頼まない。別の奴を雇うからね。——フェイとおぬしは、同じパーティと聞いたが？」

「……ナーベを忘れてもらつては困る。それで三人パーティだ」

フェイ||リジンカンと頭の中で結びつけるのに、一瞬の間が必要だった。自分は役者には向いていないな、などとモモンガは思う。

「そうだね、悪かった。重要なことだよ。……頼みたいのは、事態の解決だ。期限は切らないが、なるべく早く始末をつけてほしい。わかってくれるね？」

「孫が心配なのはわかる。——が、なぜ私たちに？　実績のある他の冒険者に頼むとか、別の選択肢があるはずだ」

モモンガには、一連の事態を收拾する手がある。本気で取り組めば、解決も可能と見積もっている。とはいえ、そこまでするからには、報酬がただの金貨というのも味気ない話であった。

せっかくの機会である。バレアレ家の薬師としての力を、どうかこちらに取り込めないか。相手は弱みを見せた。それに付け込もうとするのは、営業職の職業病というべきかもしれない。

ともあれ、専属の生産職はナザリックにとっても大きな力になる。ユグドラシルとは、まったく別系統の技術なのだから、世界を知る上でも研究する価値があった。

「私たちの何を見込んで、そこまで評価してくれているのかな？　戦闘能力は、なるほど、確かにとびぬけているという自負はある。だが、今回は敵を捕捉して、目的を確かめねばならない。そうしなければ、安心できないだろ？　——我々は、調査能力に秀でているように見え

るのかな？」

モモンガなりの探りである。目の前の老女は愚か者か、それとも賢者か。

助ける価値のある人物であれば、才覚を見せてほしかった。

「わかつていつてるんだらうね？ ああ、わかつているよ。クレマンティーヌとやらを、フェイは煽りまくったそうじゃないか。たぶん、執着されてるよ。……あの手の女戦士は、復讐に時間をかけないはずさ。手札がそろい次第、すぐ仕掛けてくる。違うかい？」

兜がなく、人面をさらしていれば、モモンガが苦笑したことに気付いたろう。

まさに、それこそが要であった。モモンガ自身も経験のあることだが、敗北を認めないまま撤退した相手は、即座に反撃の用意に移る。聞いた限りでは冷静さを失っている様子であるし、こちらの手の内も把握していないとすれば、明日か明後日にでも復讐戦を挑んできてもおかしくない。

ただし、それはよほど相手が感情的で、自制心に欠けていることが前提になる。

「そう思惑通りに進めば良いがね。……願望が多分に入っているし、いずれにせよ調査能力がなくては難しい話だ。難度が高く、時間的な区切りも曖昧。不可能とは言わんが、それでも私に頼むのか？」

復讐を考えたとしても、冷静になって距離を取る、準備に時間をかけるというパターンもある。

それならそれでナザリックの手勢を総動員させればいい話で、いずれにせよ早々に決着がつくことだ。リスクさえ許容すれば、依頼を全うすることに不安はないと、モモンガは確信する。

それでもあえて、レイジーの本意を探り続ける。短い付き合いで、彼女がこちらにどのような印象を抱き、いかなる確信を得たのか。下手な演技を自覚している身としては、ぜひ知っておきたい。

「難しい理屈があるわけじゃない。……ただごとじゃない気がするのさ。だから、一番頼りになりそうな相手に頼んでいるんじゃないか」「私たちが？ もっと高ランクの冒険者がいるはずだぞ？ 金に糸目

をつけないなら、この街で最上級の冒険者を雇えばいい」

「——そいつらがおぬしよりアテになりそうなら、そうしたらろうよ。報酬が少なかつたかね？ 金貨はこれ以上出せんが、薬草やらポーションの現物で良ければ譲ってもいい。どうか、受けてくださらんか」

『わかった、話を取り下げる』と言われても、こちらに被害のない話だし、地道に仕事を積み重ねるのもいいだろうと、モモンガは割り切っていた。

だから、レイジーが粘り強く交渉する気であったことは、結構な驚きであった。冒険者たちを信頼していないのか、あるいは独自の分析の結果、分が悪いと考えたのか。やはり、詳細はわからない。

「…………ふむ」

「追加で、今後は特別に安価で薬を売ろう。どうかね？ ……あの高品質のポーションを補充するアテがあるのなら、不要かもしれないが」  
それでもできる限りのことをしようと、老女は言った。

レイジーの目は、不安に揺れているようだった。断られたらどうするか。その心配が主であるのだろう。……そこまで見込まれている理由は、やはりわからない。

「あの特別なポーションを持ち、賢王さえ従えるおぬしだ。わしが知る限り、おぬし以上の冒険者のアテなどないよ」

「なるほど、私にとっては何でもないことだが、そうか。強さの証明としては、あれで充分か」

「充分すぎるほどさー。で、受けてくれるんだね？」

モモンガにとっては、それが強さの証明になるという自覚が薄かっただけに、レイジーの答えはあらためて現状を認識させた。

我々は強者に見えるらしい。ならば、それらしく、最大限こちらに都合の良いよう持つていくだけのこと。

情報弱者、という表現が許されるなら、ナザリックだって弱者になる。弱い者は、選択肢を選べないものだ。

そして今現在、力を求めてあえいでいるレイジーは、モモンガにとって弱者である。無体に思われない程度には、譲歩を求めようと

思った。

「――前金はいらん。成功報酬だけでいい。だが、いくらか値を吊り上げさせてもらおう。……ああ、金や現物の話じゃない。ちよつとしたお願いを聞いてほしいだけだ」

「聞こう。どのようなお願いだね?」

「カルネ村に移住して、そこで薬師として働いてほしい。私の友人で、フェイの父親にあたる人物が、そこを気にかけている。……腕のいい薬師がいれば、村の人々も喜ぶだろう。結果として、私の友も安心する。私はその友に、自らの善行を誇れる。精神的な満足感も、報酬に付け加えてほしいと、これはそういうお願いだよ」

断られれば、それまでだ。実際、善意だけのお願いではないから、無理には言えなかった。

ナザリックに近いカルネ村なら、監視も行き届く。折に触れて気にかけてやれば、恩義で縛ることも可能かもしれない。

そうして、将来手札の一枚にでもなれば成功だ。多くは求めないが、手近なところにこの世界の技術職を置いて、作成技術の奥義の一端でも掴めれば、とりあえず今はそれでよし。

「――いいよ。移住に手間はかかるけれど、無理ってほどじゃないからね」

「助かる。では、頼もう」

「そうかい、もう解決したつもりになったのかい。……わからない人だね。ああ、でも、アテにはさせてもらうよ」

こじれなかったのは幸運だった。モモンガは、報酬についてこれ以上何も言わなかった。

さらに吊り上げることもできるだろうが、悪感情を持たれては元も子もない。長い付き合いになる可能性を考えれば、ここは引くべき。

リイジーもそうした気遣いを理解したのか、あえて繰り返し返さなかった。それが礼儀であることを、彼女もまたわきまえていたのだ。



クレマンティーンは、自分が逃げ出したとは思っていない。ただ勝負を預けただけ。

そう思わねば、この感情をいかに処理すべきか、相当迷ったであろう。彼女は奇怪な性癖と狂人たる資格を備えていたが、常識をわきまえ、己が力量をわきまえる知性は持っていた。

ただ、基本的に楽観主義者であり、傲慢でもある。自分の力を高く評価しているからこそ、他人の強みを過小評価しがちになる。

——ともかく、近接すれば勝ちの目が見える。飛刀さえしのげば、どうにでも料理できる。

そうした認識が、そもその間違いと気づかない。リジンカンも冒険者フェイ・ダオの仮面をかぶっているが、脱ぎ捨てる気になればいつでも殺せたのだ。その気配をわずかにとらえながらも、気づかないふりをして強がっている。

目を背けていることを自覚せず、見るべきものを直視せずでは、この先も暗かろう。

リジンカンが彼女の盲目さを見たならば、それもまた可愛さと評価するのであろうが、残念ながら彼はここにいない。

「こっちの手駒は、拠点に待機してたカジットちゃんの弟子が十数名。肉壁に使えるほど、信頼関係なんてあるわけないし。——さて、どうしたもんかな」

内心は熱い想いで煮えたぎっているが、口にする言葉は極めて現実的であった。

実際、強敵と相対するには不安要素が大きい。クレマンティーンは、フェイ・ダオという偽りの仮面すら見抜けていないが、正面から殴りかかるのは分が悪い。それだけは、認めていた。

「……足りないなら、よそから持ってくるしかないか」

彼女は合理的な手段を取る。手持ちの手札を有効に使うため、手段があるなら躊躇わない。

カジットが残していった、弟子どもを見やる。この程度の輩でも、

生贄くらいには使えるだろう。

帰ってくるなりカジットについて聞かれたものだから、正直に話したのだが。あの弟子連中は、ぶちぶち文句を言ってきた。

戦場では弱者は死ぬのが道理。その道理を、クレマンティーヌは実践してみせた。二人ばかり寸刻みにしてやると、すぐに大人しくなった。宝珠の行方がどうのと言っていたが、彼女には興味のないことである。

カジットが持っていただろうから、もう当人の死体と一緒に処分されているとみるべき。価値のあるマジックアイテムだったらしいから、これを戦力の低下と見れば、なるほど。惜しいと言えば、惜しくはある。

——まあ、代用できなくもないでしょ。ちょうどいい餌が手近にあるから、使いつぶせば戦力になるよね？

カジットはもはやいないが、エ・ランテルに死を振りまくという目的にも、変更はない。彼らには彼らの覚悟があり、ネクロマンサーが死を恐れて逃げるなど、笑い話にもなるまい。

そもそも、彼らが所属する結社が、とんぼ返りを許さない。そうした連中の心理をつつけば、成果を出すための犠牲くらいは許容するはずだ。

ズーラーノーンの使徒として、誇りもあれば自負もある。他者を蹂躪してこそ、悪党というものであろう。

——下っ端を何人か削れば、高レベルのアンデッドも用意できる。内輪もめの種をちよつと投下すれば、後は勝手につぶし合うでしょ。ここで時間をかけられるほど、クレマンティーヌは堪え性がない。すみやかに想いを遂げるためならば、何でもしよう。もしまだ躊躇う奴がいるなら、三人目の惨殺死体ができるだけだ。

この場に、クレマンティーヌに敵う者はいない。彼女は、意思を通してとすれば、どこまでも強引に進めることもできるのだ。

「死体も物資も、有効活用しないとったいないなね。……あいつ、自分のために人がたくさん死んだって聞いたら、どんな顔するだろう」  
そのときを楽しみに思いながら、クレマンティーヌは妄想に浸っ

た。

後先など考えてはいない。ただ刹那的な気持ちに殉じられるほどには、彼女は狂っていたのだ。

人目を避けるように、モモンガは路地裏へと移動した。周囲に目がないことを確認して、リジンカンとナーベに向かい合う。

「人目はありません。仕掛けるならば、今かと」

「ナーベに同意する。さっそく動かれるかね？ 早いに越したことはないから、その判断を俺は支持するよ」

モモンガは、やる気になっていた。ここまでくれば、どこまで本気を出すかが問題になる。

自分の手札を惜しまず使うか、ナザリックの総力を結集するか。ただ敵の拠点を探り出すことを目的とするなら、後者が一番早い。

「即座に探索行動に移る。私が探る間、周囲の警戒を頼むぞ」

しかし、少なからず手の内を見せることにもなりかねない。敵の看破能力にもよるであろうが、目端の利く手合いがいれば、禍根を残すことにもなる。それは流石に避けたかった。

——だから、自分の力だけで解決するのが一番いい。魔法の用意はある。これでどこまで迫れるか、実験と考えればちようどいい難度だ。

スクロールの在庫は、うなるほどある。一枚や二枚は惜しむものはなかった。補給のあてはまだないが、使うべき時に躊躇っては、何のための在庫かわからない。

モモンガは、どちらかと言えばケチな質だが、ここぞという場面で消費を厭うのは誤りだとも理解していた。ユグドラシル時代も、消耗を惜しんで判断を誤り、痛い目を見た経験がある。同じ間違いは犯すまい。

「物体発見……だけでは、難しいかもしれないが、やりようはある。軽戦士で、若い女性。細剣を得物としている、と。これだけわかれば、か

なり絞り込める」

探索自体は、情報系の魔法を駆使すればどうにでもなる。一定距離内の戦士職を探すものを使って、特定の種族と性別、レベル範囲を探る。そうすれば、必ずハマる相手がいるはずだ。

相手は、この地域においてははずば抜けたレベルであろう。その一味がいると仮定すれば、不自然に集中している部分が極めて怪しい。

これでも不足であれば、さらに追跡しても良い。スクロールを大盤振る舞いすることになるが、モモンガは必要経費と割り切っている。

肅々を作業を進めながら、モモンガは片手間にリジンカンを見やっ

た。

「フエイ・ダオ」

何かしら、憂いを帯びたような顔をしているので、呼びかけてみる。部下の心情を慮るのも、上司の役目だと思ったからだ。

「何か？」

「……違和感のある呼び名だが、それはいいとして。女を手にかける覚悟はあるか？」

リジンカンの冒険者名は、もう普通に口に出せるようになってい

る。違和感はあっても、しゃべるときにぼろを出さない程度には、慣れたつもりだった。

それはそれとして、気がかりな部分を口に出す。あの女戦士を見逃したのは、個人的な感情が大いにあったからではないか。

彼は、客観的に見ても大層な色男である。そうした疑念が生まれる程度には、紳士的でもあった。だから、モモンガはあえて覚悟を問う

ことにした。

「特別な理由がない限り、女は殺さない主義でしてね。まあ、モモン殿が望むのであれば、主義を曲げるのも致し方ありませんが」

「無理にとは言わない。どうせ、雑魚が取り巻いているだろうしな。

——私が決着をつける。構わないか？」

「気遣い無用。……どうぞ、お望みのままに」

うやうやしく、リジンカンは一礼した。芝居がかっているが、彼は

大根役者ではない。舞台ならばよく映えるだろうと思えば、そのイケ

メンつぶりにも感嘆したくなる。

「ならば、よい。だが、もし万が一、機会があつたら容赦はするな。好みの女であつても、必要とあらば手にかけてよ。……あくまでも、万が一だが」

「——わかりました。では、機会がありましたら、そのように」

一応、念を押した。嘘など吐くような男ではないと、モモンガは思う。やるといったなら、彼はやるのだ。それが男というものではないか。

「よし、特定できた。早々に向かつて潰すのが、無難ではあるが」

クレマンティヌと、その一味はモモンガの目を逃れること能わず。廃人PCの手管から、素人が逃れることの方が難題というもので、彼女に非があるとは言えまい。

ともあれ、搜索は完了した。潰そうと思えばすぐにでも可能な距離である。ただ、そこまでの確信が得られるのならば、欲が出てくるものだ。

——なるべく、いいタイミングで戦えないか。よからぬことを企んでいるのは確かだし、ある程度街に被害が及んだ方が、名声を高めるには良いかもしれない。

仕掛けてきてから、一網打尽にする。そうした凶面を頭の中に思い描く。

彼我の実力を照らし合わせれば、一石二鳥の策を練りたくなる状況である。さりとて、敵の動きが想定内に収まる保証はないから、モモンガとしては欲をかきすぎるのも良くないと思う。

「どうしたものかな。利益を優先するか、安全を重視するか。悩ましいところだ」

こうしたときに、対等の相手が欲しくなるのだ。ナーベラルにして、リジンカンにして、忌憚なく話し合うのは難しそうな気がした。彼の方はかなりカジュアルな態度を崩していないが、決定的なところで一線を引いている。モモンガは、それを見抜ける程度には、洞察力があつた。

恐縮して意見にも遠慮が出る、というのでは興ざめだ。ウオン・ラ

イの都合がつくなら、相談したい。

監視の目を残しておくとして、今夜にでも時間を作るべきだった。敵側に動きがあれば、いつでも出られるように、気構えだけはしておいて。

——やれやれ、緊張を維持するのも楽ではないな。まったく、冒険者って、こんなにきつい職業だったのか。

今日のところは取り越し苦労に終わったが、油断してよい状況でもなかった。一旦ナザリックに帰還して、ウオン・ライと話そう。

「まあまあ、仕事が首尾よく終わったなら、とりあえずはよろしいでしょう。即座にどうこう、と切羽詰まっているわけでもなし。気楽に行こうじゃありませんか」

「……そうだな。息抜きに、一晩くらいは余裕を見てもいいだろう。監視は怠らない、という前提ではあるがね」

できれば、くつろいで話したかった。リジンカンほどの凶太さを持たないモモンガとしては、自室で酒と肴でも並べて、気楽に話し合えたら最高だと思いつつながら。

モモンガは、ナザリックに帰還してウオン・ライと面会すると、すぐに人化することを勧められた。料理長に焼餅シヤオピンを焼いてもらったから、一緒にどうかと誘われたのだ。

息抜きを欲していたのは確かである。まさか自分の心を読んだわけでもあるまいが、彼なりの思いやりだと思えば、受け入れるのが礼儀だろう。

どうせなら、自室で話し合いたい。そうした意向を伝えると、ウオン・ライは快く同意してくれた。

「若いころは、機会があれば逃さず弟たちに振る舞ったものだ。純粋な小麦の焼餅は貴重だったが、正月や二人の誕生日には、親族がどうか加工してくれてな。——生地を作るのは苦手だったが、焼くのは

上手いと褒められたこともある。世辞だったとわかってはいたが、それでも嬉しかった。みんな、本心から喜んでくれていると、理解できたから余計にな」

焼きたての、湯気を立てた焼餅を口に入れて、慌てながらも顔をほころばせる家族の姿は、今でも鮮明に思い出せるとウォン・ライは言った。

中国の焼餅とは、小麦粉をねって伸ばして焼いただけのものだが、これはこれで地方や家庭によってレシピが異なるもので、いわゆる中国の家庭料理といってよい。

ぐるぐる巻いてから適当な大きさにちぎり、円形に整えて天火で焼き上げる。この工程は同じだが、油や塩などを塗ったり、発酵させるかさせないかで違いもあり、ネギやゴマを混ぜるものもある。

「せっかくだから、色々と種類をそろえてもらった。お気に召してくれたら、幸いなのだが」

小さなテーブルに、席が二つ。そして、まさに湯気を立てた様々な焼餅が、山ほど皿に盛りつけられていた。酒も強いものが用意されている。焼餅にはこれが合うのだと、ウォン・ライが勧めたのだ。

「アルコールには弱い方じゃないが……食べきれるかな。まあ、こんな体で満腹感をうんぬんするのも妙な話だが」

「構わないとも。いくらか残してくれる方が、私としてはもてなせた気分になる。弟たちは健啖だったから、めったに残さなかったがね」

「弟……そういえば、家族については、深く聞いたことはなかったが」  
「——ああ、私には過ぎた弟たちだった。二人とも事業をよく手伝ってくれたし、よく私を励ましてくれたよ。家族のつながりは、私にとって救いそのものだ。誰にとってもそうだろうが、暖かな家庭ほど、安らげるものはないんだ」

モモンガは、その光景を想像しようとして、自分の両親を思い出しそうになった。両親との思い出は、もはや遠い。今さら思い返したところで、痛みを覚えるだけであろう。

「羨ましいな。……一人っ子だったから、兄弟がいればいいのにと、何度思ったことか」

「それは辛いだろう、家族は多い方がいい。——私にとっては、中国の人民すべてが家族だ。民族や地域の違い、文化なり習慣なりの相違など、私には些細なことにはしか思えなかった。そうあるべきで、そうでなくてはならないと信じている。……だから、孤独感など覚えたことはなかったよ」

人は、人にまみれて生きるべきなのだと言いつつも——抱え込んだ分、苦しいことも多かった、とウォン・ライは付け足した。

微笑みの表情は崩れなかったが、その眼は遠くを見るようだった。きつと、口にする以上に、辛いことがあったに違いないと察せられる。

後悔もあつたらうし、罪悪感もあつたかもしれない。モモンガは付き合いが長いだけに、彼の雰囲気から気持ちを読み取ることも、それなりにできた。

ウォン・ライが遠くを見るような目をしたら、過去を思い返しているのだ。そして彼が他人の心の傷に向き合う時は、相手を安心させるために、柔らかに微笑むのが常だった。

「抱え込みすぎのもの、かえって辛いんじゃないか？」

「なんの、それ以上に喜びも大きくなる。恋をした、結婚した、子供が生まれた。その子供が、今度学校に行くという。自分の子供にしては出来がいい。将来が楽しみだ——などと、広く仲間内で話すんだ。すると、他の誰かがじゃあ、うちの子と婚約しないか、なんて言い出す。あんたは信用できるし、家族になれたら嬉しい、と笑い合う。そうして人の和が大きくなって、誰もが誰かを思いやるようになって、愛情を向け合うようになる。尊いものを共有するようになる。……こうした過程を見守るのは、何とも言えない快感だよ。少しずつ、家族が大きくなっていくんだ。それらが続くと、どんどん世界が優しくなっていくように感じて、私は本当に嬉しかった」

ウォン・ライの眼が、本当に優しく見えるから、モモンガは見とれてしまった。

赤鬼も同様に人化していたから、壮年の大人の姿である。彼はこの年の人間が、ここまで純粹で汚れのない、透き通った眼をする様を見ることがなかった。



「だが、それでは足りぬのだ。身内だけで固まって、他人を異物と見るようでは泰平は遠い。まず家族、次に村、そして広く都市の人々にまで共感の意識を拡大する。教育し、衆の徳化を目指して、皆を大きな一家だと理解させるんだ。……五族共和はただのスローガンだったが、私はそれを拡大解釈したいと思った。そして、人民はお互いに思いやり、共に幸福を追求していかねばならないと、本気で思っている。人々は多すぎて、手が届かなくなることがあつたとしても。けつして、努力をやめてはならない。他の誰でもない、私の家族たちのために、私はいくらでも力を尽くそう。身を削つてでも、いくらでも働いてやろう、と思う」

しかし結局、自分はそれにどこまで貢献できたか、怪しいものだ。理想は理想だと、ウオン・ライは言った。自嘲するように、額に手をやって頭を振つたが、やはり顔には苦い感情など表さない。

この人は、どこまで自分を犠牲にしてきたのだろうか、モモンガはふと考えた。そして、どんな立場にいた人なんだろうかと疑問に思う。

もしかしたら、思った以上に権力に食い込んだ人なのかもしれない。中国の大企業の社長などであれば、政府に顔がきいたり、政治に影響をもたらすこともあると、聞いたことがあつた。

そうした人であつたなら、多少は責任を感じるものだろうか。モモンガには想像するしかなかったが、自分が感じたのこのない義務感を背負つたのは、間違いないと理解する。

ここで過去を追及してみようか、とモモンガはふいに思ったが、切り出すより先にウオン・ライが言った。

「いかな。年を食うと、無駄に話を長くしたくなる。——さ、どうぞ」

「あ、はい。……ん、ただこう。思えば、純粋な小麦なんて、すごい貴重じゃないか。美味そうだ」

もつとも、ここでは貴重ともいえぬ。調達しようと思えば、これくらいいくらでも手に入るものだろう。質に差はあろうが、自然食品自体はありふれたもので、それをこうして口に入れられる幸福を、モモン

ガはありがたく思った。それを可能にした盟友にも。

だから、焼餅の味に満足してしまつて、言い出すのに時間がかかつてしまった。

「そうだ、話したいことがあつたんだ」

「何でも聞こう。遠慮なくいつてくれ」

ウオン・ライは、姿勢を正して、話を聞く態勢になつた。

そうして、モモンガは自らの考えを述べた。前の仕事にケチがついたこと。クレマンティーンという女戦士のこと。今後の対策諸々について。

一通り聞いて、ウオン・ライは応えた。

「モモンガ殿の判断に、問題はないと考える。現状、相手の行動を待つてから動いても、十分間に合うだろう。ここらで一つ、最良の時期を見据えて、冒険者モモンの名を知らしめる——というのはいい判断だ」

「そうか。なら、良かった」

ウオン・ライは机に置いていた両手を合わせてから、指先をそろえて、こう答えた。

これは彼の癖のようなもので、熟考した上での返答だとわかる。頭を使わずに、ただ同意したわけではない。

君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず。彼は、面倒さから逃げような、不誠実さとは無縁である。

ちやんと考えてくれている。その証拠に、いくらかの意見も追加してくれた。

「問題があるとすれば、想定外の被害が出た場合、冒険者モモンへの評価も微妙なものになる、ということだ。……兵士や冒険者の死者は、仕方がないとしても。街の住人に被害が出ないのが、もっとも良い。この部分を完璧にこなせば、モモンの名は周辺に鳴り響くだろう」  
「そうだな。わかりやすい異常が現れて、街に脅威が迫る。そこを颯爽と解決してみせるのが、理想的だろう。同意する」

「あと一つ。敵の情報も得るべきだ。女戦士を生け捕りにするか、殺しても遺体を確保して、ナザリックに持ち込むことを考えよう。情報

源はいくらあってもいい。この世界に悪の組織があるというのなら、そちらの事情も詳しく知りたいものだ」

ウォン・ライは人差し指を立てて、そう言った。表情は真面目だが、堅苦しさはない。

どんなに厳しい状況でも、口調と態度で、柔らかな印象を人にあたえる。彼はそうした人で、だからこそモモンガも遠慮なく頼れるのだ。

「ありがとう。相談してよかった」

「何をいまさら。第一、モモンガ殿の対策案は完全だった。私は全くの同意見だと言っただけで、さしたる貢献はしていないさ」

「いや、メンバーの同意を得られた。それだけのことが、ギルドマスターにとつては嬉しいことなんだ。……ああ、すまん。いまさらの話だな、確かに」

しみみりした気分になるのは、それだけ自分が寂しがっている証拠なのか。

モモンガは、少しナザリックから離れただけでも、この場を恋しく思うようになったらしい。その理由はといえば、言うまでもないだろう。

「ああ、そうだ。格下の他人だが、混合パーティでクエストに挑むというのは、結構新鮮な体験だったぞ。わかっていたことだが、やはり異なる文化の相手と接するのは刺激的だな」

「——そうだろうとも。人が人と接する以上、摩擦は避けられぬ。……だが、それ以上に喜ぶべきことだ。新たな他人を知り、新たな身内を増やしていく。人々が共感を得て、手を取り合う様は、何よりも美しいことだと、私は信じているのだよ」

「そうは言っても、相容れない人種はあるものだぞ？　例えば、何事につけ、物騒な手段を持ち込むようなやつがいる」

「しつめて飼いならす余地があるなら、それもまた楽しみだ。——どうにもならぬとあれば、排除する覚悟もいるがね。ああ、しかも幸いなことに、我々は強者であるらしい。強者は手段を選ぶことができる。素晴らしいことであるとは、思わないか？」

「まったく同感だとも。……いや、わが身の幸運を実感するよ、本当に」

モモンガは、焼餅を一つ手にとって、口に運んだ。ゴマ油の香ばしさと、小麦粉の食感を楽しんで、以後は他愛もない歓談に浸った。

——待っていてくれる人がいるっていうのは、いいものだ。一人暮らしが長かったから、余計にそう思うよ。

また一つ、いい思い出ができたな、と。モモンガは、今の幸福を感じずにはいられなかった。

そして、唯一の仲間と杯を重ねる。前は、ここまで酒に強くなかったはずだと思しながら、今の境遇を感謝した。

評価して、理解してくれる人がいる。仮想ではなく、現実においてくれる。それがどれほどの励みになるものか、モモンガは実感せずにはいられないのだ。

準備だけは整えていたから、モモンガは初動を外さなかった。敵の拠点が墓地であり、アンデッドを戦力として用いていることもわかっている。数も多く用意されているのだから、よからぬことを企んでいるのは確かだ。

そして、大規模な戦力を運用するということは、目的も相応に大きなものと考えべき。エ・ランテルの街を占拠、あるいは破壊するか、いずれかの国に戦争を吹っ掛けるか。それくらいの事態は想定しておいて、しかるべきであろう。

——そして、レイジーの依頼を果たす意味でも、ここで活躍する意味はある。首魁はあの女戦士で間違いない。わかりやすく脅威として現れたのだから、恩義を感じてもらわねばな。

アンデッドの総数は、遠目から確認するだけでも、千は居る。街を出て墓地へと斬りこむならば、それまで相当な数を屠ることになるのは明白。

モモンガは、死肉にまみれる覚悟を決めた。

「そろそろ行くぞ。準備はいいな」

「はい、いつでもご随意に」

「好きなように動いてください。俺たちは、モモン殿に付いていくだけですよ」

ナーベラルとリジンカンが、傍に控えている。露払いを任せるのに、不安はない。

低レベルのアンデッドなど、いくら居ようがモモンガにとっては烏合の衆に過ぎず、鎧袖一触に打ち破ることは容易い。だが、街の冒険者にとってはどうか。

数そのものが、絶望として映るであろう。何しろ、街の守りの要たる、衛兵が怯えているのだ。門を叩き続けるアンデッドの群れを前に、慌てて救援を求める様は、どうしたって無様に見えた。

——おっと、人死にはなるべく少ない方がいいのだったな。

ものは考えようで、無様をさらしてくれているからこそ、モモンガの活躍も映える。

それに人間を見下すのはよくない。自分はたまたま力を持っているから、余裕をもって対応できているのだ。

ナザリックが存在しなければ、己は果たして、どこまで動けたのか。「低レベル相手は、やはりつまらん」

思考を打ち切って、モモンガは目の前の敵を屠る作業に入った。街の門を飛び越え、死体どもを眼前にとらえる。

わかりやすく人の目に映るように、迅速に門に張り付いていたアンデッドを潰した。

文字通り、剣の一振りで砕いたのだ。右手で一振り、左手で一振り。それだけで、数体のスケルトンが骨屑になった。

「興を削ぐには早いすな。まだまだ、黒幕が控えているんですから。まあ、多少なりとも歯ごたえがあればいいかと、その程度の期待に留めるのがよろしい。どうせ、貴方に敵うものなどいないんだ」

「——フェイ。モモン………さんに対して、いささか不遜な言葉遣いではありませんか？ 今少し、丁寧に」

「ナーベ、お前は固すぎる。もう少し態度を柔らかくしろ。モモン殿は、もっと乱暴な態度でも文句など言いやしないさ」

二人とも、モモンガに追従して門の前に立っている。

従者たちの会話に、モモンガは混ざれなかった。返答に困ったというのもあるし、実際にナーベは気安く接してくれた方が、楽ではないかとも思ったからだ。

しかし、雑魚とはいえ見られていることを意識しての戦闘である。緊張を隠すためにも、口数は少ない方がよい。

——数だけ多い、というはやはり考え物だな。賢王の奴もつれてくれればよかったか？

無駄に愛らしいハムスターは、今回はお留守番だ。下手に活躍させるよりは、三人だけで功績を独占する方が美味そうだと思ったからである。

魔獣が獅子奮迅の働きをしたとしたら、そちらに目が行ってしまうかもしれない。リジンカンも軽戦士の常として、手数が多く格下を殺す術に長けている。だからこそ、モモンガも最善の結果を狙えるのだ。

「一気に突破する。ナーベは私に続け。フェイは手の届く限り、見える範囲のアンデッドを処理しろ」

「具体的には、どこまで？」

「全てだ。お前の、戦士としての力量に期待している。言っている意味がわかるな？」

おおせのままに、とリジンカンは答えた。もちろん、フェイ・ダオとしての仮面を忘れたわけではない。

冒険者フェイ・ダオはあくまで一戦士に過ぎない。だから、戦士としての力以外は見せるな、とモモンガは言外に伝えたのだ。

「行くぞ、ついてこい！」

「はい！モモン様！」

さん付けで呼べ！と応えてしまったのは、戯れであったのか、そうでなかったのか。モモンガ自身にも、わからなかった。

思いのほか、テンションが上がっていく自分を自覚していた。それが不快でないどころか、楽しみに感じているあたり——己の人間性も戻ってきているのかもしれないと、何気なく思う。

だが、そうした彼の想いとは別に、彼の行動を観察している人々にとって、これは奇跡として映った。

「……信じられない。見えるか、アンデッドの群れを、無人の荒野を駆けるように進んでいる」

「なんと……あの戦士は、いや、あの戦士たちは、どんなに強いんだ。俺たちは、夢でも見ているのか……？」

衛兵たちが、思い思いに口を開いては、畏敬と驚愕の声をあふれさせた。あれほどの冒険者など見たことがない、と誰もが言う。

そして、アンデッドたちの目標も、わかりやすい脅威たる、彼ら三人へと変化していった。もはや、街など眼中にない。この恐ろしい敵を倒さぬ限り、生者の血肉にはありつけぬと知っているかのように。

「——俺たちは、英雄の誕生を目にしているのか」

モモンガの姿は、もはや門の上からでも見えなくなった。だが、遠くから響く剣戟の音が、戦闘が続いていることを教えてくれる。

そしてリジンカンは、襲い来るアンデッドの群れを的確に間引いていく。動きの鈍さをあざ笑うかのように、ゾンビの四肢をもぎ、首を飛ばし、スケルトンの腰骨を砕く。時には飛刀を用いながら、街へ一歩たりとも近づけさせまいと、単独で奮闘していた。

「カバーしきれないなどと、文句を言っても始まらない。——さて、速度をあげていくか」

リジンカンは、不格好な鉄の直剣を手にしながら、縦横無尽に駆け回った。そして彼の働きを見た衛兵たちも、勇気を奮い立たせてアンデッドどもに対抗する。

「俺たちが震えていたら、誰が街を守るんだ！」

「たった一人に働きで負けるな！ 兵の名折れだぞ！」

士気が向上し、衛兵たちの目に希望が宿る。

英雄といい、傑物という。そうした人物が、すぐ近くにいてくれるという事実を、エ・ランテルの者たちは今、明確に意識したのである。

レベル差があり、敵も特別な行動をするわけでもなく、ただ向かってくるばかりとなれば。

モモンガにとつてはルーチンワークに等しい。外野がどう見ているかは別として、彼は脅威など微塵も感じることなく、中枢にまでたどり着いてしまった。

「拍子抜けだな」

リジンカン置いていったことに後悔はない。いちいち手綱を取らねばならぬ相手ではないし、今回の側仕えはナーベだけで充分だ。

——まあ、どうとでもなるか。油断は禁物だが、理性のない雑魚が相手なら、いくら余裕を持ってもいいだろう。

ここまで遠く離れば、街の人々からも確認できない。途中から面倒になってきたので、手の届かないところは、アンデッドを作成して当たらせた。

そうして、モモンガは霊廟の前に立っている。ここからでも、怪しげな連中が儀式を行っている様子が見えるが、その中で際立つものが一人。

「女？ ——話に聞いた、女戦士か。なるほど、あいつが言うように、美人ではあるらしい」

たった一人だけ、女がいた。外見を見る限り、聞き取った情報と相違はない。

軽装、細剣、金髪、そこそこの美人。人によっては、たまらぬほど食指を動かされるであろう、獣のようなしなやかさと凶暴さを持った、均整の取れた肢体。あの色男ならば、どのように表現しただろう。

——ま、どうでもいいことだ。レベル的にも、脅威とはいいがたいしな。

モモンガは性欲が随分と薄くなっていたから、欲望に心を乱されはしないが。

リジンカンが手加減して、見逃す気持ちになったのは、相手が美女だったからだ。それくらいは、理解できた。



「……こちらに來ます」

「ばれていたか。いや、隠ぺいしていたわけではないから、当然だが」  
その気になれば、気づかれずに近づくこともできたが、モモンガは  
あえてしなかった。

敵の反応が見たかったというのもあるし、戦士としての己をまだ演  
じていたかったというのもある。

英雄モモンは戦士である。戦士であるならば、敵は真っ向から迎え  
撃ってしかるべき。

「聞こえたよ。——あいつはどこ？」

「飛刀の男なら置いてきた。今頃、街の外でアンデッドを処理してい  
るだろう。……残念だったな？」

「別に。お前を殺してから行けばいいだけ。……街の外なら、すぐに  
向かえるし」

大した違いじゃないよ、と彼女は言った。

その不遜な態度に、まずナーベラルが気分を害す。即座に殺してや  
ろうかと得物を構えるが、モモンガが制止する。

「よい。抑えろ」

「モモンガ様！……ああ、いえ、その」

「許す。私のための怒りだとわかるからだ。——すべて、許そう。だ  
から、ここは私に任せてくれ」

モモンガは、彼女の不適切な言葉を許す。ナーベラルは、憎しみを  
込めた形相だったが、齒を食いしぼり、両手を固く握りしめて耐えて  
いる。

主であるモモンガに対して、下郎に対するような扱い。これを見過  
ごすことは、従者としての誇りを傷つけるようなものだろう。当の本  
人になだめられても、目の色には強い殺意が表れていた。

「番犬みたい。別に興味はないけど。……ああ、一つだけあった。よ  
く、ここまで来れたね？ 私たちがここにすることが、わかっている  
みたいだった」

「靈廟があからさまに怪しかったのは、確かだからな。不思議でもな  
いだろ？」

「そうだね。で、お前はあいつの知り合いつてことでいいんだね？」  
「繰り返すが、飛刀の男のことなら、そうだ。色々聞いてきたからな、クレマンティーン、と言うんだったか？」

名を呼ばれたとき、明確に彼女の顔が嫌悪にゆがんだ。お前が名を呼ぶな、と言わんばかりに。

モモンガは、その反応に、『女』を感じた。罪作りな奴、トリジンカに内心で呼びかける。自分のことは柵に上げて、あの色男を困らせてやりたいと、遊び心さえ生まれていた。

「あいつは美人を手にかけることに、抵抗があるらしくてな。私にとっては意味のないことだが、彼個人の価値観は尊重したい。美しく産んでもらった、両親に感謝すべきだぞ？」

「うるさい。不快だよ」

「と、言われてもな。自重する気はない。なぜならお前はただの障害物に過ぎず、凡百の敵役に対する配慮など、私は認めない。——抵抗するなどは言わないから、存分に戦うことだ」

モモンガは、斬りかかることでクレマンティーンへの挨拶とする。

彼女の方もまた、迎え撃つことで返礼とした。撃ち合う剣。鋼同士が重なり合い、火花を散らす。

細剣が折れる前に、彼女の方から打ち合いを流す。一撃の邂逅の後、口を開いたのは彼女の方だった。

「なんだ、全然大したことないんだ」

「……力だけは、それなり以上だと自負しているが。いや、その細い剣でよくやる」

「馬鹿力。でも、技量が伴ってないよ。ああ、つまらない。あいつだったら、もつと楽しく打ち合えるんだろうになー」

心底残念だとばかりに、クレマンティーンは言う。

モモンガは、自分が戦士としての技量に劣ることを、素直に認めた。なるほど、熟練した戦士から見れば、己のそれは見戯にも等しいであろう。

「だからといって、退く気はない。戦士の先達殿、その自慢の技量とやらを、ご教示願おう」

「は！ 学ぶ前に死んでるよ。……お前に興味ないのは本当だし、さっさと逝ってくれろ？」

彼女は、全力でかかるつもりだった。だから、モモンガもこれを幸いと、存分に学ぶつもりだった。

「その番犬には、相手を用意してやるよ。——嬉しいだろ？」

「ナーベ、付き合ってやれ。……私の心配は無用だ」

かつて、カジットの高弟であった者たち。彼らが命がけで作成した、スケリトル・ドラゴンが二体。霊廟から現れたそれは、その巨軀をこれ見よがしにせながら、モモンガとナーベラルの前に現れた。

「適当に遊びながら、街の方にまでひきつける。城壁の衛兵に見える位置までおびき寄せ、時間を稼げ。……そうだな、移動してから一時間も持たせればいい。攻撃をいなしながら退いて、街をかばうように動いていれば、それなりに苦戦しているように見せられるだろう」

「御意。モモン様が駆けつけてくるまで、演技を続けておきます」

クレマンティーンを処理したら、モモンガが駆けつけて颯爽と骨の竜を斬り倒す。そうした筋書きが、もつとも美しい。うまくいくかどうかは、さておいて。

「残すのは一体でいい。だが無理は許さん。手加減が難しいと感じたら、残りの一体も遠慮なく潰してやれ。演技にも限界があることを忘れるな」

「……おおせのままに。決して、無様はさらさぬと約束いたします」

そうして、ナーベラルは距離を取った。スケリトル・ドラゴンどもも、彼女を追っていく。

どうせなら、一石二鳥を狙いたいものだ。モモンガの思惑が常にうまくいくとは限らぬが、失敗したとしても、傷は浅く済ませたい。

声望が高まるのは、モモンとナーベ、あるいはフエイ・ダオか。いずれであっても良い。それくらいの分別は、彼にもあった。

「後衛の補助があるなるともかく、一人で勝てるつもりなんだ。飛刀の男を呼んでこなくていいの？」

「勝つつもりだとも、クレマンティーン先生。かつて人気を博したR

PGでは、経験を稼ぐのにうってつけの標的に対して、『先生』と呼ぶのが習わしだったそうだ」

ならば、それに倣うのも一興だろうと、モモンガは言った。クレマンティーヌは、やはり顔を嫌悪にゆがめたまま、無言で斬りかかる。

速度に劣るモモンガは、それを鎧で受けた。ダメージはないが、やはり前衛職の技術は侮れぬ、と想いを新たにす。

「わけわかんない。……ああ、もういいよ、どうだって。イラつくから死ねよ、お前も、あいつも」

「そろそろ、言葉を尽くすのにも飽いたか。私も、ここからは剣だけで語ろう」

一時間、戦士の経験を積む時間としては、いささか短すぎたか。いや、それはこの場限りのことだと、モモンガは気持ちを切り替えることにした。

——持ち帰れば、いつでも殴り合える。とりあえず、概要だけでも吸収できれば上等だ。

クレマンティーヌは、程なく後悔することになる。自身が誰に戦いを挑んでいるのか、きちんと理解さえしていれば、まだしも苦痛の少ない敗北を迎えられたろう。

一つ確かなことは、彼女が諸々の真実を思い知るのに、一時間もかからなかったことだった。

全てのことが、二十四時間以内に決着したと言え、どれほど驚異的なことであるかわかるだろうか。少なくとも、街の住人たちにとっては、英雄的行為であったことは確かである。

アンデッドの討滅には思いのほか手間取ったが、リジンカンもナーベラルも、この点では過失を犯さず、完璧に仕事をこなした。

スケリトル・ドラゴンも、一体は危うげなく二人で連携して倒して

くれていた。そして残った一体も、駆けつけたモモンガが一刀両断にして打倒した。

城壁で兵士たちが見守る中、適当に演出を入れながらの勝利である。英雄譚の一節としては、そこそこの出来ではないかと、当人たちも自賛していた。

——その点については、街の連中の反応を見るに、そう外れてはいないと思えるが。

ひと仕事を終えて、モモンガは宿屋の一階でくつろいでいた。周囲を見やれば、先日と変わらず、色々な冒険者たちが飲み食いしている。

——日常が戻ってきた、と言えるのだろう。一日にも満たぬ異常だったが、これを収めた我々は、望外の結果を得ることができた。これは僥倖と言って良い。

冒険者組合からの表彰やら何やらも予定されている。地位の向上、名声の流布。そうした結果に満足しながらも、冒険は始まったばかりなのだ、気を引き締める。

——あれの処分というか、処遇についても考えねばならんし。どうせ一朝一夕では片付かないんだから、ゆっくりと進めるか。

モモンガは、クレマンティヌの遺骸をひそかにナザリックに送っていた。

リジンカンがいるなら、しばらく放っておいてもどうにかなるだろうと。念には念をと、自らナザリックまで運び込んでいたのだ。

蘇生する時期は、まだ先にしようと思っている。モモンガは街を守ったパーティのリーダーだ。あれやこれやと持ち上げられて、宣伝され、仕事も割のいいものが舞い込んできていた。

実際に仕事にかかるのは、先送りにしてもいい。しばらくは、組合に深入りするのも手だろう。

エ・ランテルは、人間関係についてはまっさらの土地であるし、上層部に人脈を作るのも重要だ。

——さて、リイジーは約束を守ってくれるようだし、幸先の良いスタートだと言える。目論見通りに事が進むのは、気持ちがいいものだな。

未来のことばかりを考えて、すっかりモモンガは浮かれていた。油断していた、と言つてよい。だから、緊急の報告があると伝言が飛んできたときは、いささか驚いた。

ウオン・ライの声でなければ、あからさまに動揺したに違いない。外にいる状態で、それはまずい。落ち着くためにナーベラルやリジンカンを置いて、一人で自室に向かう。

両者に追つてくるな、とわざわざ言い残す念の入りようで、自室に入ると力を抜いて椅子に腰かける。伝言の内容を頭の中で反芻しながら、落ち着いたところで彼に返答した。

「……もう一度言つてくれ。聞き間違いでないと確認したい」

『シャルティアが、ナザリックの制御を離れた。もう一度言おう。守護者たちは、彼女の裏切りを想定している』

「ありえない。いや、ありえないと……思いたい」

『そうだ、ありえてはならない。——実際のところ、ユグドラシルでのバッドステータス、魅了か混乱か、支配の状態に近いと見ていいだろう。NPCが一時的に離反した状態に過ぎず、そこまで深刻に見るこ  
とではない』

取り返しがつくことだ。どうにでもなる。

ウオン・ライが、繰り返すようにそういった。だから、モモンガも冷静さを取り戻す。

アンデッドの特性として、強い動揺は現れないようになっていたのだが、いくらかの感情の揺れ動きは残るものだ。それをなだめるのは、実際のところ、さしたる労力ではない。

——落ち着け。シャルティアは、自ら敵に回ったのではない。どうしようもなく、その状態に陥ったと考えるべきだ。忠誠を疑うのは、事のはつきりしてからでも遅くないだろう？

しかし、発散せずため込むことも、精神衛生上悪いことだ。相手が相手なので、モモンガは気取らずに話を進めた。

「ん、そうだな。取り乱して、悪かった。……シャルティアには、確か仕事を任せていたと思うが」

『足がつかない、都合のいい強者の確保。言葉を飾らずに言えば、犯罪

者の拉致だ。適当な盗賊の巣を襲撃すれば、いくらかは確保が見込めると思っていたが、思わぬ結果となった』

この世界の魔法や、武技を修めた人間を捕縛し、研究することは急務であった。ナザリツクは情報に飢えており、知るすべがない領域においては、世の全てが脅威と言える。

そのため、使いつぶしても非難されない、犯罪者を狙っていた。探せばいるはずだと思い、セバスやシャルティアにその任に当たらせていたのだが。

「——いや、こちらが悔りすぎていた。この世界のレベルが低いものだと決めてかかっていた。その油断を突かれたんだ。くそ、予想できはずなのに。……ああ、そうだ。これは俺の失敗であって、シャルティアの失態ではない。それだけは、間違えてはいけない」

モモンガは己を責めた。部下を責める前に、己をかえりみて反省する。

自分の失敗を部下に押し付ける上司が、いかに醜いか。彼はそれをよくわかっているから、常に自戒の心を忘れず、短絡的な思考だけで完結しない。

だからこそ、確認すべきことに思い至って、ウオン・ライに問うた。

「セバスは？　ともに行動させていた、ソリュシヤンは無事なのか？」  
『大事な。二人とも無事だ』

「良かった。もし二人にも、何かしらの被害が及んでいたとしたら……私は、適切な命令ができない、愚かな主人になっていただろう。力量に見合わぬ仕事を任せて失敗したなら、それは命じたものが責任を取るべきだ。そうだろうか？」

モモンガは、不安を感じていた。自身の失敗を重く見て、自信を失いかけている。やはり己は、ナザリツクの支配者として相応しくないのではと、恐ろしい疑念すらわいてくる。

だが、そうした悲観を吹き飛ばすように、ウオン・ライは努めて明るく言った。

『その通り。そして、モモンガ殿は適切な命令を伝えられた。二人は、途中までは順調に任務を遂行していたのだ。……シャルティアにつ

いては、事故とみるべきだろう。まだ詳細は明らかではないが、早急に情報を収集する』

「ああ、頼む。私は——そうだな。冒険者としての仕事は、一時中断して、シャルティアの件に集中しよう」

『小さなことでも責任を感じるのは、貴方の長所だよ。そして、即座に判断して挽回を狙いに行く強かさは、それ以上に素晴らしい長所と言える』

「私は、間違っていないか？」

『正しいとも。これからそれを証明しようじゃないか。私のバックアップでは、不安かな？』

「まさか。……充分だよ、ありがとう」

下手に手を抜いたり、手間を惜しめば、致命傷になりかねないと、モモンガは感じている。

ウォン・ライも、そうした気持ちかわかるのだろう。またナザリック内で話し合おうと答えて、伝言を終了した。

——そうだ。失敗したなら、それを上回る成功で取り返せばいい。シャルティアのことだって、手遅れというわけでもなし。事を収め次第、対策を練れば済む話だ。

弱気になった自分を鼓舞して、モモンガは前向きになった。新しい世界で、新しい事業に向かっているのだ。アクシデントはつきものである。

そう割り切って、彼はナザリックへの帰途についた。

——気楽に焼餅でもつまみながら、とはいかないが、肩の力は抜いておこう。そうだとも、失敗しない人なんていない。委縮して行動しないことの方が、きつと害は大きい。動くべきだ。

考えつく限りのことを考えて、必要な対策は全てたてよう。

もはやモモンガにとって、ナザリックは帰るべき故郷であり、そこにいる者たちはみな身内である。

身内のために骨を折るならば、構わない。モモンガは気持ちを新たにして、現状と向き合う覚悟をした。

「シャルティアは、気に病むかもしれない。終わった後のケアについ



ても、話し合うか。ウォン・ライなら、上手に慰めてくれるだろう」  
モチベーションを保つためには、首尾よく終わった後のことを考え  
て、気を紛らわせるのもいい。常に都合よく事が運ぶとは限らない  
が、夢想するのは自由だ。

そして、時に楽観的な仮定や空想は、救いとなることもある。失敗  
を恐れるのではなく、成功への道筋を考えること。モモンガの頭の中  
は、もはやそれだけに集中していた――。

## 第十四章 女の戦い

——結局、昨夜はモモンガは帰ってこなかったな。よほど、今の仕事に集中したいらしい。

朝早くからウォン・ライは、道にまで伸びてきた茨を切っていた。カルネ村の道路事情は、そこまでよくはない。細かなところに整備が行き届いていないのだが、きつとそこまで労力をかける暇がなかったのだらう。

茨は道の外側に茂っているから、もう少しくらい放っておいても、問題にはなるまい。しかし、こうした小さく細かい部分をすっかりやりたがるのが、彼の性格だった。

——野茨はトゲがうつとおしく、道端に伸びてくると通行の邪魔になる。地球のそれとはいくらか違いもあるうが、駆除して悪い種でもあるまい。

しかし、こうした野草の処理など何年ぶりになることか。今となつては、中国でも絶滅に近い種であろう。子供のころは、弟たちがこれで怪我をしたこともあったが、今や不毛の大地となった大陸では、ここまで伸びることはまずない。

自然がそのままであることは、幸いである。幸いであるならば、どんな作業であれ、やはり楽しむべきだ。

努力を厭わない？ その程度では修行が足りぬ。修行を好む、という段階に至るならば、それはそれでよいことだが充分ではない。

いかなることであれ、楽しむことが最上だ。そしてウォン・ライは、どのような雑事であれ、楽しみを見出す才能を持っていた。

——茨は、荆棘けいぎよくとも呼ばれる。そして荆棘の花は、あれで結構美しい。荆棘花にたとえられた女性も、かつて中国には存在したと聞く。うろ覚えだが、さて、どのような物語であったか。

単調な作業の中でも、きつかけ見出して面白みを感じるのがコツである。頭の中ではあれこれ考えていても、彼の手足は機敏であった。そして指先は繊細であり、行動には後に続く人々への思いやりに満ちている。

——それにしても、茨にも華があると認めたら人は、なかなかセンスがいい。街中では、トゲがあるから駆除されるが、野にあるならば愛でるのも一興か。この世界では、荆棘はどのような花を咲かせるのだろうか。

この手の植物は、完全に駆除するのが難しい。だから適当に処置して放置する、ということが結構あるもので、こうして邪魔になるほど伸びるのも、その結果だった。

ウオン・ライも、現地の植生に詳しいわけではないから、根絶までは考えていない。ただ、ここを通る人がトゲに足を引っかけないように。しばらくの間は、茨で頭を悩ませることのないようにと、なるべく深く刈り取った。

本気で絶やすつもりならば、手段はあるのだが——それはそれで、無粋な気がしたのだ。

——これで、よいか。

そうして働いているうちに、村長と出会った。彼は彼で、早朝から働き出すのが日課であるらしい。

勤勉なものは好ましい。お互いに軽く挨拶をしてから、言葉を交わす。

「ウオン・ライ様。朝早くから、精が出ますな。意外ではありませんが、手際もいい」

「若いころは、色々な仕事をした。つまらないものであっても、面倒なものだろうと、嫌とは言えぬ身分であったからな。結果として、様々な事柄に習熟してしまっただが」

こうして役に立てるのなら、その苦労は無駄なものではないのだと、ウオン・ライは言った。

実際、彼の顔に苦悩の色はない。すがすがしく感じられる声で、村人たちの役に立てて嬉しい、とまで言う。

「そこまで気遣っていただかなくとも、よろしいのに」

「いや、やはりできることはやっておきたくてな。それに、手が回らぬところを補助してやらねば、協力する意味もないだろう。……ちよつとした手間で皆が喜んでくれるなら、これくらいは惜しむものではない

いさ」

彼は何でもなくこのように、作業を続けた。確かに手慣れているが、むしろ手際の良さ自体が違和感を覚えさせた。

こんな些事をさせて良い人ではない。村長は、直感的にそう思った。思つてなお、直言がはばかれるほど、本人が楽しんでいたのが問題であった。

「……他に、やるべきことがあるのでは、ないですか？」

「今、村人の安全を確保すること。それは私のやるべき仕事で、優先すべき仕事なのだ。その作業は細やかであるべきで、手を抜いてはならないと思つている。……どうしてだろうな。私は、目に見える人々をまず助けたいのに、そうした人々から敬遠される。私自身の不徳ゆえと思うが、改めて聞かされると堪えるよ」

「いえ！ 悪い意味で言つたわけではないのです。ただ、ウオン・ライ様にはもつと大きな役割があつて、そちらの専念することが、我々のためにもなるのではないかと。こうした些事は、我々で処理したほうが適切ではないかと、そう思つただけです」

やはり村長も、似たようなことを言うのだな——と、ウオン・ライは苦笑した。

その様が、村長には少しだけ寂し気にも見えた。彼自身、間違つたことを言つたつもりはないのだが。

「私としては、些細な気づかいを忘れては、大きな仕事などできない、と言いたくもあるが。……まあ、ここは村長の顔を立てよう。後は任せるが、良いな？」

「はい。どうぞ、村のことはお任せください。若い連中も、やる気になつたようですし、十分に働いていただいたと思つております」

ウオン・ライは深くは追及しなかつた。そうすることが、村長のメンツを守ることだと理解していたから。

温情も過ぎれば毒となる。心配するよりは、信頼する方が人間関係としては健全だろう。村長も仕事があるらしく、すぐに別れた。

そうして、村を見回りながら、ウオン・ライは道行く人々に挨拶した。人々を観察していれば、後の課題も見えてくる。

また、そのように別に深く考えずとも、身近な人々との触れ合いは、彼を楽しませた。氣遣いを見せる人もいれば、驚く人もいる。そういうものであるう、と彼は思った。

「失礼、貴方がウオン・ライ殿ですか？」

「ああ、そうだが、貴方は？」

「わしはレイジー・バレアレと申します。孫ともども、これから村の世話になりますので、ご挨拶に参りました」

新入りらしい老婆とも、彼は親しく言葉を交わした。村に来たいきさつから、これからの仕事について。話題の種は、いくらもあつた。モモンガの働きが、目に見えて現れている。それを実感できたことで、ウオン・ライも労働意欲がわいて出てくるのを感じた。

——人が人を思いやる気持ちに、限界などない。慈しむ気持ちを持つてば、自然と礼に適う態度を取れるものだ。

礼を尽くせば、人々は応えてくれる。そう信じて、ウオン・ライは今日を生きている。さて、次は何をしようかと、思考を巡らせた。

きつと、モモンガも同じように楽しんでいるのだろう。そうあつてほしいと願いながら、彼は仕事に取り掛かった。

シャルティアの件がなければ、おそらく村に終日居続けたであろう。それを残念に思うのは、もはや本人だけではなかつたのである。

シャルティアが寝返つた、と聞けば動揺するのも無理はない。

だが、ただの状態異常である、と聞けば『なんだその程度か』と安心できる。認識が変わるだけで、現実まで変化するわけではないのだが、人の心とはまことに都合よくできている。

しかし、原因がわからないというのは不気味であつた。状況が唐突であるゆえ、まずは外部勢力の犯行を疑いたくなるが——それならそ

れで、奇襲に備える必要が出てくる。

シャルティアの耐性をぶち抜いて、その意思に干渉するナニカ。それを見定めねばならぬと、モモンガは気を引き締めた。

「——詳細は理解した。ともあれ、セバスらは任務を続行してよい。ただ、警戒は強めよ。油断を戒め、慎重に事を進めるように」

「はい。しかと、伝えましょう」

アルベドは、神妙な面持ちでモモンガの言葉を聞いていた。彼女であれば、その言葉をそのままに、間違いなく伝えてくれるであろう。

「他に何か、伝えることはございますか？」

「己を責めるな。お前たちが無事でよかった、と。……私は、お前たちの安全と幸福を心から願っている。たとえ治癒できるとしても、傷ついてほしくないのだ。無論シャルティアも同様であると、そう心得るがいい」

モモンガは、その身をナザリックに置いていた。表向きの、冒険者としての顔は今も忘れる。後で仕事が停滞したことで頭を悩ませるのだろうか、それはいい。取り返しがつくものだ。

——だが、この件は無視すれば酷いことになる。そうした予感がある。根拠のない直感だが、この手の感覚は案外馬鹿にできないものだからな。

アルベドに向かい合うと同時に、己の心とも向かい合う。やるべきことは決めている。退こうとは思わない。妥協することも。

「私が出張る。私自身でなくてはいけないことだ。——だから、討伐隊を派遣する、などと言ってはくれないなよ」

「……以前であれば、一度は異議を申し立てたでありますようが。男を立てるのも、女の務めでありますれば」

今はあえて、譲りましょう。

アルベドはそう言った。引つかかるものを感じるが、モモンガは追及しない。負い目があるだけに、突っ込むのが怖くなったのだ。

何より、その表情が怖い。身内の女性が、悲しんでいる。その暗い表情が、ここまで心に来るとは、彼にとっても計算外であった。

「う、うむ。そうか。反対されると思っていたが」

「考えないわけでは、ありませんでした。心境の変化、といえればそれまででございますが——ともあれ、不興を買わずに済んだのであれば幸いです。ウォン・ライ様に相談した甲斐があったというものですわ」  
そうだ、ウォン・ライだと、モモンガは思った。シャルティア対策は一人でも立てられるが、答え合わせをする相手が必要である。彼ならば、いかに備えいかに応じるか。その見解を知りたいところであった。

アルベドの相談内容も気にはかかるが、なんとなく、追及する気にはなれなかった。デリケートなことだとすれば、こちらから聞くのはあまりに不躰であろう。

「彼は、いつ戻る?」

「まもなくかと。村の仕事に区切りをつけ次第、戻られると仰られていましたから——」

ならばしばし待つか、と時間つぶしの方法を考えているうちに、ウォン・ライは姿を現した。

「私個人の準備は整えた。いつでも行けるが、どうする」

特に明確に指示したわけではないが、彼は彼の仕事があつたはずである。それを置いてまで備え、駆けつけてくれたことを、モモンガは感謝した。

「忙しいだろうに、すまないな」

「なんの、これくらいは負担のうちに入らぬさ。余裕はあるが、緊急性があることには違いがない。シャルティアに何が起こったかは、いまだ断定できん。しかし、結果だけはわかつている。……もし、これが意図的に引き起こされた事態であれば、必ず落とし前をつけさせてやりたいものだ」

「——ああ、もつともだ」

ふつふつと、怒りが湧き上がるのを感じる。モモンガは、穏やかな怒りというものが、いかに始末が悪く、後を引きずるものか、改めて自覚した。

強くならないから、爆発することがない。それでいて意識してしまふ程度には感ずるのだから、消化不良を起こしてしまいそうになる。

「しかし、今はまずシャルティアだ。私自身が解決せねばなるまい」  
「彼女のステータス、装備の構成は覚えているかね？ モモンガ殿とは、相性はよくなかったと思うが」

殴り合いになるとは限らないが、そうなったときの備えはいる。いや、おそらく決戦になると、見込んでおいた方がいい。

何かしらの手段で、穏便に状態異常を回復させられるのなら、それが一番である。しかし、それをアテにして、他に何の備えもしないというのは、楽観を通り過ぎて怠惰の極みだろう。

「戦うにしても、準備すればどうとでもなる。——いや、慢心はいかな。だが、勝率は十分あると見込んでいる。たとえ、一対一であつても。……ウオン・ライ、わかっているとは思うが」

「もちろん、止めはしない。が、支援は十分にさせていただく。万一に備えるのは、当然のことだ。そうだろう？」

真に勇気があるものは、恐れを飲み下し、行動するものだ。だが勇気しか持たないものは、事態を乱すばかりで收拾がつかなくなる。

モモンガは、決して勇だけの男ではない。事後の対策は、すでに考えている。それに、これは己にどこまでの単独行動が許されるのか、それを試す好機でもあった。

「備えか。そうだな、必要なことには違いない。……私の単独行動は、果たして無謀であるのか否か。ここらで確かめるのも悪くないだろう？」

「無茶には違いがないのだ。討伐隊を組んで、多対一で安全に対処する方法がもつとも無難だが、モモンガ殿はそうしたくないという」

「……ああ。これは、我がままだな。そう、認めよう」

シャルティアの現状は、自身の失態が招いたことだと、モモンガは考えている。だから、はじめをつけるのは、痛みを知るべきなのは、己であると捉えているのだ。

何より、もはや身内として認識している守護者たちを、互いに争わせることが辛い。そんな光景を見るくらいならば、多少の危険がどうだというのか。

——ウオン・ライには、それがわかる。そうした責任感を共有でき



てこそ、友と言える。

「道理である。生みの親との交流の長さを顧みれば、我々が始末をつけねばならぬ。それが誠意というものであろう。……モモンガ殿、貴方の判断は正しい。私は支持するよ」

「——ありがとう。わざわざ危険を冒しに行くのだ。止められて当然と、私は考えていたが」

「誰より心を痛めているのは貴方だ。どうして止められようか。……心痛を収めるのに、あえて自らを責める。そうせねば収まりがつかぬというのだろう。責任感の強い、貴方らしい判断じゃないか」

「そうか。私らしいと、言ってくれるか」

「長い付き合いだろう？ お互いに。それくらいは、言わせてくれ」

ウオン・ライは、モモンガの心情を察したように話を進めた。これには彼自身、苦笑で返すよりほかはない。あれこれと言葉を重ねると、余計に気恥ずかしくなりそうだったからだ。

「すでに戦術は考えている。——と、まあ、こんな具合でどうかかな」

「それなら——で、こう……というところで、アレを——」

「うん。良い感じだ。それでいこう」

しかし、傍から見ているアルベドにしてみれば、その息の合ったやりとり自体が、嫉妬の対象である。流石にここで割り込むほど、空気の読めない女性ではないが——。

乙女心、とでもいうべきか。名状しがたい感情が、積み重なっていくようで、落ち着かない様子を見せた。

これにはモモンガも、流石に気付かずにはいられない。配慮が必要かと、声をかける。

「アルベド」

「——ッ！ はい、何でしょうモモンガ様」

「苦労を掛けるが、改めて命じておく。……信じて待て。案ずるなどは、あえて言わん。だが信じよ。私はナザリックの支配者として、相応しい格をここで見せたい。そう私が発言していたと、守護者たち全員に、お前が伝えるのだ」

良いな、と重ねてモモンガは言った。

「……確認いたします。モモンガ様単独で、シャルティアに挑む。それで間違いはありませんか？」

「もちろんだ。——準備は必要だが、やはり手伝いはいらん。ウォン・ライがいれば事足りるゆえな」

モモンガは、ウォン・ライをちらりと見やった。彼は微笑んで、一礼する。

ならば憂いはないと、続けて言った。

「シャルティアは、今何かしらの手段によって、異常な状態にある。距離を取って、状態異常の解除をまず試みる。それでうまくいかない場合は、一度撃破し、復活させよう。それで正常に戻ればよし。戻らなければ……相応に対処し、様子を見る必要があるな。異論は？」

「ごいません。適切な対処と考えます」

決まったなら、後は行動に移すだけである。時間を置く理由はないのだから、モモンガはさっそく装備を吟味し始めた。

考え直すことがあれば、ウォン・ライが相談に乗るだろう。アルベドは、一連の出来事を黙って見ていた。

彼女には傍観するだけの余裕があったと、そう言えるのかもしれない。ただ別の言い方をするのであれば、ただ傍観する以外に、やるべきことがなかったとも言える。

二人の関係は、やはり特別であるのだと。それを思い知らされて、わかってはいたもの——やはり、己が感情を持って余してしまうのが、アルベドという女性であった。

「ウォン・ライ様」

「どうした？ 不安か」

呼びかけてはみたものの、モモンガの前で彼と面と向かっては、やはり気おくれを感じずにはいられない。

無意識に嫉視してしまうような相手である。一呼吸を入れてから、再度口を開いた。

「協力とは申しませんが、手段は広うございます。今回の件、半端な手段では、効果もないでしょう」

「もつともだ。ゆえ、積極的にかかわらせてもらう。最悪の展開を想

定して、備えておきたいと思っっているとも」

積極的、備える。そうした言葉の中に、アルベドは不穏なものを感じた。ゆえに問う。

「……まさか、一対一という前提を覆すつもりでは、ありませんか？」

「ほう、なかなか鋭い」

愉快気に、ウォン・ライは笑ってみせた。

なのに、モモンガは意に介さず異議を唱えない。邪魔されるなどと思ってもいないような態度である。

ウォン・ライは不穏な言を吐いた。そうでありながら、この態度はどうなのだ。理解が足りぬ、及ばぬということが、ここまで齒がゆいのかと、アルベドは思い知らされた。

「が、ここで直接割り込むようでは友とは言えぬ。さりとして心配一つせぬ、というでは、やはり友人足りえないのでね。——保険を仕込むだけだ」

「具体的には？」

「モモンガ殿の死亡率を下げる。端的に言ってしまうえば、それだけのこと」

そのどこが具体的なのか——とアルベドは突っ込みたくなかったが、ぐつと堪える。

モモンガも、補足が必要だと思っただろう。穏やかな口調で説明した。

「うむ、アルベドは知らないかもしれないが、一度だけ致死ダメージを肩代わりするスキルがあつてな。……発動するまで、本人が解除しない限り長時間持続する。高レベルのタンク役には必須の技能ゆえ、ウォン・ライも当然覚えている。諸々の心配も、これで軽減できればいいのだが」

致死ダメージと一言で言うが、要するにHPを超過したダメージを受けた際、そのダメージをそっくりそのまま術者に移し替えるスキルである。ウォン・ライはタンク役に相応しく、HPもモモンガと比べれば遥かに高い。一度ダメージを肩代わりした程度では沈まないの  
で、どちらにとってもリスクのない話である。

これがあれば、不意の一撃で倒れる可能性は消える。そして一撃を受け流す余裕ができたなら、モモンガにはいくらでも打つ手があった。

「よくわかりました。しかし、自動復活の指輪をつけていれば、さらに安全度は増すのではありませんか？」

「いや、復活は、一度死亡判定を受けてから発動するもの。その一度の死亡判定が、この世界においてどのように作用するのか？ 実験していないので、これがわからない。……方が一のことを考えるならば、そもそも死亡判定など持ち込ませない方がいいと思うのだ」

アルベドの問いに、モモンガはそう答えた。復活の指輪をつけるよりは、その分だけ火力なり防御なりを伸ばすべきだと。

本音を言えば、彼は自分を追い込んで、不退転の覚悟で臨みたかったのだ。その理由はと言えば、非合理ではあるが、モモンガなりの責任感がそうさせたがっている。

なのに、ウオン・ライを巻き込むことを躊躇わないのは、それだけ強く信頼しているから。

「そういうことだ。まあ、最低でも撤退する余裕は生まれよう。現状、モモンガ殿が死亡する、という展開が最悪の中の最悪だ、と思っっている。ゆえ、このスキルが発動したら、撤退するか援軍を向かわせるか、その二択を選んでもらいたい」

「……場合によっては、諦めろと？」

「これが最大限の譲歩だと理解してほしい。誰もが貴方を心配している。己一人の命ではないと、わかってくださっているだろう？」

「それは、そうだが……」

このスキルは、HPの高いタンク役が、打たれ弱い後衛に使用するのが一般的である。重ね掛けができず、一度使用すれば数時間の冷却時間が必要になるため、使いどころが難しいものだが……今回に限っては、悩むような場面ではあるまい。

死んでも蘇生の手立てはある。だが、積極的に活用したい手ではないし、現実としてどうなるかは不明瞭なところがあり——方が一のことなど、考えたくもないというのが本音であった。

ゆえ、譲歩をウオン・ライは求める。追い詰められたならば、わがままはひっこめてくれと。

——モモンガ様は、拒否なさらないはず。すると、あの提案が、結果的に私の不安を取り除くことになる。かの赤鬼様は、そこまで考えて話していたというの？

アルベドは、ウオン・ライが意味ありげにこちらを向いて、片眼をつむっているのに気づく。内心を読み取られたようで、それがまた悔しかった。

「了解した。そういうことであれば、拒否するのも気の毒か。……シヤルティア相手に、致死ダメージを受けるようなことがあれば、即座に退こう。そこまで事態が推移したなら、何かしらつかめていることもあるだろうしな」

「ありがたい。……アルベド、そういうことだ。最悪の事態は、これで避けられる。戦闘中、何者かが乱入してくる可能性さえ潰せば、無難な結果に終わるだろう」

「——はい。そういうことであれば、わずかに残っていた懸念も消えます。どうか、ご存分に」

彼女はそれで、納得したように不安を顔から消してみせた。そして微笑んで、安心しましたと答える。内心はどうあれ、彼女にとって顔を作るくらいは容易いことだった。

そうするのが礼であると、わきまえているかのように。モモンガはすっかりそれを真に受けて、戦闘への前準備に集中し始めた。

状況を想定する。まず懸念すべきことは何か、初手は素直に通るか。通らない場合の対応、彼我の実力差と性能の違いについて——彼には、考えるべきことが山ほどあったから。

男にとって、女心は永遠の謎である。その逆もまたしかり。君臣、家族の間柄であろうと、他者を理解するというのは容易なことではない。

ただ、経験だけがその齟齬を埋める。ウオン・ライは察していた。アルベドには、まだ言葉が必要である——と。

モモンガは出陣した。冒険者組合からシャルティアの件が持ち込まれる、などの思いがけない出来事はあったが、彼はこれを上手にさばっている。

やるべきことに変化はなく、事が終われば地位が向上し、組合への影響力が強まるのだから、良く身を処していると言えるだろう。

——不測の事態、というほど深刻な結果にならなかつたのは僥倖だ。外のつながりがあったからこそその結果で、やはりモモンガ殿は、何かしら持つている人であるな。

災い転じて福となす。何事にも両面があると知り、一方的なものを見方をしないよう努めるのは、ウォン・ライの癖のようなものだった。もしもの際、撤退を支援する態勢だけは整えておいたが、おそらく必要となることはあるまいと、ウォン・ライは考えている。

モモンガは常に謙遜するが、ここぞという時の勝率は非常に高い。なるほど、敗北を喫した経験は数多いと、それは認める。全盛期のユグドラシルは、まさに魔境であったから。

だが事前に対策が可能であり、準備に時間をかけられて、敵の情報もあらかた把握している。そこまでの条件がそろっていて、分の悪い勝負に持ち込まれるなど、彼に限ってはありえない。ウォン・ライは、これを正しく理解していた。

信じている、のではない。知っているのだ。彼がこんなところで負けるような男ではないと、最初からわかっているから、不安など微塵もない。

「これで、良かったのですね？」

「確認を取ろうとするあたり、やはり納得はしておらん様子だな」

「……確認は、あくまで確認ですわ。そこに他意など」

だが、悩むべきことが全くないとも言えぬ。気を遣うべきは、戦闘以外のところにあつた。そう思うからこそ、今ウォン・ライは、アルベドと向かい合っている。

共に、いざとなればシャルティアとの戦いに割り込める位置で待機していた。もし、何者かが乱入してくるような気配があれば、こちらで迎え撃つ予定である。退却時の支援が必要であれば、当然二人で対応することになる。

他の守護者たちは、ナザリックの一室で戦いの成り行きを見守っていた。そこまで過剰に戦力を投入すべきでない、と考えたからだ。

「モモンガ様とシャルティアとの戦いは、順調に推移しています。周囲の警戒網にも、異常はありません」

「戦いを見守るくらいは、片手間にできると。つまり、時間が空いたわけか」

「——ただ待機しているよりは、お互いに語りたいことを語り合って、理解を深めるのも、よろしゅうございましょう。何か、不都合でも？」

アルベドがこのような発言を行ったのは、単純に機会ができたことが第一。そして余裕があるうちに、ウォン・ライという唯一無二の存在と向き合いたい、出来れば他人の目がない場所——というのが第二の理由である。

「良いとも。他者の理解が難しいのは、当たり前のこと。言葉を尽くそうじゃないか。——我々は、同志であるはずだ。すでに、認識のすり合わせは済ませたと思っているが」

「お互い、それほど多くの時間を割けたわけではありません。……いえ、多少なりとも忌憚なく言葉を交わしたからこそ、改めて話し合いたいこともできるというものです」

ウォン・ライは、決して話しにくい相手ではない。威厳もあつて厳格な所もあるが、その本質は穏やかであり、相對すれば柔らかな雰囲気を感じさせ、何より聞き上手だった。

だから、アルベドも一対一で面と向かえば、言葉を引き出されてしまう。これもまた、人徳とでもいうのだろうか。ちよつとした言葉としくさで話を促されると、不思議と口が滑るのだ。

「正直に答えさせていただけのならば……完全な理解は不可能、ということがわかった程度なのです。何と申しても、この身は女なれば。男子の矜持も、その夢も、私にとってはさほど重く感じられない。私

の想いと、かのお方の幸福。その両立に比べれば——ええ、あえて危険を冒すということ自体が、受け入れがたいものなのです」

両者は、すでに一度語り合っている。ウォン・ライは、アルベドに理解を求めている、彼女もなるべくわかり合いたいと思っている。

なにしろ、彼女にとってウォン・ライは鬼門なのである。ある種の疫病神と言ってよい。彼がいるからこそ、モモンガは彼を頼りにしてしまう。最後の抛り所にしてしまう。

決して、彼女自身には甘えてはくれない。どこまで行っても、モモンガにとってアルベドは庇護すべき対象で、おろそかに扱えぬ身内なのだ。

頼ることはあるだろう。力を求めることもあろう。だが、寄りかかってよい対象ではないと、彼は自戒している。見栄を張り、己の力量を誇示しようとするのは、それゆえであるとアルベドの中の『女』は見抜いていた。

「もちろん、愚かな女の妄言と、笑われても仕方ないとは思いますが。でも、仕方がないではありませんか。……好いた殿方を理解したい。けれど、殿方のほうにも、同じく私のことをわかってもらいたい。案じる私の感情をくみ取ってくれるなら、もつと踏み込んで受け入れてほしいと願うのは、傲慢なことでしょうか？」

好いていればこそ、モモンガの言動にやきもきするのだし、積極的に役に立ちたいと願うのだ。対等であることは無理でも、身内として特別な存在になりたい。そのためには、モモンガという人物の核を見定めねばならぬし、より深く心情を理解したくなる。

モモンガの心情を、深いところまでくみ取れぬ彼女にとって。さらなる理解を求めるならば、ウォン・ライの視点が欠かせない。ウォン・ライを見定めることによつて、モモンガが何を好み何を忌避するかを知るのだ。

友人というものは、己の鏡である。鏡を見れば、実像が知れる。アルベドは直接向かい合うのも恐れ多いと感ずるがゆえ、まずは間接的に理解を深めようと図っていた。

「だとしても、健全な傲慢さだ。まして男を想う女性としては、当然の



願望であることだろう。モモンガ殿は、アルベドの本音や内心の譲歩をくみ取れぬほど、鈍くもなければ狭量な人物ではないさ」

このアルベドの姿勢に対し、ウオン・ライは励ますように言った。「少なくとも、率直に好意を伝えれば、無視したり、そっけなく対応したりすることはあるまいよ。モモンガ殿は、他者の好意を無下にすることに慣れていないし、誠意には誠意で返すことが当たり前、まっとうな感性を持っている。だから、もつと踏み込んでほしいなら、その気持ちをわかりやすく伝えてあげるのが一番いい」

実際、モモンガは繊細なところがあり、よく思い悩むタチである。であるがゆえ、あれこれ手を回すし、コミュニケーションも細やかに取りたがる。

そうしてよく考えて、よく見ようとするから、失敗も少ない。物事から外れる解釈をすることもあるが、後々振り返れば大事な部分は外さず、ピタリとはまった采配になっている、ということもままある。

長い付き合いのウオン・ライは、それを単純に勘が鋭い、と捉えてはいない。おそらく本人さえ理解していない、無意識下の観察眼とも言うべきもの——ではないか。

「まあ、シャルティアの件が無事解決したら、ゆっくり二人で話し合う機会を設ければいい。ナザリックの運営関係をダシに使えば、口実としては十分だろう。くだいようだが、言葉を尽くすことは重要だ。君臣はもとより、男女間ならば尚更だと私は思っている」

「……実務的な話であれば、そこから私情に持ち込んでいくのは、難しくありません？　ちよつとムードがない、と言いますか、その——」  
「率直に言うのは、はしたないのではないか。あまり押すと引かれるのではないか。そうした懸念はわかるとも。確かに、モモンガ殿は奥手なところがあるからな」

「……恋心というものは、本当に厄介なものです。一つ満たされれば、また一つ欲しくなる。時間がたてばたつほど、より深く寄り添いたくなるのですから、難しいものですわ。我慢しすぎると、かえって暴発しかねません。けれど、そんなことでモモンガ様を悩ませたくないと  
思うのも、本当なのです」

「——まあ、暴発も時と場合によっては良い影響になる。いつそ場所を定めて発散させてやるのも手だが、どう受け止めるかは、モモンガ殿の器量次第かな」

彼も社会人であるから、コミュ能力は十分ある。だが、私人としてはむしろ気難しい方だ。

なにしろ、情の深い男である。情の深い人物は、交友関係がやたら広くなるか、逆に狭まるかのいずれかで、モモンガはどちらかといえば後者だった。

ギルドメンバーは数多かつたし、交流にも積極的であつたが、それは気兼ねなく対等に付き合える環境——ゲームの中であればこそ。現実の人間関係が、ひどく寂しいものであつたことは、モモンガという人物の性質を表している。

そして、交友関係が限定されれば、情が深い分だけ、入れ込み具合も尋常ではなくなるものだ。

「モモンガ殿はギルドメンバーには親しかつたが、全員に等しく、その重い愛情を向けたわけではない。その中でよほど近しくなれた一部だけが、彼の本質に触れられたのだ」

「例えば、たつち・みー様のような？」

「そうだな。彼がそうであつたのは間違いない。出会いからして劇的であつたし、尊敬にたる人物でもあつた。だから、今でもモモンガ殿に影響を与えている」

妬み、嫉み。感情を抑えつけるのも、楽ではない。

時に恋する乙女は、鈍感な想い人の友人を強く嫉視する。恋愛とは別方向の関係と分かつていても、いや分かつているからこそ、友人以上に深く接してくれないことが悔しいのだ。

「では、ウオン・ライ様はそれ以上に近しいのでしょうか。だからこそ問いますが、私はモモンガ様に如何に接するべきでしょう。この気持ちには、恥ずべきものでもなければ、隠すべきものでもない、私は思いたい。感情のまま、生のままに捧げたい。そう考えるのは、不敬でしょうか？ ……おそらく、誰よりもモモンガ様を理解しているであろう、貴方に聞きたいのです」

ウオン・ライは苦笑してみせた。買い被りだ、と一言ことわってから、彼は答えた。

「思いやりの気持ちを忘れず、ただ傍らにあれ。求めるより先に、相手の心を満たすことを考えよう。意識すべきは、そこからだ。……モモンガ殿は、寂しがり屋だ。それでいて、心の痛みに強いから、耐えようとすればどこまでも耐えてしまう。良い思い出が一つでもあれば、それを抛り所にして堪えてしまう。傍らで見ているならば、よくわかる。そこを逃さず支えて、力になってやれるならば。今の私の場所までならば、すぐに追いつけることだろう」

だから気後れすることも、悲観することもないのだと、彼は言い切った。アルベドを励ますために言ったのだと、はつきりわかる。

「モモンガ様は、冒険者としての役目もありましょう。常に傍にあることなど、不可能では？」

「体が傍にあらずとも、心は寄り添うことができる。物理的な距離など、いくらでも埋められるのが心というものだ」

「……私はいつだって、モモンガ様を案じています。慕っています。でも、それだけで十分気持ちが伝わるとは、限らないでしょう？」

「結論を急くな。愛情の表現は多様である。まずは、こころざしを同じくし、相手の価値観に寄り添うことだと、言えばわかるるか」

アルベドは、思考した。モモンガの価値観、それを完全に己は理解しているかと言えば、必ずしもそうとは言えないと気づく。

ナザリツクこそが至上とする考えに、違いはななかりうが。さて明らかな部外者、他国に関してはどうであろう。少なくとも、モモンガは一定以上の価値を認めているように感じる。

この世には多様な考え方があり、多くは愚にもつかぬものであれど、モモンガはそれらを尊重しているのだろう。そうでなければ、この世界に己の足跡を残したいなどと、考えるはずがない。

ならば、そんな彼の価値観に寄り添うとは、どういうことか。アルベドは、これを改めて考えねばならないのである。

「なるほど。確かに考えてみれば、視点を切り替えて考慮するならば、モモンガ様の新しい側面に気づけた気がします。……気づけばすぐ

に理解できることなのに、気づくことが難しい。ああ、分かり合おうということが、こんな難事であるなんて。私、これまで真剣に考えたことなどありませんでした」

「それを知っただけでも、大いなる進歩だよ。知らぬことを自覚し、敬虔にして身に修める。そうした心構えができてこそ、君子と言えよう。アルベドは聡明だが、智者とは言い難い面もあった。——これでは、学を修める基本ができたのではないかな」

智者ではない、と言われては、アルベドも反発したくなる。だが、ウオン・ライの声に軽蔑の色はなく、あわれみの感情もない。

むしろ子供の成長を喜ぶような色があつて、それが彼女を戸惑わせた。

「智者ではない、ですか。頭が悪いつもりは、なかったのですけれど」  
「わかりやすく言おうか。——己を省みて、反省する。人々の言葉に耳を傾け、自らの在り方を正す。過ちあれば素直に認めて、手本を参照しながら理想を追う。言うは易しで、自負するも勝手だが、本当の意味で身に着けるのは難しい」

この点、モモンガは完璧にできている。だからこそ、彼は智者だといえるのだ。

さりとて、モモンガにできるのだから、アルベドもそうあるべきだ、などとウオン・ライは言わない。言い聞かせ方にも、人それぞれに適切な表現があるものだ。

「アルベド、お前は自身の至らなさを自覚した。そうだな？」

「……認めます。私は確かに、至らぬところがあつたのでしよう」

「いいことだよ。己の弱みを知らねば、智者とは言えぬ。また、知つても改めることができなければ、やはり智を持たぬ小人と言われても、否定はできまい」

知つてなお改めぬこと、これを過ちという。アルベドは、自身が優れていることを理解しているがゆえ、己の欠陥に気づけなかった。

いわば優れた人物の欠点というもので、実力と実績が備わりすぎると、己の長所ばかり見て、欠点に目を向けることを怠りがちだ。

優れた自分に優越感と自負を持つてしまうため、弱みを自覚するこ

とを忘れてしまう。この傾向を、彼女はようやく自覚したといつてよい。

「——ええ、ええ。そうでしょうとも。まったく、自分と向かい合うのは、難しいものですわ」

「自覚こそ全ての始まりだ。そして一旦自覚すれば、目標の半分は達している。何故なら自覚できるだけの才覚があれば、誤りを正すことなど、残り半分の力で十分だからだ」

だから決して、己を卑下するなどウオン・ライは言った。智者とは、知識や知恵が優れていることだけを指すのではない。己が分を知り、道理をわきまえてこそ智者たりえるのだと。

そして己を知り、他者を知ることが、いかに難しいことであるか、こんこんと彼は説いた。そしてアルベドには、素質があると断言した。その気になれば、誰よりも人を思いやれる人になれると。何よりも愛する人の力になりえるのだと、力強く説き続けた。

「愛する人に、言葉を惜しんではならない。だから、私は常に言葉を尽くしたいと思っている。ただの沈黙より、雄弁に価値があると信ずるがゆえだ。……だから、アルベド。これからも話をしよう。モモンガ殿のこと、ナザリツクのこと、あるいは、この世界のことも。多くを知ろう。多くを経験して、多くのことを認めようじゃないか。そして、彼が決して無視できぬほど、素晴らしい女性になってほしい」

「……はい」

あまりに暖かな言葉であったから、アルベドの頑なな心にさえ、深くしみいるように響く。初心な生娘の、純真な心根は、ここで新たな価値観に染められたといっても過言ではなからう。

「シャルティアとの決戦も、そろそろ決着が近いと見える。……結局、保険は保険のままに終わりそうだ」

「結構なことです。モモンガ様が順当に勝利するなら、それに越したことはありませんもの」

アルベドは、凱旋を飾るモモンガの姿が、すでに脳裏に描かれていた。

いかに彼をねぎらうか。そればかりに気が向いて、シャルティアに

対する隔意など、どこかに吹き飛んでしまったようで――。

事態がどう転ぼうと、後にしこりを残すことはあるまいと、そう思わせるだけの余裕が、彼女には備わっていたのである。

騒動が一段落して、シャルティアも問題なく復帰した頃。

リジンカンは、クレマンティーヌと相対していた。彼女からの情報収集は、それなりに重要であるからして、早めに済ませられるならばそうすべきだったから。

彼女は蘇生に際して、いくらかのペナルティを負わされている。体調は本調子ではないし、レベルもダウンしていた。抵抗力を削ぐことで、従順にさせようとしたのである。

「体の調子はどうか？」

「……別に、悪くないけど」

「なら良かった。環境が変わって、しばらくは慣れないだろうが、これに必要な処置だと理解してほしい。――本気で気分が悪いなら、待遇の改善も、俺の方から通しておくが、どうだ？」

情報を得るには、相手からの協力が不可欠だった。そしてリジンカンは、なるべく穏便に協力を仰ぎたいと思っている。

態度はぶつきらぼうだが、それなりの気遣いを見せるのは、懐柔するためだ。

「で、素直に話すだけでも？」

「気骨ある女だ。いや、そうでなくてはな」

「脅しにも痛みにも屈しないからね。――時間の無駄じゃない？ 早く殺せよ」

リジンカンは、快活に笑った。大したことではない、と言うように。実際、どう転んでも彼に痛手はなかった。

自分がしくじったら、デミウルゴスにでも引き渡せばいいのである。失敗したからと言って、失うような面目など彼にはない。

——まあ、支配なり魅了なりで処理すれば早かろうが。シャルティアの件があるだけに、親父殿もそうした方法は、なるべく取りたくないんだろう。

クレマンティーヌはひねくれものである。追い詰められれば、かえって反発したがるのが彼女の本質であった。

負けを認めないではないが、負けても矜持があると言いたいのだろう。だから殺せと、彼女は言う。

「まあ、ゆつくりやるとも。——酒はないが、茶ならばある。一杯どうだ？」

「いや、と拒否するのは容易いが、容易に脱出できる状況でもないと、彼女は分析している。

リジンカンほどの手練れが、油断なく見張っている今、何ができるだろうか。ただ反抗するだけの己に、存在価値はあるものか。

「得体のしれないものを、口に入れたくはないんだけど」

「毒見してほしいのか？ ……思ったより繊細だな。いや、それも可愛げというべきか」

やんわりと断つたのは、複雑な感情ゆえである。リジンは茶化すように言ったが、あざけっているような様子でもない。

茶をカップに入れて、一息に飲み干してみせる。不思議なほど嫌味さを感じさせないのは、彼がどこまでも自然体であったからだろう。

「ま、杯は用意しておくから、飲みたくなくなったら適当にやるといい。俺の役目は、お前の話を聞くことで、痛めつけることが目的じゃあない。さしあたって、急ぐような理由は——あるような気もするが、まあお前には関係ない。だんまりを決め込みたいなら好きにすればいいさ」

この通り、何も無い部屋だから退屈だとは思うがね——と、彼は言う。

「退屈なのは、そっちも同じだろう」

「ん？ そうでもない。美人と席を同じくして、気を悪くする男がいるものか。話す気になるまで、お前の顔でもながめてるさ」

リジンカンの言葉が脳内に到達するまで、数秒。そして意味を理解して席を立つのは、ほんの一瞬のことであった。

「ふざけてんの！ アンタ——ッ」

「怒るな怒るな。まるで猫が毛を逆立てているようだぞ？ 微笑ましくて、これはこれで悪くないが、どうせなら懐かれないものだな」

クレマンティーヌの手が、腰に回る。が、そこに己の得物はない。流石にそこまで温情をかけるほど、目の前の男は間抜けではなかった。

「剣術指南がお望みなら、また時間を作ろうか。訓練用の剣なら、死ぬ危険もあるまいし——」

「そうじゃなくて！ ……なんで、私の相手がお前なんだよ。情報が欲しいなら悠長なことをせずに、拷問でも何でもすればいいだろ」

「何でと言えば、親父殿がそう望んだからだな。俺としては、是非にもと思っていたわけじゃない。ただ、そうしろと言われたら、あえて拒む理由もなくね。——で、せつかく自分で尋問するなら、気ままにやりたいわけさ。痛いのが苦しいのは、好みじゃない」

リジンカンは、もう一杯茶をあおった。

言うこともやることも、クレマンティーヌの気に障る。なぜかと考えると、一つの結論に行きついた。

「女たらし。あからさま過ぎて引くよ、気持ち悪い」

「伊達男を気取れるほど、女に慣れているわけでもないんだが。まあ、それでも身の危険を感じる程度には、異性として意識してくれている、と。いや、逆に安心した。これで何も感じないとか言われたら、それはそれで男の沽券にかかわることだ」

暖簾に腕押しとばかりに、リジンカンは彼女の口舌をまともに受け止めない。ある意味では誠実に答えているのだが、まったく堪えた様子がなく、些細な感情の揺れ動きすらない。

それがまた、クレマンティーヌの癪に障るのだ。

「決めた。何も話してなんかやらない。ぜ——ッたい、情報なんか漏らしてやらないんだから」

「そうか。じゃあ俺から話をしよう。話題は……家族について。どうだ？ 興味深くはないか？」

いきなり何を話すのやら——と思いなながらも、彼女は黙って耳を傾



けた。

他にすることがないから、命を握られているに等しいからと、理由を作りながら大人しく聞いていた。

己の中に芽生え始めている感情が、何とものものなのか。それを見つめることの、ないままに――。

## 第十五章 棍棒外交・前編

始まりは、リザードマンの村落をアウラが見つけたことだった。新しい種族の発見は、好奇心を強く刺激する。自然、その対応はと言えば、強者が弱者に対する様なものになりがちである。

「死体のサンプルや実験動物として、ある程度の数は確保しておきたいと考えます。いかがでしょうか？ モモンガ様」

「実験動物、か」

「殺すだけ殺して、死体だけ回収しても使い道はありませんが。視点を變えてみれば、生かして利用するのも手ではあるでしょう。人体実験はもとより、繁殖や統治の実験なども、後々のことを考えれば有益ではないかと。もちろん、必要なのは数であって、共同体そのものではありません。——必要とあらば、群れそのものは潰して構わないと考えます」

「ふむ。十数体ばかり確保して、適当な場所に移住させ、家畜のように管理する。なるほど、一考に値しよう」

アウラからの報告を元に、アルベドはモモンガにそう伝えた。彼女なりの見解も述べてくれたが、そこにはある前提が抜け落ちている。

「しかし、リザードマンの能力について、完全に判明しているわけではない。そうだな？」

「はい。とはいえ現状、脅威と見るべき要素もまた、確認されておりません。ですので、一戦して力をはかるとい手は、いかがでございますしょう」

アルベドの言葉に違いはあるまい。しかし脅威ではないというが、それも現時点でのこと。種族としての発展性、成長性はまた別の話である。

だからこそ一戦すべきであると。そうして見極めるべきなのだと言われれば、素直に賛同できた。

「それはいいな。戦いの中で相手の価値を見極める、ということか」

「はい。結果としてリザードマンは、単独ではこの世界において強者足りえない。そうした結論が出るようであれば、我々が積極的に関与

して、その処遇を検討すべきです。群れごと従属させるか、潰して牧場を作るか。いずれにしろ、主導権を握るのはナザリツクであるべきでしょう」

アルベドは暗い笑みを浮かべた。彼女の中で、勝利は確定したもののだろう。そして、その後のリザードマンどもをいかに料理するか、想像の中で楽しんでいるのか。

モモンガとしては、彼女の嗜好を一概には否定できぬ。半端に関わるよりは、いつそ取り込んで保護するのもいい。

もちろん、やり方にはいろいろとあるだろう。結果さえ伴うのであれば、恐怖と暴力で支配するのも、寛容と利益で懐かせるのも、モモンガにとっては同じことである。

——興味はある。情報収集のための実験材料は、現状足りていないのも確か。カルネ村で得た捕虜の連中は使い道があるし、容易に使いつぶせない。手軽に消費できる資源が得られるなら、これは渡りに船だ。

モモンガは、何事も慎重に事を進めたがる傾向にある。だがそれは、油断することの恐ろしさを知っているからで、リスク自体を恐れているのではない。

戦いの決断そのものは、彼は支持した。アルベドが示した線で、進めて良からうと考える。

ただし鵜呑みにはせず、自身の見解も同時に述べた。

「……悪くない。が、どうせなら敵を計ると同時に、こちらの戦力も同時に計りたいものだ」

「と、申されますと？」

「リザードマンは、戦う術を持っている。数があれば、軍隊の真似事も出来よう。村落は人間の街からも遠く離れているようだし、ここいらで集団戦——合戦の経験を積むのもいい」

「守護者であれば、おそらく単独で陥落させられるものと思いますが」「いや……せっかくだ。弱いアンデッドの軍勢を、そうだな。相手方の三倍程度を用意しよう。それを守護者がいかに運用するか、じっくりと見てみたい」

相手方の三倍、と言ったのは、兵力に余裕を持たせることで、行動の幅を広げさせるためだ。数が多ければ、取れる手段も広がる。事前工作をするなら人出はいるし、伏兵に用いても、決戦時の予備兵力として扱うのもいい。

モモンガは、軍政の采配を守護者の誰かに任せるともりでいる。いつもいつも、己ばかりが出張っていては部下の成長もない。自分こそ経験を積んできたのだし、そろそろ出番待ちの守護者たちにも、外の業務を任せるときではないか。

結果が成功であれ失敗であれ、得るものはあるはずだ。そしてそこから何を学び、どのように成長していくか、それを知りたかった。

——誰を行かせるにしろ、結果以上に過程が重要だ。たとえば失敗しても、本人の努力はきちんと認めてやらないとな。

三倍の戦力があれば、実に多くのことができる。敵の選択肢を削ることも、行動を縛ることも。

己であれば、どうするか。その点も比較して評価すれば、より深く理解することが出来よう。

守護者と言えど、モモンガにとってはまだまだ付き合いの浅い相手。人格を認めたのもつい最近の話で、資質まで見定めるとなると、多くの材料が必要となる。

モモンガは彼らの主として、なるべく深く彼らを理解したいと思うのだ。戦い方には、性格がよくあらわれる。嗜好はもとより、基準とする考え方も知れる。一戦した後、反省することがあればそのやり方で、その人物の性質もわかるものだ。

モモンガは経験上、そうした分析にも一家言がある。これくらいなら、ユグドラシルの延長線上として、的確に判断できる自信があった。「荒事ならばコキュートスが適任か? ……とはいえ、アウラが見つけたのだから、当人に功を立てさせてやるのも手ではある」

「アウラは対象を発見して、我々に未知を示しました。ですが、この世界に来てから、コキュートスはこれといった功を立てておりません。ここで一働きさせてやるのも、思いやりというものではないでしょうか」

「……それも、道理か。まあ、人選は後で改めて考えると、もろもろの報告を聞いておきたい。カルネ村に移住した、バレアレ家についてはどうか。きちんと監視は行き届いているか？」

「それは問題なく。冒険者としてのモモンガ様が、十分に気にかけておられますし、村の住人ということで、ウオン・ライ様もよく様子を見に行かれています。村に対する感情も上々で、定住に不満がある感じではありませんね」

ならばよかったと、モモンガは胸をなでおろした。強制したつもりはないから、二人には拒否権があった。それを快く受け入れてくれた相手なのだから、相応の敬意を払わねばなるまい。

「もし村に危険がせまったら、最優先で保護するように。優先順位はインフィーレアが一番、祖母の方は二番目だ。これは、将来性を考えてのことと思っしてほしい」

「わかりました。——前に助けていた、娘たちについてはいかががでしょう」

「ああ、それがあつたか。……三番目以降に据えるとしよう。せつかく助けたのだ。出来るなら、人生を全うさせてやりたいからな」

アルベドは、それを愛玩動物に対する情と解した。感情はもはや乱れることはなく、諸事についての報告を残らず済ませる。

「シャルティアへの罰について、ですが」

「どうしても決めねばならんか」

「はい。何より本人が望んでおります。半端な対応は、よろしくありません」

モモンガが許しても、彼女自身がそれを受け止められない。罰さなののは、かえって酷だとアルベドは言う。

「彼女自身、強く反省しているところです。ここで罰をあたえることで、ようやく心理的な再出発ができるというもの。どうか、ご再考ください」

「わかった。とはいえ、すぐに思いつくものでもない。処罰は——うむ。追って、伝えよう」

悩ましいものだ、とモモンガは一人ため息を吐いた。NPCが魂を

持てば、ギルドの運営もひどく重く感じられる。

この重荷に慣れる日など、やってくるのだろうか。意思のある、確かな命を背負っているという自覚を持ってしまったからには、手は抜けない。

——友人の子供たちに等しい。そう思っているから、守ってやりた  
いし、尊重してやりたいと思う。

実感を得るまで、時間が掛かってしまったのは、無理なからぬこと  
だ。意思を持ったNPCの存在など、かつては意識する方が難しかつ  
たのだから仕方ないと、そういう意味では言い訳がきく。

だが、これからは違うのだ。ナザリックの全てを身内として扱うこ  
とに、今さら躊躇は覚えない。なればこそ、分かり合うための努力を  
しようと思う。

——付け加えるなら、皆が安心して暮らせるよう、安定した環境づ  
くりも考えていかねばならない。すると、外界との関りが何よりも重  
要になってくる。

今回の件も、外界との関りという意味では決して小さなことではな  
い。リザードマンは、間違いなくこの世界固有の文化をもった存在で  
ある。

ナザリックがこれをいかに扱うかは、一種の外交問題と言って良  
い。初手が荒事になってしまうのは、どうしようもないことだろう  
か。今さらだが、リザードマンを穏やかに併合する道を、模索しても  
いいのではないか。

アルベドの提案にケチをつけるのではなく、最善が何であるか考え  
続けるのは、決して悪いことではあるまい。

——攻めることが、間違いだとは思わないが。安易な方向に寄って  
はいないか？ 本当に、この手が正しいのか。……まったく、考える  
のが面倒だと、思考を投げ捨ててしまえるならば、どれだけ楽やら。

この世界で得られた、世界地図を取り出して広げてみせる。これだ  
けを見るならば、なんとちっぽけな世界であることだろう。だが、こ  
の世には多くの空白があり、人間が理解している範囲は、あまりにも  
小さすぎる。モモンガは、そう思わずにはいられない。

「よし」

リザードマンたちがいる村落を、地図に書き入れた。かつて存在した集落になるとしたら、これは無駄な行為になってしまう。なら、なるべくそのままの状態で、生かして使うべきなのか。

——全滅が目的ではない。なるべく大きな利益を得ることが目的だ。根絶やしが最大利益になるのなら、そうしてもいい。そして、生かして使った方が得になるとしたら、そうすることに異論はないさ。

モモンガには、まだいくらかの精神的な余裕がある。ひとつの結論に固執して、視野を広げることが忘れるほど、焦つてもいなかった。

この世にはさまざまな種族があり、国家がある。価値観も違い文化も違うのだから、誤解も反発もあつて当然だろう。さりとて常に衝突するとは限らず、穏便に結ぶ道がないとは言えぬ。取れる手段は、多くあるべし。

シャルティアに仕掛けた勢力がどこかにあるはずだから、そちらとは争わずにはおれまいが……リザードマンは、流石に違うだろう。固定観念に近いが、そこまで強力な種族とは思われない。

「頭を使うことが多くて困る。今は大丈夫だが、精神的に疲れてしまふな、これでは」

「リザードマンの件に関しては、延期なされても不都合はありません。ゆつくりと考えられるのも、よろしいかと存じます」

「気遣いはありがたいが、今はとにかく動いておきたい。慌てるのが良くないのは、確かだが……なんというか。余裕があるうちに、仕事を片付けておきたい気分だな」

急げるうちに急いだほうが、後で楽ができるというもの。ともかく、今が時間の使いどころである。スケジュールは詰められるうちに詰めておくものだ。

——對話に時間を取るのも、今のうちだな。

人選も即座には決めなかったことだし、コキュートスやアウラらと、面談するのも悪くはないか、とモモンガは思う。

いやしかし、ギルドマスターというものは、色々な意味で重労働である。気晴らしがなくては、到底やってられないだろう。冒険者家業

は、そういう意味でも役立つている。

しかし、ウォン・ライはどのようなのだろうと、ふと思う。彼は彼なりに重い役割があり、その責任を正しく理解しているはずだ。

それを、どう向き合っているのか、なんとなく気になった。彼ならば、いちいち思い煩うこともないのだろうか。

後で会ったときにでも聞いてみるか——と、モモンガは他愛のない感想を抱くのであった。

適当な雑談の後、モモンガとウォン・ライの二人は結論を出した。もともと、時間をかけるようなことではないと気づいたのである。

「——よし、やろう」

「モモンガ殿は、それでいいのか？」

「宿題をあとに残しても、後々苦労するだけだ。ならば即断即決、速やかに動きたい。——私は冒険者家業に精を出したいところであるし、ウォン・ライに出向いてもらいたい」

モモンガ自身、未知の種族を相手に上手に立ち回れるか自信がない。下手を打って、ギルドマスターとしての威厳を損なうようなことがあれば、それはナザリツクの価値を貶めることにならないか。

そうした不安が、モモンガを縛り付けている。だからこそ、ウォン・ライに頼った。

「もちろん引き受けよう。——大船に乗ったつもりでいてくれ」

頼れば頼っただけ成果を出してくれる人として、モモンガは彼を認識している。彼の方もまた、モモンガの要請を快く受け入れた。

ともかく、モモンガは決断したのである。実際、リザードマンへの対応は、早いに越したことはない。

即宣戦布告、という手も考えたが……モモンガは、近代国家の住人だ。外交の一手として、まずは挨拶から始めるのが筋だろうと考えた。



ウォン・ライは、すでに使者として出立し、現地に向かっている。カ  
ルネ村での仕事は、すでに急を要するものなどない。十日やそこら、  
目を離れた程度でどうにかなるほど、村民たちもヤワではなからう  
と、彼自身理解している。

——だからこそ、こうして使者を引き受けたのだ。

見るべきものを見て、やるべきことはやったという自負がある。  
ウォン・ライは老練な政治家でもあるから、村の運営に関して下手は  
打たなかった。

だが、ある程度の価値観を共有できる人間とは違い、リザードマン  
は全く別の種族である。外交に関しては、慎重な行動が求められる。  
今それを行うならば、己のほかにはないと、彼は正しく認識してい  
た。色々な意味で、守護者たちは外界に慣れていない。過剰反応され  
ては、話がどこに転がっていくか予想がつくまい。

だから、ウォン・ライは頼られたことが嬉しかったし、その期待に  
応えたいとも思う。

「さて」

ウォン・ライは考えていた。使者であるならば、礼儀はわきまえね  
ばならぬ。しかし、リザードマンの流儀については、流石に調べる時  
間がなかった。

それゆえ、一般的な礼儀に則ることにする。つまり窓口を探して接  
触し、指導者へ話を通す。そこから先の行動は、相手の出方を見てか  
らだ。すぐに話を聞きたいというなら出向くし、日にちを改めたいと  
いうなら引き下がるのが良いだろう。

いきなり顔を見せに行つて、驚かれるのもよろしくないから、窓口  
となった人物に書状を預け、村落の外で待機するのが無難か。

書状は、モモンガ直筆のものを用意している。組織の長が自ら骨を  
折つた、という事実を見せておくことが、効果的なこともある。細  
かなところで、相手を尊重する態度を見せるのが、外交の手管とい  
うものだ。

——出会い頭にきついハツタリをかましては、態度を硬化させかね  
ない。あいさつ代わりに交渉術は、使いどころを考えねばならん。

故郷のやり方をぶしつけに持ち出すほど、ウォン・ライは傲慢ではない。中華式交渉術は、他民族に対して、良くも悪くも強烈に響く。初手で横っ面を叩く様なやり方は、礼を失しよう。

だから最初は舐められても良いから、穏やかに接しようと、彼は判断した。

——相手が傲慢に振る舞って、話がまとまらなかったとしても、それはそれで一つの成果だろう。どんな形でもよいから、何かしらの結果を持ち帰るのが大事だ。

へりくだるばかりでは、辱めを受けかねないのが交渉の場である。毅然とした態度を崩すつもりはなかった。礼とは、卑屈になることではないのだ。

リザードマンは、外界からの客をいかに遇する文化なのであろうか。すべてはそれにかかっているといつてよい。

百聞は一見に如かず。まずはぶつかってみることだ。こちらが物騒な事を凶っているのは確かだが、利益を得る方法は一つではない。モモンガの意向を察している彼は、この点をはき違えたりはせぬ。

「……何者だ。ここから先は、われらの縄張りだぞ」

「失礼いたしました。私はナザリック地下大墳墓から参りました、ウォン・ライと申します。どうぞ、お見知りおきを」

窓口となりそうな相手には、見当をつけている。もとより、闇魔王ヤムラージの索敵能力から逃れられる存在など、近場には全くいないのだから、容易なこと。

わざわざ発見されやすいよう、隠ぺいの技能を使わず、赤鬼としての姿で村落近くまで歩く。それだけで、相手の方から見つけてくれるという寸法である。

ウォン・ライは、接触してきたリザードマンと向かい合うと、腰を折って一礼した。

「非礼をお許し願いたい。——ただ、リザードマンの部族と、話し合いたいことがあります。事前に何かしらお伝えできればよかったです。これまで何の接点もなかった相手ゆえ、自らここまで出向いて参りました」

「話し合い？ 目的はなんだ」

「詳しくは、主がしたための書状がございます。これをご覧ください」  
そう言つて、ウオン・ライはそのリザードマンに書状を渡した。あくまで自らがへりくだるように、慎重に振る舞いながら。

「勝手ながら、お返事がいただけるまで、近くに滞在したいと考えております。お許し願えましょうか？」

「あ、ああ。……こちらこそ申し遅れたが、俺の名はザリユース・シャシャという。書状は間違いなく族長に渡しておく。返事は確約できないが、外からのお客人は珍しい。俺のあばら家で良ければ、歓待させていただけよう」

助かります、と一言言つて、再度一礼。ウオン・ライは穏やかな声と態度で謝意を示した。それが、相手にとつては慣れぬ対応であつたらしい。

「……そこまで畏まらなくてもいい。敬語もいらんど。どこのどのような種族かは知らないが、貴方は相当強いのだろう。体格は立派だし、雰囲気もある。強者には敬意を示すのが、俺の流儀だ」

「そうですか。……いや、お言葉に甘えるのは、返事をいただいてからにいたしましょう。私は主命によって来ているのですから、それが終わるまでは使命に殉じなくてはなりません」

それが、われらの礼にございますれば――。

ウオン・ライが付け加えた言葉を、そのリザードマンは重く受け止めたらしい。ならばと、彼の方もあえてそれ以上は言わなかった。

お互いに、異文化であることをわきまえている。礼儀一つとつても、それぞれに違う。相手と分かり合う気があるのか、否か。まずは確かめ合う段階だと、両者は考えていた。

ザリユースは、ウオン・ライを自宅に留め置いてから、書状を届けに行った。

――なるべく早く、返事を返してやりたいとは思うが。

自宅にはもてなしの準備など整えていなかったの、まともな歓待などできなかつたが、彼から不満そうな雰囲気は感じ取れなかつた。ただ、体格が大柄なので、いささか窮屈な思いをさせているかもしれない

何より、相手は部外者である。不慣れな環境に、長く留め置くのも悪いだろう。

書状の中身はあらためていないが、兄のシャースーリユーが、今日を通している。どうにも困惑している様子で、頭を傾げたり顎に手を当てたり、難しそうに考えていた。

「この書状を持ってきたのは、どのような奴だった？」

「大柄の、赤い肌をした人型の種族だ。体格は俺より二回り以上は大きい。人間というには、いささか立派過ぎる気がするから、まったく別の種族だろうと思う」

「相手が人間ではなく、見たこともない種族とすると、近場から出向いてきたわけでもなさそうだが。……悩ましいな。この村落に、それほど意味のある宝があるはずもない。なのに、わざわざここまで出張している。うーむ」

書状から何を感じ取ったのか、ザリユースにはわからない。自分が運んできた縁でもあるし、率直に聞いてみたほうがいいだろう。

「どんな内容なんだ？」

「……いや、それがな。読めんのだ」

「なんだって？」

「本当だ。俺は学はそれほどない身だが、人間が一般的に使う文字くらいは、何とか読めるつもりだ。だが、この書状は未知の文字を使っているようで、まるで読めん」

兄の手から、ザリユースへと書状が渡される。彼は村を出て旅をした際に、様々な所に触れている。だから兄よりは書を読み解く力を持っているのだが――。

「なるほど、確かに読めないな」

「だろう？ ……これはどう対応したものか、難しいぞ。持ってきた者は、それなりの身分に見えたか？」

「ああ。礼儀正しい、高い教育を受けた男に見えた。大きく、強い力を感じさせる体格だが、いちいち所作に粗暴さがない。自らを律する術に長けているんだろう。……すると、無視して追い返すのも上手くないと思う」

「無礼を働いて、報復に攻められるというのも馬鹿らしい話だ。——で、そいつは本当に強いのか？」

「勘だが、疑問の余地なく強者だと思う。顔つき、体つきもそうだが、口から出る言葉にも力があつた。一人でここまで出向いてきたのだから、胆もすわっている。舐めてかかつていい相手ではないな」

シャーサーリユーは、弟を信頼している。だから、その人物の鑑定についても、全面的に信じることにした。

「強者か。それほどの人物が持ち込んできた書状。おそらく、厄介な話になるな。……すぐに返事をするべきか」

相応の教育を受けた人物が、使者としてきたということは。その後ろにある組織は、きちんとした教育を可能とするだけの大きさがあるということ。

下手に機嫌を損ねて、その組織が武力で迫ってきたら、どういうことになるか。もし万が一、それで村人たちに被害が出たなら、族長として責任を取らねばならない。

「よし。その、使者殿に会いに行こう」

「いいのか？」

「書状が読めない以上、意図を聞きに行くのは当然のことだろう。あちらは、あちらなりに礼儀を示したのだから、今度はこちらから示さねばならん」

「……そうだな。ならば、俺も同席していいか？　気になって仕方がない」

「好きにしろ。では、早速出向くぞ」

シャーサーリユーは、腰を上げた。弟の家まで少し出かけてくると、それだけ妻に声を掛けて向かう。

読めない書状を持ってきた男に、両者の興味は集中していた。だからザリユースの家についた時、その男が静かに椅子に座っている様を

見て、少しだけ驚いた。

「……すまない。あの赤い肌の大男殿は、どちらに？」

「ああ、これは失礼しました。あの大きいばかりの図体では、いささか迷惑をかけると思いましたが。人化の術を用いて、人間としての姿になっております。どちらもうオン・ライであることには変わりませぬので、どうかお気になさらないでください」

姿が変わっている。まずそのことに驚いたが、良く聞けば声は同じである。なにより容姿は違えど、同一人物と言われれば、素直に納得できるだけの雰囲気があった。

ザリユースとしても、窮屈そうに椅子に座らせるよりは、対等の視線で話ができる方がいい。気にするなと言われれば、そうしようと思う。

「そうか。気を使わせてしまつて済まない。——ウオン・ライ殿、族長をここまで連れてきている。書状の件で聞きたいことがあるそうだ」  
ザリユースは、ウオン・ライに兄を紹介する。彼は、ウオン・ライと向かい合う席に座り、自己紹介をした。

「族長のシャースーリユー・シャシャという。よろしく頼む」

「お初にお目にかかります。ナザリック地下大墳墓より参りました、ウオン・ライと申します。こちらこそ、お目にかかれて光栄です」

「……うむ。書状は受け取った。いや、目を通してはみたのだが、どうにもよくわからないのでな。真意を問いに来たのだ」

素直に、読めなかったから読み上げてくれ、とシャースーリユーは言わなかった。

恥じたのではない。相手の出方を見るためである。読めないとわかつている書状を、わざわざ持ってきたのか。あるいは、こちらがあれを読めないなど、考えもしていないのか。

それを図るために、問い方を変えたのである。

肉体的な強さこそが重要な族長であれど、それくらいの腹芸はできずて当たり前だった。

「真意、と申されますと？」

「リザードマンは、他の文明圏からは離れている。他国の文字で他国

の文化を語られても、理解に齟齬が生まれかねない。だから、直接出向いて問いたくもなる。——わかるだろうか？」

「——はい。そういうことであれば、否やありません。正確に伝えるために、改めて申し上げます」

何気にシャースーリユーは、書状を読めなかったことを示唆した。知ったかぶりをしているようで、しかし明確に書状を読んで理解した、とは言わない。後でフォローできる範囲内で、上位者としてのメンツを保っている。

もちろん、重要なのはメンツを保つことではない。族長のメンツ、というものに対して、相手がどこまでの敬意を払えるのか。それを試したのである。

——俺などには、到底できる芸当ではない。

こういう場面を見るたびに、ザリユースなどは『俺は族長には向いていない』と思うのだ。

「ナザリックは、リザードマンとの交流を望んでいます。貴方がたに異存がないのであれば、我々の間に友誼を結んでほしいと我が主は願っています」

「……友誼、とは？ 悪いが、もっと明確に話してもらいたい」

リザードマンには、交易を行えるほどの余裕がない。周囲に魅力的な土地があるわけでもない。

なのにならぬわがわが出向いてきて友誼を結ぶとは、どういうことか。シャースーリユーは、その真意を探るため、なるべく明確な言葉で表現してほしいと思う。

「ならば、改めて申し上げます。『闘争をもって、種族間の懸け橋としたい』……我が主は、もっと直接的な接触をお望みです。——書面と、我が言葉で示しましょう。リザードマンの村落と、ナザリック地下大墳墓の間で、模擬戦を行いたいのです」

思いもよらぬ方向からの一突きである。模擬戦とは、シャースーリユーはもとより、ザリユースも想定していなかった事態だ。

まして、争うことが友好につながるなど、彼らにとっては理解しがたいことでもあった。

「模擬戦と一口に言うが、どこまでを線引きにする。戦死者が出るような戦いを、模擬戦と呼べるものか、どうか。何より、お互いを傷つけあって、友誼も何もないと思うが？」

「……そのあたりは、文化的な差異でしょう。模擬戦という表現が気に入らないのであれば、実戦形式の練兵とか共同演習とか、そのあたりの言葉にしても良いですが、本質は変わりません。そして軍隊の訓練においては、死者が出るほど厳しくやることも、珍しくはないのですよ」

「そちらの常識は、こちらの非常識である。そうした認識を、俺たちと共有できるなどとは思わないことだ」

「我が主は、可能な限り大規模な交流を望んでおられる。模擬戦は、そのための手段と割り切っていたいただきたい。決して、悪意があるわけではないと、ご理解いただきたく思います」

そんな馬鹿な話があるか、とシャーリユーは言い返したかった。だが、短絡的に感情をぶつけて良い相手でもない、理解して貰っていた。

「そうか。失礼ながら、ウオン・ライ殿の故郷は物騒な所であるらしい。普通、友好を結ぶ際は、まず話し合いから始めるものだ。いきなり顔を突き合わせて殴り合おう、というのはいかがなものか」

「繰り返しますが、我が主の意志です。どう受け取ろうと結構ですが——あまり、深刻に考えないでいただきましょう」

「深刻にならずに済む要素が、どこにある？」

「安全面では、なるべく配慮するようにと仰せつかっております。限定的ではありますが、蘇生の処置も考慮に入れましょう。そちらの集落が立ちいかなくなるほどには、追い詰めないこと。これは、確実にお約束いたします」

蘇生の御業は、話に聞いたことがあるだけで、ザリユースもシャーリユーも実際に見たことはない。

それが可能な相手となると、大変なことだ。悪感情を持たれたまま帰られては、あとでどのような災いになるか知れない。うかつなことを言つて、失点を重ねるよりは、曖昧に濁して考える時間を捻出した



いところである。

「……ありがたい話だが、さて、どうしたものか」

受けるにせよ受けないうにせよ、大事には違いなかった。族長とはいえ、一部族の長に過ぎぬシャースーリユーは、周辺への影響も考えねばならない。

「この集落全体を巻き込んだ模擬戦ともなれば、周辺の部族たちへも、説明しなくてはならん。その話し合いのために時間を取りたいくらいなのだ——」

「事後で結構でしょう。確かに争いごとではありませんが、半日もあれば終わることです。そこまで深刻にとらえることはありませんまい。

——つまり、後は貴方の判断次第と、そう考えておりますが？」

シャースーリユーは、背筋が寒くなる思いだった。ウオン・ライは、別に脅しているような雰囲気ではやべってはいない。ただ、事実を指摘しているだけだと、ごく自然な語り口であった。

戦えば、半日で終わる。その見積もりが立っている。これがまた、得体が知れず、恐ろしく思う。拒めばよりひどい結末が待っているよな、そんな圧力を感じずにはいられなかった。

そうしたシャースーリユーの怯みを察したのかそうでないか。ともかく、ウオン・ライはさらに言葉を尽くした。

「ともあれ、模擬戦とはいえ闘争であるならば、暴力の結果としての死はありふれたものです。リザードマンは、違うのですか？」

「必ずしも違う、とは言わないが。——しかし、族長として。身内の死はなるべく少なくしたいという気持ちも、わかってもらいたい。全面戦争を望んでいるわけでは、ないのだろうか？」

「それはそうです。ただ、こちらとしても、一戦もせずには貴方がたを信頼するのは難しい。ナザリックでは、力のあるものが尊敬を受ける。これからの交流を考えれば、最初は強くぶつかるとも必要だと思うのですが——」

「そちらの意見はわかった。だが、それでも死者は出したくない。我々にとって、人的資源は貴重だ。特に戦士たちは、一朝一夕に生み出せるものではない」

そういうことであれば——と、ウォン・ライは提案する。すでに書面の内容からは逸脱しているのだろうが、彼は丁寧に粘り強く接した。

今は、緩やかにだめるべき場面。相手のメンツに配慮し、大きな対価を示すことで、たかぶつた気持ちを和らげる。ここで気遣いを惜しんではならぬと、経験上彼は知っていたのだ。

「そちらに死者が出れば、賠償を行う、ということではいかがでしょう。相応のものを提供できる自信が、我々にはあります」

「——人は金銀を尊ぶらしいが、我々の間でそうしたものは、あまり意味をなさない。無意味とは言わないが、もつとわかりやすい賠償を保証してもらいたいな」

「出来る限りのことは、させていただきます」

その言葉を待っていたとばかりに、シャースーリユーは言った。実際、ここで対価を得られるなら、可能な限りむしっておきたい場面であるから。

未知の相手でも、交渉となれば遠慮なく押していく。彼がこの手の凶太さを持っていたのは、リザードマンにとって幸運な事であったろう。

「知識がほしい。われらに活用できる学識と技術、その運用方法が確立するまで、人材と資金の提供をお願いしたい。それと戦死者が出た場合、こちらの戦力が回復するまで、代用の戦士をお貸し願いたいのだ。——リザードマンは決して貧弱な種族ではないが、戦に出して恥ずかしくない戦士ともなれば、相応に貴重なのだ。わかってくれるな？」

シャースーリユーの目から見ると、ウォン・ライとやらは、やはり高度な教育を受けているように見えた。立ち振る舞いに隙が無い、というのもあるが、聞いた通り言葉に力がある。

芯の通った、重い声だった。聞いていて誠実さを感じさせる声は、こうしたものなのだろうと思うし、その誠実さが怖くもあった。

真実しか口にしない男が多弁であるのは、出来ることがそれだけ多い、ということでもあるから。

——あちらから望んで接触しておきながら、この応対。傲慢と思っても不思議はないはずだが、どうにも憎んでやろう、という気にならん。ウォン・ライか。不思議な男がいるものだ。

多くの言葉を知り、多くの経験を積み重ねば、こうした雰囲気は出てこない。シャースーリユーは、そこまで老いたつもりはないのだが、長老たちと施策で衝突し、腕力ではなく口舌で争った経験があった。だからこそ、多くを察することができたともいえるし、察しすぎたともみることできる。

——この男はできる人物だ。その彼が保証をする、と答えるなら、期待してもいいだろう。

これほどの人物が所属している組織である。学問の蓄積が、どれほどのものであるか。想像はつかないが、リザードマンよりは高度な技術を備えていると、期待しなくなった。

「知識と技術、当面必要になる資金に人材。それさえそろえれば、部族の死者と釣り合いますか？」

「忘れてほしくないのは、こちらとて死者など出さずに済むなら、一人だつて出したくないということだ。くだいようだが、強調させてもらおう」

「——ああ、なるほど」

ずいぶんと吹っ掛けるものだど、ザリユースは思う。魚の養殖にさえ四苦八苦している現状、技術的な面での弱さを痛感しているのは、己よりも族長である兄の方かもしれない。

さらに、戦力が減つた分はそちらが補え、とまで迫っている。これが信用できない手合いなら、かえって危険ではあるのだが、今回の件ではどうだろう。本気で応じてくれるのなら、損のない取引と考えて良いのだろうか。

兄がどこまで考えているのか、ザリユースにはわからない。

「わかりました」

ウォン・ライは、意味ありげに微笑んだ。それがまた不気味でもあり、背筋に走る怖気は、果たして気のせいだと言って良いものか。

「族長殿の意思は理解しました。……ただ、流星に一人の死者も出さ

ないような模擬戦は、想定しておりません。よって、そちらの要望には、完全には応えかねると申し上げます」

どのような交流を結ぶにしろ、力関係は強い方が優位である。これは、その力量を埋めるための要求であり、得られる恩恵が大きければ大きいほど、相手方（ナザリック）にとって不利となる。

知識を出し惜しみたいなら、こちらの申し出は不都合だろう。難色を示して当然だった。

「では、やめるか」

「それはそれで、惜しいことではありませんか。リザードマンは、武勇を貴ぶのでしょうか？ 我々として、勇者を遇する道は知っております。そして、貴方がたも勇者の一人に違いないと、私は思っているのですから」

「世辞はいい。具体的な話がしたい。この場で決められぬというなら、持ち帰って検討してくれればいいが」

「いいえ。——私は、外交に関しての全権を任されています。今、ここで決めましょう」

リザードマンの二人は、ウオン・ライのこの返答に面食らった。

書状を携えた使者が、そのまま全権を担うなど、これも想定範囲外だった。シャースーリユーは、他の部族も交えて話し合う時間も欲していたのだが、今ここで決めるとなればそれも叶わぬ。

「そうですね。知識と技術、と一口に言っても色々ございます。リザードマンの主食は魚と聞いておりますので、魚の養殖の技術を提供いたしましたでしょう。きちんと実用的に運用できるまで、面倒を見ると約束します。戦力の貸し出しについても、受け入れましょう」

「——ありがたい話だ。それは、模擬戦における被害に応じて提供されるものと、そう考えていいのかな？」

「結果次第では、それ以上のものを。たとえ死者が一人も出なかったとしても、今後の交流を通じて、技術の提供は行くと明言しておきます。——養殖については、既存の養殖場との兼ね合いもあるでしょうから、担当者と呼んで話し合わなければなりません」

「ならば問題ない。このザリユースが担当者だ。魚の養殖の技術に関

しては、こいつに聞いてくれ」

いきなり話を振られて、ザリユースは驚いたが、この兄にしてこの弟でありである。即座に対応して、あれこれと自身の見解を述べた。

それをいちいち頷きながら、ウオン・ライは聞いていた。そして、曲がりなりにも専門家であるザリユースが絶句するほどの規模で、技術を提供しようと言い出す。

「——と、まあ、これくらいで不足はないかと思われませんが、いかがでしょう」

「いかかも何も。……なあ兄者、俺にはどうも、拒むのが怖くなってきたのだが」

ザリユースとて、物騒な話を好むものではないし、負傷者もなるべく少なければいいと思っている。

だが拒絶して、一時の平穏を得たとしても——ウオン・ライが、他の部族へこの提案を持っていったらどうなるだろう。凄惨な争いになるのか、大きな利益が生まれるのか……いずれにせよ、他所に押し付けては、運を天に任せるようなものだろう。

これでは、自分の目が届かない分、より恐ろしく感じられる。だとしたら、ここで自ら動いて、出来る限りの手を尽くした方が、最善なのではないか。ザリユースは、そのような気分になっていた。

「怖い、か。俺も同感だ」

シャースーリユースもまた、同じような不気味さを感じているから、弟の意見に同意する。ウオン・ライの話は、物騒ではあるが魅力的だ。いや、魅力的であると思わされてしまっている。

同胞の命を天秤に乗せての交渉だというのに、まるで危機感を感じさせない話し方に聞こえる。

「まだ何か、懸念されることがあるなら、残らず話し合いまししょう。私は、決して口を閉ざしたり、拒絶したりはしません。——私はあくまでも、ナザリツクトリザードマンの友好のために、この場にいるのですから」

そんなわけはない。相手は暴虐な悪人に決まっている、と思おうとしても、ウオン・ライの洗練された態度と言葉が、シャースーリユース

をなだめて落ち着かせるのだ。

礼節をわきまえた強者が、ここまで厄介な相手だとは知らなかった。だが恐れるばかりではなく、族長として立ち向かう義務を、彼は背負っていた。

「話は理解した。しかし、あくまで模擬戦は模擬戦としての規模で行って、被害も適切な範囲で留めねばならん。そうでなくては、禍根を残すのではないか。そう思わないか？ 使者殿」

「まさに。禍根を残してはなりません。——そればかりは、こちらも同意いたします。リザードマンの族長殿」

「俺は、この部族の長に過ぎない。別の群れには、別の長がいるものだ」

「だとしても、貴方の覚悟と意志は、種族の長を名乗るのに十分なものと考えます。でなければ、こうも『犠牲を前提とする話し合い』に応じるはずがない。そうではありませんか？」

シャーソーリユーの雰囲気が変わった。兄の目つきが鋭くなるのを見て、ザリユースは驚いた。

「事のよれば、ここで仕掛けるつもりだと、そうした剣呑さを感じ取ったからだ。」

「……どういう意味だ」

「同胞の死を受け入れて、こちらの譲歩を迫る。そうして得られる利益の大きさを想定して、話を進めてくださった。——これは、そういうことではありませんか？」

個人の感情より、種としての利益を重んじる。

私心を捨てて、公益を優先できる気質は、まさに統率者として十分な素質と言ってよい。だからこそ、ウォン・ライも尊重しようと言っているのだ。

「……使者殿。俺は別に、争いを求めているわけでも、犠牲を望んでいないわけでもない。何度もその意思を示したはずだし、わかってくれると思うが？」

「承知しております。『無益な』被害はごめん被る、と。——ご安心ください。我が主は、流した血に値するだけの褒美をもって、貴方がた

を遇するでしょう」

ザリユースにも、その発言の意図がわかった。

ウォン・ライは自身の優位を確信している。上から目線の不遜さ、傲慢さがなくて、こうした言葉は出てこないはずだ。

——見下されている。言葉こそ巧妙だが、これからお前たちは我々に従属するのだ、と言っているに等しい！

何より、彼は褒美、と言った。上から下に、施しを与えるつもりで、そう言ったに違いないのだ。

これには流石のザリユースも隔意を感じざるを得なかったし、それは兄も同じ様子で、感情が口からこぼれるようであった。

「言ってくれるものだ。——いつそ滅ぼしておくべきだったと、後で悔いても知らんぞ。我々は、どんな敵であっても、一度殴られたからには、やられっぱなしではすまさんつもりだ」

「やられっぱなしでは済まさない、と。なるほど、ではお受けくださるということ、模擬戦の日程はいかがいたしましょう。そちらの都合に合わせたいと思いますが」

シャースーリユースは、口に出してから、『しまった』と思う。言葉を引き出された以上、今さらこの話はなかつたことにはできない。そういう意図ではない、と取り繕えば、どうなるだろう。

信用ならぬ相手、うかつで軽薄な慮外者、きつとこんな評価を受けてしまう。そうなってしまえば、この恐るべき赤鬼は、まともに話をしてくれるのか。

「そうだな。……ああ、そうだ。模擬戦の申し出は、確かに受けよう」  
そもそも、どうして自分は感情を抑えられなかったのか。裏切られたような想いを抱いたのは、なぜか。目の前の赤鬼は、味方でも何でもないというのに、勝手に親近感でも感じていたのか。

まんまと話に乗せられてしまったようで、苦い感情が後に残る。上手いように転がされておきながら、『見下すな』と言い張るのもみつともないではないか。シャースーリユースは、深呼吸して、気持ちを落ち着かせた。

——これは、俺が未熟だったということだ。だが、もう自覚した。

これからは隙を作らんで。

ウォン・ライの顔は、穏やかな紳士のもので、もう無遠慮な発言の後すら感じさせていない。

それがまた、妙に様になっているから嫌らしい。ある種のひがみだが、シャースーリユーは自分を抑える術を知っていた。

先ほどの態度は、単純に言質を取るためのものであったのだろう。そう理解すれば、ウォン・ライの狡猾さに、してやられた、と悔しさを覚える。

「日程か。こちらに合わせてくれる、と。……うむ」

思わず、彼はザリユースに視線を向けた。傍にいる者に頼って、この悔しさから目を背けたかったのだ。

だが、ザリユースは何を求められているのかがわからない。だから、思いつくままに言葉に出す。

「とりあえず、準備期間を用意してくれるんだな？」

「長すぎない程度には」

「……すると、どうかな。こちらの戦力に合わせてくれると考えていいのか？」

「あらかじめリザードマンの戦力を申告してくれるなら、調整いたします。異存がなければ、こちらは弱いアンデッドの群れを、数にして三倍用意することになっています。——それで、よろしいのですかな？」

「三倍？　公平を期するならば同数であるべきだ」

「最下級のアンデッドです。単体での能力であれば、リザードマンの方がはるかに上でしょう。もつとも、そちらの戦士たちと比べて、これらスケルトンやゾンビどもが三倍では対等とは言えぬ。不安だといわれるなら、改めて考えますが」

ウォン・ライの視線がシャースーリユーを射抜いた。わかりやすい挑発にも聞こえたが、事前の情報と差異があるのか、確かめているようにも感じた。

少なくとも、彼はリザードマンと戦うならば、三倍の戦力で妥当、と考えているのだ。そこに修正の余地があるか、ないか。素直にウォン



ン・ライの言を受け取るなら、問題はそこだけだろう。

ザリユースは、兄の表情が微妙に揺れ動くのを認めた。応じるべきか否か、考えている風でもある。

必要とあらば、手心を加えてくれる。その事実をどう解釈するべきか。ここで同数を主張して、もし仮に負けることがあれば、リザードマン全体が軽んじられることにならないか。

こうした弟の不安を、シャースーリユーもまた感じていたのか。彼はこれを承諾した。

「わかった。三倍の戦力を用意する、ということ構わない。だがこれは、模擬戦だ。ならば、お互いに消耗を抑える手段を考えるべきだろう。本物の戦ではないのだから、終わった後の治療と、われらの身の安全について、保証していただきたい。一戦した後は、お互いに健闘をたたえて休息した後、改めて会談の用意をしたい。構わないか？」

「結構です。模擬戦後の治療と安全を保障し、十分休養を取ってから話し合いの場を設けると、ここで約束いたしました。——ただ、可能な限りで構いませんので、おおよその戦力の見積もりを立ててもらえますか。そちらの戦力も限りがあるでしょうし、こちらは調整する側なので、なるべく詳細に教えていただけると、ありがたいのですが」

嘘偽りのない返答を、ウォン・ライは求めている。それがそちらの為なのだ、真摯な態度で示して見せた。

正直な話、シャースーリユーは、目の前の男に勝てる気がしなかった。そうした手合いに本気でかかられてはたまらない。だから、戦力の調整は望むところであった。

「……そうだな。それで結構だとも。本気になり過ぎない程度に殴り合うのが、仲良くなる秘訣だろう」

そんな秘訣など、ザリユースは聞いたことがなかった。兄なりのユーモアだと解するのに、しばらくの時間が必要であったほどである。

しかし、赤鬼（今は人間らしい姿だが）は、彼なりに理解したらしく、穏やかに微笑んで相槌を打った。

「まさしく。戈矛だけではなく、言葉をもって殴り合う。それもまた、外交の妙味でありますれば。……戦が終われば、会談とは別に、お互いに語らいの時間を儲けましょう。個人的には、政治の話より、生活習慣や文化の面で理解を深めたく思います」

ウオン・ライは朗らかな笑顔を浮かべ、そう答えた。まるで、そちらの方が本分であると言わんばかりに。

これがまた、二人のリザードマンから剣呑さを抜き去ったようので、一言か二言も雑談を挟めば、話し合いもやがては穏やかに進んでいく。

「我々がリザードマンの存在を知ったのは、最近ですが。最初から、興味を引く存在ではあったのです。だから、こうして会話をする機会をいただけたのは、まことに幸運でした」

「われらがそこまで貴重な文化を持っているとは思われぬが——。ウオン・ライ殿がそうしたいというならば、交流もやぶさかではない。楽しみにしている」

リップサービスである。ただ、シャースーリユーはそのつもりだが、ウオン・ライの方は本気で楽しみにしているのかもしれない。そうした雰囲気を持っていたから、むしろこれは彼の方が気押されるようでもあった。

そのうちに、実務の面からの話が飛んでくる。あくまで先ほどの話し合いの補足だったから、シャースーリユーは些細なことだと思っていた。

「それから、一応補足させていただきますが、生き残ったりリザードマンの戦士たちについては、模擬戦の後、全快させて帰すことをお約束します。死者に関しては、こちらで『葬儀』を手伝っても構いません。これについては、約束させていただきました」

「結構。——ありがたい話だ。至れり尽くせりとはこのことだな」

「いえいえ、こちらこそ『受け入れてくださって』ありがとうございます。そもそも、こちらから持ち掛けた話でありますれば。最後まで責任を持つのは、当然のことでしょう」

どのような言葉を掛けようと、ウオン・ライは華麗に受け流して見

せた。何やら引つ掛かるような物言いも挟まったが、言っていること自体はまっとうである。違和感は切り捨てて話を進めた。

「不安を感じていらっしやることは、わかります。我々としても、こうした外交は慎重に行いたい。そのためにも、お互いの理解が必要だと考えています。『お互いの歩み寄り』が必要だと、感じています。出来るならば、この想いをリザーブマンの方々にも、共有していただけると幸いなのですが」

「それくらいならば、努力はするとも。お互いに軋轢を生まぬよう、前向きに検討したいところだ」

ウォン・ライは、シャースーリユーの言葉を聞いて、わずかに微笑んだ。そちらが理解を示してくださって幸いだ、とまで言う。

ここまでくると、シャースーリユーがあれこれと細かいことを突いても、不足なく答えてくれた。いままでの話の流れを無視して、なんとなく絆されたように感じさせてしまうのは、いったい如何なる手品なのだろう。

——無条件で好意的になれる相手ではない。狡猾さを感じさせながら、悪辣な印象はなく、老練の商人と話しているようだ。高圧的ではないが、甘さも無い。油断ならぬ空気を演出しながら、しかし自然と信用して話をするようになっていく。この雰囲気、どう表現したものだろう。

シャースーリユーには、不思議だった。単純な人徳とえば、それまでなのであろうが。

話し合いは、結局長くなってしまった。すでに空は明るさを失い、夜が近くなってきた。

それでもどうか、真つ暗になるまでに終わらせることができた。

「——では、話はまとまったということ、よろしいでしょうか？ もちろん、戦力の詳細や勝利条件などについては、また明日の夕刻に話し合うことにいたしますが」

「ああ、そう思ってくれて構わない。明日の話し合いが問題なく終われば、その翌日の正午、お互いに使者のやり取りをして、再度用意した戦力の申告と勝利条件を確認する。それからお互いに合図を待つ

て、開始。これで間違いないか？」

「はい。これで私も、主命を果たしたことになります。いや、すんなり話を通つて安心しました」

晴れて交渉は成立となった。

これで、ウオン・ライは使者としての役割を完全に果たしたことになる。

「また、明日にでも会うことになるのでしようが。今日のところは、事務的な話はここまでにしましょう。——日も沈む時間帯ですし、公務ではなく、私人として接したいと思います。よろしいですか？」

「よろしいも、何も。好きに振る舞えばいい。俺は気にしないぞ。な？」

シャースーリユーは、ザリユースにも視線を向けた。諸々の感情はさておき、判断の材料は多い方がいい。考える時間が増えるなら、願つたりだったのである。

「もちろんかまわない。……ここは、俺の家であることだし、大したもてなしはできないが……そうだな、せつかくだ。脂ののつた魚を一つ、さばいてくるとしよう」

兄はまだ、赤色の鬼殿と話したがっている。恐怖ゆえか、興味が先だったのか。ともあれ、なんとなく意図はわかったし、ザリユースとしても、もう少し相手の出方を観察しておきたいと思う。

そのためならば、魚の一匹くらいは安いものだった。

「——お気遣い、ありがとうございます。では、酒は私が持ってきたものを開けましょう。遅くなるようなら、明かりも用意しますが」

「……火を使わずに済むのなら、お願いしたいくらいだ」

「では、そのように」

ウオン・ライは酒瓶を一つ、机に乗せて見せた。もちろん、ストツクは出そうと思えばまだまだ出せる。飲みただけ飲んでいいのだと、彼は言った。

銘柄などリザードマンにはわからないが、相応の一品なのだろう。場合によっては、贈呈品として贈るつもりだったはずだ。

それをここで開けるということは、ウオン・ライ、ひいてはナザリツ

クという組織そのものが、リザードマンに対して友好的であることを示している。

「これはいい、大盤振る舞いだな。そら、早くさばいてこい。俺は酒の味見がしたくて仕方がないぞ」

口調はおどけているが、目は真剣そのものだった。兄に油断はないとわかると、いつそこで軽口を叩くのもいいか、という気分にもなる。

「……酔っぱらって家に帰ると、姉上に怒られるんじゃないか？」

「おおっと、それはいかん。お前も協力しろ。お前が俺以上に酔っぱらっていれば、言い訳できるからな」

「頼むから俺を言い訳に使わないでくれ。いや、本当に」

シャース・リユー、ザリユース、そしてウオン・ライの三人は、その一時を楽しく過ごした。そう言って、良いだろう。

あれこれ話しているうちに隔意は解され、酔いも手伝ってか、いい具合に快い気分になってきていた。

「なるほど、そうしてザリユース殿は旅人として見聞を深められたのですな。そういえば、私への対応も堂に入っていた。不審者としてではなく、客人として正しくもてなしてください。——理知的で、しかも歴戦のつわものである。族長殿が頼りにするのもわかるというものです」

「あまり褒めないでやってくれ。弟は、これで照れ屋なのだ。褒め殺しされると、かえって敬遠されてしまうぞ？」

「これは失礼。それも含めて、彼の美点でありましょう。おごらず、しかし卑屈にならず。自身の能力を誇りながら、つつしみの気持ちを忘れない。付き合っていて、気持ちの良い男です。——これ以上、私からは言いませんが、仲間内での評価も高いのでしょう。よき家族を持たれましたな」

ザリユースなどは、珍しく褒められて戸惑っていたし、シャース・リユーも弟が認められて嬉しかった。

外部からも高い評価が得られた、という部分が重要である。身内のひいき目を抜いても、弟は大した人物なのだ。それに同意してくれて

嬉しいと、何よりも表情に現れている。

「俺の話はいいだろう。兄者、酒が進んでいないぞ。もう少しは飲んだらどうだ」

「おう、それもそうだ。ウォン・ライ殿、貴方も遠慮しなくていい。我々は人間ほど華美な文化は持たないが、客人をもてなすことくらいはできる。弟はこれで、リザードマンの中でも料理がうまい方なのだ」

「族長殿のご厚意、まことにありがたく思います。……一戦交えることにはなりますが、それはあくまで交流の一環。こうして友情をはぐくむことに、何の障害にもなりません」

「おう。ならば、まずは一献。いただいた酒で申し訳ないが、まずは乾杯しなければ始まらない」

「——ありがたく」

ウォン・ライとの語り合いは長時間に及んだが、お互いに間違いなく楽しんでいたはずだと、リザードマンの二人は信じた。確かに、それは事実であった。

「シャースーリユ族長殿にとって、優秀な弟の存在は、誇りでありましょう。信頼すべき身内の存在は、何よりもありがたいものです」

「わかるか？」

「それはもう。私にも、頼れる弟たちが居ました。いまはもう過去のことですが、弟たちの助けに感謝したことは、数え切れません」

ここでウォン・ライは共感を示した。もちろん、これは語り合いの中での一幕であり、他愛のない言葉の一つに過ぎない。

それでも、シャースーリユは嬉しかった。同じように、兄弟を持つ身なのだと言った。種族は違えど、共通する感覚がある。それをわかりやすく口にくれたのは、ウォン・ライなりの好意に違いないのだから。

「ああ、それなら俺にもわかる。優秀な弟は、実に便利なものだ。意思疎通にしろ価値観の共有にしろ、手間を省いて無茶ぶり出来る存在は実に貴重でな！」

「……兄者、本人の目の前で言うことじゃないだろう、それは」

警戒を解いたわけでも、完全に信用しているわけでもない。お互いの文化の違いは、そうたやすく埋まるものではない。

それでも、わかり合おうと努力すれば、いくらかの信頼は構築していける。

結果として、彼らはすっかりと打ち解けてしまった。ザリユースもシャースーリユームも、内心を打ち明けることに抵抗がなくなってしまうている。むしろ、気の置けない友人と酒盛りをしているようだった。

ウオン・ライも心から喜びの感情を表現して見せだし、二人に出会えたことを感謝し、敬意をもって振る舞った。

結局最後まで、ウオン・ライは彼らへのメンツに配慮し、誠実に振る舞い通したとあってよい。

しかし、二人のリザードマンは知らない。ウオン・ライという男の複雑さと、その精神の異質さを。

そしておそらく、彼らが赤鬼の真実を知る機会など、永遠にありえないのだ。

ウオン・ライは、モモンガに外交の首尾について報告した。一語一句間違わず、記憶したとおりに話したから、誤解なく経緯は伝わっているだろう。

「書状を読めた様子はなかったと。それは確かか？」

「確かだとも。流石に日本語を解読できるほど、この世界は万能ではないらしい。今後、書状を作る機会があったら、きちんとこの世界に合った言語で記す必要がある」

「まあ、仕方がない。……後日の課題としよう」

聞き終えた後、モモンガは安心したように、一息ついた。それを確

認して、ウオン・ライも安堵する。

「協議抜きで、いきなりケンカを吹っ掛けられては、なし崩しに殲滅戦に入りかねなかった。穏便に事を運んでくれたこと、ありがたく思う」

「存外、気のいい連中だよ。その性質は純朴で分かりやすく、人格も基本的に善性だ。モモンガ殿が、気をもむほどの相手ではないさ」

「いや、感謝させてくれ。——改めて考えると、私自身が出張るとアルベドあたりがうるさいだろうし、かといって守護者を出せば、威圧的に屈服させて来たはずだ。……私は多くを知りたいし、闘争ばかりを好むわけでもない。時には礼節が、武力以上に有効なこともあるだろう」

「まさに。力押し以外の方法を、我々は学ばねばならん。己の強さを自覚した以上、より慎みをもって事に当たらねば、知らずと傲慢の悪癖におちいるだろう。腕力に物を言わせる場所は、わきまえるべきで——チエをもって圧倒できるなら、その方がいいと、私も思う」

ウオン・ライの目には、リザードマンの内心が透けて見えていた。彼が闇魔王であるからだとか、魔法だのスキルだのと言った話ではない。観察眼と経験則で見破れる範囲である。

要するに、それだけ連中は純粹なのだ。老獪なる彼にしてみれば、ザリユースやシャーリースーリユーなど、必死に背伸びをしている子供のようにはか思えない。

そうした彼らの腹芸もどきや、言葉遊びなど、酒を浴びながらでもあしらえる。それがまた、微笑ましくてたまらなかった。

見下しているというよりは、好意に近い。ひどい環境でも頑強に育った、異国の子供に感心する様な気持ちである。多少チエが伴わなくとも、それが悪いとは思わない。

「まあ、あの手この手で探られたが、反応を見る限りおおむね好感触だったといえる。少なくとも、悪感情は持たれなかったはずだ」

「そうか。——いや、模擬戦というのは、妙案だったな。これなら表面き、交流の一環として……まあ、ぎりぎり言い訳できる範囲内だろう、きつと。一応、死人が出てても不自然ではないし、事前に協議しておけ



ば、反感も少なくなると思いたい」

「そして、葬儀の一環として、我々はリザードマンの死体を合法的に得ることが出来る。少数の死体でも実験に使う分には充分だし、言質は取ってある。後から文句をつけられたとしても、言い訳はきくだろうよ」

模擬戦をはじめに考案したのは、ウォン・ライだった。リザードマンは、観察する限り好戦的な種族ではない。だが、戦士階級が存在する以上、武力の誇示は有効に働くはずだ。

実際、形式は整えたが、ほとんど戦のようなものである。まずは軽く一戦しておきたいモモンガとしても、悪くない提案だった。力の差を感じて従属を求めてくるなら、一石二鳥の策であるともいえる。

臣従させれば、ある程度は意のままに動かせよう。そうすれば、実験の自由度も広がるというものだ。あれこれと考えを巡らせながら、モモンガは口を開いた。

「好意を得たならば、次は恐怖を刻むとしよう。事が終われば、私も直々に出向いて、挨拶をしようじゃないか。第一印象が肝心だな。出会い頭に驚かせてやるのも、一興かもしれない。——もし模擬戦が終わった後も、うまく付き合えそうな様子なら、色々と便宜を図ってやるのもいい」

「顔を突き合わせての交渉は、私に任せてもらおう。大丈夫、うまくいくとも。お互い、共存共栄が最善だ。それを理解させるのは、難しいことではないと、私は思う」

ウォン・ライは、リザードマンをよほど高く買っているらしい。積極的に取り込みにかかるつもりだと、モモンガには感じられた。

理由はわからないが、彼のこと。ナザリックのことを考えての判断だと信頼できる。

「そうだな。せっかくウォン・ライに骨を折ってもらったのだ。その後のことまで一任しよう。本格的に信頼関係を築いていくなら、いくらかでも見知った顔の方が、あちらも安心できるだろうしな」

「——ありがたい。まあ、私も外交に携わるのは久しぶりだ。安請け合いはできんが、努力しよう。……最悪の場合、私が責任を取る。だ

から、最後の選択肢は、まだ消さなくていい」

ウォン・ライは、必要ならば切り捨てていいと、言外に伝えた。なるべく避けてほしい選択であることは、確かだろうが——それでも、模擬戦の結果がどうなるかはわからない。

彼は自身の手管で、友好関係を構築するつもりであろうが、最悪の場合は——さて。

モモンガとしては、最善の結果を求めたい。まして、友人に悪名を背負わせるのは、流石に後味が悪すぎる。だから、今は深く考えないことにした。

「……まあ、後のことは後のことだ。実務的なことを考えるのは、一戦終えてからでもいいだろう。この件が首尾よく終わったとしても、まだまだリザードマンの群れはあるのだから、長い目で見ていかねばな」

「今回の件については、リザードマンの一集落だけに話をつけた、という点が大きい。終始和やかに接したから、あちらも大事とはとらえてはいないだろう。周囲を巻き込んだの大会戦、とまではいかないはずだ」

ウォン・ライが訪ねたのは、シャースーリユの群れだけである。他にもリザードマンの集落は発見しているが、あえて接触しなかった。

今回の件で反応を見て、後々に取るべき行動を決めるためである。危機感を得て、団結するならばよし。まるごと抱え込む好機と見る。

周辺の部族が、ただただ無為に過ごすならば、それはそれでよし。無能と見れば、すりつぶすことに躊躇いはない。

「ところでモモンガ殿。模擬戦に挑む人選だが、結局コキュートスに軍勢を指揮させる、ということで落ち着いたのかな？」

「ああ、そうすることに決めた。合間に会って話をしたが、コキュートスも功を立てる機会を求めていたし、候補に挙がったのならなおさら、この好機を逃したくないそうだ。……思い詰められるよりは、発散させてやろうと思う」

つまり、この一件では、コキュートスの軍事的才能を推し量ること

になるわけだ。

モモンガには軍事の知識などないから、評価するのも難しい話である。しかしこればかりは、組織の長として、自分がやらねばならないことだ。ウオン・ライに頼ることはできない。

「まあ、場合によっては機会も何度か巡って来よう。評価はその都度、修正するようにすればいいか」

リザードマンという種については、一個の群れさえ掌握していれば、モデルケースとしては充分だ。

それ以外は、コキュートスのための草刈り場にしてもいい。実践し、反省しながら、よりよい戦の作法を学んでいく。そのための機会と考えれば、むしろリザードマンたちは反抗的であった方が都合が良いかもしれない。

コキュートスに采配の経験を積ませるには、場数を踏ませるのが最も良いし、経験を積み成長もありうる。守護者たちの成長を望むモモンガとしても、これは一種の好機であった。

いまだ進行中の懸案であり、油断は禁物だが、見通しがたったというだけでも気が楽になる。

張りつめているばかりでは、息も詰まる。一段落したら息抜きしたいな、とモモンガは思った。

「いずれにせよ、これでとっかかりはできた。モモンガ殿は、どう見るね？」

「うん？ 交渉そのものについてか？ ……なんというか、あれだな。情報の差が、そのまま結果に表れているような気がする。見せかけは対等でも、力の差があれば主導権を握られて当然だが、それ以上にこちらを未知の脅威ととらえているんだろう。計り知れない相手だから、強気の交渉に出れない。そんな感じかな？」

「——まあ、脅威には違いない。そもそも、彼らに洗練された交渉術を求めするのも酷だろう。高度な教育を受けたわけでもなし、外部との接触も少ない部族だ。……経験豊富な日本の営業職なら、むしろ放題の手合いではないか？」

ひどい言われようだ、とモモンガは思う。ぼったくり商法は、健全

なビジネスマンが取るべき手段ではない。

モモンガは、社会人として誠実さの重要性を理解している。特に営業職は、不特定の相手に信頼してもらうことで利益を得るのだ。物を売りつけるにも、人脈を得るにも、まずは本人が誠実でなければお話にならない。

さりとして、誠実さには濃淡もあれば種類もあるのが現実だ。嘘をつかない詐欺師にだって、一片の誠は存在する。

——だまし放題、いや話に乗せ易い相手だからこそ、細く長く食うのが一番利益になる。優秀な営業職は、リピーターを作るのが上手いものだ。お互いに得をした、と思える相手でなければ、付き合いも続かない。

だから、リザードマン達には相応の報酬を与えようと考えている。もちろん、良好な関係を築けることが前提で——要するに、正式に従属した後のことにはなるが。

「一方的に利益をむしると、恨みを残してしまう。すると、次に会った時に話がしにくい。ビジネスを続けていくつもりなら、いくらかは相手を儲けさせてやる気遣いが必要だ」

「さすがはモモンガ殿だ。商売の奥義を心得ておられる。相手を儲けさせたうえで、自分はさらに儲ける。そうして得た財で、さらに大きな事業を展開させていくのだ。……何事も、細かい事柄の積み重ねで進んでいく。特に契約の忠実な履行は、その根幹を成すもの。——あいつ分かった。彼らが分をわきまえている限り、力を貸すことで話をつけよう。細かい部分は後々詰めるとして、大筋はその方針で良いか？」

「良いようにしてくれ。Win—Winで収まるなら、それに越したことはない。リザードマンの繁栄が、ナザリックの利益になるのなら、いうことはないさ」

後に歴史に記される出来事であり、ナザリックが初めて、外界に大きく干渉した事例であるといつてよい。

リザードマンは、これを機に世界に躍進し、その知名度と勇猛さを知らしめることになるのだが——ともあれ、現段階ではマイナーな一

種族に過ぎないのであった。

## 第十六章 棍棒外交・中編

リジンカンにとって、父親に当たるウォン・ライの存在は大きなものである。

お互いに無視できない存在というか、異様なほど親近感を感じるときもあった。親子であるのだから、当然であるかもしれないが――。しかし、だからといって、やることなすこと全てを把握しているわけではないし、感性の違い、価値観の違いは互いに容認している。

距離を置くことの重要性も、自然と理解しているのである。親子だからこそ、冷静にならねばならぬこともある。お互いに微妙な部分を突くには、適切な時期というものがあるのだ。

リジンカンは賢明であつたから、それが今でないことはわかつていた。

「まあ、色々と事情は複雑だし、なにやら親父殿は忙しそうだが、今の俺にはどーにも出来んことさ」

「気楽だねー」

リジンカンは、美味そうに杯をあおつた。酒の量に上限はない。尽きることはない酒瓶を、彼は持っているから。

すでに、ここはクレマンティーヌの監禁部屋ではない。闘技場の一角を借りて、彼は美女と闘争を肴に大いに飲んでいた。

闘争による『試し』は、多くのサンプルを提供する。モモンガも有用性を認めていたから、ナザリツク内での腕試しはある程度許容されていた。結果として、実際どれだけ実用的な戦いをしているかといえば、そうとも言えぬのが現状ではあるが。

「実際、気楽なモンさ。俺は親父殿と違って、他人のために思い悩むことなんてない。自分自身のことですっぴいだからな。――こうして、身内の殴り合いを査察するのも、仕事の一環というわけだ」

物は言いようというもので、別にリジンカンの業務として割り当てられたことではない。ただ、彼なりに空き時間の暇つぶしとして、酒を友にしながら適当に鑑賞しているだけだ。

闘争と言っても、守護者同士がやりあうような本格的なものではな

く、湧いて出てくる雑魚たちの戯れを、上から見下ろしていたようなものである。

「……酒を飲みながら言うことかな？ 随分余裕ありそうじゃん」

「そうかな？ —— どうか。俺にはわからん。酒を飲むのも、剣を振るうのも、俺にとってはいつものことだ。余裕のあるなしは関係ない」

リジンカンにとって、それは日常である。思い悩むのも、自己嫌悪に酔うのも、酒に酩酊するのも——。あるいは、主君に奉仕するのも、彼にとっては息をするのと同じようなものだ。

ただ、ここにはクレマンティーヌという部外者がいる。彼女には何のしがらみもなく、言うことなすことナザリツクの常識から外れているのだが——。その話し相手をすることが、リジンカンには不思議と快かった。

「で、どうだ。ここで少しの間過ごしてみても、思うところがあるだろうか？」

「逃げる気は失せたよ。今は、あんたに師事する。望むならなんだつてしてやるから、まだしばらくは私の相手をしてくれる？ ……鍛錬を積めば、さらに上を目指せるかもしれない。その糸口くらいは、つかめた気がするからさ」

クレマンティーヌの方も、今ではリジンカンとの交流に、何らかの利を見出しているらしい。

冗談交じりに言った剣術指南だが、一度やってみると、彼女はのめり込む様にそれを求めた。

リジンカンは、指導者として、それなりの仕事をしたつもりでいる。美人に求められれば、彼とて無下にするのは難しい。男としてではなく、師として求められるというのも、これはこれで一興であった。

「まあ、指導してほしいというなら、それに応えるのも、やぶさかじやないが。何でもする、なんて言うもんじやないぞ。——嫁入り前の娘は、自分を大事にするもんだ」

「……はん。本当に初心なんだ？ 今時、貞操どうこうなんて流行らないよ？」

クレマンティーヌの返事を聞くと、リジンカンは杯を持つ手を下ろした。うつすらと浮かべていた笑みさえ消して、真顔になる。ほんの軽口のつもりだったが、無神経な言葉であったかもしれない。

「流行る流行らないじゃない。そうやって、自分を傷つけようとするな。……女は、自分を幸せにくれる相手にだけ、身を任せればいい。お前さんほどの器量なら、いい男なんてより取り見取りだろう。——その中で、納得できる奴だけを、相手にすればいいんだ」

リジンカンは、大真面目だった。普段の軽い雰囲気とは違って、本気で言っているのがわかる。

それだけに、クレマンティーヌもつい、口が滑ってしまった。言わなくてもいいことを、口にしてしまったのである。

「——今さら、なんだよ」

「……うん？」

「私の貞操なんて、もうどこかに行っちゃったよ。この体に、花嫁としての価値なんて、あるもんか。……男がそういうところ、気にするのは何となくわかるけどね。女にとっては、過ぎてしまえば何でもないとなんだよ。そうだ、私は辛くない。だから、必要なら何だつてする。——本気だよ」

リジンカンは、自身の非礼を認め、詫びねばならないと思った。真摯な想いには、誠実さで答えるのが道理だろう。そして誠実であるならば、最も率直な形で謝罪せねばなるまい。

「申し訳ない。傷つける意図はなかったというのに、嫌な思いをさせてしまった。——この通りだ、許してほしい」

彼は、頭を下げて謝った。さて、その行為は誤りであったのか。むしろクレマンティーヌを困惑させ、驚かせた。これほどの強者が、この程度のことです頭を下げるのかと。

「ちよつと、やめてよ。何それ、本気？」

「偽りのない、本心の言葉だ。俺は愚かな男だ。その愚かしさからでた言葉で、辛いことを思い出させてしまったのなら、許してくれ」

クレマンティーヌは、男のあらしい方を知っているつもりだった。

己の強さに媚びる者、外見に惹かれる者、誰彼構わず発情する者――



―。いずれにおいても、彼女は適切に処理できる自信があった。

だが、誠心から謝罪する男への対応については、惑わずにはいられない。そのような相手とは、出会ったこともなかったから。

「俺は女心がわからん、本当にな。――クレマンティーヌ、お前さんは、自分を卑下しなくていいんだ」

「――何を」

「過去に傷つけられたから、汚れたからと言って、それが何だっていうんだ？　今のお前は綺麗だよ。誇ってもいいくらいの美女じゃないか。……そんな女の貞操なら、十分以上に価値があるとも。それはどこにも行っていない。今だって、ここにあるじゃないか」

「……わかんない。私にはわからないよ」

クレマンティーヌの困惑は深まるばかりで、まともに受け答えさえできなかつた。この場限りの、瞬間的な思考停止に過ぎないが――男女の交わりにおいては、それが決定的な場面を引き寄せることもある。

「貞淑であることの源は、自らが作り上げてきた誇り。自尊心が元だと言つて良い。そしてお前にはそれがある。そうでなくて、どうして剣を取ろうとするだろうか。――自身の力で自分を守ろうとする意識、自立の意志がなければ、そうはなるまい」

己を卑下する者は、誰も守つてはくれない。己自身を否定する様な輩に何を尽くしても、たいていは無駄に終わるからだ。

そうした存在に、なつてほしくはないとリジンカンと思う。これほどの器量良しが、自己否定に走るなど、悲しすぎるではないか。

ゆえに目の前の女性に対する称賛を、彼は惜しまない。美女には違いないのだから、なおさら言葉に力も入ろうというものだ。

「まあ――それはそれとして、こいつは余談だが。剣を置き、闘争から離れたお前は、極上の美女と言つて差し支えない。男として、これほどの女性の相手ができるなら、それは榮譽というものだ。この点については、誰にはばかることなく誇つていいぞ」

リジンカンの声に、甘みが帯びてきた。聞くものの耳をとろかせるような、美声である。

クレマンティーヌは生娘ではないが、思わず一瞬、頭がくらくらとした感覚を覚えた。男慣れした彼女が、くらむような魅力的な声で、それを、彼は備えている。

「猫でもかぶってたの？ あんた」

「猫に例えるなら、お前さんの方が似合うな。——性根は気高く、不屈で、鬭争を恐れぬ。そして外見は愛らしく、時に麗しく、見る者をひきつけてやまない。……これは、俺の本心だよ」

女慣れしてないと言ったくせに、すらすらと賛辞を述べ腐る。詐欺師じやなからうな——と、クレマンティーヌは、そう思わずにはいられなかった。

——口先だけで、絆されそうになるなんて。

それとも、これは何かしらの魔術なのか。いま彼女は、ひどくリジンカンが魅力的な異性として映っていた。胸の奥に、ほのかに暖かい感情を抱く程度には。

「口説くのやめてくれない？ 調子狂うんだけど」

「話を振ったのはそちらだろう？ ——まあ、ちと言葉が過ぎたか。いや、良い意味で刺激的な女性が目の前にいるんだ。愚かな男が興奮するのも仕方がないと、割り切ってくれ」

節度をわきまえて接する。それは変わらないからと、彼は言った。耳を這うような、甘い口調で。

ああまったく、信用できたものではない——とクレマンティーヌは思う。

「うん。今さらだが、良いもんだな。初心な女と交わす会話は、男に色々なものを考えさせる」

「何が！ 私を弄んで楽しいの？」

「そうやって感情を表すのは、自分に価値を認めているからだ。誇りがあり、自尊心が残っているから、真心を向けられると真剣に向き合おうとする。やはり確信したよ、クレマンティーヌ。この程度の言葉で揺れ動くんだから、お前は己を肯定したがつている。難しく言えば承認欲求というやつだが……簡単に言えば、愛を求めているんだな」

あるいは、餓えていたのかな？ とリジンカンは言った。思いやり

を受け取ることに慣れていないものは、単純な好意さえ素直に受け取れないものだ。

「でも、そうやって、好意を向けられていく内に気づくんだ。自分は本当に価値のある人間で、後ろめたい思いを感じずに、ありのままに生きていてもいいのだと。……気づいているか？ クレマンティヌ。お前、泣いてるぞ？」

クレマンティヌがとっさに頬に触れると、確かにそこには涙の跡があつた。涙を流していたことに、今になってようやく気付いた。

「良い涙だ。鏡があれば、自身の本当の無垢な顔を確認出来たらうに、惜しいことをした」

リジンカンは、微笑んでいた。まことに、喜ばしいものを見つめるように、何かしらの祝いの事を寿ぐように。

「もう、そろそろ認めてもいいんじゃないか？ 自分自身を大事にして、愛してやれよ」

己を愛す。自己愛は、全ての基本である。自らを大切にできない者に、どうして救いがあるだろうか。自らを進んで傷つけるもの。それに手を差し伸べて、報われることはあるのだろうか。

いや、報われずとも、リジンカンは哀れむ。哀れむが故、言葉を尽くす。

「そうやって、感情のままに泣ける奴は、素直になつていいんだ。あるがままに人に接して、交わす言葉に喜びを感じられるなら——そういう奴は、生きていていいんだ」

無理矢理狂気に染まることなんてない。生のままに受け止めよ。クレマンティヌ、貴女は美しい。リジンカンが、そう言った。

「……生きていて、いい。なんて、言われるまでもないよ。……当たり前じゃない」

「まさに。どうか、その気持ちを失わないでくれ。当たり前前のことを、当たり前前に求めることだ。そして可能ならば、幸福になつてほしい。

——今の貴女を見たら、親父殿だつて賛同するだろうよ」

幸福になつてほしい、などと。これまでのクレマンティヌの生涯で、言われたことがあつただろうか。

類似するような言葉さえ、彼女は聞いたことがなかった。生きていていいんだ、という当たり前のことにさえ、胸が高鳴るような感覚を覚えるのは、どういうことなのか。

「わけわかんないよ。——なんで、そんなこと」

「美人に言葉を尽くすことを、俺は惜しんだりしない。言わなければわからないし、伝わらないからな。……だから、言わなくてもわかるだろうとか、察してくれるとか、そんなことは期待しない。——まあ、無駄口が多いことの言い訳だな、これは」

自ら動いて、自ら示して、初めて意味があるのだと、リジンカンは言った。

それが彼なりの哲学なのだろうが、クレマンティーヌにとって、それは新鮮な刺激であった。

驚くほどに。熱を持つほどに。新たな感情が、彼女を突き動かすようになった。

リジンカンがクレマンティーヌの相手をしているうちに、闘技場の演目は趣を変えていた。

「おお、こいつは珍しいな。——コキュートスが、衆人環視の元で剣を振るうらしい」

とたんに、リジンカンの目が輝きだす。なんとなくそれが、クレマンティーヌには面白くなかった。まるで、自分の時間が奪われたように。

「誰？」

「おお、そうか。外部の者は知らんでも当然だな。……コキュートスとは、このナザリックでの指折りの実力者だ。一番はモモンガ殿だが、まあ、三番か四番を争うくらいには強い男だよ」

クレマンティーヌには、モモンガとモモンをつなげるほどの情報は持っていない。ただ、二番目は誰なのか、と思うくらいだが、強者の闘争には興味がある。

見取り稽古も兼ねて、リジンカンと一緒に観覧するくらいはいい

か、と考えた。

「ほう、相手は差し詰め軍隊か。即興だろうが、隊列を組んでそれなりの装備もしている。——如何なる心変わりか、ともあれ見ごたえはありそうだぞ？」

クレマンティーンの目には、武装した骨の馬にまたがる、勇壮なスケルトンの一隊が映っていた。その周囲を固めているのは、禍々しい

——死の騎士デスナイトの群れだった。数にして、総勢三十名ほどになる。

「コキュートスの力量なら、苦戦はしまいが……。仮に、あの軍隊がきちんと指揮されて動いたとしたら、相当面倒くさいことになるな」

さあ見物だ、とりジンカンは言った。

実際、開始の鐘が鳴らされてからは、食い入るように二人は魅入った。

コキュートスは武人である。さらに言えば求道者であり、鍛錬は呼吸と同じものと心得ている。

刀を振るう。ただ振るのではなく、足の運びから、腰、腕への連動。周囲への影響を考えた立ち回りなど、彼にとっては本能に近い感覚で最適解を導き出す。

ある種の優雅ささえ感じさせる、鮮やかな演舞。戦闘というべき形にすら、なったと言えるかどうか。

「……圧巻だな」

「——すごい」

一対三十。その圧倒的な数の差を、ただ純粋な力の差で覆す様を、二人は見ている。

最後の一体を屠ったコキュートスは、刀を一振りしてから、それを鞘に収めた。納刀まで油断なく、立ち振る舞いには隙が無い。ここから何者かが奇襲したとしても、彼は即座に対応して見せるだろう。

それだけの確信を得るくらいには、コキュートスの武威は示された。部外者であるクレマンティーンなどは、見ているだけで精神が消耗したようで、若干息が上がっている。

「レベルが違う。……次元が違うね。妬ましいとさえ、思わないよ」  
「それほど、見事だったか？」

「見事なんてもんじゃないって。……自分には、どうしたってたどり着けない境地。それを、見た気がする。本当に、すごいよ」

クレマンティーヌの正直な感想である。称賛と言つてよい。一太刀に込められた力、斬撃の技術、あらゆる要素が高次元であり、自身との差を感じずにはいられない。

そうした彼女の反応を見て、リジンカンは一言添えずにはいられなかった。

「まあ、戦えば俺が勝って見せるがね」

苦し紛れの言葉には、聞こえなかった。

状況からして、捨て台詞に聞こえても仕方がないはずだが、リジンカンの声に陰りはない。ごく自然に、自信に満ちた声で言う。

「俺とコキユートス。純粹に数値で比べれば、強いのはアイツの方だろう。腕力でも体力でも……瞬発力、敏捷性、様々な部分で俺はアイツより劣っている。実際、戦ってみれば、コキユートスには押されっぱなしの展開になるに違いない。——だが、最後に立っているのは、俺の方さ」

リジンカンは酒を一息で飲み干し、杯を置いて席を立ち歩みだす。彼の発言の意図すらつかみ取れない、クレマンティーヌにとつては戸惑うばかりの展開だが、制止も出来ぬ。

「ちよつとー」

「ついてこい。勝者をねぎらいに行くぞ」

コキユートスとやらに、会いに行くのだと。彼女は、それだけを理解した。

会つて、どんな話をするつもりだと、聞いたただすことさえできなかった。それくらい、彼の歩みは早かったから。

「オオ、リジンカン。見テイタノカ」

「ああ、見せてもらった。気合が入っているな？　まあ、モモンガ様か

ら仕事を任されたと聞いているし、気張りがたるのも無理はないが」  
たかぶった気を発散させるのに、闘技場を利用したと考えるなら、  
まさに彼らしい。リジンカンには、コキユートスが高揚していることを  
正しく読み取った。

仕えるべき御方から、仕事を任されたことが誇らしく、同時に不安  
でもあるのだろう。本戦の前準備として、軽く慣らしていたとみるべ  
きか。

ともあれ、緊張をほぐす手段として、闘争を用いるのがいかにもコ  
キユートスらしく、リジンカンはそれが可笑しかった。

「肩の力を抜け。モモンガ様は、無体なことはなさらない。無理もさ  
せはしないさ。——自然体で挑んで、戦い抜けばいい」

「シカシ、失態ハ許サレヌ。コレガ実質、コノ世界デノ初任務ナノダ。  
失敗デ終ワラセテハ、ナザリックノ面子ニ関ワルノデハナイカ？」

「取り返す手段くらい、親父殿が考えてくれるさ。——重要なのは、力  
を尽くすことだ。油断をしないことだ。考えつく限りの、あらゆるこ  
とを思い、悩んで、答えを出すことが肝要である。結果は問題ではな  
いと、俺はそう思うがね」

コキユートスは、悩んでいる様子を見せた。彼なりに、この度の任  
務を重荷に感じているのは確かだろう。

だが、それに押しつぶされるほど、ヤワな気性はしていない。ただ  
ひたすらに、力を尽くすべき。そう言われれば、改めて納得も出来た。

出来ることをするしかない。出来ないところは、補ってもらえばい  
いのだ。助け合うことまでは、モモンガは禁じなかった。それが、コ  
キユートスへの救いとなる。

「言ッテクレル。タヤスイ仕事デハナイノダゾ？」

「たやすい仕事なら、わざわざコキユートスに任したりはせんだろう  
よ。ま、気負うな。俺にできるのは助言くらいだが、疑問に答えるこ  
とくらいはできる。不安要素があるなら、言ってみろ。真摯な意見と  
いうやつは、これで結構役に立つもんさ」

リジンカンは不敵にも、そう言っただけで見た。相談事があるなら乗っ  
てやると。

コキュートスは、ここまで言ってくれるなら、甘えるのもいいかと思わぬではない。だが、ここは自身の力だけで乗り切りたいという考えもあつたから、即答はできかねた。

代わりに口にしたのは、後ろにいた彼女の事。リジンカンの影に隠れるようにしている、クレマンティーヌについて、言及した。

「部外者ノ彼女ニ聞カセテ良イ話カ？」

「どうせしばらくはナザリックから出られん。ま、俺の方が離しはしないがね。——で、話を逸らすなよ。俺とお前の仲だろう」

溜息を吐いて、コキュートスは頭を振った。リジンカンの前で、思いつくのも無駄だと悟つたのだろう。

心にしこりがあるのなら、ここで吐き出しておくのもいい。コキュートスは、そんな気分になれた。

「リザードマントノ模擬戦ニ、主将トシテ参加スルコトニナツタ。自身デ軍勢ヲ率イ、戦ワネバナラヌノダガ——自ラ剣ヲ振ルツテハナラヌ、トイウ。何分、軍ヲ率イルノハ初メテノコト。不安ハ隠セヌナ」  
「ああ、なるほど。直接斬り合いに行けば、早々に終わる話だが。……わざわざ軍勢を用いるのは、お前の軍才を計りたいんだろう。軍事的才能というやつは、ともかく場数を踏ませなければ判断できんものだからな」

クレマンティーヌの見る限り、リジンカンは、いたって横柄であつた。

そうでありながら、嫌味を感じさせない雰囲気を作つて見せるのだから、たまらない。言葉の粗さとは裏腹に、いちいち所作に品があり、本物の美丈夫とはこうしたものか——と感嘆したくもなる。

「まあ、不安と言つても色々ある。時間はあるんだろう？ 可能な限り付き合つてやるから、一つ一つ言つてみると良い」

「フム。スルト、マズ考エネバナラヌコトトシテ、彼我ノ戦力差ニツイテダガ……」

コキュートスとリジンカンは、語り合った。戦力比1:3の意味合いと活用方法について、事前の準備と偵察について。現実の戦力の運用として、正面戦力と遊撃戦力の兼ね合いから乱戦時の対応について



ともかく、逐一話し合つて、もつともらしくリジンカンはアアだコウだと語つて見せた。

「適当に言つたが、どうあれ試してみることだ。失敗したところで、教訓さえ得られればモモンガ様とて罰したりはするまいよ。——まずは、気楽に構えることだ」

「トハイエ、緊張感ハ持つベキダ。ソウデハナイカ？」

「お前は真面目過ぎる。もつと余裕を持って……と言いたいが、初仕事では難しいかもしれんな。よし、なら、俺もついて行つてやろう。傍で見たいれば、助言も出来ようしな」

モモンガ様には、俺の方から話を通しておこうか、とリジンカンは言つた。

「出来ルナラ願ツテモナイガ、許サレルノカ？」

「目はあるとも。なんにせよ、試みて損はなからう？ ——俺も興味があることだし、お前の助けにもなれるのなら、こちらとしても無理を通してみたいくなるものさ」

自分から申し出たことなから、最悪でも叱責を受けるのは俺だけで済むと、リジンカンは言つた。

「俺だけが、言いたいことを言い切つた気がするな。お前の方からは何かないのか？」

「一番ノ問題ハ、今話合ツタバカリダガ。……ソウダナ。ソコノ人間ニ、如何ナル興味ヲ抱イテ、ココマデ連レ回シテルノカ。聞イテモ良イカ？」

ここでクレマンティーヌに話題が移る。彼女自身にとっては戦々恐々の展開だが、リジンカンは努めて明るく言つた。

「雄の習性というやつだ。深くは聞いてくれるな」

「……フム。ナルホド。イヤ、野暮ナコトヲ聞イタ」

「いいさ。何度も言うが、俺とお前の仲だろう。もつと踏み込んだ話をしてもいいんだぞ？」

何がナルホドなんだ、とクレマンティーヌは突っ込みたかつたが、口にするほどの勇氣はなかつた。

リジンカンは、平気で冗談を言う男である。話をしている分かったが、女心を乱すのを好む癖すらある。

そうしたロクデナシであるから、彼女はなるべく彼の言葉をまともに受け止めないようにしよう、と思っていた。真摯であるからこそ、正直に受け止められない、とも言える。

「クレマンティーヌ。お前も見学に来るか？」

「——は？ いやいや、なんで」

「特に深い考えはないさ。……少しくらいは外に出てみれば、気分転換になると思つてな。嫌なら、自室に引きこもつていればいいが」

どうする？ といたずらっぽくリジンカンは言った。やっぱりこいつは、気まぐれで女を振り回す、ろくでもない男に違いない。

「はいはい。付いていってもいいんなら、私も行くよ。——今は、あんた以外の奴と絡めるほど、気分的に余裕もないしね」

「そいつは結構なことだ。後は、モモンガ様の許可をいただくだけだな」

前提として、その問題があるというのに、リジンカンは気楽に言つてのけた。まるで断られること等、ありえないとでもいうように。

それがまた、クレマンティーヌにとつても、あるいはコキユートスにとつても、不思議な事であつたのだが。

さて、実際にモモンガの立場からしてみれば、リジンカンの申し出はなかなか面白く映る。

「模擬戦の際、コキユートスの側についててやりたいと？ お前がか

？ リジンカン」

「ああ、何か不都合でもありませんかね、モモンガ様」

「……ふむ、それはコキユートス次第だな」

リジンカンからの提案とはいえ、模擬戦に連れて行くのはコキユートスである。だから、この場には彼もいた。彼は彼で落ち着かない様子だが、いかに口を開くべきかで迷っている。

「どうせお前の方から言い出したのだろう？ コキユートスが面白そうないイベントに参加するものだから、自分も混ぜろというわけか」  
「まあ、間違っちゃいませんが……」

クレマンティーヌは、流石に自室へと戻らせているが、それ以外の部分でリジンカンには自重するつもりはない。モモンガの真意を問う。  
「ともあれ、コキユートス次第という。それはいかなる意味で？」  
「どうもこうもない。模擬戦という場で、本当にお前を必要としているのか。賑やかな余興くらいの認識なのか、どうか。——その真意を知りたい」

モモンガの視線が、コキユートスを貫く。彼にとっては比喻ではなく、本当に貫かれていくように感じているかもしれない。おずおずと、恐縮しながらも姿勢を正して口を開く。

「コノ度ノ申し出ハ、リジンカンノ方カラ提案シタ物デハアレド——。考エマスルニ、彼ノ存在ハ、模擬戦ニオイテ役立ツ部分ガアルト思ワレマス」

「具体的には？」

モモンガは、無益で曖昧な答えを許さない。そうした厳しさをもっているように、コキユートスには感じられた。

事前にリジンカンと協議したとはいえ、自身の言葉が通じるだろうか——とも思ったが。

しかし彼とて、戦う前から怖気づく様な男でもない。淡々と考えを述べる。

「マズ、違ッタ視点ガ得ラレマス。リジンカンノ感性ハ、私トハ違い、アル意味自由デス。私ダケデハ気付カナイコトニ、気付クカモシレマセン」

「だから助言を求めるにはもってこいだと。——うむ、他には？」

「私ノ傍ニ、人間ラシキ人物ガ、親シソウニ接シテイル。リザードマンニ、他種族トノ融和姿勢ヲ見セル例トシテ、モットモワカリヤスイ形式デアルカト考エマス」

よくよく考えている、とモモンガは感心した。きつとこの言葉を口に出すまで、ひどく悩み、熟慮の上に熟慮を重ねたに違いない。そう

した努力を、認めてやりたくもあるが。

同時に、それだけでは足りぬ、とも思う。外部勢力に対する以上、誠意と同じくらいに、相応の狡猾さが求められるのだ。

「……融和、融和か。そうした言葉がコキユートスの口から出てくるというのも、驚きだが。しかしそれだけでは理由が弱いな。模擬戦は確かに親善目的という名目だが、比重としてはナザリツクの利益の方が重い。……この場合は、情報を得ることや、実戦経験を積むことなどだな。融和姿勢は今後見せていけばいいことだし、今回の件は、せつかくお前だけに任せたことだ。それを横から割込ませるなら、もう少し利益の上がる提案であってほしいと思うが」

モモンガは、コキユートスに不安を持っているわけではない。むしろ逆である。

模擬戦で主将として用いる以上、そこには信頼がある。モモンガはコキユートスに仕事を任せて、学ぶべきことを学び、勝敗はどうあれ結果を出してほしいと思っていた。彼には成し遂げるだけの力がある、とも。

第一、自分の力で成し遂げた、という実感こそが、彼にとって一番の報酬になるだろうと見越してもいる。他人の言葉で誘導されての結果であれば、そうした実感は薄かろう。それでは、あまりにも残念ではないか。

リジンカン割り込ませるなら、せめてこれらの懸念を吹き飛ばすだけの利益か、論理的な根拠が欲しいと、モモンガは思う。

「どうだコキユートス。私を説得して、リジンカンをどうにか連れて行ってみるか？ これはこれで、難しいミッションかもしれないぞ。ここで退いても、お前の失点とは考えないことにするが……さて。まだ言うべきことがあるなら言うといい」

モモンガが見たいのは、守護者の成長性、とでも呼ぶべきもの。彼らの自由意志、精神の柔軟性を確かめておくのが第一。そこから明確な未来を思い描き、計画性をもって動いていけるか、否か。

コキユートスならば、ひどいことにはなるまい、とモモンガは樂觀している。

特に根拠はないが、そもそも信頼とは感覚的なものだ。見知らぬ他人ではないのだし、これくらいは過剰な期待とは言えまい。

だから、モモンガはここからコキユートスが明確な根拠を提示してくれると思っっているし、己を納得させてくれると信じたかった。

「モモンガ様、そいつはですね——」

「リジンカン。ココハ私ニ任セテホシイ」

リジンカンを押しとどめるように、コキユートスが言った。彼なりのケジメというものだろう。とはいえ、そう大したことを考えついたわけではなく、ただ誠実に、正直に思うところを述べるだけだ。

「申シ上げマス。……恥ズカシナガラ、私ハ個人戦術ニハ一家言アル身ナレド、集団戦ニ関シテハ、サホド見識ガ広クハアリマセヌ。ユエ、ソウシタ方面ニモ明ルイ、リジンカンヲ傍ニ置ク事デアリマセヌ。要ハ、彼ヲ我ガ軍師トシタイノデス。軍ノ運用ヲ学ブナラバ、軍師ノ助言ヲ如何ニ現実ニ落トシ込ムカ？ コレヲ実践スルノモ、有意義デアルト考エマス」

コキユートスの主張は正しいが、それだけなら先ほどの言葉の焼き直しである。モモンガは無言で続きを促した。

「彼ハ自由ナ部分モアリマスガ、基本的ニ見識ハ広ク、発想モ柔軟デス。知恵者デミウルゴス、アルベドノ両名ハ、気軽ニ戦場ニ連レ出スノモ氣ガ引ケマスガ——ソコナ男ハ、色々ナ意味デアリヤスク、頼リヤスイ。今回ノ件デアリ連レ回スナラ、彼ガ最適ノ人選デアアルカト愚考致シマス」

「同意する。——それで？ 頼りやすく連れまわしやすいことが、どのような利点を生むのだ？ 私にもわかるように、説明してほしいな」

さらなる重圧が、コキユートスに押し掛かる。モモンガの発言には、それだけの重みがあった。もちろん、当人は気づいていないだろうが。

ともあれ、それに負けじと、コキユートスは一呼吸置いてから話し始めた。

「戦ハ、戦場ダケデアリマセン。戦ニハ、終ワツタ後ノ処理ガアリマ

シヨウ。模擬戦デアルナラバ、勝者ヲ勞イ、敗者ヲ納得サセル場ガ必要ナハズ——。思イマスルニ、ソウシタ場デハ、賢イ知恵ヨリモ、共感ト慰メガ必要ニナルカト」

「……詳しく聞きたい。続けよ」

「模擬戦トイウ形態デアレバ、直後ニ死傷者ト環境ノ被害ノ確認、治療ガ終ワレバ結果報告ナドノ時間ガ必要ニナリマシヨウ。オ互イニ、顔ヲ突キ合ワセテノ話し合イニナルデシヨウ。……私ハ、主将ヲ仰セツカッタノデスカラ、ソノ場ニモ出席スルノガ筋トイウモノ」

そう言われればそうか、とモモンガも思う。コキュートスは勝敗の心配よりは、そうした戦後の話し合いに苦手意識を持っているらしい。

確かに、単純な武人には不慣れな分野だろう。戦場での助言役はおまけ。リジンカンを使う最大の目的は戦後——少し砕けた言い方をすれば、反省会での立ち回りを助けてほしいのだ。

「そうだな。単純な戦争なら、蹂躪して支配して従え、という簡単な流れになるんだが。……体裁を整えてしまった以上、お行儀良くせねばならんな」

「オツシヤルトオリ。私ハ無骨ナ武人ユエ、不器用ナ態度デ接スルコトニナルデシヨウ。至ラヌ所ガ出ルカモシレマセヌ。——ソコデ、リジンカンノ人付キ合イノ良サニ、期待シタイノデス」

「……デミウルゴスやアルベドでは、知性が鋭すぎて相手も緊張するか。リジンカンは陽気な男だし、リザードマン相手でも分け隔てなく接することも出来るか……？ いや、確かにその通りだ。よく考えたものだ、コキュートス。感心したぞ」

ここまで聞けば、コキュートスが真剣に彼を必要としていることも、理解できた。自分に足りないものを把握する。単純だが、認めるのはなかなか難しい。さらに必要なものを認め、上司に向かって謙虚に申し出るのは、もっと難しいことだ。

社会人として経験のあるモモンガは、経歴が立派で能力のあるものは、プライドも高いことを知っていた。そういう手合いは、他人の長所に嫉妬したり、助力を侮辱と取るような相手もいる。

———すぐくできる奴は、妙なところにこだわったりするからなあ。コキユートスがそんな奴でなかったのは、実にいいことだ。

これだけでも十分な成果と言えるが、さらに実戦で試すことが出来れば、重ねて有意義であろう。モモンガとしても興味深い。

よって、許可することに決めたが、形式というものがある。

「なるほど。よくわかった。……主将であるお前が、どうしても必要だというのであれば、許可しないわけにもいくまい」

「デハ」

「強調しておくが、リジンカンの申し出だから許す、というのではない。この件を任せたのは、あくまでお前だ、コキユートス。そのお前が強く推すから、許可するというのだ。それを確かに理解せよ」

今回の件に限っては、コキユートスがリジンカンの上位者であり、直属の上司となること。これを強調すべきだった。上下関係をあいまいにして、なれ合いの仕事をさせると、まずろくなことにならないと、社会人としての経験から言う。

「ああ、はい。……わかつていますとも」

モモンガは、コキユートスではなく、リジンカンの方を見やった。

彼の面目を鑑みて、自重して動け、と釘を刺すように視線を向ける。わかつてくれるかどうか、いまいち不安だったが、リジンカンは正しく理解したらしい。肩をすくめて見せた。

「アリガタクー！」

「よい。お前が必要だと思ふもの、戦力以外であれば、融通は利かそう。——さて、他にないのであれば、改めてウォン・ライに伝えねばならんな。彼には模擬戦の最終案を通達する役目があるし、土壇場で変更案を突き付けるのもアレだ」

そういえば、ウォン・ライは直前の調整のため、今日もリザードマンの集落を訪れている。出てからしばらく時間がたっているし、あちらも順調に進んでいるだろうか。

コキユートスのためにも、問題なく話し合いがまとまればいいが——と、モモンガはそう思っていたのだが。

流石に、何の問題もなく、とはいかなかったのである。

ウォン・ライは、その情報をどう処理すべきか、一瞬悩んだ。

「……その数に、修正する余地はないのですか？」

「ない。出陣させる戦士の数は、10名が限度だ。よって、そちらも30名のアンデッド部隊を用意すると良い。——何か問題があるのか？」

シャースーリューは、不思議そうに言った。こちらを偽る意図はなく、ただ真実を述べているだけだという態度。

その純朴な姿勢には好感を持つが、口にした情報は捨て置けない。ウォン・ライは大いに問題だと主張した。

「少なすぎる。模擬戦の規模としては、まだ大きくしたい。最低でも100対300の試合にしたいのですが」

「それでは、集落へのダメージが大きくなりすぎる。非戦闘員まで動員しなくてはならなくなる。——戦争を仕掛ける意図がないのなら、こちらの事情もかんがみていただきたいが？」

「……リザードマンの人口は、100人の戦闘員も確保できぬほど、危険水域にあると？」

「どうとつてもらつても結構。ただ、我々としても過度の負担は避けたい。俺を族長と認めてくれるなら、俺が責任を持つ民たちにも、理解を示してほしいと思う」

わかつてもらいたいと、シャースーリューは付け加えた。おそろく、集落では模擬戦自体が批判の対象なのだろう。

そんな面倒に関わりたくない。そう思われては、人員が少なくなるのも当然か。

「はいそうですか、と引き下がっては、主に顔向けができませんな。……なるべく大きな戦いであつてほしいのです。派手に打ち合つてこそ、戦いの中で生まれるものがある。私は、そう信じておりますので」

「何と言われようと、こればかりはな。族長とて、何もかもを自由にできるわけではない。俺は、奴隷を従えているわけではないのだ」



ならば、とウオン・ライは切り出した。

「それでは、こちらから戦力を貸し出しましょう。そちらの命令に従うよう調整した兵を、90体ばかり預けても構いません。受け入れてくださるならすぐにでも——」

「無用だ。理解の及ばぬものに、命を託すのは勇気がある。……10名だ。この数は覆らん」

シャースーリユーは頑なだった。模擬戦とはいえ、命のやり取りには違いない。だからこそ、頑なになる理由もわかるのだが——。

「……なるほど。よくわかりました。どうしても、というのであれば、致し方ございません。10対30の少数での模擬戦になりますが、それで行うと致しましょう」

ウオン・ライとしては、無理押しも出来ぬ。ない袖は振れない。そういうものと考えるしかない、思考を切り替えた。

彼は極めて穏やかに、その事実を受け入れる。ウオン・ライの顔に怒りの色はない。それを確認すると、シャースーリユーも安心したように、一息ついた。

「わかつていただけたか」

「もちろんです。——さて、ともあれ数の話はこれで決着としましょう。そこでもう一つ、提案があります」

「……と、いうと？」

「そう構えなくても大丈夫ですよ。貴方がたの懸念を取り除いてあげたい、と思っただけですから。——要するに、戦力の確認ですな。どの程度の強さのアンデッドを持つてくるか。それを実際に確かめてみたほうが、安心できると思うですが、いかがでしょう」

ウオン・ライは、模擬戦を前にして、リザードマンたちが抱える不安を理解してやりたいと思っっている。

人数を絞ったのは、そもそもこちらに信用がないからだ。信用は、互いへの理解を深めねば生まれない。理解さえできれば、不安を取り除くことも出来るし、利益の誘導も容易になる。

ここで戦力の公開に踏み切ったのは、その布石とも言える。

「それは、あれか。こちらの10名に対する、そちらの30名の戦士

を、事前に紹介してくれると。そういうことでいいのわ？」

「はい。もつとも、全員ではなく一人だけ連れてくる形になりますが」「いい話だ。出来るなら、ぜひ紹介してくれ。ぶつつけ本番でも充分戦って見せるが、こちらに有利な案であれば、拒む理由はない」

「その気があるのなら、殴り倒してくれて構いません。失つて惜しい戦力ではありませんので」

戦う前に、その相手のことを把握していれば、手の打ちようはあるだろう。心の準備もできるし、リザードマンにとってはありがたい話だった。

これも温情の一つ、と考えれば、ウォン・ライには感謝すべきか。いやいや、そもそも好きで付き合っているわけではないのだから、それは過剰であると、シャースーリユーは思い直す。

「相互理解が深まったようで、何よりです。——では、模擬戦の時期は伸ばしましょう。可能なら明日にでも行いたかったのですが」

「……性急であったと認めるべきだな。初めての試みなのだから、余裕を持つておきたい。二日や三日くらいは伸びても支障はあるまい。……今日は、まだ話し合うことはあったか？」

「戦力の確認のほかは、ございません。しいて言うなら、模擬戦の後の段取りについてはですが」

「ふーむ、そのあたりはきちんと書面に残しておいた方がいいな。後で手違いがあっても困る。できれば、我々にわかる文字で頼みたい」  
「では、書面に記すのはそちらにお任せしましょうか。こちらには写しをいただければ充分です」

終始和やかに話は進んだと言って良いだろう。シャースーリユーは、初回ほどの緊張は感じなかったし、ウォン・ライからも、悪い雰囲気は欠片も見られなかった。

いいことだ、と単純に彼は喜んでいた。交渉を通じて、自分が成長したという実感を得ているようでもあった。

シャースーリユーがそう思っている感覚が、実際にはただの錯覚で、作り出されたものに過ぎないのだと気づくことは、終生なかったであろう。

ウオン・ライは表情を崩さなかった。

赤鬼は、静かに感情を表さず、最後まで理知的に、論理的に、矛盾なく話し合いを進めたのだ。

少なくとも、そう演出し、そう相手に感じさせる程度には、気を使っていたのである。

結果として、誰に幸いし、誰に不幸をもたらすか。そこまで見通すには、シャースーリユは若すぎたというほかない。

ウオン・ライが話をまとめて帰ってくると、コキュートスがリジンカンと同行する話をまとめていた訳で。

これはこれで、お互いの頭を悩ませることになってしまった。

「悪手とは言わぬが、事が複雑になりかねん。リジンカン。お前、まだ何かやらかすつもりではないだろうな？」

「信用がないな親父殿。いや、むしろ信用しているから不安になるのかね？ まあ、何でもいいが、その懸念は当たっているといっておこうか」

クレマンティヌを連れて行く、とリジンカンは言った。

この場にモモンガがいなかったのは幸いだった。二人は、ウオン・ライの私室で話している。

リジンカンとのコミュニケーションを重んじた結果だが、ウオン・ライが求めずとも、彼の方から話し合いの場を作ったろう。これは、それほどの話であった。

「おい」

「良い話だろう？ 親父殿。俺は最近、ひどく勤勉になってな。女を育てる喜びに目覚めそうだよ。——上位者というものは、気分がいいものだな、うん？」

「……皮肉か、それは」

「皮肉だとも、親父殿。貴方には、それが一番効くだろう？ ——息子  
の孝行に、少しは感謝してほしいものだね」

他者が聞けば、何が何やら、であろう。しかし、二人は解していた。クレマンティーンを戦場に伴うことは、リジンカンの趣味である。だが、彼女には利用価値があった。

——彼女は、全ての情報を明かしたわけではない。出し惜しんでいる。

リジンカンが、積極的に情報を絞ろうとしないからだ。彼はすでに彼女を『自身の所有物』だとナザリックにおいて宣言している。

当人にこそ伝えていないが、クレマンティーンはもう他者が手出しできる存在ではない。少なくとも、守護者たちはいくらか気を遣うだろう。モモンガも、リジンカンの管理下にあるのならば、あえて干渉はしないように思える。よって、彼女はもう安全なのだ。

「女子を戦場に伴うか、男子の矜持はどこへやった？」

「女性差別だな、それは。言いたいことはわかるが、俺には届かんよ親父殿。俺の矜持など、投げ捨てて構わない」

そうした彼女を、ナザリック最初の外交である模擬戦に伴うことの意味。

ウォン・ライは、いくらか考え込まねばならなかった。それほど、リジンカンの言動を理解しかねたのである。

「……私の考えが正しければ。リザードマンに対するアピール、ではないな。クレマンティーンを伴う利点は、外部にあるのではない。むしろ内部の、ナザリック内の者たちへのアピールというわけか」

「まったくその通りだとも。……これから先、外の世界との結びつきは強くなる一方だろう。少しずついいから、異物を受け入れる土壌を作っていきたい。彼女は、その一助になってもらうつもりだ」

今回の件は、ほんのあいさつ程度のものだがね、とリジンカンは付け加えた。

涼しげな顔で、刺激的なことを言う。これで不敵に笑って見せるのだから、彼の神経はよほど太いのだろう。

「——楽しいか、リジンカン」

「楽しいとも、親父殿。貴方が楽しんでいるのと同じくらいにはね。……村人たちと接して、連中を憐れんでやって、満足だろうか？ 貴方

はずつと、ああしてやりたかったものな！ 上から目線で超越者を氣取り、無償の施しをするのは、まったく。至上の悦楽と言つてよからうよ」

リジンカンは、勝手に持ち込んだ酒をあおる。手酌でぐいぐいと飲み干していったが、酒瓶の中身は尽きることを知らない。

減らない酒瓶は、ウオン・ライの私物である。それを自分のものであるかのように扱う彼。

いや、ウオン・ライの本心を見透かしたような言葉を吐く彼を、何といえはよいのであろう。

「……皮肉を言うどころか、率直に非難するか」

「非難？ 俺は責めたつもりなどないさ。親父殿の現状を、ただ述べてみただけでね。……これを非難というなら、それだけ後ろめたさを感じている証拠だろうよ」

ウオン・ライは、リジンカンの言葉を否定しなかった。

出来ようはずもない。彼の言葉は、すべて正しかったし、そのことを自覚してもいたからだ。

だが、どうしてリジンカンがそれを理解したというのか。まさか、心を読めるわけでもあるまいに。追求したいところであるが、したところかどうか、という気持ちもウオン・ライにはあった。

「現実で叶わなかったことを、夢の中で叶える。それを私の弱さだと、お前は笑うか」

「笑ってほしいんだろう？ 親父殿は、複雑な人だからな。俺が氣にかけてやらねば、誰も理解などしてくれまいよ。——いや、本当に孝行ものだな、俺というやつは。世が世なら、良き孝子として語り継がれるだろうよ」

リジンカンの戯言を、ウオン・ライは聞き流した。戯言でない部分だけ、真剣に受け止める。

しかし、この義理の息子の思惑を、どう解釈したものだろうか。いたずらに突いてみただけだとも思えぬ。

「我が国の思想を愚弄するつもりか？」

「時代錯誤な滑稽話を、そのまま笑い話にして何が悪い——と、ああも

ちろん冗談だとも。いや、しかし、そこで出てくるのが『我が国』とはな。貴方の言う我が国とは……何のことなのだろうな?」

「わけのわからぬことを——」

「親父殿、貴方は真剣に考えるべきだ。我々は、これから国づくりをすることになる。ここが、この世界が、我らの祖国となるんだ。……その事実から、目を背けるべきではないと、俺は思うがね」

ウォン・ライは、明確な反論が出来ず、黙り込むしかなかった。

リジンカンが指摘した部分について、考えていなかったわけではない。だが、目先の仕事に追われて、広い視野を持ってなかったのではないか? 自身の感情に溺れて、後々の禍根を見逃しているのではないか。

「……お前は時折、私の心を見透かしたようなことを言う。そして今、私自身の至らなさを指摘してくれている。——親子というものは、ここまで通じ合うものかな?」

「さて、どうかな。まあ、つながりは深い方だろうが、俺は親父殿以外には、不感症といつてもいいくらいだよ。つい最近も、女心がわからず、一人の淑女を傷つけてしまったしな」

はぐらかされている。わかっていたが、ウォン・ライは追及できなかった。

言わぬと決めたら、死んでも言わぬ。そういう男であると、父である彼には分っていたから。

「クレマンティーヌのことか。話に聞く限りでは、ずいぶん物騒な女性であるようだが」

「あれくらい物騒な淑女がいても、許されるだろう。血の気の多い奴は、ナザリツクでも珍しくない。——そもそも、美しい女は、たたえられてしかるべきだろ?」

気負いもなく気取りもせずに、ごく自然な口調でリジンカンは言った。

いちいち、あからさまな表現をする時点で、女性に慣れていないのがわかる。設定上、リジンカンにはそうした経験を付け加えた覚えはない。そして、ナザリツク内で誰それに手を出した、などという話も

聞いていない。

「未熟者め。まさか、そのノリで当人と接しているのではあるまいな」  
「……勘弁してくれ、親父殿。女の口説き方まで指南してほしいとは、流石に望まんよ」

あるいはリジンカンは、自身の良い所を見せるために、クレマンティーンを伴おうとしているのかもしれない。それも、異性として意識して。

だとすれば、これはこれで、可愛げのある息子ではないか、とウォン・ライは思い直した。

そして、この可愛らしい息子のためになるのなら、些細な粗には目をつぶって、いくら骨を折ってもいいかと、そう考えもするのだった。

「近いうちに、義理の娘を持つことになるのか」

「やめてくれ、相手にも選ぶ権利というものがある。……ああ、今は皮肉じゃないぞ。念のため」

「わかっている。自由意思に任せるとも。……恋愛は、自由であるべきだ。その後の展開も含めて自然にあるべきで、何の不思議もない。そうだな？」

「そうだと、親父殿。貴方は何も間違っていない」

外部からの圧力で、恋の結果は左右されてはならない。悲恋など誰が望むものか。

恋愛観については、親子は共通しているであろう。そういう意味で、ウォン・ライも初心な気持ちを持ち合わせているということか？

残念ながら、そうではない。

「……孫の名前を考えておかねばならんな。候補は、三十ばかりで足りるか？」

「親父殿がそれで満足するのなら、あえて止めはせんよ。年寄りの楽しみを奪うのは、忍びないものな」

リジンカンは、明るく笑い飛ばすよう、努力せねばならなかった。

己がその希望にこたえられるかどうか、自信がなかったというのもあるが。何より、ウォン・ライがカラ元氣を出しているようにも見え

て、痛ましかつたからだ。

ウオン・ライの心は、すでに傷だらけだ。しかも人生を長く生きた弊害で、隠し事が上手くなり過ぎていたから、傍目には健康体に見えるてしまう。

いや、傷つき、病んでいたからとて、それがどうだというのだ。まさに周大鸞は、病んだまま大業を成したというのに。

「頑張りすぎるなよ、親父殿。……貴方を頼りにする者たちがいることを、忘れないでくれ」

「今さら何だ。わかっているとも。働きたがるのは——まあ、性分だ。これでも好きでやっていることだから、疲れも少ない。心配するようなことではないだろう」

リジンカンは、酒をあおった。これ見よがしにやっているのに、ウオン・ライは一滴も飲もうとはしない。

それこそが、まさに両者の差であるといえるし、役割の違いをも示していたと、言うこともできる。

二人は適当に駄弁った後、何とはなしに別れた。不完全燃焼であったと思いながらも、また機会があつたら話し合おうと、お互いを感じながら。



## 第十七章 棍棒外交・後編

模擬戦までの準備期間、リジンカンは飲んで過ごせばいいし、キュートスは努力を尽くせばいい。

モモンガも息抜きを兼ねて冒険者家業をしているが、ウオン・ライは仕事の時間である。

期間もいくらか延長して、丸三日間もリザードマンとの詰め協議が行われ、最終的な合意がなされた。

「では、これで最終合意とみなしてよいかね？」

「……うむ、問題ない。リザードマンの族長として認めよう。ここに、模擬戦に関する合意は、全て締結されたものと判断する。一応、当日の開始前に再度条項を読み上げるが、ここに至って問題は起こらぬだろう」

二人は十分話し合っていた。少なくとも、シャースーリユーはそう思っていたし、まさか当日になって反故にされるとも思えなかった。

連日のやり取りの中で、それくらいには、ウオン・ライのことを信頼するようになったともいえる。

「スケルトンの一体とも戦ったが、確認しておく。あれが標準と考えて間違いないな？」

「はい。あれと同格のスケルトンを30体、戦場に送り出すことになっていきます。この点に間違いはないと確認いたします」

「——もし、違反したとみなされた場合。この話はなかったことにさせてもらう。そうだな……例えば、アレが本当に一体だけ混ざっている、他は高レベルのスケルトンになっているとか、そうした不正があればナザリックの誠意を疑わねばならない。もちろん、装備だけ桁違いに高品質にする、と言うのもなしだぞ」

「わかっております。私は、主命を受けてここにおります。ゆえに、そのような稚拙な詐術は用いませぬ。我がナザリックの名誉にかかわることです。そのためにこの条件について——お互いに読める言語で表記し、記録として残しておくのですから」

再確認は念入りに行われた。

1. リザードマンが10人、ナザリック側が30体のアンデッドによる模擬戦を行う。
2. 30体のアンデッドは全て同格のものを用意し、過剰な重装備は行わない。
3. 上記の戦力以外は用いない。もし断りなく追加した場合は、模擬戦を中止する。
4. どちらかが全滅するか、敗北を認めるまで続行する。戦意を失った相手への追撃を禁じる。
5. 戦後は被害確認と負傷者の治療に当たり、休息の時間を作る。
6. 死者がいた場合は葬儀を行う。これはナザリック側も協力して、互いを尊重した形で行う。
7. 反省会を行い、ナザリック側が多大な被害をもたらした場合、被害の補填を保証する。
8. すべての作業が終了した後、リザードマンとナザリックの間で友好関係を樹立する。
9. 具体的な共同声明は協議の後に発表する。共同声明は周辺部族にも通知して周知させる。
10. お互いに納得するまで話し合うことを確約する。
11. 協議が終了し、お互いが同意するまで、共同声明を発表してはならない。

要約して記せば、以上の項目となる。この時点で、リザードマンに対して対等な扱いをするつもりがないことがわかるだろう。

だいたい一方的に、ナザリック側が配慮する内容になっているのだが、シャースーリユーはこれを当然のことと考え、他種族から、他部族から見ても映るかなど考えていない。ウオン・ライの話術の妙であろう。この程度の配慮は当たり前だと、話の流れで持って行ったのだ。

——後日。他国との外交の際、ナザリックがリザードマンに対し、いかに国交を築いたか。この世界の者たちは、研究するだろう。

その時のために過程を明らかにして、公開しておくのは有用だ。他

国が今回のナザリツクの外交を理解した際、どのように解釈するのか。実に興味深いではないか。舐められるか、慎重さを評価するか。いずれにせよ、外交官としての話のタネにはなるだろう。

ちなみに、これ以前の話し合いも文章として保管され、共同声明と同等の扱いとなる。——要するに、望めば誰でも閲覧できると言うことだ。

個人的な思惑を別にしても、過去の成果をきちんと残しておくことは、外交において重要なことである。いかに話し合い、いかに決めたのか。後世の人々が参考にするためにも、これは必要なことだとウォン・ライは思っている。

細々な規定は他にもあるが、些事と言ってよい。モモンガに報告する際は省いてよかろう。

——交流を通じて、リザードマンの現状は把握した。鞭も飴も適度にやれるだろう。

被害の補填は最初から行うつもりなので、すでに見積もりは行っている。

威圧が過ぎれば恐怖を生む。恐怖が過ぎれば反抗を生む。程よい畏怖に留めて管理するには、恩恵も同時に与えねばならない。

友好という言葉はあくまでも名目、お互いの差を理解させ、わきまをさせて初めて成果と言える。

——悟られぬ程度には、援助の上乗せをしてもいい。こちらの援助がいかに大きく、離れがたいものか。理解した頃には、全てが終わっているよう。調整するのも、この分では難しくあるまい。

名目とはいえ、本気で友好的な態度で接しておかねば、容易く見破られるもの。哀れみも優越感も、決して表に出してはならない。主従の鎖をつけるのは、今しばらく様子を見てからになるうか。

勘所は、これまでの交流でおおよその部分はつかめた。後は現場で接しながら修正していけば、大きな失敗はしない自信がすでにある。

過程はどうあれ、リザードマンは屈服の上に畏敬させ、支配の口実を仕立て上げねばならぬと、ウォン・ライは思い定めていた。

「模擬戦の開始は明後日だ。それまでは準備を整え、英気を養わせよ

う。俺たちの方はこれで問題ない」

「我々としても、問題はありません。当日を楽しみにしております」  
シャースーリユーは気負いもなく、いたって自然体であった。ウオン・ライも、それに応えるように朗らかだった。お互いにリラックスして話し合えた、満足するほどに。

緊張感はすでない。意識の差はあったとしても、峠は越したと、両者は理解しているのだ。

「時間が出来た分、暇になるな。まあ、これまでのいきさつを考えれば、これくらいの休養は当然だろうが」

「シャースーリユー殿にとつては、外交など、慣れぬことであつたでしょう。心中お察しいたします」

「からかつてくれるなよ？ 膝を突き合わせて、それなりの時間を共に過ごしたのだ。ちよつとは気を許してくれてもいいだろうに」

「あいにくと、そこまで気を抜くわけにはまいりません。油断して無礼を働けば、ナザリックの誠意が疑われます。何より……」

主命でございますれば、とウオン・ライは一礼して答えた。

この際、ウオン・ライはリザードマン種自体にも、シャースーリユーやザリユースに対しても、悪感情や優越感は無塵も感じていない——ことになっている。

感情の引き出しを数多く持つのが、優れた交渉人の特徴である。共感も理解も、相手の立場をおもんぱかって、はじめて成立する。思いやりが優越感に変わっては元も子もない。見下すような視線に、案外ヒトは敏感なのだ。

——悲しいかな、気を許すほどの仲になるには、世代をいくらか隔たねばなるまい。

そして、優しさは弱者に強く働きかける感情であると、わきまえねばならない。

友情は、対等の相手にこそ成立する。ウオン・ライは、彼らに対する思いやりの情を持つことは出来ても、心からの友情を築くつもりは全くなかった（口先では友情を語ることもあろうが）。過ぎた庇護や博愛は、格下の相手にするものであろう。

とはいえ、援助物資に関しては、必要な時に必要なものだけ、水準を満たす程度に提供するのが重要だ。行き過ぎれば警戒され、及ばなければ恨まれる。まこと、ヒトの感情ほど複雑なものはない。

「そもそも、あなたほどの強者が、俺たちとの友好を望むというのも妙な話だな」

「そうは申されましても、私どもの強さ、というものを、まだ見せてはおりません」

「見ればわかる強さもある。学識、雰囲気、立ち居振る舞い。洗練されていけばいるほど、無学な者には大きく見えるものだ」

単なる世辞ではない。シャースリーユの言葉には、羨望も含まれていた。自身には決して習得できない礼法、その貫録と教養の確かさは、自然な身振りにこそ現れる。当たり前のようににじみ出るウォン・ライの品位は、彼の劣等感を刺激したらしい。

「私自身に優れた部分があつたとしても、それは私一人の力ではありません。周囲の助け、良き環境があつてこそです」

「それはわかる。だが、俺たちには、俺には、そうした機会がなかった。もちろん、最初は師事しましたが……超えてしまえば、自分だけで自分を磨かねばならなかった。先達のいない中、自身の強さを追求することとは、思いのほか厳しかったよ」

「お察します」

「……いや！ 結構だ。余計な話をしてしまったな、所詮は愚痴に過ぎんというのに」

「であればこそ、放つてもおけません。リザードマンは、これからのナザリックにとって、盟友となるかもしれない相手。その族長が悩んでいるのであれば、相談に乗るのも私の職務です」

職務、とウォン・ライは言った。同情ではない。仕事にかかわりがあるからこそ、干渉するのだと主張する。決して同情ではないのだと、強調するように。

盟友と、生涯の友人は、違うものである。盟を誓う同胞はいくら居てもいいが、刎頸の交わり（その友の為ならば首を刎ねられても悔いはない、という間柄）を交わすなら、今生においてはモモンガだけで

いい。それが正しいのだと、ウオン・ライは思う。

「悩みを言えば、応えてくれるのかな？」

「——主命の範囲内であれば。今回は、友好が目的です。物質的な支援はまた別の話として、口頭での受け答えなら、いくらでも応えられます」

「あくまでも個人的な話だ。種族の長としての話ではないから、そう堅苦しくとらえなくてもいいが」

「ならば、ウオン・ライが個人として、盟友たるリザードマンに答えましょう。何なりと、ご相談ください」

「こういう言い方をすれば、相手も受け入れやすい。メンツを立ててこそその名目である。」

ウオン・ライは、感情の厄介な面を痛いほど理解していた。実感として知っているから、利用もまた容易い。

「やはりやめておこう。心惹かれるが、そうした馴れ合いは戦いの後にした方がいい」

「なるほど、戦いの後であれば、馴れ合いは拒まぬと。言質は取りましたゆえ、後で反故にされては困りますぞ？」

ウオン・ライは、微笑んで言った。老紳士の穏やかな態度は、大きな度量を相手に感じさせる。まさしく、中国的大人らしい雰囲気があるにあっては、ここにあった。

「こうした言い方をされれば、シャースーリユーの方もあえて拒むことはできぬ。苦笑して受け入れた。」

「手厳しいな。いちいち指摘されるほど、俺は交渉下手か？」

「なんの。シャースーリユー殿は、まだ若うございます。何より、厳しく指摘するのは、それだけ見込みがあるからですよ」

「若い、か。長老どもから言われたときは、いくらかの侮蔑が感じられたものだが、貴方の場合は本当に真心から言ってくれているとわかる。……格の違い、というやつかな。まったく、たまらんよ」

「心配も過ぎれば、相手にとって負担となる。悪気があったのことでありますまい。私が格別なのではなく、格の違いを理解できるほど、貴方自身が成長したのだと、そう捉えるべきでしょう」

「——なるほど、そういう見方もある、か。いや、きつとそれが正しいのだろう」

あれこれと言葉の隅をつつかれては、気分を害するのがふつうである。

だが、ウオン・ライは度々フオローするように、嫌味なく励ましてくるものだから、シャー・スーリユーも毒気が抜かれるようだった。

「若者の成長は、年寄りにとっては何よりの楽しみです。多少うるさく言いたくなるのは、己のような失敗や苦勞をさせたくないという、老婆心から来るもので、決して悪気はないのですよ。……若者がこれを理解するのは、難しいかもしれませんが」

「そうでもないさ。ウオン・ライ殿のように言葉を尽くしてくれたなら、俺にだって理解はできる。誰だって、それは変わらんだろうさ」

何より、耳に入る言葉、『声』がいい。温かみがあつて、それでいて威厳のある声だ。鬼種の大きな姿と合わせてみれば、遠い記憶にある父の姿を、思い出すようであつた。

本気で交流を考えてもいいかもしれないと、そう本心から思うようにもなっている。

明後日の模擬戦の結果がどうあれ、リザードマンはナザリックに対し、友好関係を持つことになるのだろう。

未来の形が、少しずつ見えてくるようであつた。もちろん、見ているモノの違いはあるだろうが——。

リジンカンとコキュートスは、模擬戦の段取りを検討していた。当然のように、ウオン・ライからも情報は共有しているので、そこに齟齬はないはずだった。

「と、いうわけで難儀な話になった訳だが」

「何が難儀ナノダ？ 普通二戦ツテ勝ち二行ケバイイ。ソウデハナイカ？」

たった30体とはいえ、運用しようと思えば方法はいくつもある。それを検討するために話し合うのだが、まずは前提を整理せねばならない。

「それでもない。今回、俺たちに求められているのは、そこその勝利。あるいは惜敗だ。圧倒的な勝利は求められていない」

「ドウシテ、ソウナル？ ナザリックノ初戦ダゾ。快勝シテシカルベキデハナイカ」

コキュートスは、その点を疑っていない。戦う以上は全力で勝つべき。それ以外の道があるかという。

しかし、リジンカンは知恵者らしく理屈をこねる。親父殿の意図はこうだ、と言わんばかりに。

「具体的な話をしようか。俺たちが模擬戦で圧勝……つまり、ほぼ無傷で相手を皆殺しにしたとする」

「フム、最善ノ結果ダナ」

「それでもない。——この世界の常識というか、まあ、なんだ。普通、同胞を一方的に蹂躪した相手とは関わり合いになりたくない、と思うのが人情というものだろう。負けさせるにしても、一矢は報いたような気分にはさせてやりたいな」

事前に話し合いを行って、納得すぐでの戦いのはず——とコキュートスは主張したが、リジンカンは困ったように苦笑して、説いた。

負けず嫌いはそうそう降参しないし、戦士は誇り高いものだ。死ぬまで戦い続けるような手合いばかりでは、皆殺しという結果もなくはない。被害が皆無とはなるまいから、多少なりとも相手をおもんばかってやりたいと思うのだ。

「感情は、理屈じゃない。嫌なものを嫌と感じるのに、たいした理由はいらんよ。仲間を殺した相手と友情を築くのは、きつと大層難しいことじゃないのかね？」

「……ウム。理屈ハワカッタ」

どこか、皮肉っぽい言葉の響きである。ともあれ、ならばどうすべきか、コキュートスにはわからない。

そして、彼が悩むような問題に、助言をするのがリジンカンの仕事



である。

「手加減ガデキヌ、トハ言ワヌガ……。自ラ刃ヲ振ルウナラ、ヤリヨウハアロウ。ダガ指揮ニ専念セネバナラヌ状況デ、ホドホドノ線ヲ見極メル自信ナドナイゾ？」

「その為の俺だ。まあ聞け。親父殿がペテンにかけてくれたおかげで、こっちは多少有利な状況で戦える」

「……ドウイウコトダ」

「親父殿は、嘘をつかずに相手をだましたってことだよ。スケルトンは30体もいる。すべての装備を軽装でまとめることもないだろう。リザードマンに見せたのは、曲剣と小盾を装備した一体のみ。残りの29体の編成について、考えてみようじゃないか」

シャーサリーユーたちは、軽装のスケルトンしか知らない。あまり過剰な重装備は反則と見なされかねないから、そこはどうかやりくりするべきだろう。

「まず、軽装を主体とするのは確定だな。一番数が多い奴をサンプルにした、といえば名目もたつ」

「スルト……ソウダナ。軽装歩兵12体、長槍兵10体、弓兵8体。コレクライガ妥当カ？」

「重装でなければ問題ないだろうから、木製の大盾を持たせた奴を守備に置くのはどうだ？ 上手に運用すれば、弓兵を守る」

「イヤ、大盾で動キノ鈍ツタ兵ハ、全体ノ行動ヲ阻害シカネン。……ソウダ、騎兵ヲ使ウトイウノハドウカ。低レベルノ、スケルトン・ライダーが居タハズダ」

「うーん、難しいかもしれないが。まあ、騎兵は馬と兵で二体分の枠にすれば、容認してくれるかな」

一度考えがまとまれば、案は次々出てくるものである。二人はアレコレ話し合いながら、結論へと向かっていく。

「とりあえずアレだ。軽装歩兵10体、長槍兵8体、弓兵6体、騎兵3体（骸骨馬と騎乗するスケルトンで6体と計算）。これで一度、闘技場で何度か試合でもやってみよう」

「ワカツタ。リジンカンハ、状況ニ応ジテ助言ヲ頼ム」

「軍師としての初仕事だな。まあ、いくさは準備が一番大事とも言うし、大いに励んでやるとしよう。……その分、本番ではサボるかもしれないが許せよ」

「口ノ滅ラン男ダ。トニカク、仕事ヲシロ。後ノコトハ、後ノコトダ」  
話をついた、と考えるべきだった。とすれば、次は実践して結果を吟味し、反省と改善を続ければよい。

時間が許すまで、コキユートスとリジンカンの二人はこれに集中した。

あまりに集中し過ぎていた為か、模擬戦の直前まで試行錯誤していたのである。それこそ、当日の挨拶に出るまで、ぎりぎりの線を模索し続けていた。勤勉というほかない。もっとも、そのおかげで指揮も練度も、最低限の線までは整えられた。

——さて、万事上首尾に終われば言うことはないが。親父殿の計算を狂わせても、良いことは何もあるまいよ。

ところで、コキユートスは肝心な部分について聞き逃していた。惜敗が許されて、惨敗が許されない理由について。

それはある種おぞましい理由がついて回るのだが、幸運なことに彼は気づかずに済んだのである。これだけは上手く誤魔化せたな、とりジンカンにはひそかに安堵した。

——リザードマンの連中を追い込んで、負傷の度合いから正確な戦鬪力を計るのはもちろんだが、惨敗して死体が入らないのは、ひどくまずい。資源としての有用性を調べるなら、これは絶対に確保しておきたいものだ。正規の手段で、疑われることなく持つてこれるなら、その方がいいのは違いないからな。

リジンカンは、人知れず肩をすくめることで、親父殿の残酷さを実感する。

あの人は、これをわかった上で慈悲深い態度を崩さず、当人に対して誠実そのものの振る舞いで接することができるのだ。

『悪を隠して善を揚げ、その両端を執って、その中を民に用ゆる』——中庸の行いとは、中間をとることではない。極端な方法であってもためらわず、状況に応じた最善の手段を取ることを言う。個人によつ

て解釈に違いはあるが、リジンカンはそう解釈している。

善を愛し悪を憎むのは人の性だが、最も良い手段が悪性を含まないとは限らない。そして悪性を含む手段が、善なる結果を呼び込むこともあるだろう。

陽中に陰あり。陰中に陽あり。まさにこの世は複雑である。リジンカンは酒が欲しくなったが、これから大仕事控えていると思えば、それもはばかられた。

模擬戦当日。モモンガは自らあいさつに出向くのが筋だろう、と主張したが、ウオン・ライが『ことが終わってからでよいでしょう』と論じたため断念した。

上役はもつたいぶることも職務のうちである。もつともらしく、絶妙なタイミングで姿を現すのも大事な役目だ。リザードマンたちの心を折る、という意味でも重要である。

だから、決戦の場には彼は居ない。ナザリック勢は外交官ウオン・ライと主将たるコキュートス、それに軍師役のリジンカンとスケルトン兵30体。付け加えるなら、クレマンティーヌがおまけのようにくつついていた。彼女の武装は解いているため、平服である。

外見は、小奇麗で洒落た町娘と言っても通るほどだ。とはいえ、流石にリザードマンたちは場違いな人間の雌を目にして首をかしげたが、あえて問わなかった。戦いを前に、余計なことに気を回す余裕はないのである。

さて、対してリザードマンはシャースーリユーはもちろんとして、この日のために集った精兵10名。それが全てである。

族長自身が10名の中に入ることを危惧していたが、そうした事態にはならなかったのは喜ぶべきだ。

しかし、養殖漁業の責任者たるザリユースが入っているのは、どうしたことか。彼は欠くべからざる要人ではないのか。

「どうしても、と言われては、弟の申し出を断るのは難しい。肉親のたつての願いだ。無下にするのは心苦しくてな」

「――なるほど」

ウオン・ライとシャースーリユーは、模擬戦前の打ち合わせを行っている。戦力についてはお互いに問題ないと確認した。戦士七名、狩人の弓兵三名。ザリユースが中に入っていることを予測できなかったのは、ウオン・ライの落ち度というべきか。

シャースーリユーの方を見やれば、いくらか微妙な面持ちで頭をかいていたが、少なくとも表面上は不満を出していない。

二体分計算とはいえ、騎兵はやりすぎだったかもしれないと、今さらのように思う。こちらも多少の無理を押ししているのだ。相手をとがめることはできない。

空気を変えるために、さしあたっては、当たり障りのない世間話から。

「わかります。弟の懇願というものは、兄としてはやりづらいものですからな」

「わかってくれるか」

「もちろんです。私も、弟のわがままには色々と振り回されました。暴力で上から押さえつける方法もあるのでしようが、私の肌には合いませんでした。なので言葉と態度だけで示してやったものですが、案外そちらの方が堪えるようです」

言い聞かせても聞き入れないときは、外界の厳しい現実を突き付けてやったものだ、ウオン・ライは述べた。暴力こそ振るわないが、叱る時は常に道理を説き、徳を説く。

怒りの感情は、時に不条理であり非合理である。それを幼い頃から知っていた彼は、自身のそれを抑え、相手に感情の是非を自覚させることがいかに大切か、よく理解していた。

「厳しきも、優しきであると。それを理解できる身内には、遠慮するべきではないでしょう。当人がその愚かしさに気づいていない場合なら、なおさらです」

「……少し、意外だな。ウオン・ライ殿は身内に甘いと思っていたが」

「本人を駄目にするほど甘やかしはしません。人は、怖くない相手の言うことは聞かないものです。真剣さのない曖昧な態度には、誰も誠実さを認めません」

ただし、厳しくした後はたくさん褒めて、自信を与えてあげること。出来れば一緒に遊んであげて、愛情を示すこと。これだけは、忘れてはいけないとウォン・ライは力強く言った。

「根源にあるのは、愛です。叱り方も褒め方も、相手を思いやって行わねばならない。肉親であればこそ、真摯に向かい合って、成長させてやらねばならないのです。ましてや感情のままに怒ったり、明らかな失態など弟に見せるべきではないでしょう。長者としての風格、上に立つ者としての見本となること。——それが長兄の義務であり、責任というものであります」

自身の過去を思い返すように、ごく当たり前のように自然な口調で言うものだから、シャー・スーリユーの方が面食らった。

「それが長兄の義務というなら、辛いな。俺とて、兄としての気負いを感じぬわけではないが……そこまで厳しい姿勢は持ったことがない。正直、頭が下がる思いだ」

「気負いを自覚しているなら、充分と言えましょう。大丈夫です。ザリユース殿は、貴方の苦労を理解しておりますし、何より貴方の期待に応えようとしている。それで、いいではありませんか」

ウォン・ライは、この件を良い話でまとめるつもりだった。

そのついでに、リジンカンらのある種アコギな振る舞いを誤魔化すつもりである。目論見は成功したようである。模擬戦の始まりまで、お互いに悪い空気にはならず済んだ。

模擬戦の直前、お互いに顔を見せあい、改めて協議した内容を確認する。

といっても、リザードマン側はともかく、ナザリック側から挨拶が出来るのは、ウォン・ライの他にコキユートスとリジンカンがいるの

みであつたが。

コキユートスの外見は、他種族を威圧するのに十分なものであつたが、傍のリジンカンの軽薄な態度が、それをいくらか和らげていた。ユーモアの通じる相手であれば、過剰な緊張もほぐれるというもの。

「コキユートス、ト言ウ。今日ハ、スケルトン共ノ指揮官トシテ参加スル。ヨロシクタノム」

「俺はリジンカンだ。今回は助言役として来ている。……硬くならず、気楽に行こうじゃないか」

クレマンティヌもリジンカンの側にいるのだが、視線を背けたまま口を開かなかつた。

シャースーリユーは、これを無視できる立場ではないので、一応は問いたださねばならない。

「族長のシャースーリユーだ。……それで、そこの彼女は？」

「クレマンティヌという。色々と気難しい女性だが、気にしないでやってくれ。彼女は見ての通り人間だが、ナザリックでは一定の地位にある。——俺たちは、種族の差異で差別しない。その証明と、彼女自身の勉強のために連れて来たわけだ。壁の花にするのももつたないから、後で負傷者の救護でもさせようか」

「……ちよつと、勘弁してよ」

『リジンカンの持ち物』という立場は、一定の地位と言つてよいものか。

とはいえ、この図々しい主張をあえて否定する声はなかつた。肩書のない人間種など、今のナザリックでは餌にしかならぬのだから。

シャースーリユーは、そうした事情など分からぬが、リジンカンの言葉は素直に受け止めた。武装していない人間に対してまで、警戒するの馬鹿らしい。

「この度は、模擬戦のためにナザリックからよくぞ来られた。——我々の戦士たちについて紹介してやりたいが、彼らは気持ちが高ぶっているようだな。……代表者に挨拶をさせよう」

正確には、よそ者に対する不信任と困惑から、前に出ることを拒否

しているであろう。そうした様子が見て取れたから、ウオン・ライもリジンカンも苦笑するだけだった。

コキュートスは、最初からそうした者どもを相手にしようとも思わない。だが、挨拶に来た代表者に対しては、興味を持ったように視線を向けてみせた。

「俺の名はザリユースだ。模擬戦での部隊長を任せられている。……公式の場の作法など分からぬから、無作法があっても許してほしい」「いいとも。気楽に、と俺は言ったしな。——よろしく」

「ヨロシク、タノム」

無造作に歩み寄って、リジンカンはザリユースと握手してみせた。こうした態度が友好的に見えるのは、こちらの世界でも同じらしい。この瞬間だけ、場の雰囲気が和らいだ気がした。

「非礼はお互い様だ。だろ？ ……ザリユースか。確か、魚の養殖の責任者と聞いた」

「そうだ。つたない作りだが、生け簀を管理している。今回の報酬に、その手の技術も含まれているのだが」

「ああわかつているとも。その点は問題ない。このリジンカンが請け負おう」

お前が請け負う前に、すでに話は決まっているのだと、ウオン・ライは横から口をはさみたくなったが、抑えた。

今の主役は模擬戦の参加者である。後方で待機している者は、黙っている場面だった。

「しかし、生け簀の管理人が死んでは問題だな。……もしもの時は、蘇生させることを考えるべきか？」

「そうしてくれ。いや、俺も弟が志願したときは同じ危惧を抱いたものだが、そちらも同感なら話が早い」

ザリユースの方が答える前に、シャースーリユーが口を出した。失言とも言えぬ言葉だが、被害の拡大を防ぐためなら、これくらいの反撃をする気骨のある男である。

「兄者……」

「言うな。お前は目の前のことに集中しろ」

ザリユースとしても、兄の言葉を否定するわけにもいかぬ。自分だけが特別扱いとは。不本意ではあったが、沈黙を守った。

「ではそうしよう。コキユートス、いいな？」

「……マア、イイダロウ。模擬戦ノ件ハ、最後マデ我々ニ決定権ガ託サレテイル。今後ノ展開ニ差シ障ル可能性モアルナラ、否トハ言ウマ  
イ」

「そこは単純に快諾しておけ。俺が確認を取ったということは、そういうことだぞ？」

「ワカツタ。……ワカツタカラ、ソノ意味アリゲナ、胡散臭イ笑ミハヤメロ」

「いやいや、俺は嬉しいとも。物分かりのいい友人をもって、俺は幸せだ。今は敵でも明日には味方になるのだし、身内同士は仲良くするものだ。そのために出来ることを、俺は惜しむつもりはないからな」

リザードマン兄弟の葛藤など、どうでもいいとばかりに軽い口調。ナザリック側にとって、この程度の場合など取るに足らぬこと。

そもそもこの二人は、すでにザリユースらを殺す算段を付けたうえで、戦いの展開次第では蘇らせることも決めている。よって、このやり取りも戯れの余興でしかなかった。

それはそれとして、事務的な手続きも進めなくては始まらない。お互いに、必要事項を述べて確認する。

「今一度、模擬戦の参加者と、勝敗の判定、その後の流れまで確認しておきたい」

「イイダロウ」

勝敗の判定も戦後の打ち合わせも、すでに最終的な合意を得ていた内容を読み返すだけなので、これは問題なく終わった。いよいよ、開始である。

「ではこれより、模擬戦を行う。準備はよろしいか！」

お互いに距離を取り、合図を待つ。ウォン・ライが戦場の外から、響く様な声で言った。

二呼吸ほどの間を置き、号令。

「……開始ッ！」



開戦の鐘が鳴らされる。声以上に響いたそれは、まさにリザードマンの森を戦場に変え、これから墓場にも変えるであろう。

その始まりの合図が、ここに放たれたのである――。

初撃は順当に、射撃によって行われた。

リザードマンたちは、日常的に狩猟を行う狩人の部隊から選抜し、3人もの射手を加えている。その射撃の勢いは、雨のように――とはいかずとも、まばらな雹の様にスケルトンどもを打ち据えた。

「前進――」

コキユートスの声が響き渡り、兵はゆつくりと前に進んでいく。指示通りに動くことを躰けられたアンデッドどもは、余計なことはしない。歩けと言われれば、応戦の直前まで進み続ける。

前衛の軽装歩兵は、小盾を構えて矢に備えていた。降りそそぐ矢を受け止めるには頼りないが、いくらかは弾けるし、そもそもスケルトンに通常の矢は利きが悪い。

小走りに迫ってくるスケルトンどもを、リザードマンの前衛は受け止めざるを得なかった。そして、骨の弓兵が弓に矢をつがえる。

「射――」

対して、リザードマンたちは8体分の弓兵の射撃を、いちいち防がねばならない。弓矢は共通のものを使っているから、その点では優劣はないのだが、骨と生身との間には比べようもない差が存在する。

スケルトンは、射手として狩人ほどの熟練しているとは言えぬが、無視できるほど弱い射撃でもない。戦士たちは手練れ揃いであるにしても、無傷でしのげるのはザリユースくらいのものだ。

「恐れるな！ 祖霊の加護を信じろ――」

ザリユースの怒号に、リザードマンたちが奮起する。そして応戦。肉薄して殴り合えば、体の強靱さに差がある以上、リザードマンの方に分がある。

だがそれも、一対一でまともに打ち合えば、の話。スケルトンの軽装歩兵が、リザードマンたちと接触する直前、その背後から長槍が伸びてくる――。

「同士討ちを恐れぬか！」

身体の構造上、スケルトンに刺突攻撃は有効打になりにくい。訓練が行き届いていれば、骨の隙間から攻撃を通すことすらできよう。

だからといって、味方を巻き込む恐れのある攻撃を、躊躇わずに繰り出せるとは思わなかったが。

軽装のスケルトンと戦いながら、合間に繰り出される長槍の刺突をかいくぐるのは、なかなか面倒なことである。ザリユースはこれも完璧にしのいだが、他の前衛が少しづつ負傷し、押されていく。

一刺しでは深刻な傷にはならずとも――二度三度と、かすり傷を増やしていけば、体力は削がれ気力も萎えていく。

まだまだ戦意は衰えていないし、リザードマンの射手たちも懸命に撃ち返してくれてはいるが、数の差はいかんともしがたい。

「正面バカリニ、気ヲ取ラレテ良イノカ？」

「いかん！」

外野で見守っているシャースーリユーが、思わず声をあげる。戦いに集中している彼らに、聞こえるわけではない。だが、視界の外から迫るものを確認できたとすれば、同様に声をあげたであろう。

「数は少ないが、犠牲者なしでのぐのは難しいぞ？」

さて、どうする？ と、リジンカンは暢気につぶやいた。軍師役であるはずだが、もう完全に観客気分だった。

「――来るか、ええい！」

ともあれ騎兵突撃である。ザリユースも騎兵を目にした時から、いずれこうした機会はやってくるものと、覚悟していた。絶望的というほどではないが、戦力としては脅威である。早急な対応が求められた。

三体のスケルトン・ライダーが、交戦中のリザードマンたちの横っ腹を食い破ろうと迫りくる。

骨だけとはいえ、突撃の速度と重量は侮れない。防がれずに直撃す

れば、リザードマンの戦士を肉塊にするには充分であつたろう。

「そこは退け！ 俺がやる！」

ザリユースが対応できたのは、単純に余裕のある者が彼だけであつたこと。

実戦経験が豊富であり、戦場においても視界を広く持ち続けていたこと。

なにより、隊長の地位を任された、責任感によるものが大きかった。兄の信認を裏切るわけにはいかぬ、という気負いが、彼に無茶を選択させた。

「氷結爆散」  
アイス・バースト

馬蹄の響きに気づいたりザードマンたちだが、うっとおしい軽装歩兵と、長槍兵の連携に対応しながら、間近に迫るスケルトン・ライダーの面倒までは見られない。

ザリユースは強引に割り込んで、突入する先頭の騎乗兵に全力の一撃を叩き込んだ。

「ほうー！」

その瞬間をとらえたリジンカンは、思わず感嘆の声をあげた。

冷気の奔流が、騎乗兵を襲った。その勢いに飲み込まれ、先頭の一体が馬ごと崩壊。残り二体も勢いを殺されて離脱。結果として突撃は失敗した。

氷結爆散と呼ばれる——その大技は、日に三度しか使えない。しかし、一度で危機を切り抜けたのだから、後二度はしのげる計算になる。

もつとも、ナザリック側はそんな事情など知らない。だから、ザリユース個人の技量か武器の特殊効果ととらえ、警戒を強めた。

「仲間のためにわが身を犠牲にする覚悟がなければ、失敗していたろう。いや、なかなか思い切りがいいな！ ——魅せてくれる」

「……くだらないね。自分の命より大切なものがあるもんか」

観戦していたクレマンティーンが、吐き捨てるように言う。しかし、これにはリジンカンがたしなめた。

わかっていないな、と前置きをして上で言う。

「ああいう姿勢が、人望を生む。身を挺して仲間を守る精神が、群れで

の発言力を強めるものだ。——子供がいれば、そうした資産を相続することもできる。あの人の子供だから、という言葉は、案外説得力があるものさ」

自身の命より優先すべきものがある。そうした姿勢が生むものを、リジンカンに決して軽視しない。自分がそうであるからこそ、なおさら。

ザリユースが家庭を持つことがあれば、後世においても、今日の戦の活躍が意味を持つことになろう。

もつとも、事態は二人の思惑とは全く別に、進んでいく。闘争は激しさを増しながら、終結へと向かっていった。

アイス・バースト  
氷結爆散を使い切ると同時に、最後の騎兵が倒れた。いや、倒させたいというべきか。ザリユースの消耗を狙って、騎兵との一対一を強要する指揮を行ったため、彼も適当にいなすことは出来なかったのだ。

これで、リザードマンたちは騎兵突撃を恐れずに済むようにはなかった。だが、言ってしまうえばそれだけの話で、数の不利はまだ健在。ザリユースらはすっかり劣勢へと追い込まれている。

「何人動ける！ 戦える奴は声を挙げる！」

叫び声をあげた者は、六人。四人はすでに血だまりに伏した。手当どころか、生死の確認すら難しい。

何しろスケルトンの射手はまだ多数が健在であり、こちらは前衛を削って騎兵と十名ばかりの歩兵を落としただけ。攻め続けなければジリ貧であることは明らかだが、このままでは勝利は難しい。

——いや、勝つ必要もないのか。しかし勝つつもりのない戦い方は、惜敗すらつかめないだろう。

ザリユースはそう思う。相手になめられぬだけの力を示し、リザードマンの地位を確かなものにする。ここで攻め手を緩めれば、より悲惨な未来が待っていることだろう。

ナザリックという、見知らぬ勢力に従属させられない程度に、せめてある程度は対等な関係を作るために、ここで命を張るべきなのだ。結果として敗死しようとも、意地を見せられればそれで良いのではな

いか。

「戦え！ 命ある限り！ 我らの戦いに群れの存亡がかかっているぞ！」

戦いの果ての死であれば、いかなる結果であれ、祖霊も納得されるであろう——と、ザリユースは考える。そうでなければ、我らの生にも、死にも、意味などなかったことになる。

無為な死など認められない。フロスト・ペインを握りしめ、スケルトンどもへと立ち向かう。

結論から言えば、コキユートスの采配は、指揮としては拙いものであったといえよう。時折はさまれるリジンカンの助言も、模擬戦においてはそこまで大きな影響は与えなかった。

ザリユースらの奮闘はそれから最後まで続き、傷を負った仲間を支え、倒れた者の盾となりながら、リザードマンは勝利を勝ち取った。スケルトンらは全て砕け散り、残っていたのはザリユースただ一人。それも立っているのがやっとという有様で、全身の傷は即時の治療を要するほどであった。

倒れた戦士たちのうち、重傷者が六名。そして戦死者が三名。

シャースーリユースは仲間の死を確かめると、目を伏せて悲しんだ。長としては、遺族への保証も考えねばならないだろう。

今後のことを考えれば、ウオン・ライとて思うところはある。同情とて、ないとは言えぬ。

——それを含めて、これからの話し合いが大事になる。さて、おおよそは思惑通りだが。

事前の話し合いを参照してみればわかるだろうが、勝者を優遇するような条件は含まれていない。

模擬戦に勝ったからと言って、ナザリック側はそれを理由に手加減してやる義務はないということだ。

——もつとも、あからさまに指摘するつもりはない。勝利は勝利。それは尊重する。尊重した上で、こちらも下風に立つつもりはないのだ。

一種悲壮感さえ漂う現状で、ウオン・ライは冷徹に思考を展開させ

ていた。彼の仕事は、これから始まるといってよい。もつとも、それはリジンカンとて同じことでもあるのだが――。

治癒できるものは治癒し、死んだ者はひとまず遺体を清めて安置している。

葬儀への段取りもつけねばならないが、まずはお互いに反省会を行わねばならぬ。主要な面々――シャースーリユー、コキユートス、リジンカン。そしてウオン・ライの四人が集って、腰を下ろした。

何気にクレマンティーヌも、リジンカンの傍の樹木に体を預けており、話を聞く態勢になっていたのだが――。

「クレマンティーヌ、ちよつと治療の手伝いに行つてやれ。応急処置くらいなら、心得はあるだろう」

「ええ？　本気で？　……どうしてもつて言うんなら、仕方ないけど。貸し一つだからね」

「わかつたわかつた。さ、行つてこい」

クレマンティーヌの返答に苦笑しながら、リジンカンは頭を外交用に切り替えた。他種族である人間が、手当てを行うのだ。異邦人を受け入れるタイミングとしても、こちらのスタンスを知らせるうえでも、これが最善の方法であると考える。

反省会の会場は、地べたに薄い敷物を敷いただけの、粗末な席である。だが、おろそかにはできぬと、ナザリック側の三名は気合を入れている。

ただ一人、リザードマン側の權益を代表するシャースーリユーも、同様の緊張を持っているに違いなかった。

「負傷者は確認しましたが、すぐ周囲の被害状況も確かめたいと思います。よろしいですか？」

「異論はない。始めてくれ」

ウオン・ライの言葉に、シャースーリユーが同意する形で、話は始まった。

流れ矢や斬り合い、踏み荒らした湿原への破壊行為など、環境への被害は最低限であることが確認された。これは、自然に放っておけば回復するであろう。

「指揮した甲斐があった、というものだ。そうだろうか？ コキユートス」

「……マア、ソウダナ。全ク気ニシナカッタ訳デハナイ、カ」

追記として、わざわざ環境への被害まで考えて立ち回っていた、とリジンカンはどうそぶいた。

そこまで気を回していたのか怪しいものだ、とシャースーリユーは指摘したかったが、自分から空気を悪くすることもないだろうと思いい、反論はしなかった。

「環境への被害はともかくとして、ナザリック側の被害は、スケルトンの全滅。ただし、これは考慮しなくて結構です」

「貴方の言葉をそのままに受け取るなら……我らが被害を補填する必要はない、ということだな？」

「もちろん、この件についてリザードマンを非難することはないと、確約いたしましょう。このウォン・ライの名に懸けて」

ウォン・ライは、シャースーリユーを真正面から見据えて答えた。胡坐をかいているが、声にも動作にも偽りは感じられない。

真摯な態度を正しく受け取れるくらいには、シャースーリユーも誠実に向き合っていた。信じよう、と短く答えを返す。

「では、問題はこちら側への損害の補填だな？ どの程度保証してくれるか、改めて明言してほしい」

「まずは、死者に対する盛大な葬儀を約束します。リザードマンの共同墓地に、一回り大きな墓標の用意を。それから、奮闘をたたえる弔辞を石碑に刻んで寄贈いたしましょう」

「——ありがたい。ただ、一つ提案がある」  
「何でしょう」

シャースーリユーが提案するという。ウォン・ライは、拝聴する姿勢で向き合った。

「ザリユースが生き残ったことは、知っているだろう。事前に彼の蘇

生の保証をもらったことも、覚えていると思う」

「はい、確かに」

ザリユースは今、治療を受けている。ウォン・ライが自ら手を施せば、即座の復帰も可能であつたろう。

だが同族による治療を望んだため、ここでの話し合いに参加することは出来なかった。時間はかかるだろうが、それはそれで本人の選択というものだ。

「この際だ。そちらの太っ腹な態度に期待したい。彼が生き残ったことで、蘇生の保証は浮いた形になった。……死者のうち、一人を無償で生き返らせることを承知してもらいたい」

「シャースーリユード殿、それとこれは、まったく別の話では？」

「そちらの好意を無駄にしたくない、という話だ。先ほどの保証の話をあいつが知れば、ザリユースは自分が死ぬべきだったと、そう思い悩むことになるかもしれない。自害するほどではなからうが——今後の業務に支障が出るかもしれない。勝者であり最後まで生き残った、名誉ある戦士への敬意として、どうかお願いしたい」

シャースーリユードは、決死の覚悟でものを言っている。眼光と視線の真剣さで、ウォン・ライにはそれがわかる。

「あいつの命は、並みの戦士の三人分の価値はある。本当は、三人分の蘇生を要求したいところだが、そちらの顔も立てねばならんからな。一人の蘇生で妥協しようじゃないか」

「最後二立ツテイタノハ、ソチラノ代表ダ。勝者ノ要求トイウノデアレバ、考慮ニ値スルガ……」

「まあ、そこまで堅苦しく考えずとも、あちらさんの要望だ。素通しでいいんじゃないか？」

吹っ掛けている自覚は、本人にもあるのだろう。シャースーリユードは自覚していないだろうが、額に脂汗がにじんでいる。

それでもコキユートスとリジンカンは、異論はないらしい。これに対し、ウォン・ライは和やかに、微笑んで返した。

「わかりました。そうしましょう。……人選はそちらが？」

「ああ、その、そうだ。左側の……彼を頼む。彼は、狩猟班の狩人だ



からな。戦士階級の奴らとは違って、無理を言っただけで参加してもらったんだ。せめて蘇生させてやって、報いてやらねば言い訳できない」

シャースーリユーが指さした遺体については、これで処遇が確定した。

逆に言えば、残り二体については、ナザリックが葬儀に関わる形で自由に扱えるわけである。

「ならば、残り二名の葬儀について、話し合います。先ほどの墓標と弔辞は前提の確認です。具体的な手順について、決めておかねばなりません」

「ああ、葬儀は共同で行うんだったな。そちらのスケルトンはどう弔えばいい？」

「残骸はこちらで処分しておきますので、お気になさらず。——もちろんもお疲れでしょうし、お任せください。差しさわりがなければ、おおよその葬儀の段取りも、こちらで済ませておきましょう」

ウォン・ライは、事務的な口調で言った。あまりにもあつさりと言ったので、シャースーリユーの方も流されそうになってしまった。

だが、思い直す。リザードマンは生身の仲間が亡くなった。だがナザリックは使い捨ての駒が壊れただけで、人的被害など皆無というべき。雑な扱いから、それが読み取れる。

ならば、もつとこの理不尽に対して、怒るべきではないのか。

「……ありがたい話だが。いや、それは困るな。遺族を無視して勝手にすすめられては、しこりが残るだろう」

「もちろんです。あくまで、我々はお手伝い。ですから、明日は遺族も立ち合いの上で葬儀を行いましょう。ただし、今夜は遺体を我々にお預けいただきたい」

「それはあまりにも、無体な扱いではないか。我らの反感を買いたいわけではあるまい」

「ご懸念はごもつとも。ただ、以前より我々の文化には、理解を示していただけたはずです」

「どうということだ、そんな覚えはない——と、シャースーリユーは抗議した。」

ウォン・ライは、厳かな表情のまま、穏やかに指摘する。

『死者がいた場合は葬儀を行う。これはナザリック側も協力して、互いを尊重した形で行う』——事前に確認したことです」

「つまりは、我々の意見も尊重してくれるのだろうか？ ならば」

「はい。お互いに尊重をする。……先ほど、私はシャースーリユー殿の立場を鑑みて、一步譲りました。一つ譲った以上は、一つ譲ってもらう。そうしてこそ、対等の関係、尊重し合う関係が生まれるのではないですか？」

シャースーリユーは、言葉に詰まった。言われてみればそうである。しかし、と食い下がることは出来ようが、この老獪な紳士にそこまで強く出る気にはなれなかった。

譲り合うという言葉は、思ったより大きなものだ。正面から否定するのが、はばかられるほどに。——これを覆しては、どこでしっぺ返しが来るかわからないのだから。

「誤解なきよう申し上げますが、遺体は一晩預かるだけです。改めて体を清めたのち、お返しすることを約束します」

そこで、ウォン・ライが一步引く。丁重に扱うから許してほしいと言われれば、拒むのは難しく思えた。

「……何のために、我らの仲間の遺体を持つていくんだ？ あなた方にとつて、価値あるものではないだろう」

「価値のあるものです。これは、明言しておきます。リザードマンの遺体、それも戦って死んだ『勇者の遺体』は貴重です」

リザードマンの戦士らは、普通の人間と比べて肉体的に強靱であり、『色々な意味』で価値がありそうだった。

ウォン・ライはまったくの本心から、彼らの存在が重要であると主張した。粗略には扱わぬと、念を押して言う。

「我らの霊廟に招待し、その魂と肉体に敬意を払い、一夜だけ『歓待』するので。その価値があると、私は思います。立派に戦った強者を丁重に扱い、安らぎの死を約束する。それが、ナザリックの流儀にございます」

「……そうか。敬意を表してくれるか。あなた方が遺体を連れて行く

のは、そうするためだというのなら、わかった。理解を示そう。お互いに譲り合つてこそその友好だ。そうだな？」

「はい。まさにそうでしょう」

シャースーリユーは、納得した。

ウオン・ライは、同意を得た。

リザードマンは、戦死者二人の遺体を一晚だけ、ナザリックに預けることになる。

その結果について、彼らから追求されることはないだろう。ウオン・ライはそれを許すほど甘くはないし、『歓待役』を務めることになつているデミウルゴスも、行為を悟らせるほど愚かではない。

「親父殿」

「リジンカン、後にしてくれ」

ウオン・ライは、リジンカンが何を言うかはわかつていた。彼の皮肉に癒されている暇はない。一言で切り捨てて、シャースーリユーと向かい合う。

……ウオン・ライは、確かに敬意を表すといったし、丁重に扱うとも言つた。だが、決して遺体に触れないとは言っていないし、おぞましい実験に使わない、とも言っていない。

言葉の意味は一つしかないとしても、解釈の仕方は色々ある。尊敬の気持ちをもつて遺体を弄ぶことも、残酷な行為のために丁重に取り扱うことも、決して矛盾する概念ではないのだ。

——そのはずだと、ウオン・ライは心の中で繰り返し思い直した。そうせねばならぬくらいには、良心の呵責を感じているらしい。何をいまさら、と割り切れば済む話であると言うのに。

「……ともあれ、共同声明の協議については、一晚置いてからのことにいたしました。休息の時間も必要ですし、何より——本日は、立派に戦つたりザードマンたちに敬意を表すべき日です。その聖体を一晚預かるのですから、おろそかなことは出来ません。あなた方の部族では、名誉ある死者をどの様に祭るのか？ 参考までに、お聞かせ願えませんか」

「ああ、それなら……」

問われるまま、シャーサーリユーは真摯に答えた。

ウォン・ライは最後まで、紳士らしい態度を崩さなかった。リザードマンの文化を尊重し、こちらの流儀に合わせる。

利己を偽善で覆い隠し、名分を盾に実利を得たといつてよいのだが——その内情の浅ましさに、純朴なりザードマンたちが気づくことはない。お互いのためにも、それが最善であることは明らかであった。

リザードマンの遺体は、ナザリックに運び込まれた後、デミウルゴスに託された。

極めて丁重に扱うよう、リジンカンから申し渡したから、問題はないだろう。コキュートスが自ずから、直々に運び込んだのだから、意図は汲んでくれるはずだ。

——そうでなくとも、後で帳尻は合わせる。些事ではあるが、だからこそ全力を尽くすべきだろう。

ウォン・ライもまた、ナザリックへと帰還していた。シャーサーリユーとの本格的な協議は、明日に行われる。

その場には、ナザリックの最高権力者として、モモンガにも出席してもらおうのだ。

「ええ……緊張するんですけど」

「魔王RPを継続させれば、どうにでもなろうよ。守護者たちの前で出来たのだから、リザードマン相手にできない道理はない、と。私は思うがね」

モモンガとウォン・ライは、明日のための打ち合わせに入っていた。協議の流れについては、ウォン・ライが主導するのでモモンガも不安はない。

だが、初めての外交交渉である。そんなものは、いち営業マンが経験できることではない。まったくの、未知の領域であった。

「不安かね」

「いや、だって、やったことないし。と言うか、一般人に縁遠いことだと思うし。……外交官ってどんな仕事するんだよ。知らないよ、そん

なの……」

ついにその時が来る、と思えば緊張も当然。深刻というほどではないにしろ、口調からも動揺しているのが見て取れる。

崩れた口調からもわかるが、モモンガ本人は、自信がないのだろう。だがウオン・ライの目から見れば、それは取り越し苦労であろうと思う。

モモンガはこれで案外、アドリブの上手な男なのである。ユグドラシル時代においても、特に重要な場面で、選択を誤ることはほとんどなかった。

ただ人がいいだけの人物が、アインズ・ウール・ゴウンの頂点に立てるわけがないのだ。

「舞台はこちらで整えておく。後のフォロワーも私がしよう。最初は強く当たって、後は流れに身を任せれば、上手くいくとも」

「ありがたい話だが……いや、そうだな。ナザリックの代表者として、顔を出さないわけにはいかんし、何とか演技を続けていくしかないか」

演技、虚栄、評する言葉は——色々あるだろう。

だが、ウオン・ライはこうも思うのだ。モモンガにとって、それが偽りの姿であったとしても。誰かにとっては、人生を左右する偶像にすらなりえるのだと。

そこまでの域に達したロールプレイであれば、演じる本人に称賛の光が当たったとしても、何の不思議があるだろう？ 単純な言葉で、ウオン・ライはモモンガを評した。

「モモンガ殿、演ずることが悪いとは言わぬ。だが、貴方はもつと、自分の得意分野で攻めるべきではないか」

「……わからないな。なんだろうか、それは」

「本当の意味で、誠実であること、だよ。相互に利益を計れる相手には便宜を図り、理解をし合おうと努力する相手には、寛容になる。——鉄火場での度胸比べにおいて、誠実を第一とするノーガード戦法は、案外効果的に働くことも多いものだ」

「ええ……？ ちよつと疑わしいんだが。いやそもそも、鉄火場って

何？」

「博打を打つ場所、くらいの意味かな。まあ、ともあれ。日本の営業マンの質の高さは、わが国にも轟いているとも。それくらいは、アドリブで何とかなる範囲ではないかな」

「博打上手な営業マンとか、たぶん希少種だと思っただけでも。……いや、別に否定はしないが」

「なに、私もついているのだ。恥など、かかせんよ。私の全霊をもつて、モモンガ殿の素晴らしさを説いて差し上げよう」

気恥ずかしいのでやめてくれ、とモモンガは言ったが、ウオン・ライは笑うばかりだった。さてこれは冗談なのか、本気なのか。

それで絆されてしまうのだから、どうしようもない。付き合いの長さが、心地よい諦めを生む。

それならそれで、いいだろう。素直に振る舞えばいいというなら、難しく考えることもない。

「誠実であること、か。そうだな。リザードマンは、犠牲を出してまで、我らに好意を示したといえる。こちらの流儀に合わせてくれたのだし、今度はこちらが返す番だと見るべきか」

リザードマンの遺体をナザリックに持ち込んだことで、報酬は先払いでもらっているようなもの。

モモンガは、弱者を踏みつけにして悦に浸るような、悪い趣味は持っていない。会見の場で、いくらかのサービスをやるくらいは、かまわないだろう。

「具体的な、協議の流れは決まっているのか？」

「あえて、事前には決めていない。こちらが主導権を握る形で進めたかったから、リザードマンの族長殿には、単に協議を行う、としか伝えておらんよ。こちらとしては——モモンガ殿の登場で、度肝を抜いてやる。そこから、なるべく精神面を圧倒したまま、共同声明の草案作りまで進めておきたい」

「それはいいな。初見で一発、連中を驚かしてやるなら、演出にも凝った方がいいかな」

「やり過ぎてはいけませんが、相手に脅威を感じさせるくらいには、派手

にやってやりたいものだ。——モモンガ殿、登場までのおぜん立ては任せてくれ」

それからの話し合いは、とんとん拍子に進んだ。モモンガは外交など知らぬが、場面さえ限定してくれば、有効な意見くらいは語れる。

そうやって、自分も貢献できているのだと、確信を持てるだけの仕事が出来ていた。モモンガに新たな仕事を覚えさせた後、達成感と充実感を味合わせることに。

この度の外交において、ウォン・ライがもつとも重視しているのは、この部分であった。いずれ訪れる未来の光景を、彼は想像せずにはいられなかったのである——。

リザードマンの遺体は二つ。それを霊廟に祭るという口実で、一晩だけ借り受けている。

つまり、一晩で一定の成果を得ねばならないわけだが、デミウルゴスはそれを可能とするだけの能力は持っていた。

「蘇生におけるレベルダウン等は、人間と変わりなし。皮をはぐ際の反応から言って、痛覚への耐性はやや上という程度。体力といい精神力といい——並みの人間と比べれば、少しは上質と言って良いかもしれませんが……」

ただし、レベル的な意味で言うならば、誤差の範囲内である。カンスト勢にとつては『変わらない』とさえ言い切れるほどだ。

そういう意味でも、アンデッド化は人間とさほど変わらぬ出来になった。つまり、現状ではリザードマンどもを『資源として』使い潰すほどの利点はない。

少なくとも、皆殺してアンデッド化させる必要もなければ、養殖して皮をはぐ家畜とするほどの価値もあまりない。

低級のスクロール用の皮ならば、人間でも構わないのである。デミウルゴスは、ニグンら法国の捕虜から、それを得ていた。多量ではないが、彼としてはきわめて穏便な形で。

「睡眠状態にして、意識のないうちに皮をはぐことは出来ますし。再利用のための治療の手間を考慮すれば、そちらの方が効率はいい。結果、人間とリザードマンとの間で明確な差異は見受けられない、と」  
「がっかりといえば、がっかりな結果である。デミウルゴスは、そこまで劇的な結果を求めていたわけではないが、リザードマンと人間との間には、それなりに興味深い違いが現れるものと思っていたのだ。  
なのに当てが外れたわけだから、愚痴もこぼしたくなる。」

「なかなか、上手くないかないものです。いや、そもそも世界が我々の都合よく作られている訳がない。資源は有限なのだから、出来る限り有効に活用しなくてはいいじゃないか——」

「せめて、娯楽として使い潰せるような、価値あるモルモットがあればいいものを。そのような、訳体もない想いに支配されそうになったところで、彼の元に友人が訪れる。」

「よう、デミウルゴス。忙しい所をすまん」

「リジンカン。……いや、一通り実験は済ませているからね。後は一晩で筆れるだけ筆るよう、部下に作業を任せている段階なので、私自身はさほど忙しくないとも」

「現れたのは、リジンカンだった。いつものように、酒瓶を携えている。」

「余裕があるとはいえ、仕事中的なのですが」

「お前、仕事してない時間帯なんて、ないだろう。暇を見つけては、何かしらやっているくせに。——まあ、一杯やれ。これで酔うほど弱くもないだろう」

「オーバーワーク気味なんだから、ちよつとした休憩と思えばいいと、リジンカンは付け加えるように言った。」

「ならば仕方がない、とばかりにデミウルゴスも付き合った。そうする程度には、彼に友情を感じていたから。」

「で、どうだ。リザードマンとやらは、資源として有用か？」

「一杯だけ飲み干してから、デミウルゴスは答えた。この悪魔にとっては、蒸留酒でもジュースと変わらない。それでもリラックスの効果はあるのか、舌の滑りも良くなる。」



「人間と、同程度には。差異はありますが、我々からしてみれば誤差と言ってもいい。もう少し、質の良い素材が欲しいものだが」

リジンカンもデミウルゴスも、必要とあらば人道的な倫理観を無視できる手合いだ。だから、平然と他者を食い物にすることもできる。

両者の間に差があるとすれば、リジンカンの方に若干、ウォン・ライの影響がみられることだろう。

デミウルゴスは、リザードマンの資源としての有用性について語った。リジンカンはうなずきながら聞いていたが、あまりに感情を廃したそれは、義侠心を持つこの男にとって、いささか聞き逃せないものである。

「まあまあ使えるなら、悪くはないだろうよ。現状、この世界については知らないことの方が多い。足るを知る、というのも大事だぞ?」

「それはそうでしょうが、せつかくの機会。限界まで酷使して、利益を得るべきではないかね?」

「限度があるといっている。形としては、リザードマンの彼らは一時的に預かっているものだ。清めて元の場所に返さねばならないのだから、あまり無体なマネはするべきでないと思うぞ?」

リジンカンは、寛容さを求めた。あまりやりすぎると、俺の不興を買うぞ? と言外に表しながら。

「しかし、現状の改善を進めない理由にはなりませんね。より良い結果を求めるのは、当然のことでは?」

「もちろん。——だが、その上で言うがね。リザードマンに相応の価値があるのなら、相応の扱いと言うものがある。具体的には、これらの待遇についてだな。今後を見据えているデミウルゴス殿は、いかにお考えかな?」

茶化すように言うリジンカンに対し、デミウルゴスは呆れたように返す。

「情けをかけてほしいなら、正直にそう言ってくれないものかね」

「察しのいい友人を持って、俺は本当に幸福だ。そこまでわかっているなら、俺の気持ちも理解してくれるだろう? いや、外交を主導しているのは親父殿だが、我々だからこぞできるアプローチもある。モ

モンガ様も、頭ごなしに否定はなさらんよ」

リザードマンに対して、慈悲を掛けろとリジンカンは言いたいのだろう。そこに意味を見出すことは、デミウルゴスとて不可能ではない。

具体的にどうするか、そこまでリジンカンは口を突っ込むまいが、それは彼なりの期待の表れだった。つまり、デミウルゴスならば有益な提言をして、相互互恵の関係に持つていけるだろうと思っっているのだ。

「……まったく、どうして。私と君は友人に成れたのだろうね。趣味も嗜好も、ひどく乖離しているというのに」

「だから、いいんじゃないか。皆が皆同じような考えではつまらんだろう。違いがあるからこそ興味深いし、自分がないものを相手に求める。——深謀遠慮にして、悪魔的な愉悦を好みながらも、過ぎるほどには求めない。自身の感情を完全に統御し、身内に配慮する思いやりを忘れぬ。そんなお前が、俺は好きだよ」

俺には、出来ぬことばかりだからな——と、リジンカンは笑いながら言った。

リジンカンは、デミウルゴスにとって奇妙な友人であった。理解し合える間柄であるが、わかり難い一面も偶に見せる。

それでいて決して不快ではない……どころか、応対してみれば、ある種の心地よささえ感じてしまうのである。

何を話しても、何を伝えても、リジンカンはありのままに肯定するだろう。耳に痛いことを言っても、感情をそのままにぶつけても、彼は笑って受け入れるに違いない。

そうした確信を得られる間柄と言うものは、実に貴重なものだ。デミウルゴスは、リジンカンからの好意に対しては、素直に好意で返すことにしている。

「友人として、不足のない相手だと、私も認めているよ。——必要なデータは取れたから、もう一人くらいは蘇生して帰すのも手だ。その場合、モンガ様が直に褒賞する形にするのがいいと思うね。遺族の前で、直々に復活させてくださるなら、強烈な印象を与えられるだろ

う」

「リザードマン達の奮戦に敬意を表して、さらに一名の蘇生を許す、という形か。——すると、相手方の損害は死者一名となるわけだ。その唯一の英霊殿には、格別の配慮が必要になるかな？」

「実際に外交の折衝を行っている、ウオン・ライ様から、特別の弔辞なり遺族への追加補償なりを行う形にすれば、余計にこじれることもないだろうね。——あのお方の外交手腕には、学ぶべきことが多くある。私とて外交の場で下手を打つ気はありませんが、リザードマンに對して親しみを持たれる自信など、まったくないのでね」

デミウルゴスは外見にしろ態度にしろ、いかに下手に出ても、感じられる知性が鋭すぎて警戒を招きやすい。

弱者に情けをかける、という行為に慣れていない部分もあるだろう。リジンカンの目から見ても、デミウルゴスは刺激の強い存在として映ると思う。

「自覚があるだけでも上々だ。——今からでも、提言するには間に合うだろうとも」

「作業を切り上げるにも、いい頃合いだね。まったく、君と話をしていると、存外に実入りも多いことに気付かされる。……狙ってやっているのだとしたら、大したものだよ」

リザードマンから得られる情報も、出尽くす頃合いだろう。復活と殺害をこれ以上繰り返したところで、趣味以上の意味はない。それくらいには、仕事をしたという自負もある。

「ところで、最近加えたとかいう、貴方の玩具ですが」

「玩具で遊ぶほど子供ではないし、そんなものをわざわざ懐に入れたりしないさ」

「ああ、これは失礼。クレマンティーヌとかいう、人間のことだよ」

穏やかな会話の中で、デミウルゴスは悪戯心がわいてくるのを感じた。最近のこの友人の振る舞いは自由に過ぎる。ここらで一つ、指摘するのも悪くないと思ったのだ。

「彼女がどうした」

「いえ、女性の趣味が悪いというか、何というか。貴方の性癖がわから

なくなつたよ。高嶺の花に焦がれるのは、もうやめたので？」

「男の悲しさだ。美人にはどうしても弱くなる。……あまり追及してくれるなよ？　俺自身、女に慣れてるわけじゃないんだ」

「それはそれは、大変なことだ。追及などしませんとも、ええ」

「……妙にひつかる物言いだが、まあいい。クレマンティーヌの奴、ちよつとした雑用を押し付けた貸しに、アレコレ無茶を言つてくれるから困る。少々考えさせると、保留にしてもらつてるところだ」

困つたような顔で言いながらも、どこか楽しそうにも見える。リジンカンがこの困難を楽しんでいるのは、明らかだった。

「まあ、別にいいのですが。——仕事の邪魔にならない程度に収めるように」

「もちろんだ。俺が親父殿の仕事を邪魔するわけがないだろう」

リジンカンにも春が来たか、とデミウルゴスは思う。

素直に認めはしまいが、クレマンティーヌからアプローチがあれば、あつさり陥落するであろうことも、この悪魔には予測できた。

——叶わぬ恋を追求させるよりは、身近なところで収めてほしいものだよ。

リジンカンのために、デミウルゴスはそう願う。どのような形であれ、彼自身の幸福を願つてやりたい。

そう思うくらいには、この悪魔も友としての情を抱いていたのである。

外交の場は形式が重要である。特に、互いの最高責任者が話し合う場においては。

ナザリックとリザードマンの友好樹立のための協議、その会場にいるのはウォン・ライとシャースーリユーの二人だけであった。

リザードマンの長老たちなど、立ち会いたいなら許可するとウォン・ライは申し出ていたが、シャースーリユーはこれをあえて拒否した。未知の相手に対し、非礼を働かないとも限らない。お互いのため

にも、正規の参加者は少ない方がいい、と。ただ、遠巻きに協議を見守るくらいは許してほしいとも、彼は言った。

——ならば、こちら主君の登場に際し、いくらかの演出は許容してもらいたい。

ウオン・ライの主張を、シャースーリユーは否定できなかった。

ナザリック側にも面目と言うものがある。模擬戦の勝敗は別として、どちらが本物の強者であるのか、お互いに理解していたからだ。所詮リザードマンなど、コキュートス一人だけでも過剰戦力なのである。

会場自体は、リザードマンの集落から少し離れたところにある、あばら家だ。この日のために突貫工事で作られたそれは、はた目にもみすぼらしく、人間の建築物とは比べようもないほどである。

だが、ウオン・ライはもとより、モモンガもそれを良しとした。かえって良いデモンストレーションになる、と。

「これより、ナザリックの主にして我が主君、モモンガ殿がお出でになられる。シャースーリユー殿、心の準備はよろしいか」

「……引き延ばしても仕方があるまい。いつでもいい」

その当日、ウオン・ライが手はずを整え、演出の舞台を作り上げたのち、モモンガが現れた際には、リザードマンたちは大いに驚いた。

遠目からうかがっていた者たちまで、一人残らず寒気を覚えたというのだから、側仕えとして、面識のあるコキュートスとリジンカンが居なければ、恐慌すら来したかもしれない。

ただの驚愕ではなく、恐怖を伴った支配者の登場である。モモンガの威容は、たとえそれ以前の演出がなかったとしても、相応の風格をリザードマンらに示したであろう。

「ナザリックの支配者、モモンガである」

「リザードマンの族長、シャースーリユーだ。——この度は、このようなあばら家まで来ていただいたこと、感謝する」

シャースーリユーは、レベル差を肌で感じ取っていた。モモンガの装備が、どれほど隔絶したものかはわからない。だがアンデッドとしての格が、スケルトンなどとは桁が違うことだけはわかる。

生存本能が、こいつは危険だ、と知らせてやまない。だが、話が通じる相手であるはずだ。そうでなければ、単独で蹂躪して終わりであろうから。

「なに、気にすることはない。これは友好樹立のための、協議の場だ。くだらんおべんちやら、無駄に豪華な施設など、私にとつては何ほどの価値もない。それより——これから我らと友好を結ぶ相手が、そうした虚飾を持たぬ文化であるのは、幸いだとさえ思うぞ」

「……そ、そうか。なら、お互いに話し合う障害は——ない、と。そう考えても良いのだな」

守護者たちからすれば、このようなみすばらしい場所に、モモンガを呼び出すなど許されぬ——と、氣勢をあげかねない。

しかし彼自身にとつては、肩肘を張らずにいられる分、むしろありがたくさえあった。

「……ふむ」

だが待てよ？ とモモンガは思案した。模擬戦を提案したのも、結果として敗北したのもこちらである。

敗戦の責任者たるコキュートスとリジンカンは、傍にいる。今さら責めても致し方ないが、ここで主である己が、圧倒的弱者であるリザードマンに膝を屈しては、面倒な感情を抱かないだろうか。少しだけ、心配になった。

まあ後で問題になってもウオン・ライが何とかするだろう、と思うことにした。責任者なのだから、それくらいの仕事は任せていいはずである。

「何か？」

「いや、何でもない。せっかくの機会なのだ。ざっくばらんに、本音で語り合おうじゃないか」

共同声明のための場だと、モモンガも聞いてはいたが、どのように切り出していくかに話を進めればいいのか。ただの営業マンにはその心得がない。

だから自然、ウオン・ライがその役目を務めることになる。

「シャースーリュー殿、この協議による共同声明で、ナザリツクとり

ザードマンの部族との間で、正式な国交が成立することになります。まずはナザリックからの物資と技術の提供を、リザードマンの方々に受け入れていただき、以後は両国間での交易が可能となること。それから、こちらにナザリックの人員が常駐する予定ですが、この認識に問題はありますか？」

ウオン・ライがそういうと、シャースーリユーはうなずいた。そのうえで、物を申す。

「ない。——が、あらためて聞きたい。この村にそこまで重要な宝があるとは思えぬ。投資……というのだったか？ 施しを受け入れることは出来るが、やはり交易するほどの物品の余裕は、こちらにはないぞ」

「その点に関してですが、今はなくとも後程有用になる、と考えております。余裕も作り出せばいいだけのこと。——その認識を問題とするなら、ここで我々が話し合うべきは、リザードマンと言う部族の未来の展望について。それが主になりますな」

シャースーリユーからの言葉を、ウオン・ライは受け止めたうえで、都合のいい展開に誘導した。

交易と一口に言っても、そこに含まれる分野は幅広い。今は対等を装っても、将来的には従属させることが決まっているのだ。その本心をおくびにも出さず、ウオン・ライは良かれと思つて、話を進めた。「モモンガ殿、私はナザリックの外交官として、対外的には貴方から権限を委譲され、あらゆる決定を任される立場にあります。それを、この場で確認させていただきたい」

「もちろんだ、ウオン・ライ。全て任せる」

これはどちらかと言えば、リザードマンに対するアピールと言えている。見た目にも恐ろしいアンデッドが、穏やかな紳士にすべてを任せられている。そうした姿を強調することで、相手に安心感を与えるのだ。

「では、シャースーリユー殿。実務的な話に入りましょう」

「……お手柔らかに頼む」

それからは、ウオン・ライの独壇場となる。モモンガはそれを見守りつつ、発言を求められたときに思うことを述べるだけでよい。

たとえば、ウオン・ライはまず、こう切り出した。

「リザードマンと言う種族の強さ、勇気、あるいは文化とでも呼ぶべきものを、我々は理解し——なおも理解し続けようと努力しております。また、それゆえにより広い世界に乗り出して、我々とともに繁栄を享受するべきと思います」

「広い世界？ ……そのような問題なのか？」

「今回協議する共同声明は、これから我々が関わっていくであろう外国に対しても、おおよげに公開することになります。国家間の共同声明とは、隠すべきことではありません。——恥じるべきことでない以上、公開して悪いことはありませんまい？」

「……まあ、見られたからどうだ、と言われればそれまでだが」

シャーソーリユーは、これから自分たちが他種族と積極的に関わっていくとは思っていない。

たとえ物好きな人間が彼の集落を訪れても、わざわざこんな小さな集落で、文章など探したりしないだろうし、読んだところで問題視することもないだろうと思っている。

「我々には主要な目的が、二つあります。第一にお互いの勢力の未来のために、互恵関係を築くこと。第二にそれを他勢力に——他国に対して、我々の外交的な姿勢と立場を表明することです。そのための下準備として、こうして話し合い、共同声明を発表する必要があると考えます」

「俺にとつては、初めての経験だ。人間はどうかしらんが、リザードマンは別の部族に対して、そこまで持つて回ったやり方はせん」

シャーソーリユーとて、対話は望むところである。自身の部族はもとより、他部族について、これから接するであろう他種族への対応について、彼らは思う様話し合った。

リザードマンの未来についても、納得させるだけの明るい将来を説いたつもりである。いかに実現させるかも、詳細に。

モモンガは適当に相槌を打っただけだったが、それで十分に機能した。ウオン・ライがわかりやすく、肯定だけすればいい場面で話を振ってくれたからである。



「とりあえず、これでまとまったか」

「はい。リザードマンとナザリックの共同声明は、これで完成したことになる。以後、他勢力と接する場合、ナザリックはもちろんですが、リザードマンの部族もこれの開示要求を拒否できません。了承願えますか？」

「ああ、それでいい。約束は守る」

シャーソーリユールが、最後にそう言って快諾した。外交の仕事は、これで完了したことになるが、ウォン・ライはここでさらに一手を講じた。

「では、後日書面にして、お送りいたします。——と、共同声明の話はこれまでに致しましょう。先日の遺体をすぐにお返しして、埋葬したいと思いますが、いかがですか。遺族との別れの時間を置いてから、葬儀にかかりたいと思いますが……」

「そうだな。——そうしよう。弔辞は、俺も読む。身内だからこそ、響く言葉もあるからな」

葬儀まで完了して、ようやくこの度の仕事は一区切りがつく。リザードマンは、ナザリックとの友好を、もはや拒むことは出来ぬ。

これから時間をかけて、ゆっくりと同化させていく。その作業を想うと、ウォン・ライは気持ち晴れやかになった。

——偽善、欺瞞、言い方は色々あるだろう。それでも交流を通じて育まれるものは、決して偽りではないはずだ。

そんな彼の気持ちを慮れるのは、リジンカンただ一人だけだった。幸か不幸かと言えば、それは確かに幸福な事であつたらう。

「未来志向、なんて都合のいい言葉がある。気に病む暇があるなら、建設的な行動を起こした方が、よっぽどいい。だろ？ 親父殿」

「そうだな、リジンカン。……まさに、その通りだ」

気持ちを通じ合う。親子の間でなされるのであれば、これほど尊いことはない。それは、誰しみが、認めるところであらう——。

## 第十八章 王国への楔

ウオン・ライらが外交に精を出していた頃、セバスらのチームもまた活動していた。

王国内での行動中、何かしらの厄介に巻き込まれたらしい。その事実を聞いた時、モモンガは樂觀的だった。

——セバスがナザリックを見限るなど、ありえないことだ。

裏切り、反逆。そうした悪徳とは無縁な男である。創造主との相似点を見つければ見つけるほど、セバスに対する疑いなど消えていく。

女性一人拾ったからと言って、何だというのか。詳細を聞いてみれば、どうと言うこともない話である……と、モモンガは思ったかっただが。

——済んだこととは言え、守護者たちの前で演出させられたのは、どうもな。

助けた女性を殺させるような、質の悪い演出をさせたのは、流石に悪いと思う。本気で殺させるつもりがなかったのは確かだが、セバスの心情を考えればどうにもバツが悪い気がした。

守護者たちが納得するために。同僚の間で疑いの感情を蔓延させないために——と、名分は確かにあるのだが、感情的には罪悪感を覚えてしまう。

——いい加減、外部の人間に対して寛容になるように、何かしらの対策をした方がいいのか。でも、実際信用できるかどうかは別問題だし。……やりすぎないように言うだけでも、意味はあるのかな。

ツアレニーニヤ、という少女を抱え込むこと自体は、何ら問題ない。とモモンガは考えていた。その扱いについては、一般メイドと同等の地位で良からうが、慣れるまでは配慮がいるかもしれぬ。厄介ごとには違いないが、この程度は飲み込んでみせねば上司として格好がつかないとも思う。

不利益をナザリックに持ち込む可能性もないが、その時に至ってから考えても遅くはないだろう。だがそうでない限りは、無力

な人間を一人かくまうくらい、容易いことである。

——それはそれとして、モモンとして冒険者家業にも、力を入れていきたいところだ。世界を知る上でも、自分の目で確かめるべきことは、多くある。

レクリエーションとして、単純に楽しい、というのものもあるが。

ナザリックの中で指示を飛ばすだけでは、致命的な齟齬が生まれかねない。実地で現場を知ることこそが、モモンガには重要に思えた。

自身の才覚が、凡庸であると理解しているからこそその結論である。椅子に座りながら、情報だけで全てを正しく推理できる知能があれば、別なのだろう。だが己はそこまで頭が良くはないし、そうなりたいとも思わない。

自ら活動し、実感を得てこそその人生ではないのか。書の知識だけではなく、生の体験から生きた知識を得ればこそ、現実的な対策を練れるものである。

理想と現実が対立したとき、現実の方が間違っているのだと。……そのような、愚かな勘違いはしたくないのだ。

——別段、仕事を急ぐべき理由もない。ゆっくりやっていけばいい。問題があれば、デミウルゴスなりウォン・ライなりが指摘してくれるだろうしな。

モモンガは、現時点でも割とお気楽な思考を維持することが出来ていた。

突発的な事故、事件は起きるかもしれないが、自分たちなら何とかやっていけるといえるという確信があり、皆の助けがあればどうにかなるだろうという楽観もあつた。

後々の出来事を勘案すれば、まさにモモンガは幸運の星の元に生まれていたと言えるだろう。

環境によつて精神的な余裕を持つこともそうだが、周囲の人間関係に恵まれるのは、実に重要なことであるのだから。

モモンガはモモンとして活動するように、ウォン・ライも色々な役割を己に課している。そして、そんな彼がデミウルゴスと行動するのは、比較的珍しいことであろう。

少なくとも、この世界にやってきてからは、初めてのことと言ってよい。その発端を考えれば、過剰戦力ではないかとデミウルゴスは主張したが――。

「王国の王女とやら――ラナー、と言ったか。彼女に興味があったのは、お前だけではないということだよ」

セバスからの情報を検討するうちに、王国には風変わりな王女がおり、注目に値する実績も有していることが分かった。

彼女の提言により行われた施策は、実際に有効であったことが示されている。その事実を突き止めたデミウルゴスは、これは利用に値する駒だと考えていた。

ウォン・ライがこれを知りえたのは、セバスからの情報の精査に、彼自身も加わっていたからである。

他者に任せることを厭うわけではないが、ウォン・ライは己にはあらゆる責務があると自任している。ナザリックの活動の全てについて、彼は一つ残らず把握しておきたかったのだ。

実際デミウルゴス主導の計画については、あらゆる部分で、はぐらかすことを許さなかった。何より、モモンガへの報告を怠ってよい問題ではないと判断したからだ。

「しかし……ウォン・ライ様は、リザードマンとの件でも充分に働かれました。カルネ村についてもよく気にかけておりますし、我々ナザリックの者たちに対しても、日々細々と声を掛けてくださいます。時には、一対一で語り合って緊張やストレスを緩和してください。この上、さらなる仕事を積み重ねられては、心配にもなろうと言うものです。我々に委任する仕事を増やしてください、よろしいのではありませんか？」

他でもないデミウルゴスの、奉仕を義務にして幸福とする者の言葉

である。無下にしたくはないが、容易にうなずける言葉でもなかった。

ウォン・ライは、ナザリツクの内外を問わず、良く人と会い、話をしている。それ自身が仕事ではないかと思われるほど、時間を費やしてもいた。

守護者のもとより、知性あるNPCとは制限を設けずに一通り語り合っていた。時間の合間を上手に使って、その一人一人に声を掛ける。仕事ぶりを褒め、忠誠心を称賛し、心の不安を丁寧に取り除いていく。

彼にとっては日常的な作業に過ぎないが、対するNPC達にとっては恐れ多いことでもある。だが、ウォン・ライは決して妥協しなかった。時間に余裕がある（彼にとって二十四時間勤務は苦行に入らない）、今だからこそ出来ることだから。

——幸福であれ。私たちは、そう願う。そのために必要な事であれば、我々は何でもしよう。ただの言葉で済むのなら、一つの行動で済むのなら、何でそれを躊躇しようか。

お前たちは、きちんと私たちに必要とされているのだ——と。被造物が、造物主にそのような言葉を掛けられて、安心しない者がいるだろうか。

しかし、そこまでの慈悲を主人から掛けられてしまったては、費やす労力の負担を案ずるのも、奉仕する種族にとっては必然である。そうしたデミウルゴスの懸念を払うかのように、ウォン・ライは笑顔で答えた。

「大丈夫だ。世の中には、仕事を与えれば与えた分だけ、精神的に充実していく者もいる。私がそうだし、お前もそうだろう。——モモンガ殿も、ある意味ではこれに含まれる。だから、心配などしなくていいのだよ。別段、お前たちが頼りないとか、任せられないとか言う訳ではない。私がそうしたいから、そうしているというだけなのだ」

「……失礼いたしました。ならば、これ以上は申しません。話を戻しましょうか」

「そうしてくれ。遠慮されるよりは甘えられたいし、頼りにされたい

ものだ。私も、モモンガ殿も、常にそう思っている」

ウオン・ライの発言である。ならば、仕える者として、その発言をそのままに受け止めるだけだ。

甘え方については、デミウルゴスやアルベドのような智者であるほど、ひねくれた形で表れてしまうが——これは、愛嬌として受け止めねばなるまい。

「話を戻すとして——そうだな。王女の件だが、未婚の女性の元に男二人で訪問するというのは、あまりに不躰だ。威圧感を過剰に与えてしまうし、王国の文化には詳しくないが、嫁入り前の娘には個人的にも配慮がいると思う。慎重さが求められる対話でもあるのだ。……形式を、整える必要があるだろう。デミウルゴスはどう思う?」

そもそも非公式な訪問自体が無礼——といえば、それまでだが。それでも、最低限の線は守るべきだと、ウオン・ライは考えていた。

「はい。……そうですね。では、私はあえて席を外しましょう。智者が必要であるならば、アルベドが最も適任であろうかと思えますが——。いえ、ウオン・ライ様が見極めるために、女手が必要だというのであれば、誰を連れて行っても良いかと思われます」

デミウルゴスは、考慮を重ねたうえで、お望みのままにという態度である。そういうことであれば、ウオン・ライも人選に遠慮はせぬ。「ならば、やはりアルベドだな。その姫君は、智者なのだろうか? ならば、相応の相手を連れていきたい。その場では気が乗らないかもしれないが、交流を続けていけば何かしらの意見は持つだろう。彼女の見解には、期待していききたい所でもある」

「結構なことですが……どの程度の知性を有しているか、正確なところは計りかねます。それを計りに行くのが、今回の目的と言えそうですが」

「——しかし、デミウルゴス。お前が注目するに値するだけの知性を、その者は有している。私も同感だ。ならば、態勢は万全に整えておきたい。……たとえば、相手がただの人間であったとしても」

油断は許されない、とウオン・ライは付け加えた。この世界における絶対的な強者、その自負を持つならば、悪い意味での傲慢さは不要

である。

上に立つ者として、目下の面倒を見てやることは義務であるが、ただの義務に過ぎないからと言って、手を抜くことは許されぬ。

麦の穂一つ、文章一つ、あるいは何某かの感情であつても。見逃して、身内に不利益を与えるようなことがあつては、上位者としてのメンツが立たぬではないか。

「では、そのように。アルベド不在の間は、私がナザリックの守りを担当いたします。どうぞ、気兼ねなく訪問なさってください」

「——お前にそう言われるのも、なかなか違和感のあることだ。部屋への立ち入りを許すのは、所有者の権利と言うものではないか？」

「件の姫君の許可は、すでに取り付けてあります。——ナザリックから、『ランナー王女の利用価値』を計りに行く、と通知しておりますし、時刻も決めております。ウォン・ライ様は、ただ訪問されるだけでよろしいのです。今さら相手が誰であろうと、あちらも拒みは致しませんまい」

「利用価値、とはあからさまだな。——言い回しを工夫したかね？」

「はい。計ると同時に、利益も与えようかと。もし眼鏡に適えば、ナザリックの統治下において、地上における一国の王に等しい地位を与えられること。働き次第では、いくらかの財貨を使わせてやれることも、通知しています」

そのうえ、人払いは万全を期し、結果にかかわらず事を露見させないことも保証している。もちろん、この全てはモモンガに事前の承認を得ていた。ウォン・ライが知り得た情報を、共有せずに済ませるといふ選択肢はあまりない。これもまた、例外には含めるべきではないだろう。

さりとてモモンガには、事前の調略について、対案を示せるほどの知識などない。だから、やりたいならやってみればいい、くらいの軽い気持ちで返していた。

「改めて言うべきではないかもしれんが、完璧だな。ランナーとやらも、生きた心地がするまい」

「どうぞでしょう。情報を精査するに、ただものではありませんまい。相

応に肝も据わっているものと思われれます」

公開されている情報から、あらゆる関係を精査された上で、自室にまで接触してくるような——恐ろしい、悪魔の言葉である。ラナー王女も、これならば不安を通り越して、諦観の域に達するほかない、とウォン・ライは予測する。

どのみち、必要なことは、すでに整えてあるのだ。デミウルゴスは、いろんな意味で手抜かりのない男であった。

「事前の準備は万端と言う訳か。流石だ、デミウルゴス。その手腕を、私は称賛しよう」

「ありがたいお言葉です。——して、刻限まで手持ちの情報を整理したいのですが、よろしいですか？ 訪問後の対話において、情報の正確さは非常に重要です」

「齟齬があつては困る部分だ。願つてもない。……何より、ラナー王女を見定めたのは、お前だ。その本人の口から、改めて必要な事柄を聞いておくことは、実務的な意味でも重要なことだと判断する」

アルベドの外出許可を、モモンガから取っておくことも、ウォン・ライは忘れなかった。

彼は『いちいち気兼ねしなくてもいいのに』と、事後承諾で構わないと言っていたが、これはケジメなのだ。ウォン・ライの方から念を押し伝えていた。

——モモンガ殿、貴方こそがナザリックの主なのだ。主であればこそ、知るべきことは知るべきなのだ。

ウォン・ライの席次は、あくまで二番目である。主席はモモンガであるべきで、そこに疑問を差しはさむ余地などない。

であればこそ、報連相は必須だろう。もちろん、間に合わない事情があれば別だが、現状はそれを許す程度の時間もある。

下準備を終えた後、ウォン・ライは時間を置かず、即座に行動した。先方への連絡は済ませてあるから、動ける状況ならば躊躇う理由はない。

「さて、行こうか」

「はい。御供いたしますわ」



モモンガへの報告も済ませて、ウオン・ライはアルベドを伴い、王都へと赴いた。隠ぺい工作に関しては、惜しみなく行っている。

レベル100勢が本気で痕跡を消しにかかれば、少なくとも格下に覺らせぬ程度の防備は張れる。ラナーとの面会において、この処置は完璧に施されていたといつてよい。

「お初にお目にかかります。ナザリックより参りました、ウオン・ライと申します。こちらは秘書のアルベドです。ご挨拶なさい」

「……アルベドと申します。今後とも、よろしくお願いしますわ」

「こちらこそ。ご丁寧な対応、恐れ入ります。ラナー・ティエール・シャルドロン・ライル・ヴァイセルフ。どうか、ラナーとお呼びください。……遠慮は、なさらないでください。強者には、強者にふさわしい態度と言うものがあるのですから」

そして、ウオン・ライは王国の化け物と対面する。

才覚においては、人間種の規格外。アルベドやデミウルゴスに匹敵しかねないほどの、巨大な才能の塊。それがラナーという少女を表すのに、相応しい冠であると言えるよう。

そして、ウオン・ライこそは中華の申し子である。この両者の邂逅に意味があるとすれば、異なる世界同士の比べ合い、ぶつかり合いにこそあるだろう。

だが、その初めにおいて、お互いの態度はやわらかであり、話す言葉も終始穏やかだったのは、両者の文化レベルの高さを物語るものであったろう。

ウオン・ライはノックの仕方は元より、入室の仕方から挨拶の仕方、椅子までの移動と座り方まで。それら過程の全てにおいて、ラナーが感心するだけの礼法を行ってみせた。それらの作法は王国の流儀に従っており、『対等の相手』に接するためのものであった。

——ラナー王女のために、下調べは行っている。反応を見るに、失敗はしていないようだが、さて。

王国側に合わせた配慮を行っていると、彼女ならば覚ってくれは  
ずだ。ならば、ナザリツクを無頼・野人の類ではないと確信してくれ  
よう。ここまで理解してくれてこそ、話し合う価値もあるというもの  
だった。

「便宜を図って下さって、ありがとうございます。この機会を無駄にし  
ないことは、ラナーの名において、保証させていただきます」

「ご配慮、痛み入ります。ウオン・ライの名において、ラナー王女に相  
応しい態度で臨むことを確約いたします。——ですから、あまり気兼  
ねせずに。気楽に話を進めようではありませんか」

ウオン・ライは人間の姿を取っているのだが、まさに教養ある老紳  
士という風体であり、セバスのそれと比べても遜色なかった。彼は微  
笑んで語り掛ける様は、いかなる人物であっても、邪険にはしがたい  
雰囲気醸し出していた。

傍に待てるアルベドも、空気を読みながら丁重にやったものだが、あ  
くまでウオン・ライに追従する形で、度が過ぎない程度の加減がなさ  
れている。

彼女にとつての上位者は、ウオン・ライであつてラナーではない。  
その意思が、態度となつて表れていた。当然、ラナーはこれをとがめ  
ることは出来ないのだ。

「では遠慮なく。正直に言いますが、私に見定めるだけの価値を見出  
してくれたことは、光栄だと思えます。——しかし、意外ですね。  
もっと、上から目線で接されると思つていましたのに」

挨拶と自己紹介を一通り終え、今回の趣旨について確認すると、ラ  
ナーはそう言つて微笑んでみせた。

あからさまに、『どうしても良い』と彼女は言つてきている。初見か  
らここまでよくぶつこんで来たものだと思うが、ウオン・ライは緊張  
を崩さずに、あくまで丁寧な態度のまま、ラナーに接した。

「ここまでの過程において、ラナー殿は我々が貴方を下に見ていない、  
と。そのように思われるのですか？」

「そうではありません。ただ、もう少し高圧的に来られることも、覚悟  
しております。私には抵抗する力がありません。言いなりになる

しかないのですから、利用されるだけ利用されて、捨てられることも考えたことはありませんが、可能ではないのですか？」

「どうも、ラナーは互いの関係に疑問をもっているようだ。確かに、信頼を置くためにはそれなりに手順が必要になる。」

ウオン・ライは、まずは言葉でなだめるところから始めた。

「なるほど。それは確かに可能です。……しかし、お互いに幸福になれる道があるなら、それを取るべきでしょう。搾取するばかりでは、成長はありません。未来を見据えるならば、ただの一人の人間として、おろそかに接してよいとは思いません。集団として見るのではなく、個人を見る。そうしてこそ、人間は自らの価値を認め、尊重されているという自覚を持つ。そうではありませんか？」

「肯定します。それは実に素晴らしいことです。……ウオン・ライ様の見解はわかりました。そちらのアルベド様にも、意見をお伺いしたく思いますわ」

「私の意見、ですか。——さて」

アルベドの役割は、そこにいること。女性の部屋に、たとえ老人とは言えど、異性がただ一人で入り込むのは礼を失する。非公式な訪問であるのだから、せめて同性の秘書を共に連れて行き、気休め程度でも安心感を与えるのが配慮と言うものであろう。

アルベドはただ穏やかに微笑んでいるのみだが、それだけでも何となく場が華やぐ。

後ろ暗い感情を緩和するくらい、華のある存在でいること。飾りの役割を果たすうえで、まさに彼女は最上の働きをしたと言える。

この後の発言を除いては、であるが。

「せっかくですが、この場においては不要でしょう。どうぞ、お構いなく。ウオン・ライ様とご歓談ください」

「あら。嫌われてしまいましたかしら」

「まさか。ただ私は秘書として、陰に徹するよう、心掛けているのです。個人的におしゃべりに興じたいなら、またの機会に致しましょう」

アルベドに出来るのはそこまでで、積極的に口を出そうとまでは思

わなない。何より彼女は、ラナーを計ると同時に、ウオン・ライも計っている。彼が如何に接し如何なる結論を出すか。興味深いからこそ、観察に徹しているのだ。

「失礼しました。どうか、お許しください。……いつもは、これほど頑なではないのですが、外に出ることが滅多にないものにして。緊張しておるのでしよう。ラナー殿がご不快であれば、詫びさせます」

「いえいえ、お気になさらず。……しかし、この調子では話題が尽きてしまいそうですわね。何か、面白い話があればいいのですけれど」

「では、私からひとつ、よろしいですか？」

「はい。どうぞ」

ウオン・ライが提案する。ラナーは、笑顔で続きを促した。

「仮定の話をします。ただこれは、お互いに理解を深めるための、思考実験と考えていただきたいのです」

「具体的には？」

「もしラナー殿が大金を得た場合、何に使いたいのか。もし権力を得たら、どのようなことをしたいのか。いかなる人物を登用し、いかに使うのか。それをお聞きしたく思います」

ラナーは頭を傾げ、考えるようなそぶりを見せた。ウオン・ライの意図を計るのに一手間。

そして一呼吸分だけ目を閉じて、ゆつくりと、まぶたを開く。この動作を済ませる間に、考えをまとめて口を開いた。

「その問いに、答えることは出来ます」

「ラナー殿は、聡明なお方でありますな。そのうえ、情報通でもあられるのか」

「……狡い人。私の、何もかもを知りたいとおっしゃいますのね？  
想い人にすら見せたことのない、私の本性を、理解されたいとお望みになられる」

「はて、そこまで深い問いでありましたでしょうか。私はただ、もしも  
の話を持ち出したにすぎません」

ウオン・ライにとって、この質問は初戦の牽制に近い問いであった。  
ラナーの交際関係は、調べられる限りのことは調べてある。王女の

小遣いの範囲内で、どのような投資を行い、誰に分け与えたかも知っている。

それでいて、誰からも恨まれる様な搾取を行っていないなかったことも、把握していた。だからこそその前述の問いである。

「誤魔化されませんよ。——資本の使い方は、私が何に価値を見出し、何を優先しているかを表してしまふ。権力の振るい方は、私の能力の適性を示すでしょう。法を重視するか、良心を優先するか、あるいは我欲のままに振る舞うか、いずれにせよ人格が出るものです。……人物の登用に至っては、他者の才能を見抜く洞察力が明確になりますし、さらにそれを組織する方法まで述べるとなると、私の器量をそのまま表現することになります。これら全てを語ってしまつては、私は私自身を構成する、おおよその部分をさらけ出してしまふことになります。違いますか？」

ラナーの言い分に、ウオン・ライは理を認めた。才女と言う評判も、こちらの分析も、正しかったことが証明された瞬間である。

自覚したことを、言葉にする。それを他者にわかりやすく伝えることは、それだけで才と言える。

利用価値のある存在だと、彼は認めた。その上で、こう答える。

「はい、違います。何分、田舎で生まれ育った者ゆえ、教養も少なく礼法も充分には収めておりませぬ。——無作法、お許しあれ」

ウオン・ライは頭を下げた。この謝罪には、アルベドの方が驚いて、顔色を変えたほどである。

声を上げるほどの無様はさらさなかつたが、アルベドにとって、ウオン・ライが上位者であることは疑いの余地がない。そうした彼が、明らかに弱者であるラナーに対して、丁重な態度で非を認めたのである。

強者が、弱者に媚びるような。ありえない光景を、目の当たりにしているようだった。

「おやめください。……本当に、ひどい人。私がそれほど、与しやすい相手に見えますか。それでも、王国でも屈指の頭脳を持っているという自負はありますのよっ。」

「失礼を重ねること、お詫びいたします。どうか、ご寛恕ください。――貴女の賢さ、頭脳の素晴らしさは認めましょう。ですから重ねて、ご無礼をお許しく下さい。……先ほどの問いについて、詳しくお答えいただけますか？」

ウォン・ライは、ラナーの言葉を否定しなかった。ひどい、という部分も、与しやすい、という評価も。

彼にとって、才気闊達で異能とも言うべき知性を持つ彼女は、厄介な相手とはなりえない。あらゆる意味で『ばけもの』など、人の海で泳いでいれば、嫌でも目に付くものだからだ。

生前の彼――周大鸞は、親しく付き合った友だけでも三百を超え、直接ねぎらった相手は万に届く。影響を与えた人数ともなれば……間接的なもの（部下の部下、友達の友達、著作に触れた人々など）も含めれば、億という単位にすら及ぶであろう。

――見極めはこれからだが……彼女の複雑さは、才気と環境によるものが大きいように思う。一度で見切ることは出来まいが、繰り返し見れば見えてくることもあるだろう。

彼にとって、ラナー王女はただ才能が希少で、感性も平民とはいささか異なっているというだけの、年相応の少女に見えた。わざわざ思うところを述べて、『わかってるんだぞ』と自己主張するあたりは、微笑ましくさえある。

現時点で、ウォン・ライの見立てが的確であるかどうかは、さほど重要ではない。大事なものは、よく相手を見ること。対話をあきらめないことだ。

きちんと関心を持っていると伝え、付き合い続けていく覚悟を見せることが、何よりの楔となる。

――あきらかな上位者を前にして、ここまで忌憚なく言葉を尽くせるのだから、やはりただものではあるまいが。

単なる少女は、悪魔的な手段で自室に乗り込んできた偉丈夫に対し、平静では居られまい。不敵に言葉を紡ぎ、気後れせず言い返す。これこそまさに彼女の才気の発露であり、器量の表れとも取れよう。

まさに規格外の存在であることは認めるが、同時に少女らしい部分

も確実に存在するはずである。問いに即答せず、引き延ばしてこちらの対応を吟味するなど、可愛いらしい真似をするのがそれに当たろう。

人生を人の海に揉まれたウォン・ライは、人を見る目を外さなかった。回数を重ねれば、さらに盤石である。

結果として、長年の経験が、極まった才能を凌駕する。そうした事例を、現実のものとするのだ。

「ウォン・ライ様。……大金を用いる事業。権力を活用して得る、あるいは与える影響と予測される様々な結果について。そもそもその前提として、仕事をするためにどのような人物を引き上げて、頼り、任せるか。ええ、私はその全てを開帳することは出来ませぬ」

「情報が有用であるならば、対価は惜しみません。見返りは十分に。ここが投資のしどころだと、わきまえておりますとも」

ウォン・ライは、自らに恥じない行動をしているだけだ。自分だけではなく、モモンガを含めたナザリツクの全てを背負っているという自覚がある。だからこそ、常に全力を尽くしているのだ。

しかし、ランナーにとっては不思議だった。目の前の男が、どうしてここまで下手に出るのか。この世界の一般的な価値観、客観的な視点を持つからこそその疑問である。

「見返り……？ 私への、報酬の用意があるとおっしゃる？」

「はい。なるべく適正な価格で支払いたく思います。価値ある情報には、金銭を支払う。当然のことでしょう」

傲慢に振る舞わないのはわかる。それは優雅ではない。礼として、美しくないからだ。

だが、自発的に懐の中身を明かす必要はあるまい。与えるのは、搾れるだけ搾ってからでもいいはずだ。

上位者は下位者の財産を管理し、これを思いのままにする。場合によつては、その身体や命までも。それが力の本質ではないか。

王国の貴族はそうしてきたし、ランナーも弱肉強食が自然の摂理だと思ふ。だからこそ、不思議だった。ウォン・ライは、この摂理に反逆しているように見えたから。

「金銭、対価ですか。しかし所詮は口先だけのこと。それに投資などと」

「払うに値する。私は、そう考えます。才ある者が、自らの力を証明する。その能力を惜しみなく開帳してくださるのなら、何も与えずに帰ることなどできましようか。まして、貴方には実権がない。自らの言葉、個人的な魅力だけを頼りにしなくてはならない。今、ラナー殿は全力で、本気で語っておられるのです。ならば、そこに敬意を表すべきでしょう。でなければ、礼を欠いてしまいます」

ウオン・ライは余裕をもって、懐の広さを見せつけたが、対するラナーは、やはり不思議な気分だった。

言葉にしようとしても、明確な表現が難しい。もやもやした感情など、恋以外にはないと思っていたのに。

彼女の程の才をもってしても、ありきたりな言葉を口に出すのがせいぜいだった。

「敬意に、礼、ですか」

「まさに、礼です。建前は重要です。おろそかにすれば、取り繕う必要さえない相手だとして、軽蔑するも同然ではありませんか。私は、相手が誰であっても、軽蔑などしたくはないのです」

「……尊重するからこそその、礼であると。主観的な規範に過ぎませんが、だからこそ、相手に響くもの。ええ、良くわかりました」

「恐縮です、ラナー殿。お互いに分かり合い、尊重したいと、私は思います。そのために必要な事ならば、断固として妥協はいたしません」

理解されている。理解してくれようとしている。そうした確信を得ることが、どれほど快いことか。ラナーは、生まれて初めての経験をしていた。

ウオン・ライは、これまで表立って評価されてこなかった、己の才を見定めている。前述の問いを、正しく答えられると確信しているのだ。

そうでなければ、どうしてわざわざ自ら出向き、問おうとするだろう。真摯に向かい合おうとするだろう。ラナーは察しのいい娘であつたし、だからこそ推察できる事柄については、正しく分析できた



のだ。

端的に言うならば、彼女は絆されたのである。

「この世は、なんと無情な事でしょう。私は、王の娘として生まれてしまいました。女は女らしく、政略の駒になってしまえばいいと。そう言われることもありませう」

だから、であろうか。突拍子もなく、こんな言葉まで発してしまう。問いへの答えではない。そう思って、詫びようとする直前、ウォン・ライの方から口を開いた。

「女性の、女性らしい美しさというものは、確実に存在します。そして、男が政治に参加する女性に対して、嫉視交じりの非難を行うことも、また充分にありうることでしよう。……ですが、才に男女の区別はなく、法の前にはすべてが平等であるべきだと私は思います。まして個人の能力などは、身分性別の違いに左右されず、公平に評価されねばならないでしょう。私が貴女に実務の話題を投げたのは、確かな答えを返してくれると思つての事なのです」

ウォン・ライは、ラナーの他愛のない一言に、真摯に応えた。年上の、分別ある大人が、ただの少女に正面から向かい合つて、その能力を認めてくれている。前向きな評価を語ってくれている。

ただの王女として生きてきた彼女には、新鮮な経験である。恋心とは別の意味で、心が震えるのを彼女は自覚した。

目の前の老人は、初対面の相手である。自身は、そこまで軽薄な精神を持つていたのか。いやそうではないはずだと、ラナーは己を鼓舞し、言い返した。

「正しい答えを期待していらつしやると？ —— 的外れな回答があれば、どうなさるのでしよう。私は所詮、世間知らずの王女に過ぎないのですよ？」

「私は、ラナー殿を過小評価しません。過大評価もまた、致しません。ですから、気兼ねなくお答えください。与えられた情報は、貴女の許可なく、私的に運用することはないと明言させていただきます。……適切でない答えがあれば、それもまた後程考慮いたしますが。おそろしく、酷い齟齬は生まれたいものと確信していますよ」

そしてウオン・ライは、ラナーを一個人として尊重すると明言した。能力に対しては疑問すら抱いていないらしい。

彼女は、隠しきれない笑みを浮かべた。作り笑いでない、本物の笑顔だった。おそらく、飼いだ以外には、見せたことのない種々の笑顔を。

「やはり、ウオン・ライ様は、わるいおかたですわ」

「重ねて、非礼を詫びます。——ご容赦ください」

化け物の様に見られることさえある、自身の才能を正しく把握しながら、決して恐れずに正当に評価してくれている。

理解される充足感、それを得られるような感覚は、彼女をして生まれて初めてというほかないものであった。

ラナーは、ウオン・ライを見定めるつもりだった。お互いに、値踏みをし合う関係であるはずだった。だが、どうしたことだろう。

まるで男性的な魅力を感じていないのに。伴侶としての適性とは別に、異性を求める感覚を、女の性は持っているのだろう。ラナーはうつむいて、こう言った。

「……お父様だったら」

「うん？」

すぐに顔をあげて、彼女はしおらしくも語る。そうしたラナーの対応は、おそらく飼いだですら見たことはないだろう。

「いえ。その。……お父様は、私をそこまで評価しませんでした。国王としてみれば、王女は貴族派閥に対する餌、あるいは外交の一手段としての価値として見るのが第一。娘を慈しむ心がなかったわけはないのでしようけれども。……私と正面から向かい合って、言葉を尽くそうとは、ついぞなされませんでした。それが、今になって外部の方が、私を認めてくれるという。これは、運命の皮肉と言うべきなのでしょう？」

気が緩んだのか。あるいは、急展開による思考のエアポケットが、彼女にそうした言葉を選ばせたのか。

深層の心理の、本人すら自覚しない心の底で。もしかしたら、父性を求める少女の願望が、そうさせたのかもしれない。

能力は別として、今だ思春期の女の子に過ぎないラナーは、幸運

だった。

繊細な少女の一面を前に出しても、怯まずに受け止めてくれる。そんな強大な父親が、都合よく目の前に存在していたのだから。

「ラナー殿」

「はい」

「父親を。国王陛下を、大事になされるがよい。言葉を尽くさぬうちから、あきらめるものではない。私は——」

顔を厳しく引き締めながら、ウォン・ライは、ゆつくりと。噛み含めるように言った。

「この場に、ナザリックの代表として。——ラナー王女を、外交の対象に選び、今後の誼を通じるために、参りました」

「……承知しております」

「はい。どうか、父御をないがしろになされぬように。国王としての利用価値はもちろんですが、血縁からは逃げられぬものです。逃げられぬなら、いつそ使い潰すくらいの気持ちでぶつかるとよろしい。本当に娘を愛する父親なら、決して無下にはなさらぬでしょう」

その上で——不満があれば、聞きましよう。そのように、ウォン・ライは応えた。

他者にすぎる前に、子供ならばまず親に甘えよ、と言う。分別ある、立派な大人の言葉であった。当たり前で、ごく自然な常識を語ったに過ぎない。

だが、それを王女の前で言った人は、彼以外に誰もいなかった。そうした言葉を引き出すような、正直に素の己をさらけ出させる場を整えた者も、ウォン・ライ以外にはいなかった。

「頼りにして、よろしいのですね？」

ラナーは、『誰を』頼りにしたいのか。もつとも大事な部分を明らかにせず、ただ問うた。

「父親は、娘を愛するもの。母国は、国民を慈しむものです。そうであるべきで、それ以外であってはならない。もし、在り得てはならない結果になってしまったら……お互いに、不幸なことではないかと思えます」

ウォン・ライは、父親を頼りにせよと、言外に答えた。

それに対し、ラナーは視線を背けて言った。

「でしたら、きっと私は不幸な娘ですね。——いえ、努力する前から、不幸だと嘆くべきではない。そのように、おっしゃられるのですね」「ご理解いただき、ありがたく思います。……せめて、機会くらいはお与えください。そうでなくば、不憫と言うものでしょう」

ラナーは、微笑んだ。安心からの笑いであり、あきらめからの笑いでもある。

ともあれ、前述の問いには答えねばならぬ。彼女はとうとうと語り、必要な事柄は全て答えてみせた。

人材に関する諸々のこと。内政への批判、外交のまずさについても色々。必要以上のことも、あるいは漏らしてしまったかもしれないが——もはや、形振りを構っている場合ではない。

「聞けば聞くほど、なるほどと思います。……いや、王国にも人材はいるものですね」

「見るべきものは少ないですが、確かに利用価値はあります。殺して排除するよりは、生かして使った方がいい駒は、これくらいでしょうか」

「わかりました。ならば、それらの人材は慎重に取り扱いきましょう。間違っても殺さぬよう、部下に徹底させます。——次に、こちらから提供する資本についてですが」

「今はまだ不要です。時期尚早ですし、私としても失敗はしたくありません。……時機を見て、そちらの都合に合わせてにいたしますわ」

二人の語りは長くなった。時間的な工作すら必要になったが、その甲斐はあったと言えよう。

隠ぺいも含めて、アルベドが担当した。聞くべきことは聞き、判断の材料はすでにそろっている。ならば仕事の補助に回るのも、己の務めであろうと考えたのだ。

ウォン・ライは、そうしたアルベドの対応を当然のように享受した。ねぎらうのは後でよい。

「二応の見解は述べましたが、最重要人物は、私の兄である第二王子、そしてレエブン候です。最悪、その他は代替できますので。——ああ、重ねて申し上げますが、クライムは私のですからね。何かの間違いで、危害を加えてもらっては困ります。この点は、特に考慮していただけるものと、信じていますわ」

「了解しました、ラナー殿。……お疲れさまでした。ナザリックは、貴女の身分を保証します。以後の支援も、私の権限の範囲で行いましょう。それくらい価値があると、判断しました」

ウォン・ライの最大の権限と言えば、すなわちモモンガへの直言を意味する。

モモンガが彼の申し出を拒否することは、ありえない（不利益なこととはそもそも意見しない）ので、この段階に至れば、実質全ての要求を受け入れることと同義である。

とは言っても、ウォン・ライの目は厳しい。権限の範囲と一口に言っても、その内容は幅広く。まして書面にすらしない口約束では、多少ケチつても文句を言われる筋などない。

「ただし、先行投資として、です。無条件に負債を引き受けるわけではないと、ご理解ください」

「わかっております。はしたない真似は致しません。——失いたくない人脈ですもの。無茶を押し付けるつもりなど、毛頭ありませんわ」

ラナーは、心を許し始めていた。嘘の自分を見せる必要はなく、正直なありのままの己を見せることが、彼に対する礼儀である。そのように、ウォン・ライの人柄を理解していた。彼女の規格外と言える才能は、早くも最善の行動をとるように自らを動かしている。

ウォン・ライは心を許すに値する人物であり、値以上の利益をもたらしてくれる存在だ。素のままの態度で多くを得られるなら、取りつくろったり、躊躇することに意味などない。

こうした懐の深い人物に対しては、遊び心も湧いてしまう。節度を守りさえすれば、それを許してくれることも。これまでの会話から、すでに彼女は覚っていた。

「こちらからも、一つよろしいでしょうか」

「私にできることであれば、なんなりと」

「貴方がたが、これから王国で行うであろう工作について。詳細を明かしてくれれば、こちらで助力も出来るかもしれません。これでも、少しは動かせる戦力もありますし、無駄にはならないと思いますが、いかが？」

「……私の一存では、決められぬことです。後程、話し合うということ、よろしいですか」

よしなに。ラナーはそう答えた。

ウォン・ライは、彼女の価値を認めた。

ならば、後は詳細をつめるだけだった。こうして、ナザリックは恐るべき才能の持ち主を、手駒として加えることができたのである。

実働の前に、確かな協力者を得ること。その信用と信頼を確かなものにするには、以後の仕事をやりやすいものとする。

あらゆる意味でも、この会合はナザリックに利すること、多大であった。それは、事後に報告を受けたモモンガも、確かに認めるところであった――。

ツアレニーニヤ誘拐、その報は、モモンガに即座にもたらされた。

彼女の保護を約束した身であるから、当然奪還にも意欲的になる。だがそれ以上に、犯人である王国の犯罪組織――八本指とも呼ばれるそれに対して、モモンガはひどい嫌悪感を抱いていた。

――ナザリックのメンツにかかわる事態だ。座視するわけにもいかん。まあ、自分から意趣返しに行くほどの、大事ではないだろうが。所用で出ていたウォン・ライらも、事が明らかになる頃にはナザリックに帰還しており、防備に不安はない。攻勢に出るための部隊編成は、アルベドに任せている。

一気呵成に攻め立てて、主導権を得るのが目的である以上、セバス

だけでは手が足りぬ。八本指を全て制圧するには、手数と速度が非常に重要だった。

モモンガ自身はと言えば、冒険者のモモン名義に名指しの依頼を受けている。報酬の大きさから、無視するにはあまりに惜しいものであるため、彼自身はこちらに注力せねばならない。

こちらも八本指関連の依頼であるから、モモンとしての姿で関わらなければ、それも良いかと考えている。

何より、デミウルゴスの仕込みが効いてくる頃合いだ。機会としても、ここで出向いたついでに消化できるなら、それが一番いいだろう。「王国の民には痛みを我慢してもらおうことになるが、まあ、八本指を摘出する大手術だと思えば、うん。何より名声を得る手っ取り早い手段であるし。——結果的に、利益を還元するなら、そこまで悪いことにはならない……かな？」

感情的に、『なんか悪い気がするなあ』という程度の感覚は、モモンガにもあるのだが。それでも上手く行った場合の利益を考えれば、この選択を放棄するつもりはまったくなかった。

モモンとしての旅装を整え、ナザリツクを出る。その心中に、不安はない。むしろ、これからの大仕事に対して、やりがいすら感じていた。

「こうなると、リジンカンに自由行動を許したのは早計だったか？ いや、下手に押さえなければ持ち味を殺すことになりかねんし、あれはあれで良いんだろうが」

それはそれとして、引っ掛かる部分がないではない。リジンカンは、自由な男である。そうした人物が、首輪もなしに出歩いている。彼が何か起こしたとして……さて。現状、何か不都合があるだろうか。あるとしても、押し通すしかない、モモンガは覚悟を決めていた。

——デミウルゴスの計略に関して、どこまでの確に対応できるかが問題だ。王国で騒ぎを起こすことは聞いているが、結局……『最初は強く当たって、後は流れで』なんて結果になるのは目に見えている。不確定要素が多い現状、アドリブを効かせるしかないだろう。

モモンガは、事前にデミウルゴスから報告を受けていた。王国を掌握するための、一段階目と言われれば、あえて拒否する理由もない。

彼が言うには、本来ならば肅々と進めるべきことだが、ウォン・ライが必ず報告すべきだと主張したから、改めて申し出たのだと言う。

——『ヤルダバオト』の戦いに、都合よく乱入するまでの段取りは決まっている。その後の対応については……アレだ。それっぽい英雄ロールプレイで、どうにかするか。

話を聞けば、なるほどと納得できるものではあるが。突発的に、ぶつつけ本番となっていたら、動揺を隠せなかつたかもしれない。外部の人間たちに、不自然な態度を見せたかもしれない。

そうと思えば、ウォン・ライの気遣いの細やかさに、感謝することしきりであった。何かしらの形で、お返しをしなくてはいけないと、モモンガは思う。

これからの仕事について、彼は緊張や不安を最低限のレベルにまで抑え込めていた。それこそがまさに、ウォン・ライの最大の功績であるというべきであろう——。

時はいくらか巻き戻る。

リジンカンには、自由を許されたので、本当に自由に動くことにした。酒場を適当に飲み歩きながら、ちよつとした遊び心を満足させようと思ひ、動いたのである。

具体的には、セバスの元を訪れていた。ちょうど、ツアレニーニヤ誘拐が発覚し、モモンガへの報告を終え、これから八本指の拠点に突撃しようとする段階。

まさに間際に、リジンカンはセバスと出会ったのである。

「ようセバス。屋敷を出るとは、今急ぎか？」

「はい。——非礼をお許してください」

「いいんだ。俺とお前の仲だ。そうだろう？ —— 厄介ごとなら、力になれるかもしれん。俺に、出来ることはあるか？」



セバスは少し考えようとしたが、悩む時間さえ惜しいことに気付く。

「ついてきて、くださいますか？」

「荒事なら、存分に力になろう。女関係なら、どうだろうな。童貞の説法など、滑稽なだけであろうし——」

「急ぎます」

セバスは、リジンカンに背を向けて走り去った。本来、礼儀正しい彼にあるまじき態度であつたろう。

「そいつは悪かつた。——俺も行こう」

だが、リジンカン相手には、それで正解である。彼は、相手にとって本当に大事なことを尊重する。セバスの『助きたい』という想いを、リジンカンは無下には出来ぬ。無礼があつたとしても、それだけ気を許してくれていると思えば、悪い気はしないものだ。

事前情報は何もなかったが、後を追えば目的地につくであろう。そう思い、ただセバスに追従して進む。

そうして、暗い路地の中を進む二人。目的の建物を前にして、緊張がなかったとは言わないが——思わぬ相手と遭遇したことで、リジンカンは気を引き締めた。

「おや、これは奇遇ですね。御二方は、この辺りに何かご用事でも？」  
「セバス様……いえ、用事と言えば用事なのですが。あの建物に襲撃をかけるつもりで、ここまでやってきた次第です」

「ほう。それはまた、実に奇遇ですね。我々もまた、あそこに用があるのですよ」

セバスの知り合いであるらしい。一人は少年。もう一人は、それなりに成熟した戦士であつた。

リジンカンにとっては初対面の相手であるが、別段邪険にする理由もない。セバスの知人であれば、相応の態度を取るべきだろう。

「俺の名は——フェイ・ダオ。セバスの友人だ。こいつほど頑強じゃあないが、そこそこ剣を使える。この場に來たのも、荒事の手伝いの為だね」

リジンカンは、冒険者名義のフェイ・ダオという名を名乗った。

それに対し、反応したのは少年の方ではなく、戦士らしい男の方だった。

「そこそこ、か。俺と比べたら、どっちが『使える』方だと思う？」  
「あんたの方が、『上手い』だろう。俺は我流だし、そこまで体系だった剣術は持っていない。ただ、速さだけを追求する剣だから、あまり見栄えはよくないだろうよ」

男は名乗りすらせずに絡んできたが、別段リジンカンは気にしなかった。

もとより、他人の無礼など気にも留めない、鷹揚な人格であるからして。

「名乗るのが遅れたな。俺は、ブレイン・アングラウス。こっちの少年はクライムという。よろしく頼む」

「クライムです。——どうぞ、よろしく」

こちらこそよろしく、トリジンカンは軽く応えた。重苦しい雰囲気は好きではないし、敵陣への突入を前に、後ろ向きな感情は見せたくない。

時間は貴重だが、それ以上に協力者の存在は希少だ。いくらかの時間を使って、お互いの協調を図る価値はある。セバスもそれは同意見であるらしく、顔を見合わせると、うなずいて答えた。

「セバス様、我々は目的を同じくしていると、そう思つてよいのでしょうか」

「考え方次第です。あそこの無法者どもに敵対する、という意味では、確かに目的は同じと言えるのでしょうか」

「ならば！……申し上げます。どうか、我々にも協力させていただきたく思います」

ここで、自ら協力する——と申し出るのが、クライムと言う少年の性格だった。

決して、そちらが協力しろ——と言うような、貴族らしい傲慢さとは無縁の人物である。それがわかるから、心あるものは、誰もが少年に好意を持つのだ。

セバスも、ブレインも、そしてリジンカンも同様である。

「願ってもない。そうだろう？ セバス」

「……」迷惑でなければ、お願いいたします」

リジンカンは、笑って受け入れた。

セバスもまた、あえて拒否はしなかった。彼は善人だから、他者の好意を、無下にできる男ではないのだ。

「迷惑などと。先日之恩を返す、良い機会です」

「ならば早速、お互いに情報と目的の共有をしようじゃないか。いいだろ、セバス」

「……ええ、そうですね。そうしましょう」

セバスは、さらわれた女性を確保することが目的であり、クライムらは八本指の拠点を潰すのが目的である。

そして、敵の勢力を削り、王国の秩序を回復するという目論見に關しても、ナザリックに不利益をもたらす訳ではないから、受け入れるのは容易いことである。

「充分です。では参りましょうか、クライム君」

「はい。これより突入します。そちらも、お気をつけください」

話し合うべきことは話し合い、共有すべき情報はお互いに交換した。ならば、後は行動するのみである。

ブレインという男は、リジンカンをずっと警戒していたようで、視線を終始そらさなかった。不思議には思うが、今は仕事をこなすことを優先すべきだろう。

——まあ、後で個人的に聞けばいいさ。

酒をおごるくらいの甲斐性は、リジンカンも持ち合わせている。外界の人間を知己に持つのも悪くはなからうと、彼は軽く考えていた。実際には、ブレインからはかなり重い事情を吐き出されることになるのだが、それは後の話である。

ツアレニーニヤの確保。まずは、それに注力すべきであった。

リジンカンは、セバスと共に突入した。クライムらとは別行動であ

る。

二人で敵の目を引き付け、クライムらが人質の救出を行うという手筈だった。

結果的にツアレニーニヤが解放されるなら、自ら救うことに固執することはないと、セバスは考えている。

「来たか。——お供がいるとは聞いていないが、まあいい。一人くらい、誤差つてもんだろ」

わざわざ羊皮紙に書き残し、場所を指定していただくくらいだから、案内役は当然いる。

それに従って、館の中を進むセバスとリジンカン。たどり着いた先に待っているのは、さて、何であるのか。願わくば、退屈を紛らわすものであってくれと、リジンカンは思う。

たどり着いたのは、広場であつた。そこには、明らかにこちらに敵意を抱いている者たちがいた。

リジンカンは、数を数えようとはしなかつた。そうするに値しない者たちであると、なんとなく察しがついたからである。

「セバス。俺に手伝えることはあるか？」

「いえ……ああ、そうですね。周囲を警戒してください。私が雑事を片している間、もしツアレを見かけたら、教えてくださいますか」

「わかつた。——さして手助けにはなれんようだ。すまん」

「いえいえ、付いてきてくれて、私は嬉しかったですよ」

セバスとリジンカンは、まるで緊張感を感じない口調で、そう言つた。

周囲から見れば、ひどく気に障る光景であつたに違いない。

「……おじいさん、貴方、なかなか強いんだって？」

軽装の女が語り掛けてきた。腰にある三日月刀を見れば、彼女が剣士であることはわかる。

「おい、呼ばれているぞ、セバス」

「はい。有無を言わさず屠るのは、流石に非礼でありましょうか。――

——どこのどなたかは存じませぬが、私が強いと言えば、そうですね。貴方がたよりは、確かに強いと言えるでしょう」

セバスの言い方に、女は気を悪くしたのだろう。強い口調で応えた。

「状況分かってんのアンタ。多勢に無勢、それにこっちは精兵をそろえてる。……ちよつとはしおらしくしてもいいんじゃない？」

女の言葉には、よどみがない。本気でそうだと、信じている声だった。

「セバス」

「はい」

「……女が哀れだ。こいつだけは、助けてやれんか」

「無駄に抵抗しなければ、あるいは。——なるべく、考慮は致します」  
「充分だとも。……無知とは、恐ろしいな。早く、あいつらに現実を教えてやってくれ。見るに耐えん」

女は激怒したが、彼女は結局、名乗ることすらできなかった。

セバスの一撃によって、昏倒させられたからだ。

「——これで、よろしいでしょう」

「ああ、完璧な仕事ぶりだ。警戒はやっておくから、適当に殴り倒してやればいい」

これ以上、深く語る必要はあるまい。

ただ事実を述べるならば、この場で命を長らえたのは、彼女ただ一人であったということ、それだけであった。

雑事を済ませた二人は、ツアレニーニヤの捜索に入った。これには別段、何の妨害も入らなかったたので、すぐに見つかった。後はクライムたちの仕事が終われば、全てが丸く収まる。

「セバス。お前はその子連れて、先に戻ると良い。後は俺がやっておく」

「……よろしいのですか？」

「よろしいも何も、それが目的だったろう？ クライムとかの連中と協力するのは、本来ならば余分なことだ。余分なことは、働きの友人に任せてくれればいい」

「働き者、ですか。……貴方には、少し、似合わないような気がします」

「俺のことはいい。助けた女性について、もっと気にかけてやれ。じゃあ、な」

リジンカンには、さっさと踵を返して、クライムたちを探しに行く。彼の耳には、戦闘音がわずかに聞こえていた。これをたどれば、行きつくであろう。

セバスは、背を向ける彼に一礼して、ツアレニーニヤをその腕に抱き、この場を離れた。

「——せっかく、ここまで手間をかけたんだ。幸せにしてやるんだぜ」  
誰に聞かれるとも思っていないから、リジンカンは適当につぶやいた。

俺にはできぬことだ、と自嘲しながら。

「さて、俺は俺の仕事をするか」

駆ければ、一分と掛からぬであろう。そして一旦心を決めれば、行動は早い。

たちまちのうちに、リジンカンはクライムらの元にたどり着いた。戦闘の最中であったのは予想通りであったが、一方は一区切りがついたところであるらしい。

「よう、クライム少年。そっちも一戦したようだが、片付いたようだな」

「フェイ・ダオ様、ご無事でしたか。セバス様は？」

「目的は果たした。人質は救出済みで、あいつが送っていったよ。だから心配はいらんが——さて、残っているのはアレか」

リジンカンは、クライムの安全を確認すると、もう一方。ブレインとその相手の方に目をやった。

唐突に乱入してきた彼に気を取られたのか、彼らは手を止めて距離を取っていた。仕切り直す態勢になったのだが、これではどちらが優位に戦っていたのかわからない。

「ブレインどの、手助けは必要かな？」

「茶化すな。——いや、そうだな。俺も少々、飽きてきたところだ。代

わってくれるならありがたいが」

ブレインは、リジンカンの軽口に軽口で返した。彼が戦っていたのは、巨漢の武闘家である。

ブレインとて負けるつもりは全くないが、圧倒するほど力の差がある相手でもない。ゆずって楽ができるなら、それでもいいかと思っている。

「なら、そうさせてもらおう。いや、ここにきてほとんど仕事が出来なかったものだからな。セバスに協力できなかった分、ここで埋め合わせをしておきたい所だ」

リジンカン、彼らの間に割り込んで、ブレインから戦いの相手を譲り受けた。

そして、向かい合って言う。

「俺の名は——フェイ・ダオと言う。偽名と言うか、通称みたいなものだが、まあ許してくれ。……お前さんの名も、一応聞いておこうか」  
「いきなり割り込んできて、言う言葉がソレとは、ふざけているのか。……おい。広場にいた、俺の部下どもはどうした？」

リジンカンは、鼻で笑った。名を聞いたにもかかわらず、男は答えなかったのだ。

もとより、礼節など不要の場である。こいつは容赦しなくていい相手だと、リジンカンは判断した。

「セバスの奴が殴り倒したよ。みんな地べたを舐めているから、援軍は期待しないことだな」

「……馬鹿な。そこそ腕が立つ程度の老人など、容易く殺せる戦力は備えていたはずだ！」

「馬鹿はお前だ。敵を知らず己を知らず、これでは勝てるはずがない。——どうせ、これまでの勝ちにおごって、まともに相手を見なかったんだろう？ そら、納得できないなら相手をしてやる。かかってこい」

リジンカンは、名も知らぬ男をあおった。さっさと終わらせたくなったから、そうした。

この挑発に、男は乗った。そして、自らの行動の報いを受けること

になるのだ。

「ぬかしたな。後悔するぞ。この『鬪鬼』ゼロを敵に回したことを――」

「かかってこいと、俺は言った」

直後、飛刀が男の喉に突き刺さり、突き抜けていった。背後の柱に突き立って、そっけない乾いた音が響く。

男はもちろんだが、傍で見ていたブレイン、クライムらも――彼がどうやって飛刀を取り出し、投げつけたか。その瞬間を認識することすらできなかつた。

「ア……？」

「だから言ったんだ。――馬鹿め」

男は、自分の身に何が起きたのか、きちんと認識することは出来なかつたろう。

ただ、不思議そうに喉に手をやり、血に染まった手のひらを確認する間もなく崩れ落ちる。

「しまった。もう仕事が終わってしまったぞ。――せつかくの暇つぶしのタネだったのに。いや、長々とグダグダやるのも、それはそれで時間の浪費というものか」

リジンカンはずっと天を仰いだ、覆水盆に返らず。

玩具も壊してしまえばそれまで。セバスは帰したし、どうしたものか――と思ったところで、外野がはやし立てる。

「見えなかつた。一体、どうやって――」

「投げたのはわかる。結果もそうだ。だが……わからない。俺は、目を離さなかつた。なのに、あいつが小刀を手に取り、投げつける動作すら認識できなかつたんだ。嫌になるぜ、どいつもこいつも、俺の自信を打ち砕きにきやがる」

クライムとブレインの声が、リジンカンの耳に入った。

何だ、暇つぶしのタネは傍にあつたじゃないかと、彼はようやく気付く。

「こんなことで驚いてくれるなよ。俺はただ、飛刀を取り出して投げただけだ。別段、特別なことはしていないはずだが？」



「……いつちやあ何だがね。王国内で、今のアレを見切れる奴はいないと思うぞ。俺が保証する」

ブレインはそう言ってくれるが、リジンカンは本当に何でもないとこの様に言う。

「そうか。まあ、どうでもいいな。——で、これからどうする。俺の方は暇が出来たから、そちらにまだ仕事が残っているなら、手伝ってもいいが」

「……生き残りの捕縛や館の探索は、こちらで兵を呼びますから、もう人手は十分です。手伝ってもらおうとしたら……どうしましょうか」

「無理にとは言わんさ。やることがないなら、酒でも飲んで帰るだけだ」

クライムは頭を悩ませたが、とりあえず必要がないならそれはそれでいい。リジンカンはそのまま立ち去るつもりでいたが、そこをブレインが引き止める。

「フェイ・ダオ。それなら、俺に付き合ってくれるか？ あんたの剣に興味がわいたんだ」

「おお、いざブレイン。とりあえず、ここから出よう。建物の中で剣を振り回すより、屋外の方が気分がいいだろう」

人目を忍ぶという考えは、リジンカンにはなかった。だから喜んでブレインの申し出を受けて外に出たのだが——。

「なんだ、あれは。炎の……壁？」

「壮観だな。いや、外に誘った甲斐があるというものだ」

リジンカンは暢気に語ったが、ブレインの方が気が気でない。クライムも異常に気付いて、対策を練る必要に迫られた。こうなると、剣を交えるとか親交を深めるとかの話はどこかへ飛んでいく。

「我々は、いったん撤退し、上の判断を仰がねばなりません。フェイ・ダオ様は、いかがなさいますか」

「そうよなあ……。自由行動を許されている身であるし、お前さんらに付き合ってみるさ。自分勝手に付きまとうだけだから、報酬はいらんぞ。——それから、俺のことはフェイでいい」

「はい、フェイ様。……行きましょう」

そうして、クライムらは王城へと帰還していった。リジンカンがそれについていったのは、ただの気まぐれにすぎない。

だがこの行為が——あるいは、好意とでも言うべきものが、いかなる結果を生むのか。それはモモンガは元より、ウォン・ライすら予測できぬことである——。